京都府遺跡調査概報

第98冊

1．鳥取豊岡宮津自動車道関係遺跡
2．南稲葉遺跡第２次
3．善願寺遺跡第２次
4．池上遺跡第７次
5．半木町遺跡
6．三山木遺跡第３次
7．木津川河床遺跡第12次

２００１

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、発掘調査については、その内容を出来るだけ早く公表する必要があり、それに対応するために三種の刊行物を出しております。すなわち、発掘調査の速報と職員の論考等を『京都府埋蔵文化財情報』によって、発掘調査成果の概要報告を『京都府遺跡調査概報』によって公表しております。そして、特に著しい成果のあったものについては、『京都府遺跡調査報告書』を刊行しております。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成12年度に実施した発掘調査のうち、京都府道路公社・国土交通省近畿地方整備局・日本道路公団関西支社・京都府土木建築部・京都府・京田辺市の依頼を受けて行った鳥取豊岡宮津自動車道関係遺跡・南稲葉遺跡第２次・善願寺遺跡第２次・池上遺跡第７次・半木町遺跡・三山木遺跡第３次・木津川河床遺跡第12次に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、宮津市教育委員会・綾部市教育委員会・園部町教育委員会・八木町教育委員会・京都市文化市民局・(財)京都市埋蔵文化財研究所・京田辺市教育委員会・八幡市教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成13年３月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター
理　事　長　　樋　口　隆　康

凡　　例

1．　本書に収めた概要は、下記のとおりである。

1．鳥取豊岡宮津自動車道関係遺跡　　2．南稲葉遺跡第２次

3．善願寺遺跡第２次　　4．池上遺跡第７次

5．半木町遺跡　　6．三山木遺跡第３次

7．木津川河床遺跡第12次

2．　遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

	遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1．	鳥取豊岡宮津自動車道関係遺跡平成12年度発掘調査概要				
	シリガイ古墳群・東禅寺古墳群・エノク経塚	宮津市須津	平12．6．1～9．19	京都府道路公社	岩松　保
2．	南稲葉遺跡第２次	綾部市安国寺町南稲葉	平12．5．8～8．11	国土交通省近畿地方整備局	黒坪一樹
3．	善願寺遺跡第２次	船井郡園部町木崎町善願寺谷	平12．5．8～6．29	日本道路公団関西支社	石崎善久
4．	池上遺跡第７次	船井郡八木町池上	平12．6．21～11．8	京都府土木建築部	村田和弘
5．	半木町遺跡	京都市左京区下鴨半木町	平12．7．18～9．28	京都府	田代　弘
6．	三山木遺跡第３次	京田辺市三山木	平12．5．15～9．28	京田辺市	岡崎研一
7．	木津川河床遺跡第12次	八幡市八幡	平12．9．7～平13．1．12	京都府土木建築部	黒坪一樹

3．　本書で使用している座標は、国土座標第６座標系による。

4．　本書の編集は、調査第１課資料係が当った。

本　文　目　次

1．鳥取豊岡宮津自動車道関係遺跡平成12年度発掘調査概要----------1
2．南稲葉遺跡第２次発掘調査概要----------21
3．善願寺遺跡第２次発掘調査概要----------37
4．池上遺跡第７次発掘調査概要----------51
5．半木町遺跡発掘調査概要----------77
6．三山木遺跡第３次発掘調査概要----------83
7．木津川河床遺跡第12次----------97

挿　図　目　次

1．鳥取豊岡宮津自動車道関係遺跡

第１図　調査地位置図----------1
第２図　シリガイ１～７号墳位置図----------3
第３図　シリガイ７号墳検出遺構配置図----------5
第４図　シリガイ８・９号墳・エノク経塚位置図----------7
第５図　東禅寺古墳群位置図----------8
第６図　エノク経塚群検出遺構配置図----------10
第７図　塚ＳＸ01平・立面図----------11
第８図　塚ＳＸ01土層図----------11
第９図　経塚ＳＸ02平・断面図----------12
第10図　経塚ＳＸ03平・断面図----------13
第11図　経塚ＳＸ04平・断面図----------14
第12図　経塚ＳＸ05平・断面図----------15
第13図　出土遺物実測図(1)----------16
第14図　出土遺物実測図(2)----------17
第15図　出土遺物実測図(3)----------18

2．南稲葉遺跡第２次

第16図　調査地位置図----------22

第17図　トレンチ・調査区配置図----------23
第18図　Ｈ区平面図・土層断面図----------24
第19図　調査区横断面土層断面図----------25
第20図　上層遺構配置図(平安時代～近世)----------26
第21図　下層遺構配置図(飛鳥～奈良時代)----------28
第22図　竪穴式住居跡１・２、ＳＸ01平・断面図----------29
第23図　竪穴式住居跡３平・断面図----------30
第24図　土坑１・溝(テラス部)全体図----------30
第25図　土坑１平・断面図----------31
第26図　出土土器実測図----------32
第27図　出土土器実測図----------33
第28図　出土土器実測図----------34
第29図　出土土器実測図----------35
第30図　土製品実測図----------35

３．善願寺遺跡第２次

第31図　調査地周辺遺跡分布図----------39
第32図　善願寺遺跡トレンチ配置図----------41
第33図　善願寺遺跡第１次調査時地形測量図と第２次調査トレンチ配置略図----------42
第34図　善願寺遺跡土層柱状図----------43
第35図　Ｐ11～15トレンチ検出遺構全体図およびＰ15・16トレンチ検出遺構実測図----------44
第36図　Ｐ14トレンチ検出遺構実測図およびＳＨ1401実測図----------45
第37図　Ｐ11・12トレンチ検出遺構実測図----------46
第38図　善願寺遺跡出土土器実測図----------47
第39図　善願寺遺跡出土石器実測図----------48

４．池上遺跡第７次

第40図　調査地位置図----------52
第41図　第７次調査トレンチ配置図----------53
第42図　池上遺跡調査区配置図----------54
第43図　調査トレンチと模式柱状図作成ポイント----------55
第44図　土層模式柱状図----------56
第45図　試掘トレンチＡ～Ｃ平面図----------58
第46図　第１トレンチ平面図----------60
第47図　総柱建物跡ＳＢ01平・断面図----------61
第48図　溝ＳＤ13・土坑ＳＫ23断面図----------62
第49図　土坑ＳＸ24平・断面図----------63

第50図　土坑ＳＸ24内遺物出土状況図----------64
第51図　土坑ＳＫ42断面図----------65
第52図　第２トレンチ平面図----------66
第53図　出土遺物実測図(1)----------68
第54図　出土遺物実測図(2)----------70
第55図　自然流路検出位置図----------74

５．半木町遺跡

第56図　調査地位置図----------78
第57図　調査トレンチ配置図----------78
第58図　Ａ地区検出遺構平面図----------79
第59図　Ａ地区土層断面図----------79
第60図　Ｂ地区検出遺構平面図----------80
第61図　Ｂ地区土層断面図----------80
第62図　各トレンチ検出ピット断面図----------81
第63図　Ａ・Ｂ地区出土遺物実測図----------81

６．三山木遺跡第３次

第64図　調査地および周辺遺跡分布図----------84
第65図　区画整理区域内の遺跡分布図----------85
第66図　基本層位略図----------86
第67図　調査地位置図----------87
第68図　第１トレンチ平面図----------88
第69図　第２トレンチ平面図----------89
第70図　流路修築状況図----------89
第71図　第３・４トレンチ平面図----------90
第72図　ＳＢ07・08、ＳＡ09実測図----------91
第73図　ＳＢ11・12実測図----------91
第74図　ＳＢ13実測図----------92
第75図　出土遺物実測図(1)----------93
第76図　出土遺物実測図(2)----------94
第77図　出土遺物実測図(3)----------95
第78図　銭貨拓影----------95

７．木津川河床遺跡第12次

第79図　調査地位置図----------97
第80図　調査区位置図----------98
第81図　土層断面実測図----------99

第82図　東区検出遺構配置図----------100
第83図　東区検出遺構配置図----------100
第84図　ＳＫ01平・断面図----------101
第85図　西区溝検出状況図----------101
第86図　出土遺物実測図----------102
第87図　砂脈の平面図----------104
第88図　液状化跡(東区北東隅)の分析----------105

付　表　目　次

4．池上遺跡第７次
第１表　池上遺跡調査経過一覧表----------51
6．三山木遺跡第３次
第２表　三山木遺跡・二又遺跡調査一覧表----------83

図　版　目　次

1．鳥取豊岡宮津自動車道関係遺跡
図版第１　(1)シリガイ１号墳試掘トレンチ(北北東から)
(2)シリガイ２号墳試掘トレンチ(北から)
(3)シリガイ２・３号墳試掘トレンチ(北北東から)
図版第２　(1)シリガイ４号墳試掘トレンチ(東南から)
(2)シリガイ５号墳試掘トレンチ(南西から)
(3)シリガイ６号墳試掘トレンチ(北東から)
図版第３　(1)シリガイ７号墳試掘トレンチ(南東から)
(2)シリガイ７号墳試掘トレンチ(北東から)
(3)シリガイ８号墳試掘トレンチ(北東から)
図版第４　(1)東禅寺１号墳主体部検出状況(北西から)
(2)東禅寺３号墳主体部検出状況(南東から)

(3)東禅寺1号墳土師器高杯出土状況(西から)
図版第5　(1)エノク経塚群塚ＳＸ01検出状況(北北東から)
(2)エノク経塚群塚ＳＸ01検出状況(北東から)
(3)エノク経塚群塚ＳＸ01検出状況(北東から)
図版第6　(1)エノク経塚群塚ＳＸ01遺物出土状況(北東から)
(2)エノク経塚群塚ＳＸ01東西土層(北北東から)
(3)エノク経塚群経塚検出状況(南から)
図版第7　(1)エノク経塚群経塚ＳＸ02閉塞石組検出状況(南から)
(2)エノク経塚群経塚ＳＸ02外容器検出状況(南から)
(3)エノク経塚群経塚ＳＸ02平石検出状況(南から)
図版第8　(1)エノク経塚群経塚ＳＸ03閉塞石組検出状況(南西から)
(2)エノク経塚群経塚ＳＸ02閉塞石検出状況(南西から)
(3)エノク経塚群経塚ＳＸ03外容器検出状況(南西から)
図版第9　(1)エノク経塚群経塚ＳＸ04閉塞石組検出状況(北東から)
(2)エノク経塚群経塚ＳＸ04閉塞石検出状況(北東から)
(3)エノク経塚群経塚ＳＸ04外容器検出状況(北東から)
図版第10　(1)エノク経塚群経塚ＳＸ05閉塞石組検出状況(西南西から)
(2)エノク経塚群経塚ＳＸ05外容器検出状況(南西から)
(3)エノク経塚群経塚ＳＸ05外容器裏込石状況(南西から)
図版第11　エノク経塚群出土遺物(1)
図版第12　エノク経塚群出土遺物(2)

2．南稲葉遺跡第2次

図版第13　(1)南稲葉遺跡全景(南から：北東は安国寺町集落)
(2)南稲葉遺跡調査区全景(南西から)
図版第14　(1)南稲葉遺跡調査区谷部全景(東から)
(2)南稲葉遺跡調査区縁辺部(東から)
(3)南稲葉遺跡谷部柱穴群(南から)
図版第15　(1)南稲葉遺跡竪穴式住居跡1・2(東から)
(2)南稲葉遺跡竪穴式住居跡3(北西から)
(3)南稲葉遺跡竪穴式住居跡3竈部(北西から)
図版第16　(1)南稲葉遺跡土坑1全景(南東から)
(2)南稲葉遺跡土坑1土器出土状況(西から)
(3)南稲葉遺跡土坑1竈形土器出土状況(北東から)
図版第17　(1)南稲葉遺跡土坑1土器出土状況(東から)

(2)南稲葉遺跡土坑１竈形土器底部(南から)
(3)南稲葉遺跡土坑１須恵器壺(南東から)
図版第18　(1)南稲葉遺跡土坑１土器出土状況(南から)
(2)南稲葉遺跡土坑１底部竈形土器(南から)
(3)南稲葉遺跡土坑１土器除去状況(南から)
図版第19　(1)南稲葉遺跡土坑１西側テラス部完掘状況(東から)
(2)南稲葉遺跡土坑１完掘状況(西から)
(3)南稲葉遺跡土坑１小土坑内須恵器出土状況(南東から)
図版第20　(1)南稲葉遺跡谷部土層断面(南から)
(2)南稲葉遺跡谷部土層断面アップ(西から)
(3)南稲葉遺跡谷部土馬出土状況(南から)
図版第21　(1)南稲葉遺跡調査区完掘状況(南西から)
(2)南稲葉遺跡北西丘陵部掘削状況(南から)
(3)南稲葉遺跡北西丘陵部近世土坑(南から)
図版第22　(1)南稲葉遺跡掘削風景(東から)
(2)南稲葉遺跡北側丘陵部掘削状況(西から)
(3)南稲葉遺跡北西側丘陵部掘削状況(北から)
図版第23　南稲葉遺跡出土土器
図版第24　南稲葉遺跡出土土製品

３．善願寺遺跡第２次

図版第25　(1)善願寺遺跡全景(北東上空から園部盆地を望む)
(2)善願寺遺跡全景(北上空から)
図版第26　(1)善願寺遺跡全景(上空から、上が西)
(2)Ｐ14～16トレンチ全景(上空から、上が西)
(3)Ｐ11・12トレンチ全景(上空から、上が西)
図版第27　(1)調査前全景(北から)　(2)調査前全景(南から)
図版第28　(1)Ｐ16トレンチ遺構検出状況(南から)
(2)Ｐ15トレンチ遺構検出状況(南から)
図版第29　(1)Ｐ14トレンチ遺構検出状況(南から)
(2)竪穴式住居跡ＳＨ1401検出状況(南から)
図版第30　(1)Ｐ12トレンチ遺構検出状況(南から)
(2)Ｐ12トレンチ断ち割り状況(北から)
図版第31　(1)Ｐ11トレンチ遺構検出状況(南から)
(2)Ｐ17トレンチ掘削状況(西から)

図版第32　(1)Ｐ10トレンチ掘削状況(北から)
(2)作業風景(南から)

4．池上遺跡第７次

図版第33　(1)調査地遠景(南上空から)　(2)調査地遠景(北上空から)
図版第34　(1)第１・２トレンチ全景(上が北)　(2)第１トレンチ南側(上が北)
図版第35　(1)調査前風景(北西から)　(2)重機掘削作業風景(北から)
(3)第１トレンチ重機掘削後精査前風景(北から)
図版第36　(1)試掘トレンチＡ遺構検出状況(南から)
(2)試掘トレンチＢ遺構検出状況(北から)
(3)試掘トレンチＣ遺構検出状況(西から)
図版第37　(1)試掘トレンチＡ遺構掘削作業(南から)
(2)第２トレンチ遺構精査作業(南から)　(3)第２トレンチ全景(北から)
図版第38　(1)試掘トレンチＡ検出遺構(南東から)
(2)第１トレンチ溝ＳＤ13検出状況(南から)
(3)第１トレンチ南端部遺構掘削風景(南東から)
図版第39　(1)第１トレンチ南側遺構検出状況(北から)
(2)大型土坑ＳＸ24検出時全景(北から)　(3)大型土坑ＳＸ24作業風景(北西から)
図版第40　(1)土器(No.97)出土状況(南から)　(2)土器(No.87)出土状況(東から)
(3)土器(No.57・62)出土状況(北から)
図版第41　(1)大型土坑ＳＸ24全景(北から)　(2)大型土坑ＳＸ24断面(東から)
(3)溝ＳＤ31断面(東から)
図版第42　(1)掘立柱建物跡ＳＢ01検出状況(南から)
(2)掘立柱建物跡ＳＢ01掘削作業風景(南西から)
(3)柱穴10断面(北から)
図版第43　出土遺物(1)
図版第44　出土遺物(2)

5．半木町遺跡

図版第45　(1)調査地全景(南から)　(2)Ａ地区調査風景(南から)
(3)Ｂ地区調査風景(北から)
図版第46　(1)Ａ地区全景(南から)　(2)Ａ地区調査後の全景(西から)
(3)Ａ地区調査後の風景(北西から)
図版第47　(1)Ａ地区遺構検出状況(西から)　(2)Ａ地区検出遺構(西から)
(3)Ａ地区検出遺構(北東から)

図版第48　(1)Ｂ地区作業風景(東から)　(2)GPSによる基準点測量(Ａ地区、北東から)
(3)土層断面図作成のための基準点設置風景(Ｂ地区、南から)
図版第49　(1)Ｂ地区全景(南から)　(2)Ｂ地区調査後全景(南西から)
(3)Ｂ地区調査後全景(南東から)
図版第50　(1)Ｂ地区ＳＫ04検出状況(東から)　(2)Ａ地区土層の堆積状況(西から)
(3)Ｂ地区土層の堆積状況(西から)

６．三山木遺跡第３次

図版第51　(1)三山木遺跡全景(北上空から)　(2)調査地全景(上空から)
図版第52　(1)第１トレンチ完掘状況(南東から)　(2)第２トレンチ遺構検出状況(南から)
図版第53　(1)第２トレンチ上層遺構(南から)　(2)第２トレンチ上層遺構(南から)
図版第54　(1)第２トレンチ下層遺構(北西から)　(2)第２トレンチＳＤ03～06近景(東から)
図版第55　(1)第２トレンチＳＤ03と畦断ち割り状況(東から)
(2)第２トレンチ南西隅断ち割り状況(北から)
図版第56　(1)第２トレンチ畦断ち割り状況(北から)
(2)第２トレンチ断ち割り状況(北西から)
図版第57　(1)第３トレンチ遺構検出状況(南から)　(2)第３トレンチ完掘状況(南から)
図版第58　(1)第３トレンチＳＢ07近景(南から)
(2)第３トレンチ柱穴内遺物出土状況(西から)
(3)第４トレンチ柱穴内遺物出土状況(東から)
図版第59　(1)第４トレンチＳＢ13近景(北から)
(2)第４トレンチＳＢ11・12近景(南から)
図版第60　出土遺物

７．木津川河床遺跡第12次

図版第61　(1)調査地全景(東から)　(2)東区全景(東から)
図版第62　(1)東区遺構検出状況(鎌倉～安土桃山時代、北から)
(2)溝(ＳＤ05)検出状況(南から)
図版第63　(1)東区柱穴・土坑検出状況(北から)
(2)柱穴(Ｐ１)完掘状況(西から)
(3)土坑(ＳＫ01・02)掘削状況(東から)
図版第64　(1)土坑(ＳＫ01)掘削状況(北から)
(2)土坑(ＳＫ01)完掘状況(北から)
図版第65　(1)東区北側断面(第81図下に対応、北西から)
(2)東区流路(ＳＤ20)断面検出状況(第81図下に対応、北東から)

(3)東区流路(ＳＤ20)断面検出状況(北壁中、南東から)
(4)液状化の断面形(第88図２に対応、東から)
(5)液状化跡の断面形(第88図３に対応、西から)
(6)東区液状化跡観察部分(北東から)
図版第66　(1)液状化現象記録作業(東区北東隅、南から)
(2)出土遺物

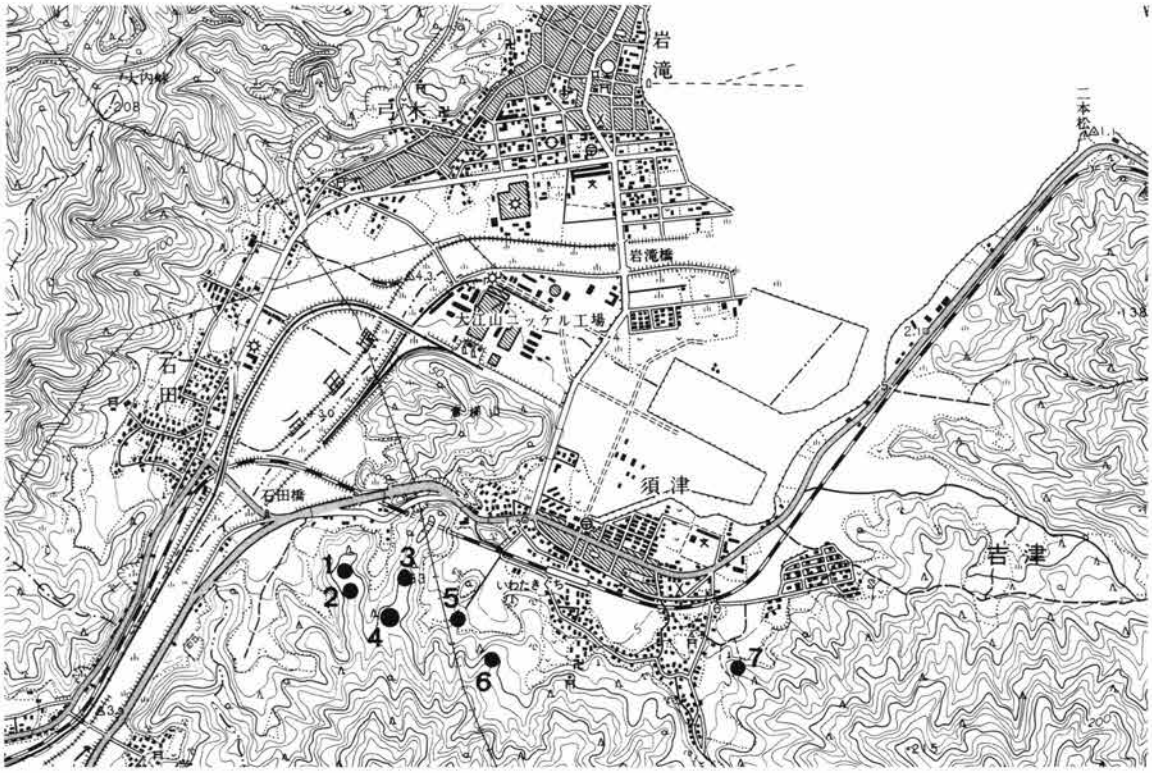
1．鳥取豊岡宮津自動車道関係遺跡 平成12年度発掘調査概要

1．はじめに

京都府道路公社は鳥取豊岡宮津自動車道の建設を計画しており、その事前調査として、当調査研究センターは平成12年度に宮津市内において、シリガイ古墳群と東禅寺古墳群の試掘調査、シリガイ９号墳地点で確認されたエノク経塚群の発掘調査と桑原口遺跡の試掘調査を実施した。

シリガイ古墳群・東禅寺古墳群は、宮津市須津地内に所在する(第１図)。京都府教育委員会と宮津市教育委員会が道路予定地内の分布調査を平成10年度に実施したところ、須津地区で古墳状隆起が分布していることが判明した。新たに確認された古墳状隆起は、その分布している地区の字名より、シリガイ古墳群(９基)と東禅寺古墳群(３基)と命名された。今回、これらの古墳状隆起の埋葬主体部の有無を確認することを目的として、試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、東禅寺古墳群では、１・３号墳からそれぞれ１基の埋葬主体部が見つかり、古墳であることが判明した。出土した土器から、古墳時代前期のものと思われる。シリガイ古墳群では、全ての地点で埋葬主体部を確認できなかったが、数基の古墳状隆起からは須恵器片が出



第１図　調査地位置図(1/25,000)

1.シリガイ１号墳　2.シリガイ２・３号墳　3.シリガイ４号墳　4.シリガイ５～７号墳
5.シリガイ８号墳　6.シリガイ９号墳・エノク経塚　7.東禅寺１～３号墳

土しており、古墳であったものが、後世の開墾等により削平されてしまった可能性も考えられる。さらに、シリガイ９号墳地点では石を埋め込んだ塚とその間で土師製筒形容器片を確認し、経塚もしくは古墓であることが判明した。協議の結果、試掘調査に引き続いて、この塚の発掘調査を実施することとなった。調査の結果、この塚の下層から、12～13世紀代の経塚が４基見つかった。この経塚群の位置する場所を地元では「エノク(家の奥)」と呼んでおり、宮津市教育委員会との調整により新たに見つかった経塚群をエノク経塚群と命名した。

桑原口遺跡は、宮津市喜多小字桑原口に所在し、従前の調査により、弥生時代後期から古墳時代前期を中心にした集落跡が調査されている(石井他1997・田代1998・増田他1999)。現地調査は、６本のトレンチを設定し、全域で弥生時代後期を中心とする柱穴・土坑・溝とともに、土器片や石器が出土した。平面「コ」の字に掘削された溝も確認しており、方形周溝墓の一部、もしくは、竪穴式住居跡の周囲にめぐる溝である可能性が認められた。

シリガイ古墳群・東禅寺古墳群の調査は、調査第２課調査第３係長辻本和美と同主任調査員岩松　保が担当した。両古墳群の試掘調査は、平成12年６月１日に着手し、８月12日まで実施した。エノク経塚群の調査は、８月21日～９月19日まで実施した。調査面積は、両古墳群の12か所の試掘調査全てで、約870㎡である。エノク経塚の調査は、シリガイ９号墳としての試掘調査面積を含めて、約60㎡である。桑原口遺跡の調査は、調査第２課課長補佐兼調査第１係長水谷壽克と同主任調査員引原茂治が担当した。現地調査は平成12年11月15日～12月22日までを要した。調査面積は約300㎡である。

桑原口遺跡は、来年度に隣接地を調査する予定であるため、今回の調査成果は、次年度の調査成果と併せて報告する予定である。そのため、今回の鳥取豊岡宮津自動車道関係遺跡の概要報告は、宮津市須津地区で行ったシリガイ古墳群・東禅寺古墳群の試掘調査とエノク経塚の調査成果をまとめたもので、現地調査を担当した岩松が執筆した。現地調査には京都府道路公社建設事務所および京都府教育委員会、宮津市教育委員会のご協力を得た。また、宮津市須津地区の自治会には作業員の募集や宿舎の手配等でご尽力いただいた。地元有志の方々には作業員として調査に参加していただいた。ここに記して感謝する次第である。(注1)

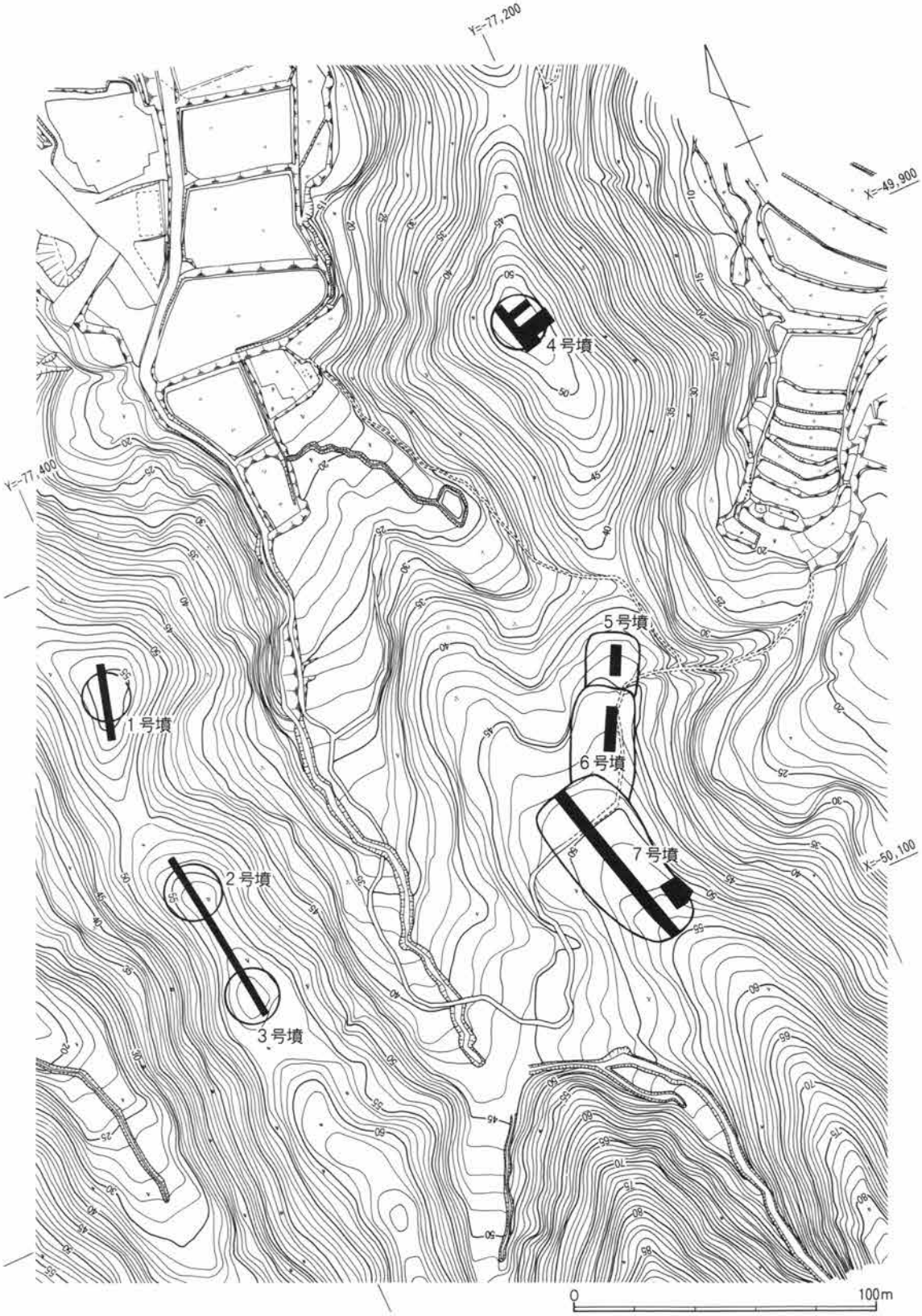
今回の調査は、京都府道路公社の委託を受けて実施したもので、調査に関わる費用は京都府道路公社が全額負担した。

2．試掘調査の概要

(1)シリガイ古墳群(第２・４図)

シリガイ古墳群は、東西約500ｍの範囲に分布し、１～３号墳、５～７号墳はそれぞれが同一の丘陵尾根筋上に立地しているのに対して、４・８・９号墳は、それぞれが別個の丘陵上に分布している。

シリガイ１号墳(図版第１－(1))　シリガイ１号墳は、２・３号墳と同じ山尾根上にあり、北側の先端部に位置している。２号墳との間の鞍部から１号墳を望むと、比高差約５ｍの高まりを



第2図　シリガイ1～7号墳位置図

なした古墳状を呈している。墳頂部には、径約12mの平坦部があり、北西方向には、なだらかな緩傾斜面が伸びている。

調査トレンチは、幅２ｍ・長さ25mで、平坦部の中央を横切るように南北に設定した。表土下20～30cmで、明褐色土系の地山を確認し、この地山直上面で精査を行ったが、竹や木の根状を呈した土質の違いを確認しただけで、遺構・遺物は全く確認できなかった。さらに、明褐色土系の地山と判断される土層を深さ約40cm程度断ち割ったが、墳丘を形成する盛土であるという兆候は見られず、当初の考え通り、地山と判断した。

シリガイ２・３号墳(図版第１－(2)・(3))　２号墳は、１号墳と鞍部を挟んで、約５ｍの高まりを有しており、墳頂部には８ｍ×10m程度の平坦面が形成されている。２号墳と３号墳の間は、幅が５ｍ程度と狭くなって、長さ10m程度にわたって平坦面をなしている。３号墳は、２号墳との間の平坦面から長さ約15mにわたってほぼ直線的に墳頂部に至る緩傾斜面をなして、比高差約３ｍの高まりをなしている。墳頂部には径約８ｍの平坦面が形成されており、この南側は、幅15ｍ、深さ２ｍ程度の溝状の鞍部が形成されている。

２・３号墳を縦断するように、幅２ｍ・長さ60mのトレンチを設定して調査を行った。トレンチ内の全面にわたり現地表下20cm程度で、地山と判断される明褐色～黄褐色土層を確認した。それを確かめるため、サブトレンチを設定し、地点によっては0.4～１ｍと深さを違えて断ち割りを行ったが、古墳の盛土であるという積極的な根拠は得られなかった。これらの土層を地山と判断し、地山直上で平面的に精査を行ったところ、２号墳の墳頂平坦面の南寄りで、焼土塊と炭化物が混じる土坑を確認した。一部トレンチ外に伸びるため、全体の規模は不明であるが、1.5ｍ×0.8m以上の不定形をなしており、深さ約30cmである。内部には焼土塊・炭化物が混じっていた。時期を決めうるものは何も出土しなかった。２号墳の北斜面では、径50cm程度・深さ40～60cm程度の土坑状の色調の違いを確認したが、その埋土が一様であることや、土坑の先端が細くなること、無遺物であることなどから、根株痕等と推測した。３号墳やその斜面、２・３号墳との間の平坦面では、遺構と判断される土色・土質の違いや遺物はまったく確認できなかった。

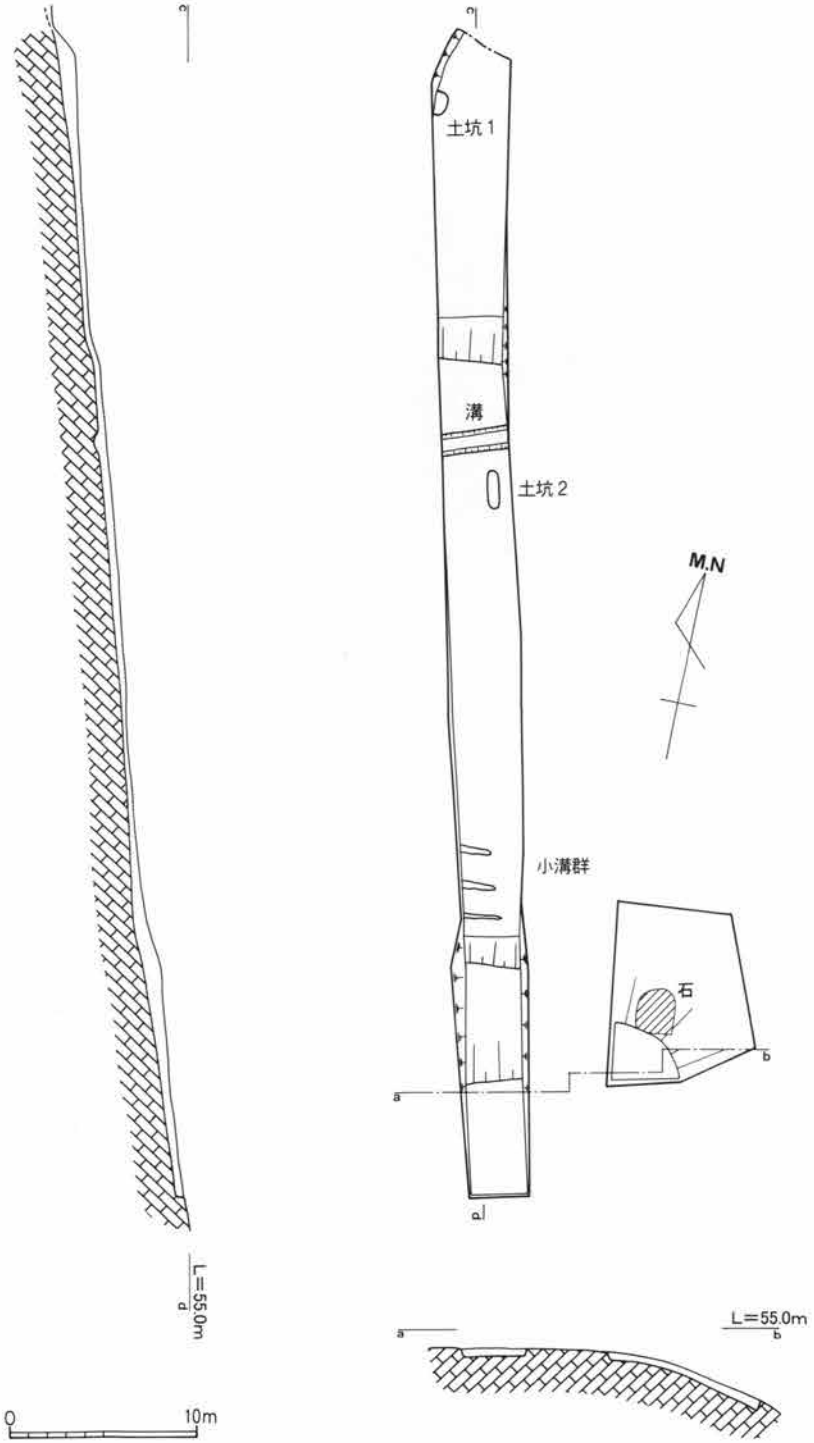
シリガイ４号墳(図版第２－(1))　シリガイ４号墳は、５～７号墳の北にある独立丘陵の頂上に位置し、現況では、径15m程度の平坦部があり、古墳状を呈していた。

当初、墳頂部と判断される平坦部、尾根筋に直交したトレンチを２ｍ×17mにわたって設定した。土層は、腐植土下に、淡褐色土が10～25cm堆積しており、その下が淡赤褐色土～黄褐色土の地山となる。地山直上では、木の根株痕等の色調の違いが認められたが、それ以外の顕著な土質・土色の違いは認められなかった。ところが、遺構に伴わないが、平坦面の淡褐色土中より、染め付け片２点、陶器擂り鉢片２点が出土した。さらに、トレンチの西南部、平坦面が終わって斜面に下りかける位置で、須恵器小片１点が出土した。須恵器片の出土を見たことから、４号墳が古墳である可能性が高まったので、平坦面の南側をほぼ全域65㎡にわたって拡張を行い、主体部の検出に努めた。ところが、拡張した調査区からは全く遺物の出土がなく、人工的な土色の違いも認められなかったため、古墳であると積極的に肯定できる根拠は得られなかった。

シリガイ５号墳(図版第２－(2))　シリガイ５～７号墳は同一の丘陵上に位置し、丘陵の奥から先端部に向けて７・６・５号墳が分布している。５号墳は幅15m・長さ12m程度の北側にやや狭まった台形状を呈した平坦面をなしており、南側の６号墳との間には約１mの段差が形成されている。この平坦面中央に南北方向の３m×10mトレンチを設定した。表土下20～40cmで黄褐色～赤褐色土の地山となり、地山上では遺構と判断されるものは認められなかった。遺物も全く出土しなかった。

シリガイ６号墳(図版第２－(3))　シリガイ５号墳の南に位置し、20m×25mの平坦面が形成されている。この中央に、３m×15mの南北方向のトレンチを設定して調査を行った。表土下10～20cmで黄褐色土～赤褐色土の地山となる。地山上では、木の根株痕と判断される窪み状の坑内に、赤く焼けた焼土塊が１点認められた。これ以外に遺構状のものはなく、しかも遺物の出土が全く認められなかったので、古墳とは判断しがたい。

シリガイ７号墳(第３図、図版第３－(1)・(2))　東西30m・南北60mの緩傾斜面をなしており、東西方向に比高差数10cmの二つの崖面が作られているため、内部は３段の平坦面が形成されている。６号墳との間にも、１m以上の崖面がある。表土中には、近現代の陶磁器



第３図　シリガイ７号墳検出遺構配置図

写真１　シリガイ７号墳小溝群

写真２　シリガイ７号墳土坑１

小片が散見された。樹木伐採後の現況を見ると、古墳と言うよりも、集落跡や城館跡が包蔵されているものと判断された。

これら、３段の平坦面を縦断するように、南北方向に３ｍ幅のトレンチを50ｍにわたって設定した。表土下には、淡褐色土層が15～25cmの厚さで堆積し、その下で、赤褐色を呈した地山を確認した。地山面では、土坑２基、溝、小溝３条を検出した。

小溝群(写真１)　調査地の南側の崖面を下った位置で検出した。３条の小溝が1.8ｍ間隔で並行している。現地表面で見られる段差の方向とは若干異なり、東で南にやや振れている。溝の規模は、幅30cm・深さ約10cmで、長さ1.8ｍにわたって検出した。溝底は小穴が連なって掘られているような状況である。これらの小溝内からは遺物の出土が全くないので、その埋没時期や性格は直接的には分からないが、聞き取りによると、７号墳としている平坦面には、第二次大戦直後には茶畑が営まれていたということなので、その時点のものとも考えられる。

土坑１(写真２)　調査地の北西部で検出した。一部調査地外に伸びるため、全容は不明であるが、長さ115cm・幅60cm以上、検出した深さは約20cmである。この土坑の直上の淡褐色土層中より、須恵器杯身片が出土した(第13図１)。この淡褐色土が土坑中の埋土であるのか、地山を一様に覆ういわゆる包含層であるのかは、木の根による攪乱が丁度この位置にあるため、確認できなかった。

溝　現地表面の段差にほぼ並行しており、トレンチ幅分の３ｍにわたって検出した。幅1.2ｍ・深さ15cmを測る。この埋土の土色は淡黄褐色土で、地山の赤褐色土とは明らかに異なっているが、土のキメや粘度・固さはほとんど同じで、やや柔らかく感じる程度である。そのため、水の染み込みや木の根の影響などのために地山が変色したものとも考えられる。遺物の出土はない。現地表では伐採樹木が散乱しているために確認できなかったが、現況図によると、この溝付近に“山道”が通っているので、それに関連するものとも考えられる。

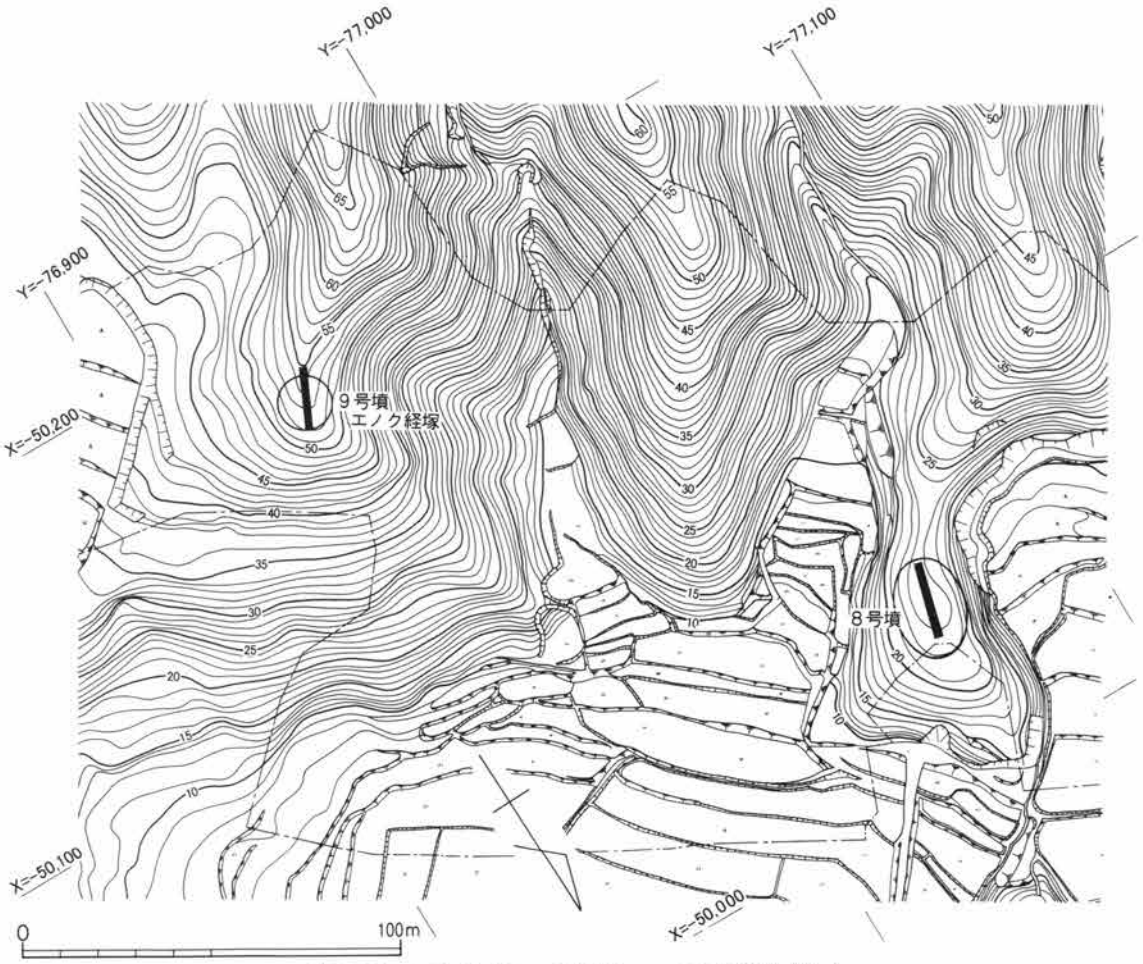
土坑２　埋土が淡褐色土で、60cm×195cmの長楕円形を呈しており、検出した深さは最大で８

cmである。土坑中に、拳大の石が1点入っていた。先述の溝にほぼ直交する方位を有している。

南西部の傾斜変換点付近には、2.3m×1.9m・高さ1.4mの巨石が横たわっていた(図版第3－2)。横穴式石室の天井石の可能性を想定し、この石の周辺を6.2m×9.8mにわたって調査を行った。その結果、巨石の周辺では、人頭大から大人の身体大の石が、斜面の傾斜に直交する方向で、数条の列状をなして分布していた。地表で見られた巨石や一部の石は地山の上に載っていたが、大半の石は地山である赤褐色土中に埋まっていた。このことから、これらの石は人工的に配置されたものではなく、自然の堆積物と判断された。遺物は全く出土しなかった。

シリガイ8号墳(図版第3－(3)) 幅15m・長さ25mの丘陵上の平坦面に、丘陵の尾根筋方向に沿って、最大60cm程度の土手状の盛り上がりが幅4m・長さ20数mにわたって認められた。その土手状の盛り上がりの中央に、幅2m・長さ20mのトレンチを設定した。土層は、表土下、20～40cmの厚さで淡褐色土が堆積しており、その下に赤褐色土の地山がある。表土内から現代陶器の茶碗片1点が出土したが、それ以外に遺物の出土は見なかった。地山直上では、根株痕と想定される窪みや穴を検出したが、人工的な掘り込みは認められなかった。

シリガイ9号墳 シリガイ9号墳は丘陵尾根端に径約3mにわたって30～50cm程度の盛り上がりが認められ、表土の間からは人頭大の石が見られた。この尾根筋の中央に、幅1.5m・長さ16



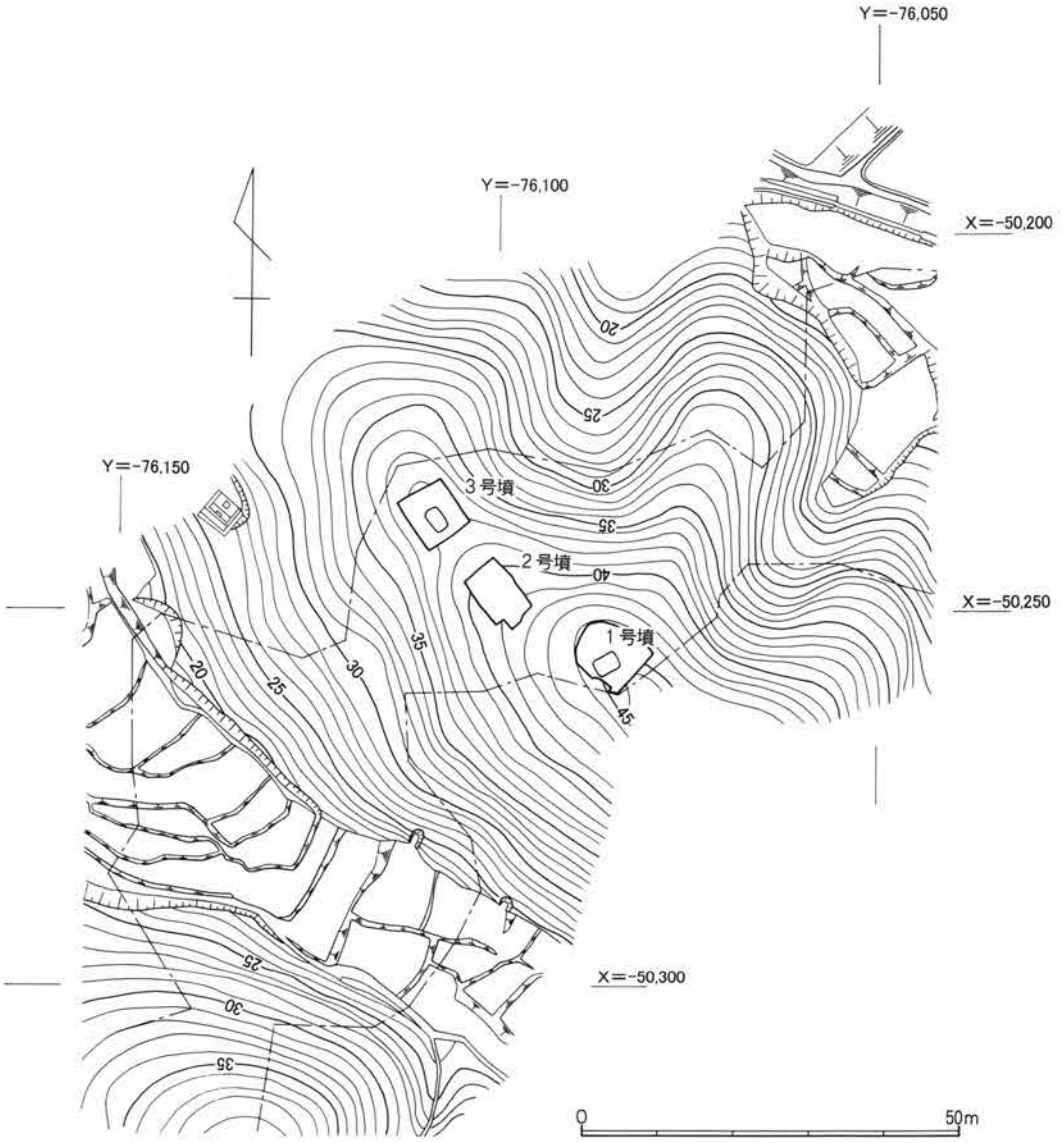
第4図 シリガイ8・9号墳・エノク経塚位置図

mのトレンチを設定した。丘陵の先端部では、人頭大の石を数個組み合わせた高さ約35cmの塚状の高まりを確認した。そのため周囲を拡張し、その全容の確認に努めたところ、3.5m×5mの長楕円形を呈した塚を確認した。北東辺に当たる丘陵先端部側には人頭大の石が盛土内に埋め込まれていた。石組の間からは、土師製筒形容器の小破片がまとまって出土した。後述のように、本調査の結果、経塚であることが判明した。この南側のトレンチ全域では、表土下30cm程度で赤褐色の地山を確認したが遺構・遺物は全く確認できなかった。

(2)**東禅寺古墳群**(第5図)

東禅寺古墳群は3基の古墳が丘陵斜面に一列に分布している。丘陵の高所から低所に向けて、1～3号墳が分布している。

東禅寺1号墳(図版第4－(1)・(3))　墳頂部は、8×15mのやや細長い平坦面をなしており、南側の約1/3は開発対象地外である。その一部を除いて、平坦面のほぼ全域にトレンチを設定し、調査を行った。表土下には黄褐色土が堆積しており、約50cm掘り下げると地山になる。この地山



第5図　東禅寺古墳群位置図

面で精査を行ったところ、試掘トレンチのほぼ中央で、2.4m×3.2mの主体部1基を確認した。検出面より約5cm程度を掘り下げたが、遺物は出土しなかった。さらに、主体部の西南部約2.5mの地点から、古墳時代前期頃の高杯2点がまとまって出土した(図版第4－(3))が、それに伴う土坑等は確認できなかった。

写真3　東禅寺2号墳全景

東禅寺2号墳(写真3)　1号墳と3号墳の間に位置する古墳状の隆起で、3号墳より約2mの高まりを有した、9m×11mの平坦面が広がっている。この平坦面のほぼ全域に調査トレンチを設定した。地表下30～50cmで地山と判断される土層となり、この直上で遺構の検出に努めたが、遺構・遺物ともに全く確認できなかった。そのため、この地山と判断される層を50cm程度断ち割って、盛土である可能性を検討したが、盛土であるという積極的な根拠は認められず、地山と判断せざるを得なかった。墓壙等の遺構も確認できなかった。このように試掘調査の結果、2号墳が古墳であるという兆候を全く確認できなかったが、1号墳と3号墳とに挟まれたその位置と形状から、元々は古墳であったのが、封土・墓壙が流出してしまったという可能性は否定できない。

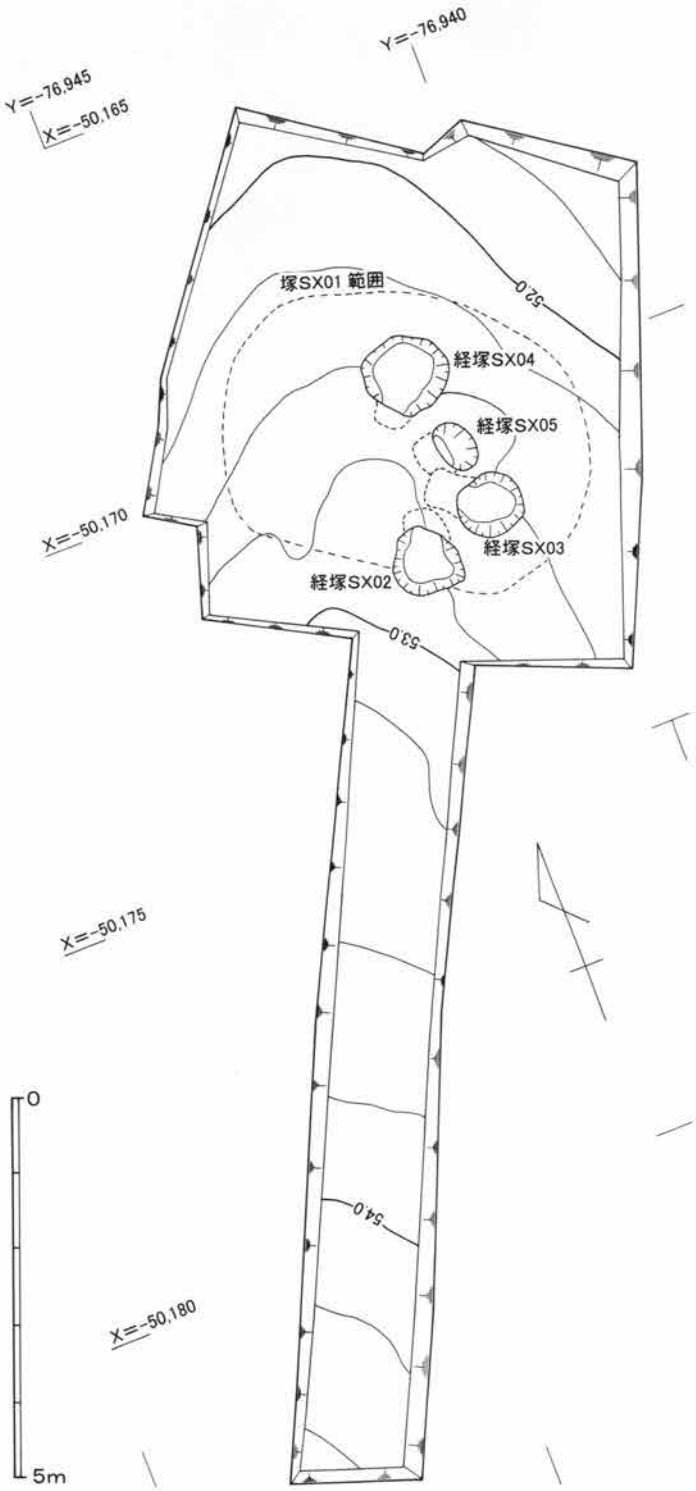
東禅寺3号墳(図版第4－(2))　墳頂部は約8m×11mの平坦面をなしており、ほぼ全域に試掘トレンチを設定した。平坦部のほぼ中央に2.1m×3.3mの主体部1基を確認した。遺物は全く出土していない。

(3)まとめ

シリガイ古墳群は、試掘調査によって、1～9号墳のそれぞれから埋葬主体は見つからず、古墳であるという確証は得られなかった。とは言っても、シリガイ4号墳からは須恵器小片が出土しており、元々は古墳であったものが、後世の開墾等により削平されてしまった可能性も考えられる。シリガイ7号墳は、樹木伐採後の現況を観察すると、古墳と言うよりも集落跡・城館跡と判断された。ここでは実際に、小溝3、土坑2、溝1を検出したが、内部から全く遺物が出土しなかったため、その時期は不明である。第二次大戦直後には茶畑であったという聞き取りから、これらの遺構の大半はその時の耕作に伴うものと判断される。ただ、土坑1直上の包含層中より須恵器杯身片が出土しており、この時期の集落跡が存在していた可能性も否定できない。

シリガイ9号墳では、3.5m×5mで高さ35cm程度の塚を確認した。引き続いて発掘調査を実施したところ、後述のように、塚の下位から経塚群が見つかり、エノク経塚群と命名された。

東禅寺古墳群は、試掘調査の結果、東禅寺1・3号墳としてマークされた地点は、墳頂平坦面で主体部を確認し、古墳であることが判明した。埋葬主体はその上面を確認しただけであるので、その詳細については不明であるが、周辺での事例を参考にすると、墓壙内に木棺を納めたものと



第６図　エノク経塚群検出遺構配置図

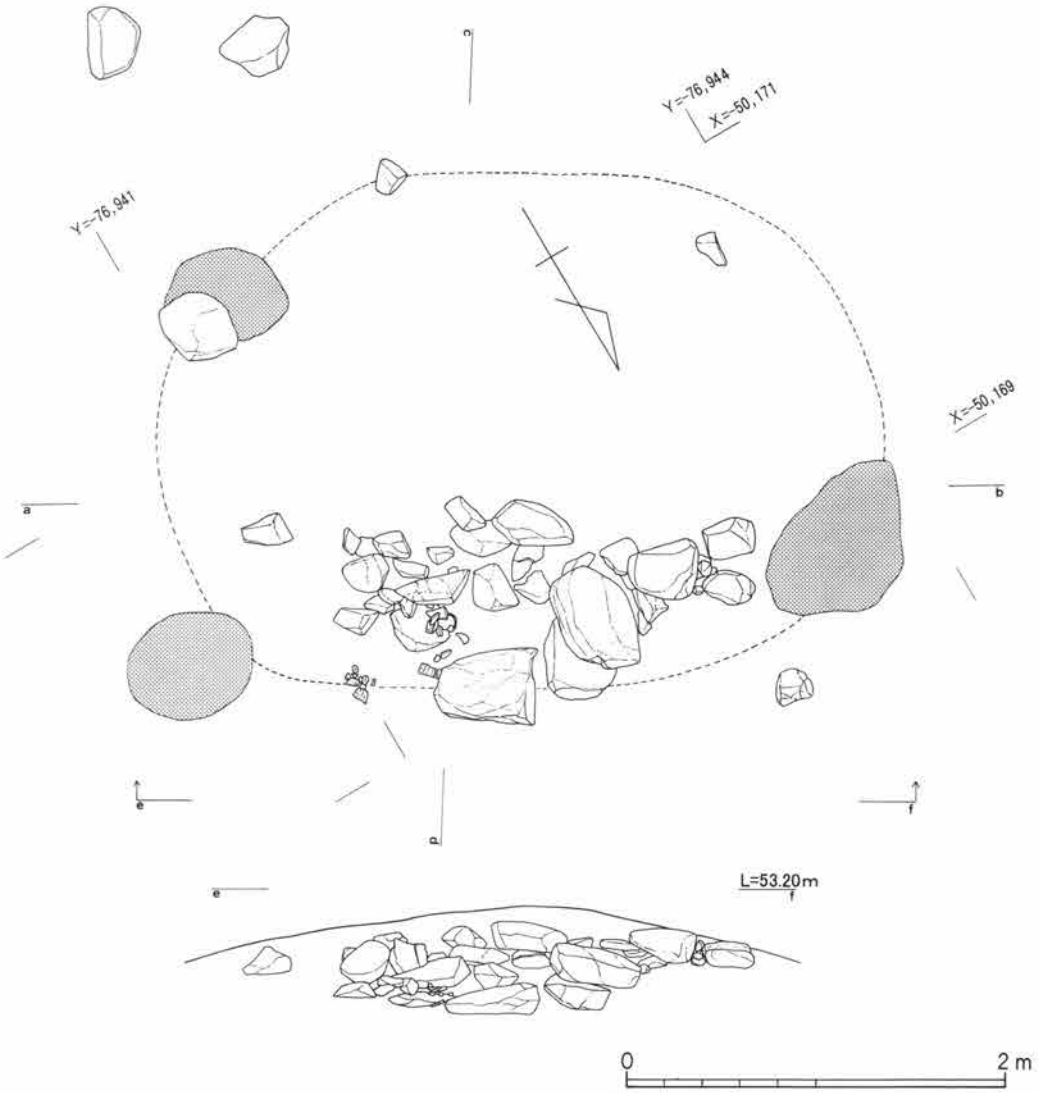
判断される。さらに、１号墳と３号墳に挟まれた２号墳は、現状では平坦面をなし、位置的には古墳であってもおかしくない状況である。

３．エノク経塚群の調査

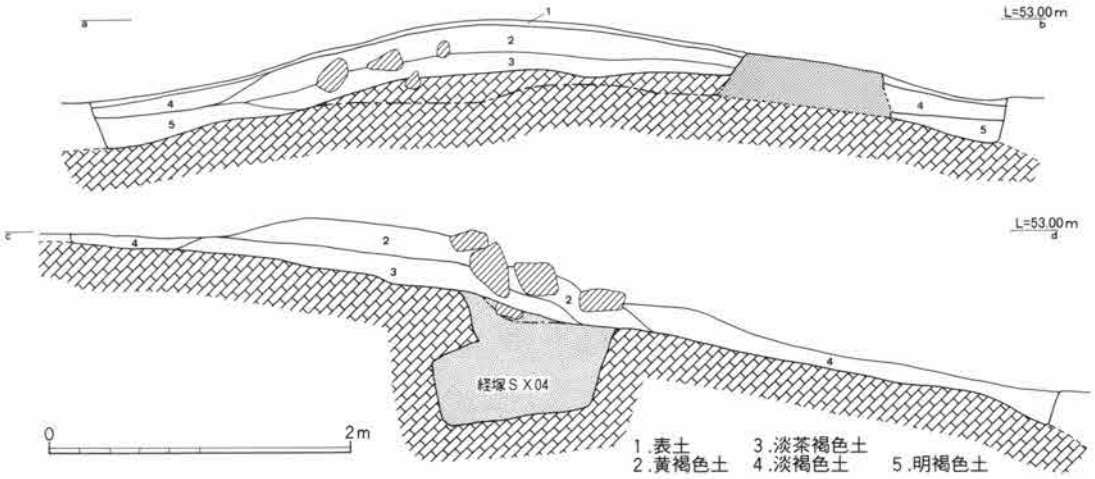
(1)調査の概要

エノク経塚群は丘陵先端部に造られており、盛土をした塚とその下で経塚４基を検出した。塚の下位で検出した経塚群は、平面「L」字形に並んでいる（第６図、図版第６－(3)）。

塚ＳＸ01（第10・11図、図版第５－(1)～(3)）　幅約3.5m・長さ約５m・高さ約35cmに盛り上げられた塚で、北側の斜面のみ、人頭大の石が段状に組まれていた。塚は２層に盛り上げられており、塚の四周の裾部には、塚盛土よりの流出と判断される淡褐色土が堆積していた。平面図・土層図で分かるように、石が組み入れられているのは塚の北面に限られており、他は盛土を行っているだけである。このことから、塚の下部に等しく石を埋め込んで塚の下部構造をなすことを意図したのではなく、北辺部の「石壇状」の石組を組むことを目的にしたものと判断される。石組は第３層の淡茶褐色土上に組み上げられ、第２層の黄褐色土層中に及んでいる。南北土層の観察により、経塚ＳＸ04が埋まった後に塚ＳＸ01が盛り上げられていることが分かった。また、東西土層の観察では、経塚ＳＸ05の閉塞石の一部が塚ＳＸ01の盛土の最下部で確認できたので、経塚ＳＸ05の埋設後に塚ＳＸ01を構築したことが判明した。経塚ＳＸ02・03は、塚ＳＸ01の盛土を除去した段階で、閉塞石の石組や土坑の掘形が確認できた。以上のことから、経塚ＳＸ02～05の構築後に塚ＳＸ01が盛り上げ



第７図　塚ＳＸ01平・立面図

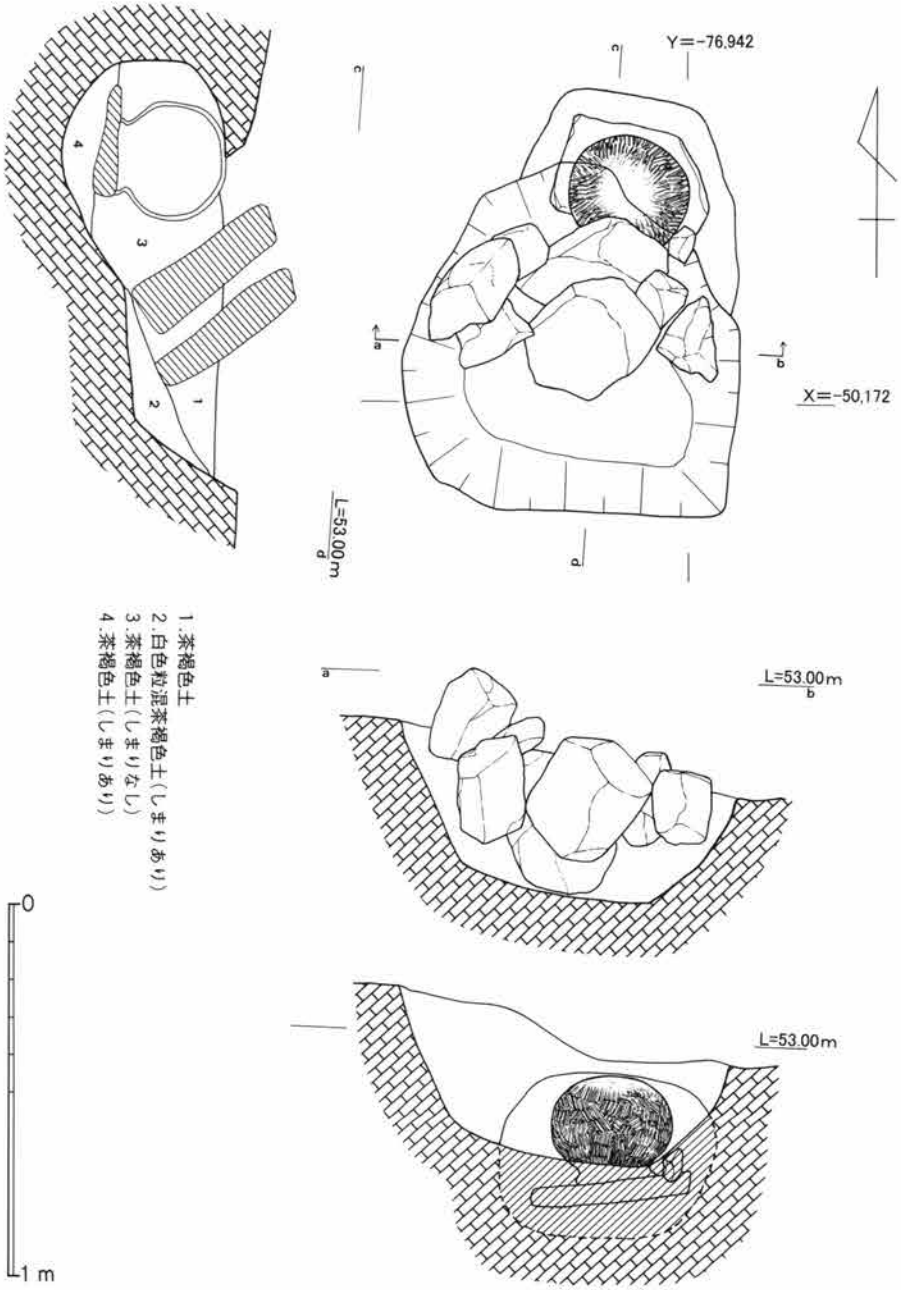


第８図　塚ＳＸ01土層図

られたと言える。この石組の間からは、土師製筒形容器および同蓋の破片が数か所でまとまって出土した(図版第６－(1))。これらの破片は、石組を中心に、数mの範囲で出土した。塚の盛土中からは遺物がまったく出土しなかった。こういった遺物の出土状況を鑑みると、石組の間から

出土した土師製筒形容器は、「元々は塚の盛土中に埋納されていた」のが「盛土の流出によって表面に現れた」とは考えにくい状況である。そのため、土師製筒形容器はこの石組の上に置かれたと考えられ、この石組も当初から塚の表面に露出していたと推定される。これ以外の遺物として、塚の西南部表面と西側裾部の塚流出土中から銭貨が２枚(熙寧元豊；1068年初鋳、元豊通寶；1078年初鋳)出土している。

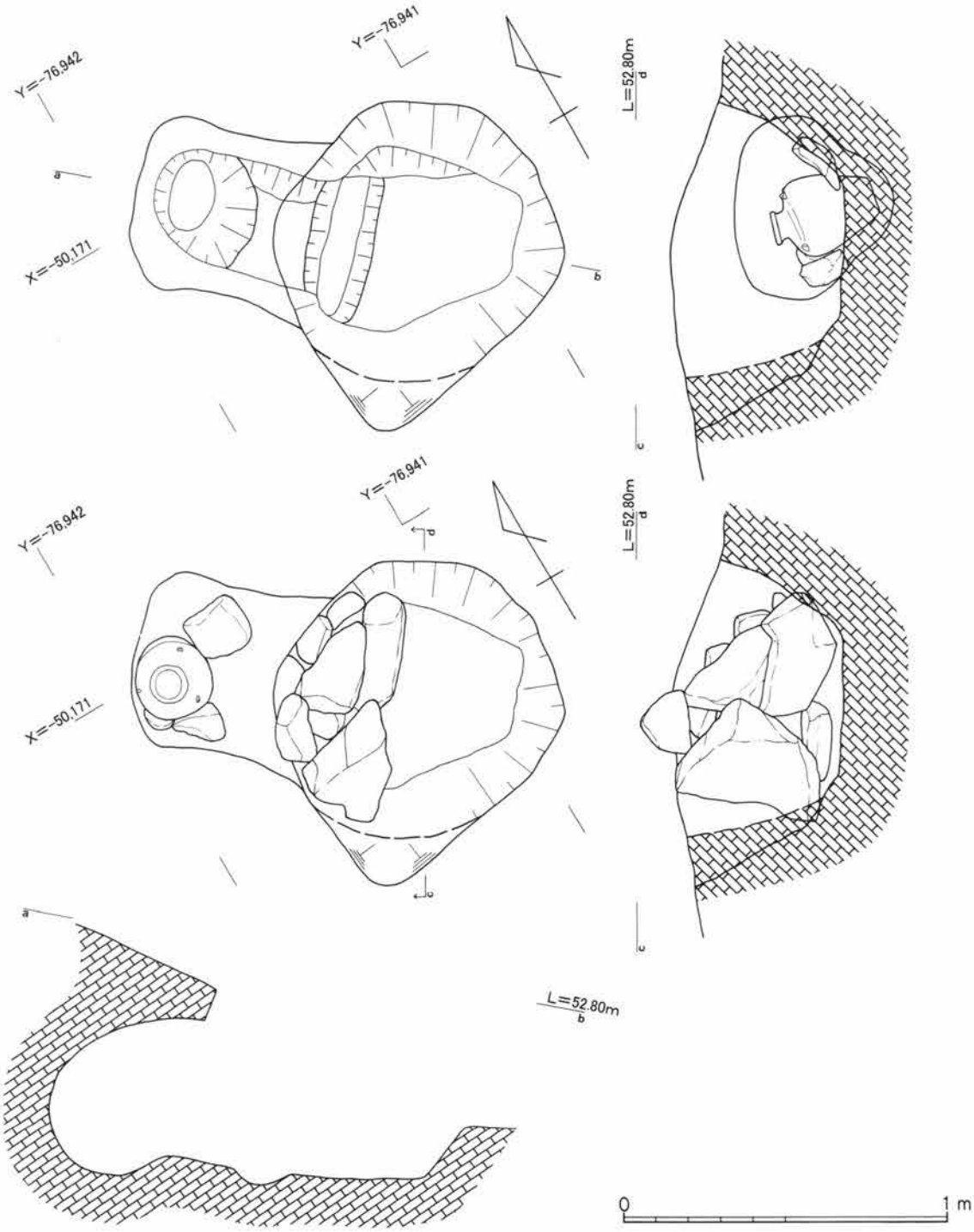
経塚ＳＸ02(第９図)　90cm×90cm・深さ30cmの方形の主土坑の北壁に55cm×60cmの埋納土坑を設け、その内部に第14図９の須恵器甕が口縁を下にして納められていた(図版第７－(2))[注2]。埋納土坑は主土坑より約20cm深く掘削されている。主土坑内の堆積土は、後述の埋納土坑内の堆積土とは違って堅く締まっており、埋経の後に直ちに埋め戻されたと判断される。埋納土坑の開口部は、人頭大～拳大の石７個を用いて塞がれていた(図版第７－(1))。須恵器甕は、35cm×25cmの平石の上に置かれており(図版第７－(3))、平石の下には約10cmの厚さで堅く締まった茶褐色土が堆積していた。一旦掘削した坑の底面を埋め戻して、平らに整地したと判断される。この平石の直下から、第15図12の和鏡１点が鏡面を上にして出土した。埋納土坑内は、ほぼ全てが土で埋まっていたが、主土坑内の堆積土とは違って、ボソボソとした柔らかいもの



第９図　経塚ＳＸ02平・断面図

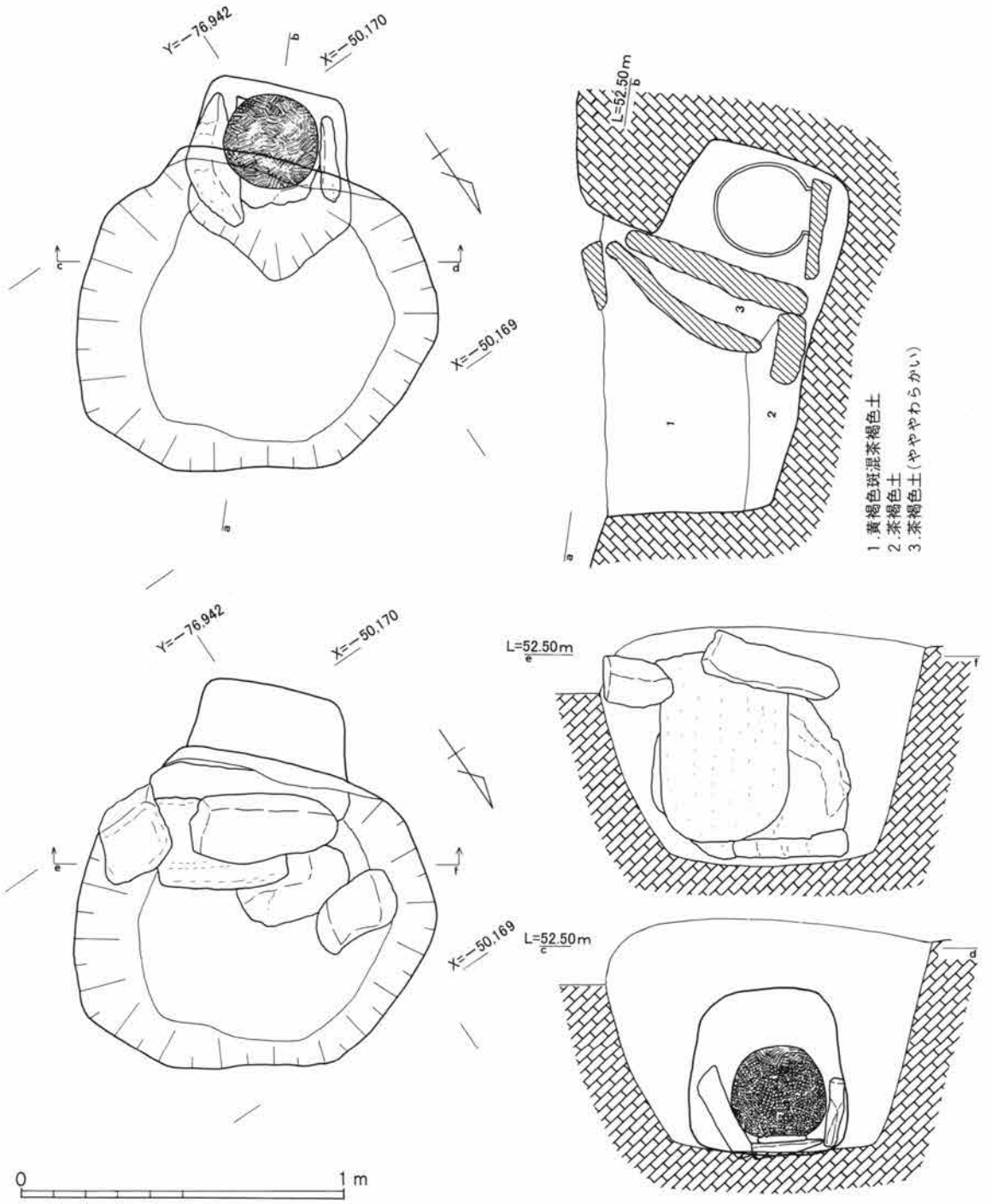
で、経塚埋納後の天井の崩落や雨水の染み込みなどによる堆積土と判断される。そのため、本来は、埋納土坑内に外容器を納めただけで、その周囲は埋め戻されずに空間であったと判断される。須恵器の内部は空洞で、遺物は全く出土しなかった。ただ、甕が据えられていた平石は、甕の口縁に相当する範囲がわずかに赤変していたので、教典をはじめとする有機質の物品が納められていたのが、長い年月の間に朽ち果ててしまったものと判断される。

経塚ＳＸ03(第10図)　85cm×90cm・深さ53cmの隅丸方形の主土坑を掘り、その東壁に埋納土坑



第10図　経塚ＳＸ03平・断面図

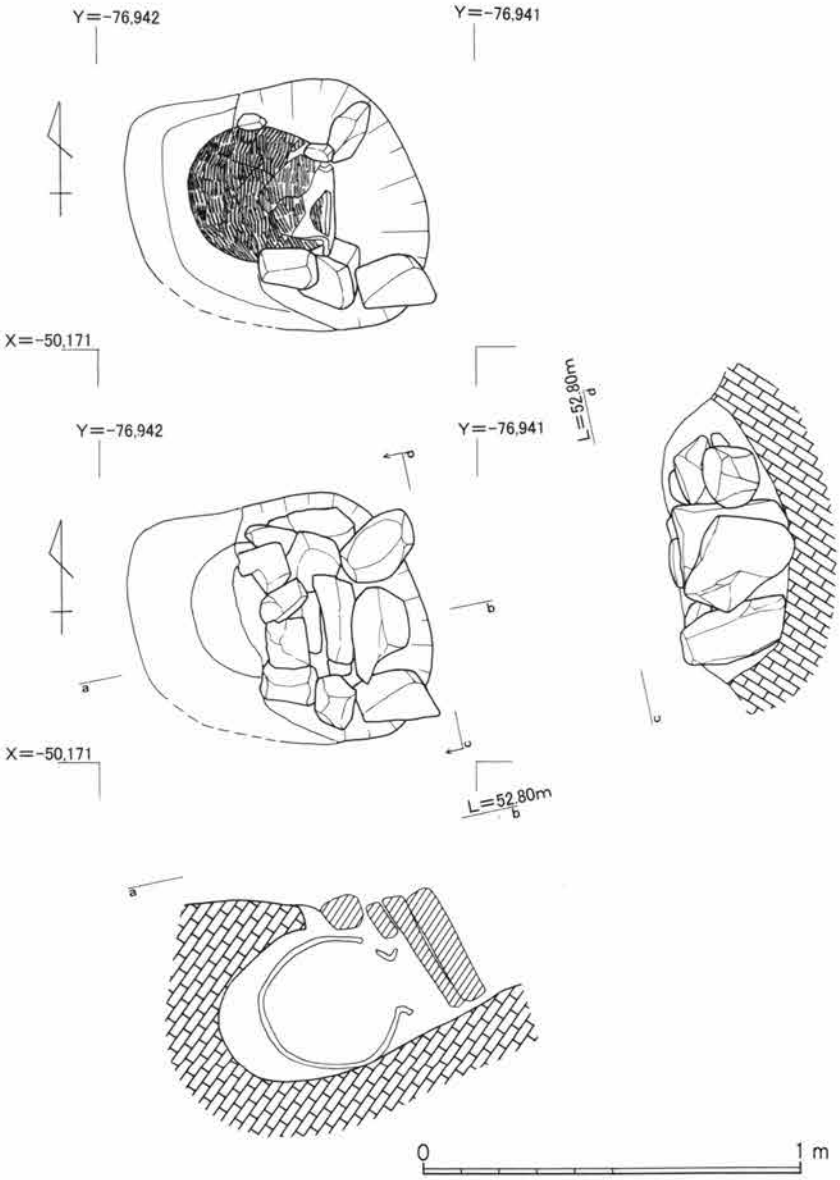
が設けられている。埋納土坑は50cm×60cmで、主土坑の底より10cm程度深く掘削されている。埋納土坑の開口部は、縦30cm・横60cmの一枚の平石でまず閉塞し(図版第８－(2))、その外側に人頭大からそれよりやや大きな石を10個程度を用いて塞いでいる(図版第８－(1))。この閉塞石が集められている部位の主土坑の底は、幅約20cm・深さ約５cm程度の溝が掘られていた。埋納土坑は、隣接して設けられた経塚ＳＸ05の主土坑とその一部が繋がっていた。埋納土坑内の堆積土は、主土坑内の埋土と違って、埋納後の流入・崩落土と判断される軟らかいもので、埋納直後は空間をなしていたと判断される。主土坑内には、越前焼三耳壺(第14図８)が納められていた(図版第



第11図　経塚ＳＸ04平・断面図

8－(3))。三耳壺は奥壁に接して正立して置かれており、主土坑側の手前には、壺が倒れるのを防ぐために拳大の石が2個添えられていた。壺の奥壁側の西側には、第14図6の土師器皿1枚が立てられていた。三耳壺の口縁には、第14図7の土師器皿が蓋として用いられていたが、壺は空洞で、内部には何も遺存していなかった。この三耳壺の年代は鎌倉時代(13世紀代)のものと判断される。(注3)

経塚SX04(第11図)　1m×1.1mで深さ50cmの主土坑の南西壁に50cm×50cmの埋納土坑が設けられている。埋納土坑は主土坑より約10cm深く、ほぼ直線的な傾斜で掘削されている。埋納土坑の閉塞は、まず、55cm×60cmの一枚の平石で埋納土坑の口を塞ぎ(図版第9－(2))、次いで人頭大の平石を底に置いた上に60cm×35cmの扁平な石を立てかけて閉塞している(図版第9－(1))。また、大形の石が主土坑の底部から“浮いた”状態で検出されているので、経塚の埋置後、速やかに主土坑は埋め戻されたと判断される。第3層の茶褐色土は軟らかく、第1層が閉塞石間に流入して堆積したものと思われる。埋納土坑内は甕埋納後の崩落土で充満しており、本来は空間であったと考えられる。埋納土坑内には底面に平石が据えられ、その両側面には平石が立てられており、その間の平石上に甕(第14図10)が倒立して置かれていた(図版第9－(3))。埋納土坑の底は若干埋め戻されて、平石は主土坑とほぼ同じ高さに据えられていた。須恵器甕の内部からは、遺物は全く出土しなかったが、甕の口が据えられていた平石の部位は、経塚SX02と同じく、口縁に相当する範囲が赤く変色しており、何らかの



第12図　経塚SX05平・断面図

物品が納められていたことが分かる。

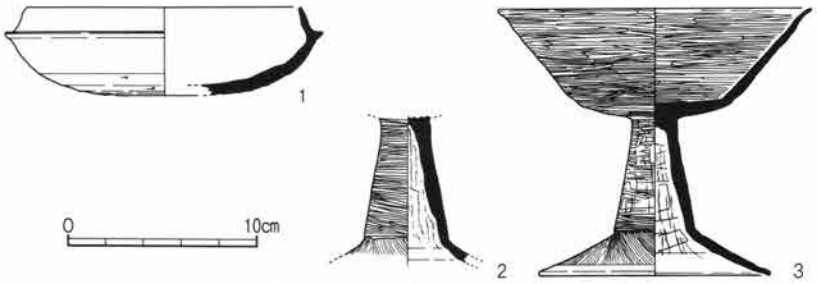
経塚ＳＸ05(第12図)　経塚ＳＸ03・04の間に位置し、斜め下方に約75cm×65cm・　深さ(最大)45cmの主土坑が穿たれ、その内部に須恵器甕が埋納されていた。経塚ＳＸ02～04と違って、埋納土坑は設けられていない。主土坑の開口部は、拳大～人頭大の石を10数個用いて閉塞している(図版第10－(1))。口縁部に位置する一部の石は、須恵器甕を据えるために置かれたものと判断される(図版第10－(2))。甕の内部からは、遺物は全く出土しなかった。経塚ＳＸ04と経塚ＳＸ03の狭い隙間に経塚を設けようとしたために、竪穴が省略されたものと思われる。この坑の一部は、経塚ＳＸ03の埋納坑と繋がっている。

(2)出土遺物(第13～15図、図版第11・12)

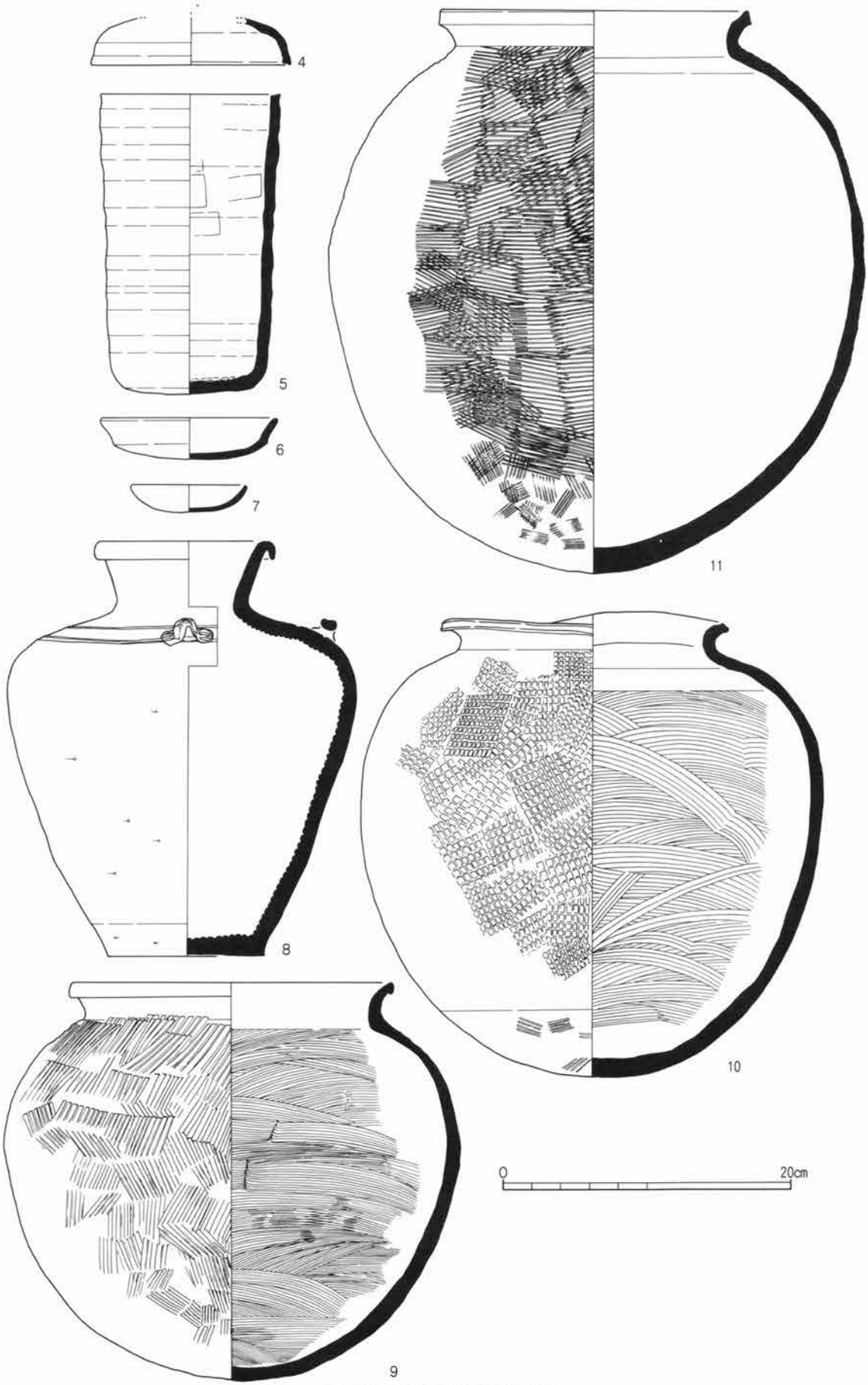
試掘調査で出土した遺物は概して少なく、シリガイ４・７・８号墳および９号墳(エノク経塚群)と東禅寺１号墳で遺物の出土を見た。シリガイ４号墳では須恵器小片１と陶器擂り鉢片、染め付け片が出土したが、遺構に伴うものではなく、須恵器以外の土器片についても、現代に近い時期のものと判断される。７号墳では須恵器杯身片と近現代と判断される陶磁器小片が出土している。東禅寺１号墳では土師器高杯が２点出土している。

第13図は試掘調査で出土した遺物で、近現代と判断されるもの以外で、図化しうるもの全てである。１は、須恵器杯身で、シリガイ７号墳の土坑１の直上で出土したものである。破片は６cm×10cm程度の小片であり、図上で復原すると、口径は14.4cm・器高4.7cmとなる。２・３は、東禅寺１号墳の墳頂で出土した土師器高杯である。２は脚柱部のみであるのに対して、３は口縁端部から底部までほぼ完存している。ともに、器壁はていねいにヘラミガキを施して調整している。色調は赤褐色で、焼成は比較的良い。３は口径16.5cm・器高14.4cm・底径12.2cm。

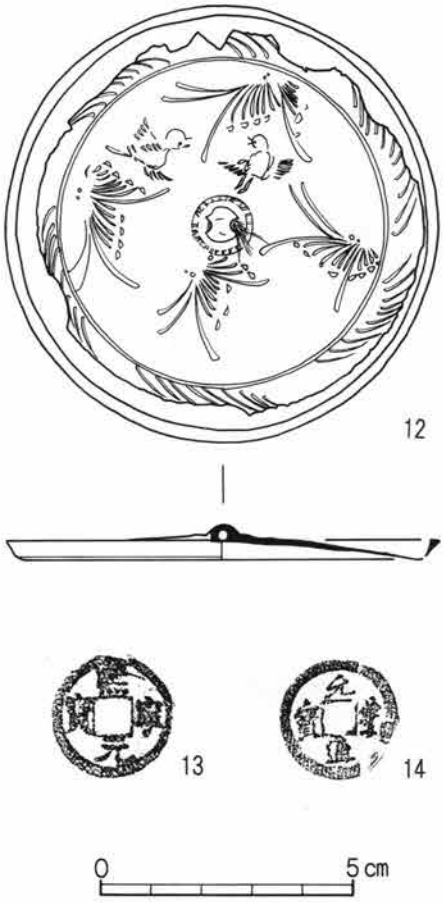
第14・15図は、エノク経塚の調査で出土した遺物である。４・５は塚ＳＸ01北東部の石組の間で出土した土師製筒形容器と同蓋である。検出時には細かな破片となって出土したが、ほぼ完形に接合できた。４は蓋で、口径13.8cm・器高3.8cm(残存)、５は横方向に指ナデして仕上げており、口径12.4cm・器高20.7cmである。６～８は、経塚ＳＸ03より出土したものである。６は、三耳壺外容器(8)の西側に立てかけられて出土した土師器皿である。伊野近富の分類に拠るところのＤタイプで、口縁部を強くナデて、外反気味に収めるものである。口径11.9cm・器高2.9cmで、焼成は非常によく、堅緻である。器高がやや深く、13世紀中葉頃に位置するものと判断される。７は、三耳壺外容器(8)の口縁にはめこまれて出土した土師器皿で、蓋に転用されていた。口径7.6～8.0cmとやや歪んでおり、器高1.95cmである。８は越前焼三耳壺で、口径11.6cm・腹径24.3cm・底径10.9cmで、器高28.6cmである。肩部には２条のヘラ描



第13図　出土遺物実測図(1)



第14図　出土遺物実測図(2)



第15図　出土遺物実測図(3)

き沈線がめぐり、耳の上にはヘラで「×」が描かれている。常滑焼の器形で見ると、13世紀後半頃に相当するものである。9は経塚ＳＸ02の外容器として用いられていた須恵器甕で、焼成は比較的軟らかく、口縁端部は下方に折り返されて垂下している。器壁外面は叩きが全面に施されており、内面は横方向のハケメが見て取れる。口径22.2cm・器高27.8cmである。10は須恵器甕で、経塚ＳＸ04の外容器として用いられていた。口頸部は焼き歪んでいる。外面叩き、内面は荒いハケメが残っている。口径19.5cm・器高32.4cmである。口縁端部は上方につまみ上げられている。9・10ともに近畿地方北部の在地で焼かれたものと判断される。11は、経塚ＳＸ05の外容器として用いられた須恵器甕で、東播系のものである。口縁部はやや開きかげんに直立して立ち上がり、端部は上方につまみ上げられて終わる。口縁端部内面の窪みはわずかに認められる程度であるが、顕著ではない。口径21.2cm・器高39.15cmである。丹治康明の編年によると、12世紀中葉頃と判断される。

第15図12は、和鏡の草鳥鏡で、経塚ＳＸ02の外容器を伏せ置いた平石の下に置かれていた。径8.6cmである。13・14は塚１より出土した宋銭で、熙寧元豊(1068初鋳)、元豊通寶(1078初鋳)である。

(3)まとめ

今回の調査では、４基の経塚とその上に盛り上げられた塚を検出した。４基のうち３基の経塚は、60～110cmの方形ないし円形の坑を掘り、さらに横方向に坑を穿って、教典等を納めたと考えられる容器を埋置している。今回の経塚で見つかった容器の中からは、経筒や教典等は全く見つからなかった。こういった経塚状遺構の容器の中に火葬骨が納められている例もあり、すべてが経塚であることを疑問視する研究もある(杉原1987)。ところが、このエノク経塚の場合は、経塚ＳＸ02や経塚ＳＸ04では須恵器甕を倒立して置いており、火葬骨を納めるのには不適当である。そのため、少なくとも今回の例は、経塚と判断してよいであろう。福知山市大道寺経塚や高田山経塚では、外容器の中に竹製の経筒が入っており(竹原1983、小池1994)、今回のエノク経塚についても、有機質の経筒が納められていたものと推定される。経塚ＳＸ02・04では、外容器の口縁に相当する平石部分が赤変していたのはそのためであろう。

次いで、主土坑が埋め戻されていたかどうかについて見ておきたい。石崎は左坂経塚群の報告で、大形土坑中の埋土に堅いもの(埋納土坑の閉塞石あり)と軟らかいもの(埋納土坑の閉塞石な

し)があることに着目し、前者は人為的に埋め戻されたものとし、後者は木蓋等により覆われていたと考えている(石崎2000)。このように、経塚では、主土坑が埋め戻されたものとそうでないものとが想定されているが、エノク経塚にあっては、主土坑内埋土と埋納土坑内埋土との土質の硬さの違いから、主土坑は埋め戻されたものと推定している。実際、経塚ＳＸ04では、主土坑の底面よりかなり上位で人頭大の石が出土しているので、須恵器甕の埋納後、直ちに主土坑は埋め戻されたと判断される。

検出遺構の項で述べたように、塚ＳＸ01の石組は元来表面に露出しており、その石組上に土師製筒形容器と同蓋が置かれているが、これらは塚に“供え”られたものではないだろうか。元の位置からは動いているが、塚の表面および裾部の堆積土中から熙寧元豊、元豊通寶が出土した。これらの銭貨も塚に“供え”られたものと判断できよう。

さて、エノク経塚群の場合、経塚２～５は、規則的に「Ｌ」字に配置されていること、隣り合う経塚の埋納土坑と近接して穿たれていること、これらの経塚の直上をきっちりと覆うように塚ＳＸ01が盛り上げられていることから、これら４基の経塚は同時もしくはその位置に関する記憶が失せない程度の比較的短い時間幅の中で造られたものと推測される。例え、経塚の閉塞石の石組が地表にわずかに見えて、それが標識と機能していたとしても、その集石のどの方向に経塚を構築したかが、長期間の間に忘れ去られてしまうならば、経塚自体の重複が見られるであろう。ところが、そのような配置にはなっていない。そのため、比較的短期間の間に経塚の構築が行われたと考えられ、もしそうならば、これらの経塚の配置は“計画的”に行われたと考えられよう。

さらに、エノク経塚では主土坑を伴うものと伴わないものとが認められる。経塚ＳＸ02～04が主土坑＋埋納土坑であり、経塚ＳＸ05は斜めに掘られた土坑だけで、埋納土坑は認められない。これについては、肥後や石崎は前者から後者への時間的な変遷を想定しており(肥後1992、石崎2000)、この見解に従うならば、経塚ＳＸ05は最も新しいものと言えよう。

ところが、出土遺物の項で述べたように、経塚ＳＸ03の越前焼三耳壺・土師器皿が13世紀中葉から後半、経塚ＳＸ05の東播系の須恵器甕が12世紀中葉頃というように、その実年代に100年以上の開きがある。この年代観に従うならば、「短期間の間に計画的に埋納された」、「経塚ＳＸ05が後出する」という先の想定に反するものとなる。外容器として伝世品を用いたのか、もしくは先の想定が誤りで100年以上にわたって埋納が追加されたのか、それぞれの外容器の年代観に誤りがあるのか、現時点では不明である。今後の検討課題である。

(岩松　保)

参考文献

石井清司・奥村清一郎1997「桑原口遺跡　京都縦貫自動車道関係遺跡平成７年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第75冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

石崎善久2000「大宮町左坂古墳群の経塚状遺構」『京都府埋蔵文化財情報』第76号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

伊野近富1995「土師器皿」『概説　中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会編　真陽社
小池　寛1994「竹製経筒の復原―漆を塗布した竹製経筒の新例―」『京都府埋蔵文化財情報』第52号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター.
杉原和雄1987「経塚遺構と古墓」『京都府埋蔵文化財論集』第１集　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
竹原一彦1983「大道廃寺跡(ＤＴ)の調査」『京都府遺跡調査報告書』第１冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
田代　弘1998「桑原口遺跡第３次　京都縦貫自動車道関係遺跡平成８年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第82冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
丹治康明「東播系須恵器について」『中近世土器の基礎研究』　日本中世土器研究会　1985
肥後弘幸「豊谷遺跡」『埋蔵文化財発掘調査概報(1992)』　京都府教育委員会　1992
増田孝彦・岡崎研一1999「桑原口遺跡第４次　鳥取豊岡宮津自動車道関係遺跡平成10年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第88冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

注１　(敬称略)大槻　伸、田中照久、江西寺尾関義昭、宮津市教育委員会中嶌陽太郎・東　高志、須津地区自治会長野原雄三

作業員　浜野良幸、糸井　勲、加賀谷綱男、小谷英昭、尾関藤一郎、河嶋　隆、伊達憲三、笠井幸男、藤原誠一、笠井健一

整理員　松下道子、中島恵美子、山中道代

注２　以下の叙述は、肥後(1992)にならい、それぞれの経塚で１ｍ内外の規模で穿たれた竪坑を主土坑、主土坑の側面に穿たれて経を納めるための容器を置いた横穴を埋納土坑と呼ぶ。

注３　田中照久氏のご教示による。ただし、実物を実見する機会を得ていただいていないので、その年代観が変わる可能性がある。

２．南稲葉遺跡第２次発掘調査概要

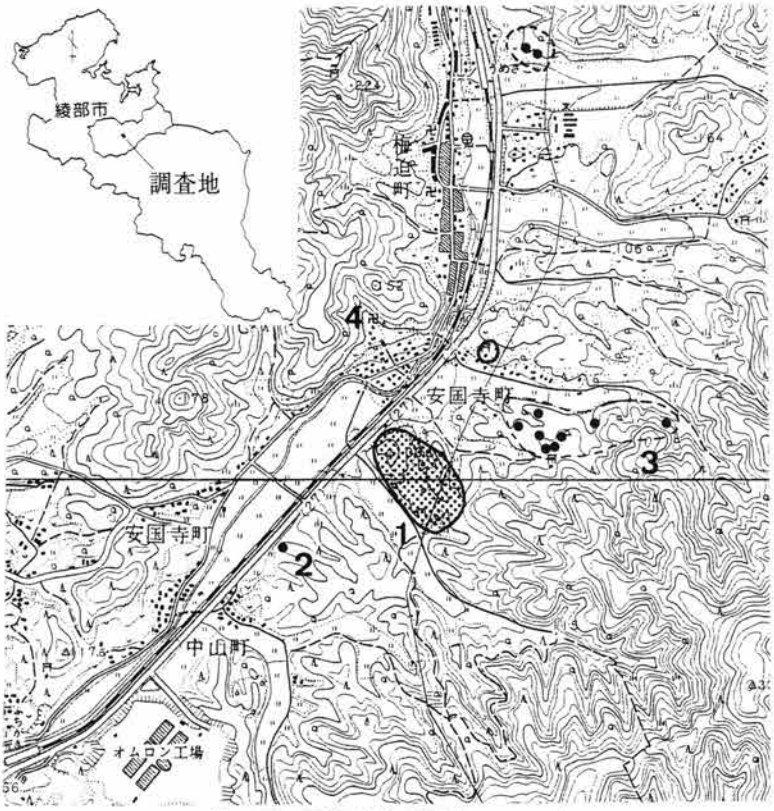
１．はじめに

今回の発掘調査は、京都縦貫自動車道の建設工事に伴い、国土交通省近畿地方整備局の依頼を受けて実施したものである。南稲葉遺跡は京都府綾部市安国寺町南稲葉に所在し、綾部市教育委員会発行の遺跡地図によると、五輪塔が散在する中世の遺跡となっている。(注1) 遺跡北西部の丘陵上には五輪塔・石仏が大量に集積する地点があり、当初はそういった中世の古墓が検出されるのではと考えられた。さらに同じ安国寺町の平山古墳の調査例や、この八田川中流域に多く分布している古墳から、古墳の存在も予想された。現地では昨年度の試掘調査によって、およその遺構・遺物の広がりが押えられた。その結果、当初予想していた古墳や古墓は検出されず、飛鳥時代（７世紀）～平安時代（11世紀）における集落跡の広がりを確認することができた。今回は遺構・遺物を多く確認した地点について本格的な発掘調査を行った。調査期間は平成12年５月８日～８月11日までである。また調査面積は約1,000m²である。調査は、当調査研究センター調査第２課課長補佐兼調査第１係長水谷壽克、同主査調査員黒坪一樹が担当した。全調査期間を通じ、京都府教育庁指導部文化財保護課・綾部市教育委員会・安国寺町自治会からはご指導・ご協力をいただいた。また現地の作業員各位は、昨年度に引き続き、社団法人綾部市シルバー人材センターからの派遣で、地元周辺から多くの方々が酷暑のなか熱心に従事していただいた。(注2) さらに調査補助員・整理員の方々にも、測量作業・遺構実測や遺物に関する諸整理でご協力をいただいた。以上の方々に心より御礼申し上げたい。

なお、調査にかかる費用は原因者である国土交通省近畿地方整備局が負担した。

２．位置と環境

南稲葉遺跡のある安国寺町は、綾部市北東部を流れる八田川の中流域に位置している（第16図１）。谷合いを国道27号線やＪＲ西日本舞鶴線が縦走し、北に向かっては丹後・若狭地方に通じる道のいわば要衝地に当たっている。八田川中流域のこの辺りは、北東から南西に縦走する狭い谷平野で、いくつもの丘陵が平野部に向かって延びている。八田川下流域（久田山丘陵～吉見盆地）や八田川上流域（高槻・上杉町周辺）に比較して、発掘調査例は少ない。これまでのところ旧石器～弥生時代にかけての遺跡は確認されていない。次の古墳時代の調査では第16図２の安国寺平山古墳１号墳（古墳時代後期、６世紀前半）が重要である。(注3) この古墳は直径約20m・墳丘高2.2～3.3mの規模で、木棺直葬の主体部内からは須恵器・土師器などの土器のほか、豊富な鉄製馬具や刀・土玉などが出土している。また古墳の周辺において中世墓関連遺構の存在も明らかとなっている。南稲葉遺跡の北側の谷をへだてた丘陵上には宮ノ腰古墳群（第16図３）の８基の円墳が



第16図　調査地位置図(1/25,000)

1.南稲葉遺跡　2.安国寺平山古墳　3.宮ノ腰古墳群　4.安国寺

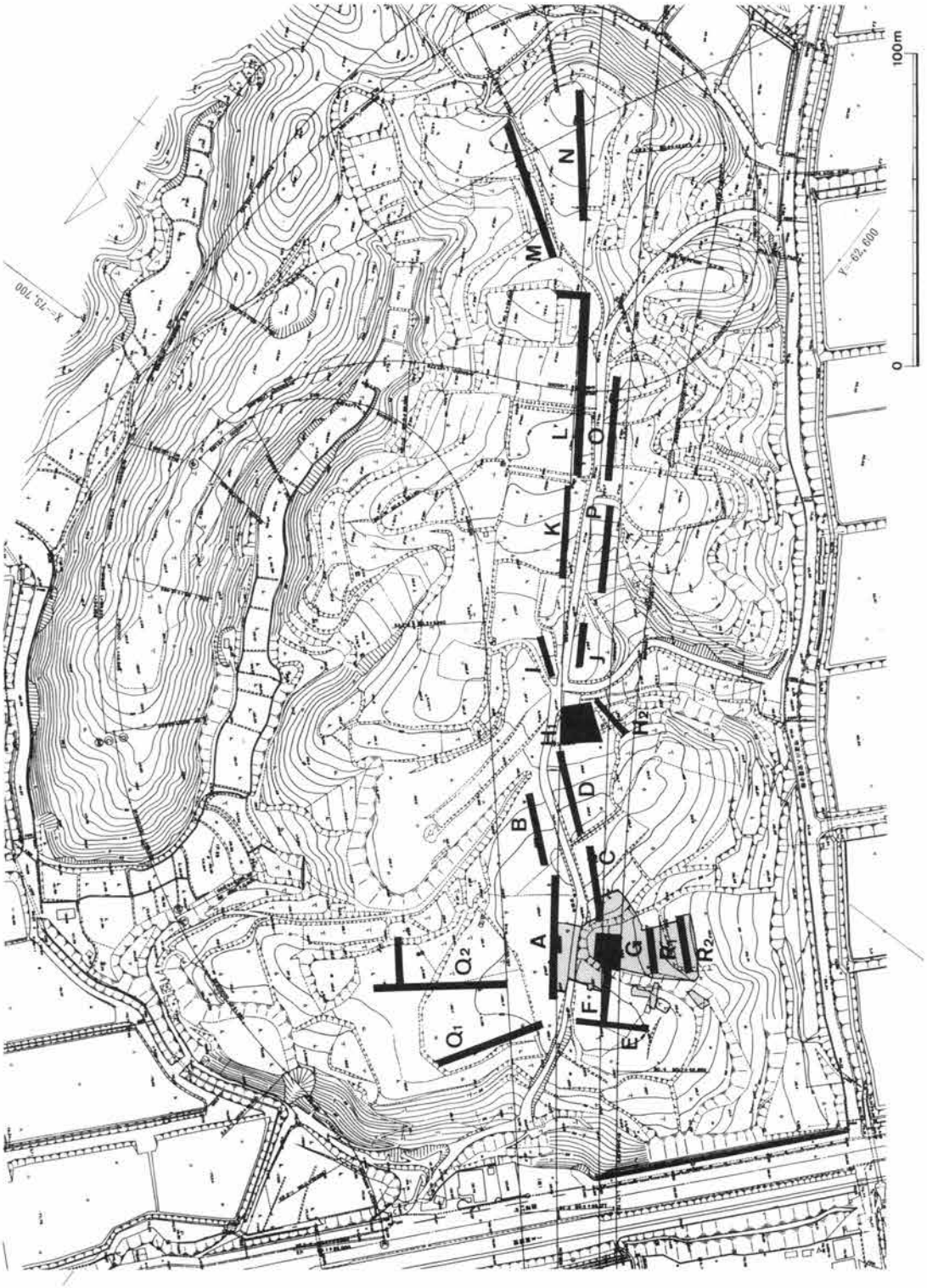
分布している。一方、飛鳥時代～平安時代の遺跡については、今回の南稲葉遺跡が安国寺町内ではじめての調査例である。また多くの国指定や府指定の文化財を有する安国寺(第16図４)は南稲葉遺跡と八田川をはさんだ対面に位置しているが、今回の調査ではこの時代に関する遺構・遺物は検出されなかった。

3．調　査　経　過

昨年度の試掘調査では、広く起伏のある丘陵上および谷部に合計20本の細長いトレンチ(幅２ｍ)を設定し、遺構・遺物の検出に努めた(第17図)。掘削は表土および包含層の一部を重機により除去し、その後人力による掘削および精査に切り換えた。

その結果、およそ半分の試掘トレンチからなんらかの遺構・遺物が得られた。試掘トレンチのうちで竪穴式住居跡や柱穴などの遺構が検出されたのはＨトレンチとＧトレンチ周辺であった。今年度の調査地は、このＧトレンチ周辺を中心にＡ・Ｃ・Ｆ・Ｇ・Ｒ1・Ｒ2の６つのトレンチ(Ａ・Ｃ・Ｆは部分)を併合したものである。丘陵平坦地とその下の谷部である。標高は丘陵平坦部で約100ｍ、谷部の最下部で94ｍを測る。

昨年度同様、表土および包含層を重機にて除去していった。丘陵上は土層の堆積状況が極めて浅く、地表下約10cmで堅くて鮮やかな色調の赤灰色シルト面(地山面)が露出した。この地山面を揃えるように精査をかけていくと、Ａトレンチの西側で竪穴式住居跡３が、Ｆトレンチ東側の丘陵端部の狭いテラス面上で多量の土師器と小量の須恵器が出土した。上の層位が浅かったため、重機によって大量の土器が露出してしまった。土器の出土範囲を早急に絞り込みつつ、周囲に掘形がないか慎重に精査を重ねた。その結果、ほぼ楕円形に掘られた土坑(土坑１)であることが明らかとなった。またこの丘陵上にも小規模な浅谷があり、飛鳥時代～奈良時代初頭には形成されていた。奈良時代の土師器甕や馬形土製品などが出土した。この浅谷を埋めて、次の平安時代には掘立柱建物を建てていたようで、直径20cm前後の柱穴がまとまって検出された。さらに、丘陵上と並行して、谷部における多数の柱穴の掘削を行い、これらの広がりを精査していった。柱穴の残りが悪く、掘立柱建物跡の確定は困難であった。また、２基の竪穴式住居跡(昨年度検出済)



第17図　トレンチ・調査区配置図

の完掘も行った。多量の遺物が出土する谷部、特に試掘トレンチR1より下位について層位ごとの掘削を進めた。遺物が多量に出土する層(第Ⅲ層)の上面まで重機で除去し、以下はすべて人力で掘削していった。谷に直交するセクション断面を２本設定し、第Ⅲ～Ⅴ層中の遺物をとりあげていき、谷部の形状を復原することにも注意した。調査の最終段階で、丘陵上の北西縁辺部に関

連遺構の広がりを確認するため、２か所に調査区を設定した。掘削の結果、近世以降と思われる墓坑と柱穴を検出したが、飛鳥時代～平安時代に関する遺構・遺物は検出されなかった。竪穴式住居跡や土坑の記録を終了し、谷部の下層が掘り上がった段階で、８月６日に調査範囲の空中写真撮影および測量を、８月９日に現地説明会を実施し、８月11日には全ての作業を終了した。

４．Ｈトレンチ拡張区の調査

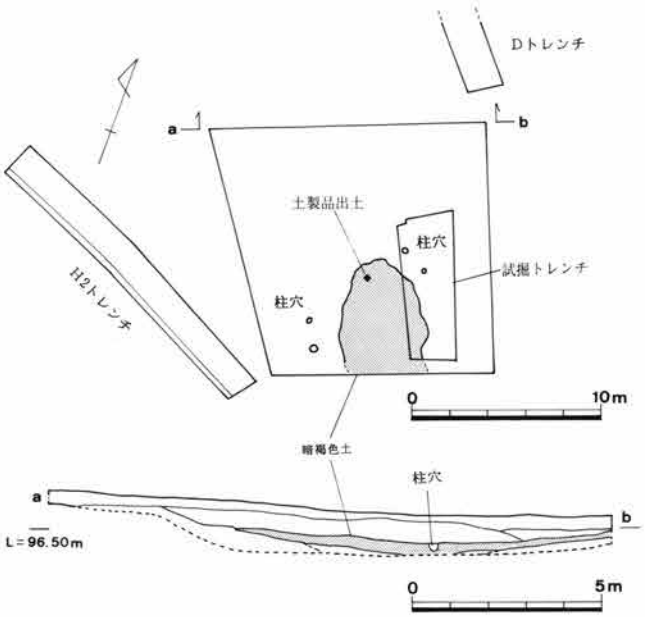
柱穴が検出されたＨトレンチについては、周辺を拡張して遺構の広がりを確認した上で、平成11年度中に調査を終了した。Ｈトレンチを含めた試掘調査の結果については、昨年度に報告した。しかしながら、竪穴式住居跡が検出されたＧトレンチ周辺の報告が中心となってしまい、Ｈトレンチについてはほとんど記述できなかった。以下に若干の補足をしておきたい。

昨年度の概要報告では、暗褐色土の詰まった竪穴状の落ち込みと柱穴が検出されたと報告したが、再検討の結果、谷部に堆積した暗褐色土層の底を竪穴状の遺構と一見認識したものであった。この点については、トレンチ平面図と土層断面図を提示して訂正しておきたい。第18図でスクリーントーンを貼った暗褐色土層の最下底が面的に広がったもので、竪穴状遺構ではない。また、この暗褐色土層からその下層(暗黄褐色粘質土)にまで掘り込まれた柱穴を４基検出した。いずれの柱穴も直径は20cmほどで、埋土は灰褐色土である。

周辺からは須恵器と土師器の細片が数点と土製品が１点(第30図11)出土した。土製品以外はいずれも細片で図化できなかったが、奈良時代のものと考えられる。

５．層　位

調査における掘削の深度は、丘陵上においては浅く約15cmの土層の堆積状況であるが、谷部においては複数の堆積層が確認される(第19図)。谷部を横断して設定した畦の断面でみると、Ⅲ層および、平安時代の柱穴群検出面(Ⅳ層上面)は遺物包含層である。最上層(第Ⅲ層)は淡灰褐色砂質土で、瓦器椀の破片が数点出土し、おそらく中世以降に堆積したものと思われる。第Ⅳ層は暗灰褐色粘質土で、その上面は平安時代(10世紀後半～11世紀前半)の遺構面である。包含されている遺物は飛鳥時代から奈良時代のものが圧倒的に多く、平安時代のものは少ない。丘陵上位にあった遺構が壊されて、土砂と一緒に転落してきたものと思われる。第Ⅳ層の下半(第Ⅳ下層)は暗褐色粘質土(砂礫



第18図　Ｈ区平面図・土層断面図

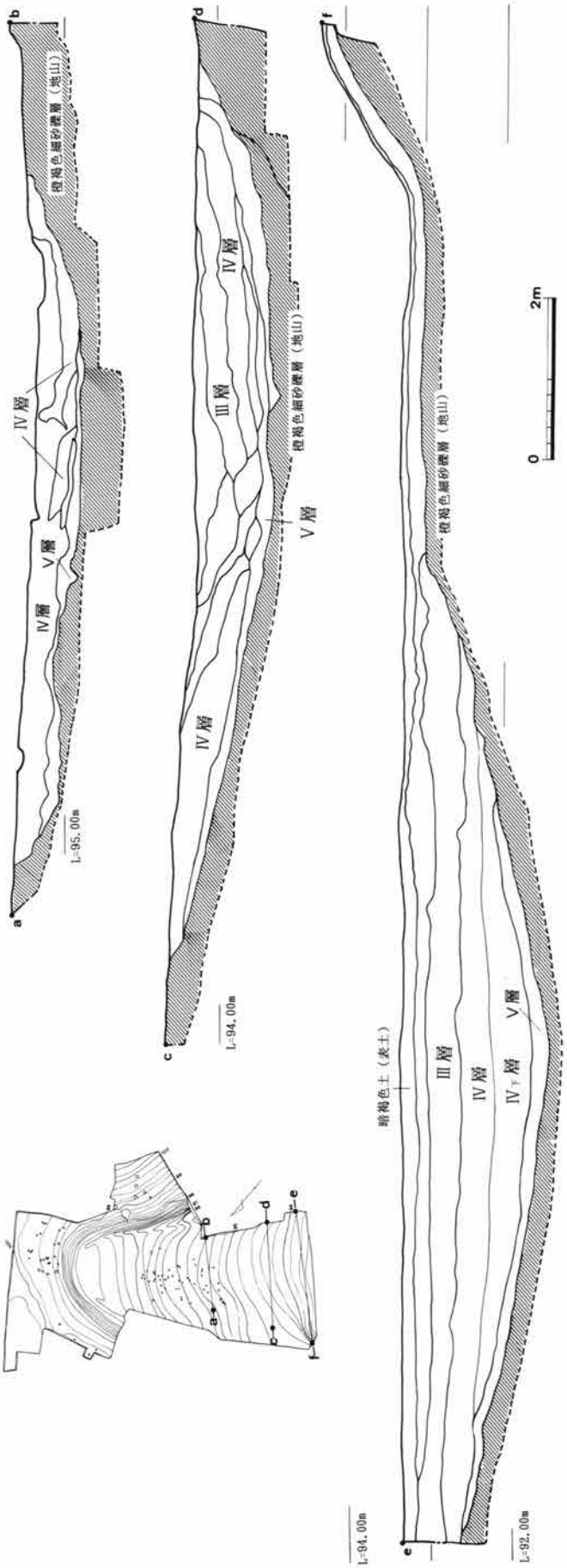
混じり)で、色調がより暗くなる。出土遺物はこの層からも多く、時期は飛鳥時代～奈良時代のもので、平安時代の遺物は出土していない。第Ⅴ層は暗黒褐色粘質土(細砂混じり)である。Ⅲ～Ⅳ下層に比べて堆積が薄いため、出土遺物は相対的に少ない。飛鳥時代(7世紀後半)を中心とする時期に形成されたものと考える。このⅤ層より下位は、堅くてよくしまった粗い橙褐色細砂礫面(地山)となる。断ち割りによる作業でも出土遺物の存在は確認できなかった。

6．検　出　遺　構

(1)平安時代～近世の遺構

調査地のほぼ全域に広がる柱穴群である。立地条件のいい丘陵上のみならず、谷部の斜面地においても、崖面を人工的にカットしてその分の土砂で斜面を埋めて平坦にし、掘立柱建物などを建てて生活していたことがわかった(第20図)。柱穴(P-20)内の遺物からみると、掘立柱建物跡は平安時代(10世紀後半～11世紀後半)に営まれたものである。

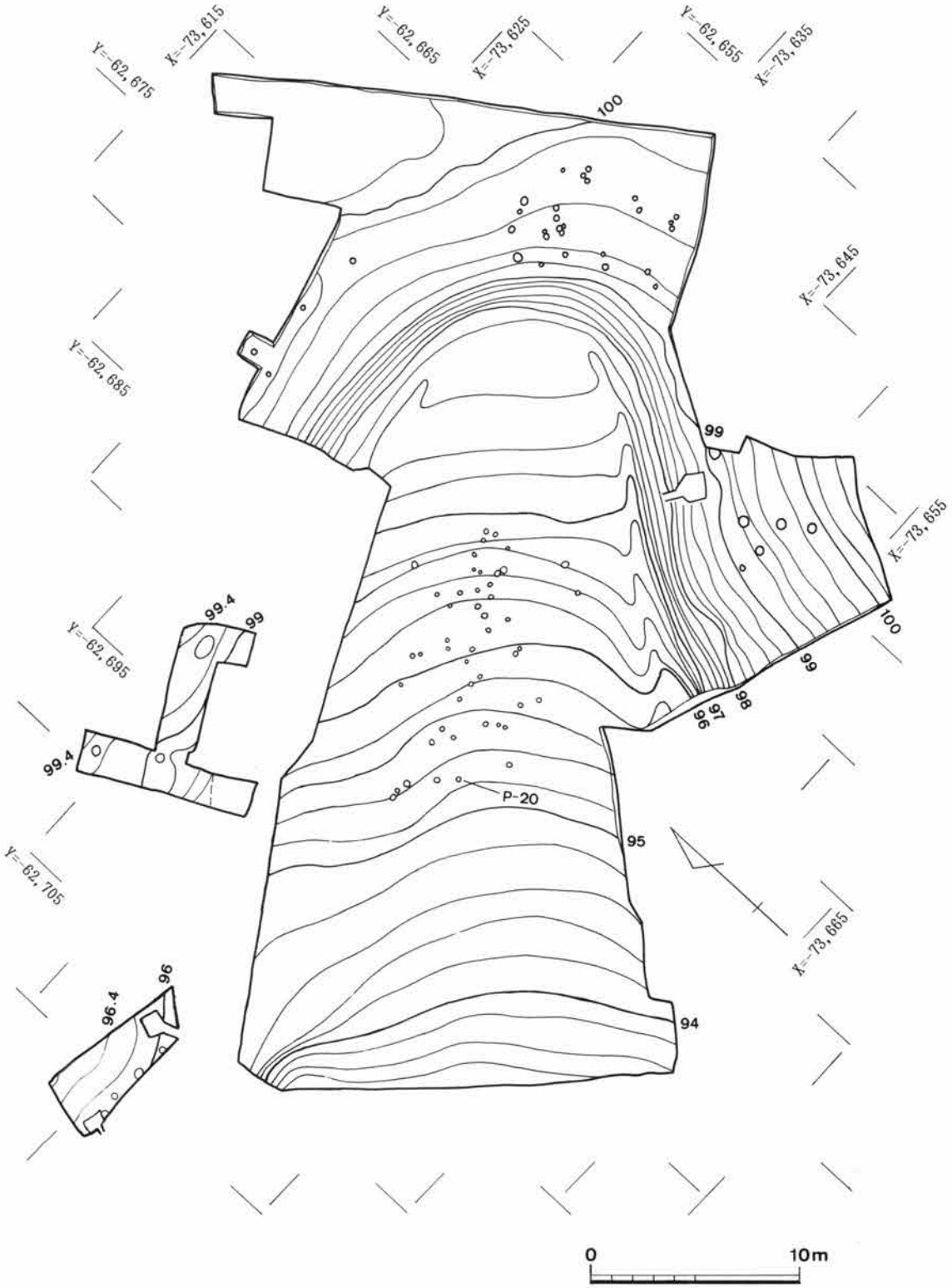
柱穴の規模は、ほとんど直径20cmほどのものが中心である。残存する深さは浅く、10～15cmで後世における削平をかなり受けたようである。埋土は暗褐色細砂である。柱穴は、谷部の中間地点から丘陵上におよび、標高95～100m付近まで分布している。谷部ではやや北寄り(南向き)に偏っており、風向きなどを考慮したものと言えよう。これらの柱穴から掘立柱建物跡などの遺構を抽出しようと試みたが、掘立柱建物跡や柵列などを確



第19図　調査区横断面土層断面図

認するには至らなかった。

なお、谷部を南北にまわり込む丘陵縁辺部から、直径約20cmの柱穴や一辺約1.2m・深さ約1mの土坑などを検出した。土坑の底面は平坦で、幅20cmほどの溝が土坑の一画を壊し、底面まで達して掘られている。土器などの出土遺物はないが、近世以降の墓壙であると考える。

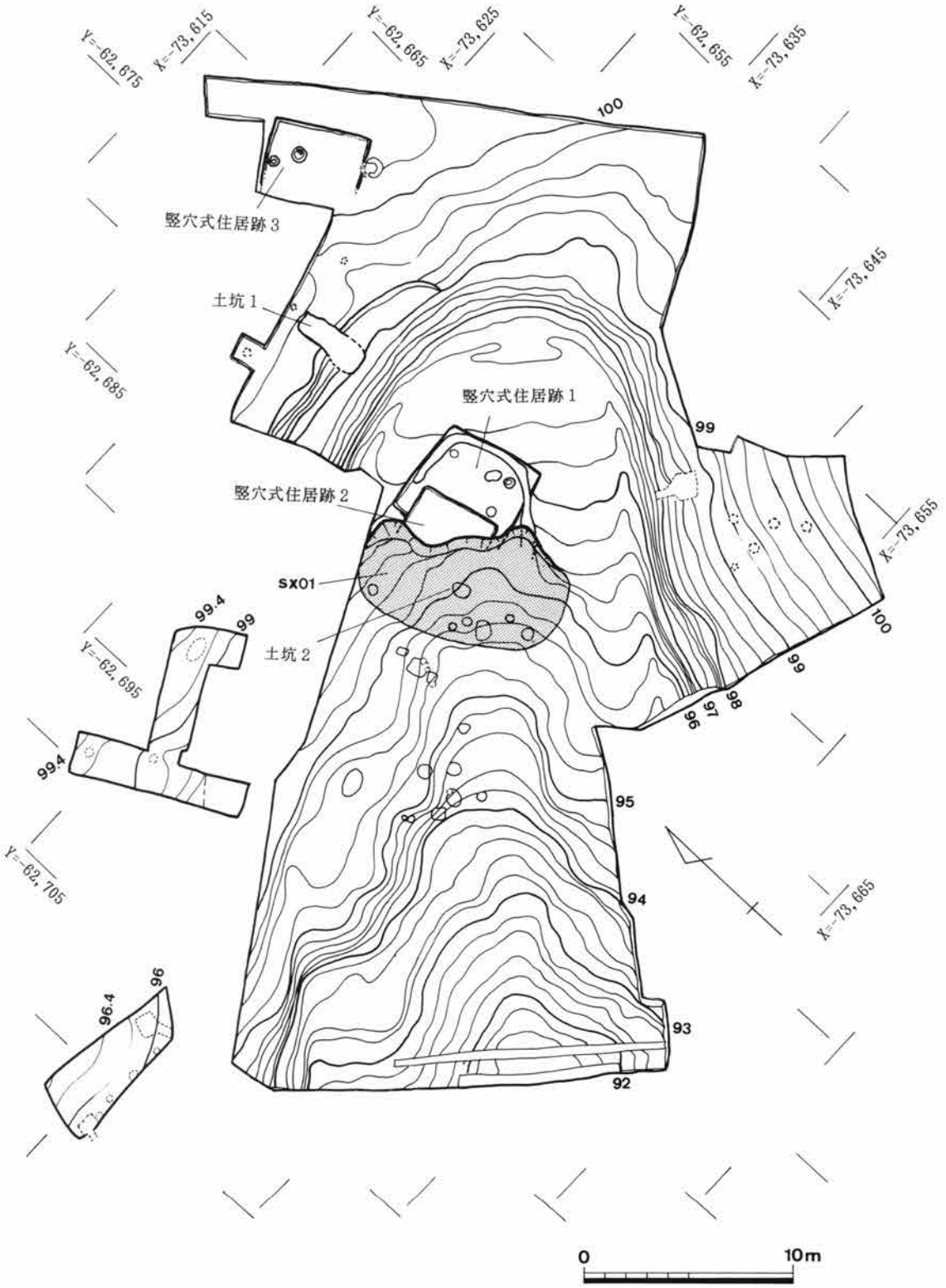


第20図　上層遺構配置図(平安時代～近世)

(2)飛鳥～奈良時代の遺構

竪穴式住居跡３基、多数の柱穴と土坑、竈形土製品や土師器などを壊して投棄した痕跡を示す土坑(土坑１)がある(第21図)。

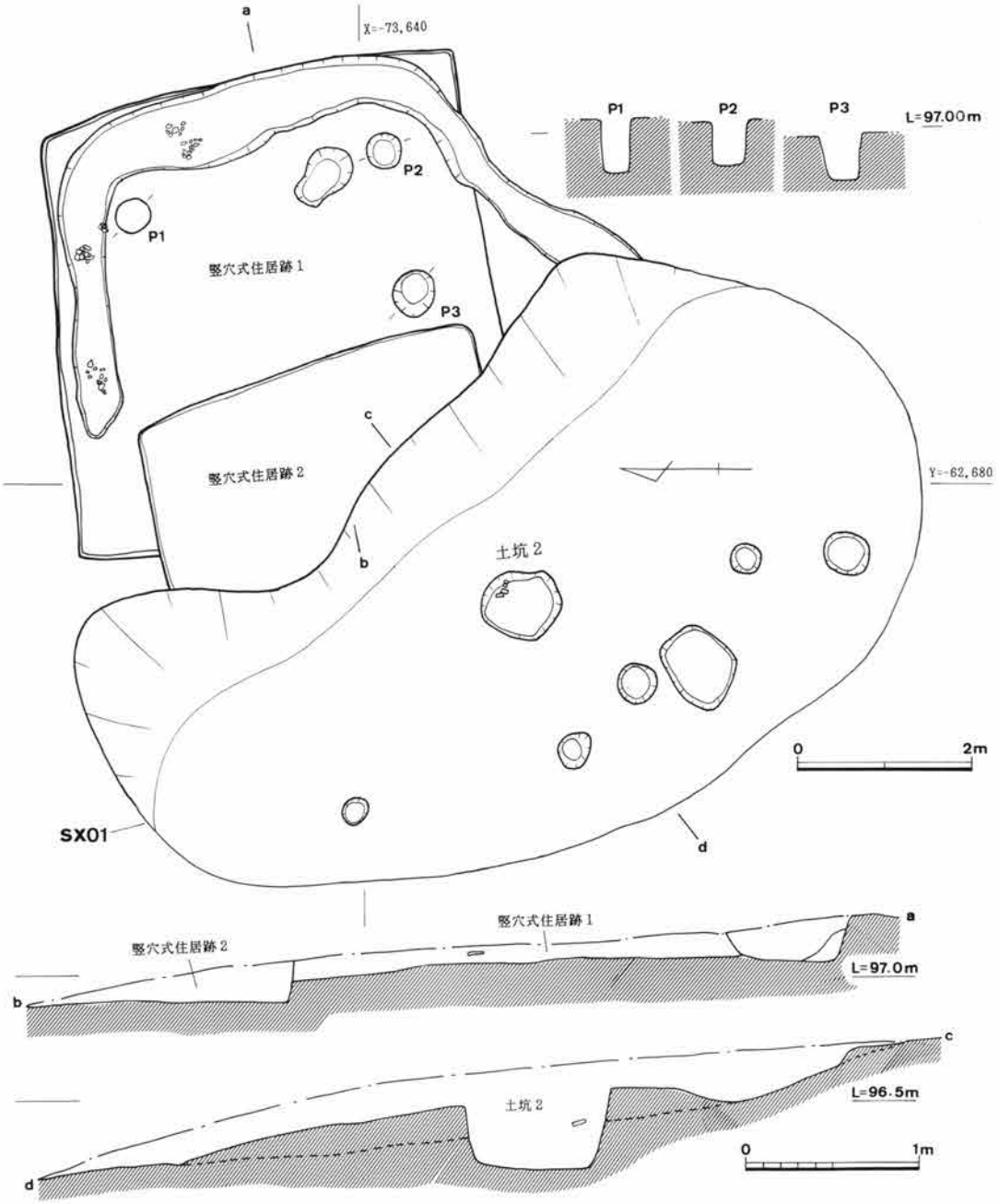
竪穴式住居跡１　一辺約５ｍを測る(第22図)。残存する深さは約15cmと浅いものである。柱穴



第21図　下層遺構配置図(飛鳥～奈良時代)

も検出された。竪穴式住居跡２や溝１さらに落ち込み(ＳＸ01)で大きく壊されている。７世紀後半から８世紀初頭にかけての須恵器杯身・杯蓋が埋め土や機能面上から出土しており、８世紀初頭に建てられたものと考えられる。

竪穴式住居跡２　谷部の落ち込みで大きく壊されているため、約４ｍを測る一辺が知れるのみである(第22図)。掘形の深さは約15cmにも満たず、かなり上面は削平されたものと思われる。竈などの施設や柱穴は確認できなかった。竪穴式住居跡１の西辺を大きく壊していることから、竪穴式住居跡１よりも新しい。さらに、竪穴式住居跡１の壁にほぼ沿って掘られた溝が検出された。この溝は竪穴式住居跡１の壁を壊し、竪穴式住居跡２を囲むように掘られており、竪穴式住居跡



第22図　竪穴式住居跡１・２、ＳＸ01平・断面図

２を取り巻く排水溝と思われる。住居床面からの出土遺物はいずれも細片で、時期の明確なものはなく住居の時期も不明である。竪穴式住居跡１に近い８世紀のものと推察される。

竪穴式住居跡３　丘陵上で見つかった一辺約５ｍの方形のものである(第23図)。掘りくぼめられた深さは約10cmで、かなり上部が削平されて非常に浅いものである。土坑が２つあったが、主柱穴は検出されなかった。壁に沿う幅約10cmの周壁溝を部分的に確認した。また、南辺の外に竈が造りつけられており、焼けた粘土や炭がよく残っていた。燃焼部内から小型で片口の土師器鉢(第26図８)が１点出土した。建てられた時期は明確ではないが、飛鳥時代末から奈良時代初頭にかけてのもの(７世紀末～８世紀初頭)である。

土坑１　北西方向に回り込んだ丘陵上の縁辺部にある(第21図)。溝状にカットされたテラス面に楕円形に近い不定形な穴(3.2m×1.2m)を掘り、そこに多量の土器が投棄されていた(第24・25図)。土器はほとんどを占める土師器と、若干の須恵器である。土師器は大部分、移動式の竈型土製品とそれに伴う甑や甕などの炊飯具である。完全な形のものは皆無で、すべて細かく破砕していた。部分的に焼けた土や炭も層で確認された。また長軸の中心ラインの南側でさらに深く掘られた隅丸方形の土坑を検出し、上半部から炭や土師器などの土器がまとまって出土した。下半部からは須恵器壺の断片(第26図19)が１点出土した。何のために掘られた土坑かは判然としない。土坑１の時期は竪穴式住居跡１と同様、奈良時代初頭(８世紀初頭)のものと言える。

土坑２　隅丸の不定形な土坑である(第22図)。長軸75cm・短軸95cm・深さ40cmを測る。埋土は暗褐色粘質土で、飛鳥時代～奈良時代初頭の須恵器と土師器がまとまって出土した。同様の土坑はほかにも数基ある。この土坑の上面には谷部のくぼみを埋め立てたと思われる暗黒褐色粘質土が厚く堆積している。この暗褐色粘質土の広がりをＳＸ01とした。形成時期は出土遺物から、奈良時代である。

柱穴　柱穴は上層の平安時代に比較して一回り大きく、直径は25cm前後を測る。埋土は暗褐色粘質土である。谷部の斜面ということで残存状況はよくない。竪穴式住居跡や掘立柱建物跡などの抽出はかなわなかった。

７．出　土　遺　物(第26～30図)

出土遺物は、遺構に伴うものの他、斜面地である谷部に埋没していた土器をあわせると非常に多い。出土遺物のほとんどは、土師器と須恵器である。なかでも土師器の量は圧倒的で全体のおよそ95％以上を占めると思われる。以下に、遺構(竪穴式住居跡・土坑・ＳＸ０１)および層(第Ⅲ～Ⅴ層)ごとに代表的なものについて記していく。

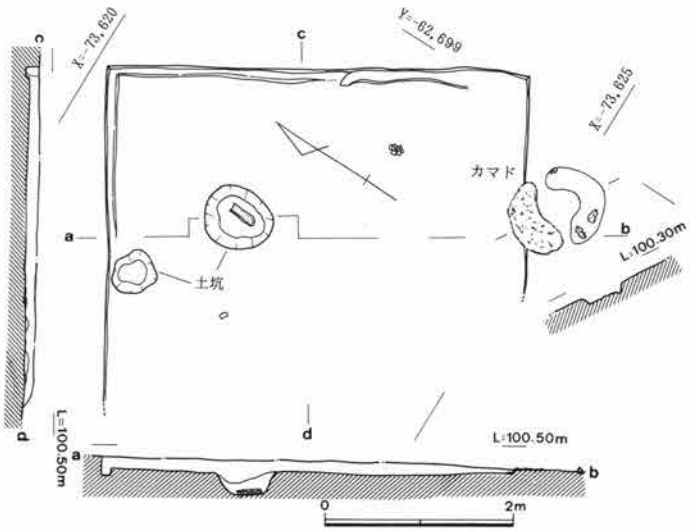
竪穴式住居跡１出土遺物(第26図１～７)　１～４はつまみをもつ須恵器蓋である。時期差があり、１は７世紀後半(ＴＫ217)、２～４は８世紀に入るものである。５・６は高台付きの須恵器杯(杯Ｂ)である。６の高台はややふんばった形態である。７は土師器甕の口縁部である。外面に粗いハケ目がある。

竪穴式住居跡３出土遺物(第26図８)　１点のみである。竈部の燃焼部から出土したもので、口

縁部残存25％の土師器片口鉢である。復原口径10cmを測り、体部外面にハケ目、内面に整形の際の指頭圧痕をとどめる。

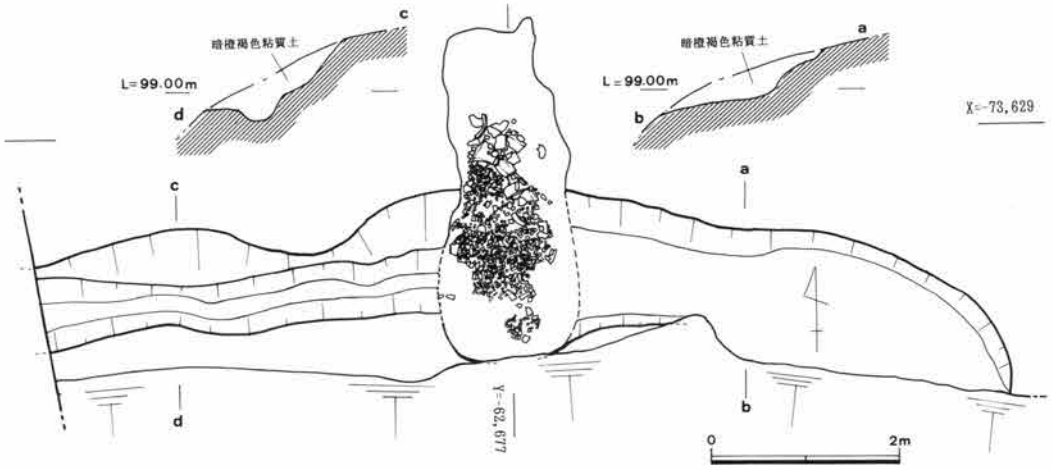
土坑２出土遺物(第26図９～11)　９は宝珠つまみや端部内面に返りをもつ須恵器蓋で、ＴＫ217の時期である。10は土師器杯である 。11は土師器の鍋である。

土坑１出土遺物(第26図12～21)　12～14は須恵器の蓋である。竪穴式住居跡１のものと同様な時期差があり、7世紀後半から８世紀にかけてのものといえる。15・16は高台をもたない須恵器杯(杯Ａ)、17は須恵器杯Ｂである。時期差は明瞭で、15・16はＴＫ217型式で７世紀後半、17は８世紀前半と思われる。18は肩部より上を欠損するが、須恵器の長頸壺である。19は細長い体部の長頸壺である。20は頸部はないが丸底の長頸壺である。本遺構中から出土した須恵器は、その他には細片があるのみで、以上のものがすべての形態である。21は土師器甕である。土師器については整理箱にして数箱以上ある。土師器甕の他に重要なものとして移動式の竈形土器がある。竈形土器は、一般的な造り付け竈と同様に日常の炊飯具か、また煤の付着が明瞭でないものがあることや出土例が住居跡に比べて著しく少ないことなどから祭祀具とする説もある。

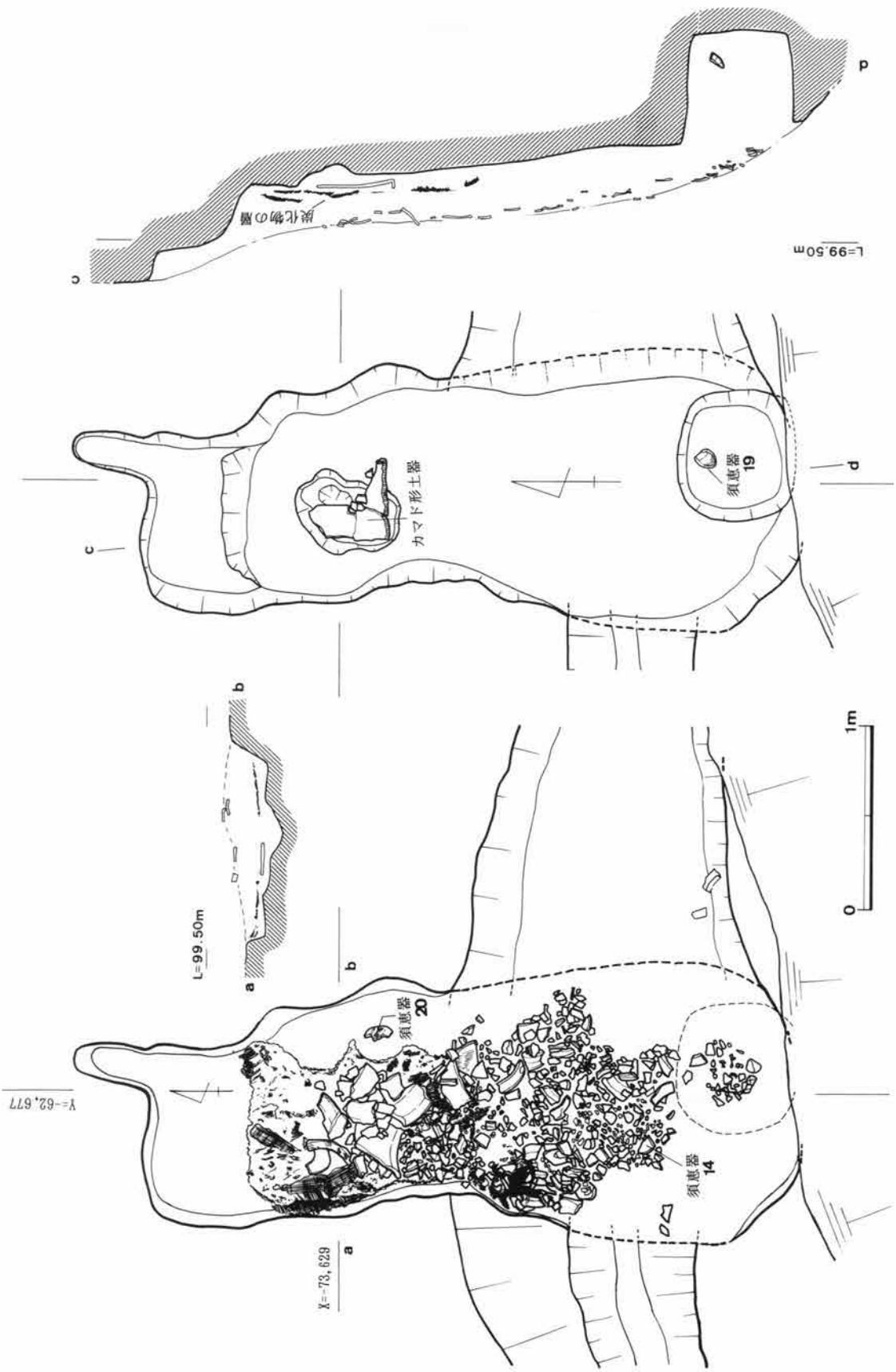


第23図　竪穴式住居跡３平・断面図

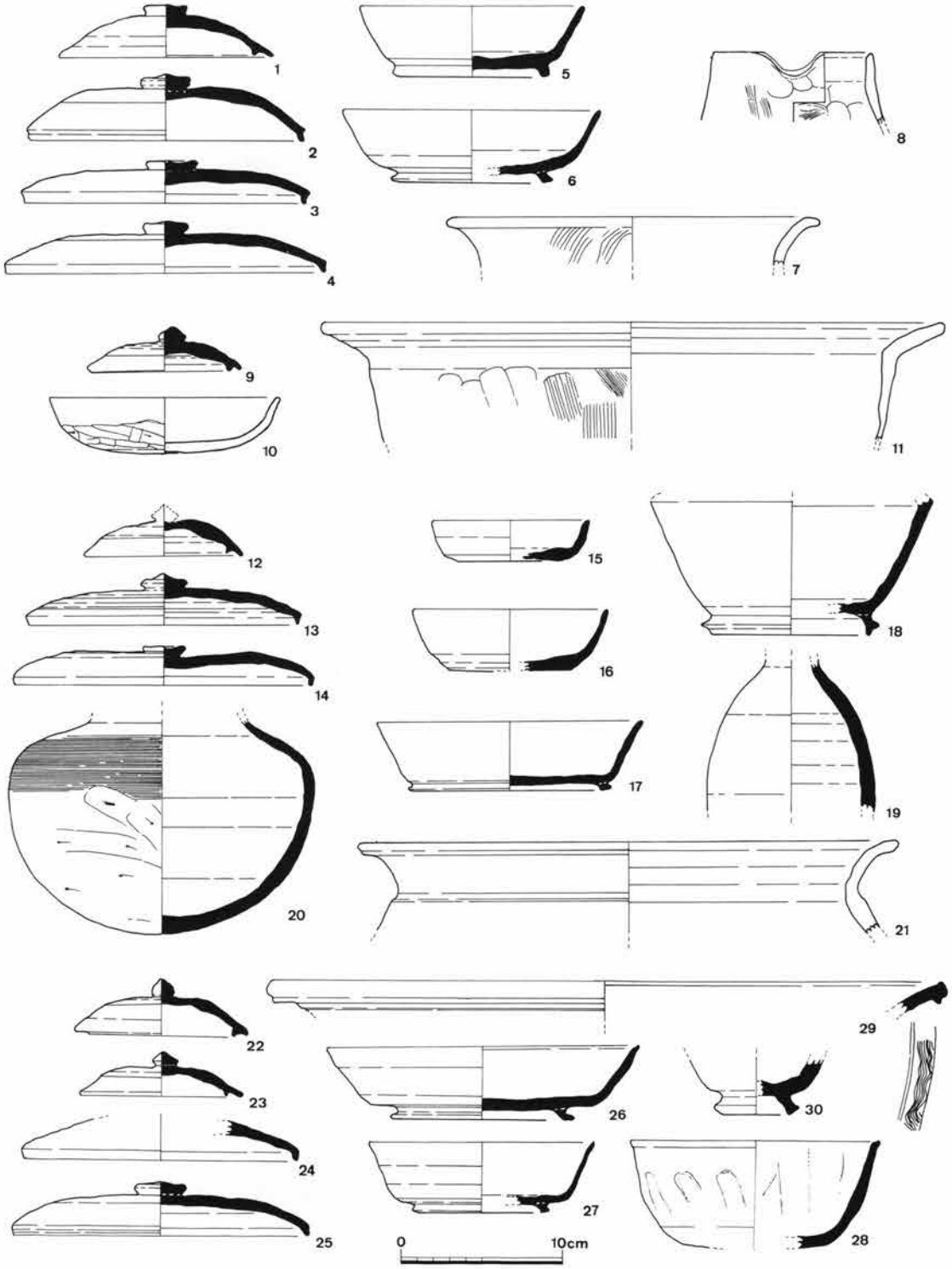
ＳＸ01出土遺物(第26図22～30)　22～25は須恵器蓋である。22・23は宝珠つまみと端部内側の返りを有するもので24・25と比較して古い。ＴＫ217型式のものであろう。26・27は須恵器杯である。28は須恵器椀であろう。体部内外面に一定間隔にヘラ状工具の圧痕のような痕跡が観察される。29は須恵器甕の口縁部の断片である。30は須恵器壺の高台付底部からの体部下半の断片である。



第24図　土坑１・溝(テラス部)全体図



第25図　土坑１平・断面図（須恵器番号は第26図の番号に対応）



第26図　出土土器実測図

竪穴式住居跡１：１～７、竪穴式住居跡３：８、土坑２：９～11、土坑１：12～21、ＳＸ01：22～30

Ⅲ層出土遺物(第27図)　数量は整理箱約４箱分である。圧倒的に土師器が多い。本層の形成された時期は鎌倉時代で、２～３点の瓦器椀細片(いずれも図化し得ない)が出土している。しかしながら、量的には８世紀前半のものが圧倒的である。主なものを記す。１～４は須恵器蓋(1)、杯Ａ(2)、杯Ｂ(3・4)である。５・６は須恵器壺である。７・８は土師器の甕と思われる。８は

先細りの把手部がついている。９は扁平な直方体に面取りされた土師器で、竈形土器の部材(底部片か)の可能性がある。

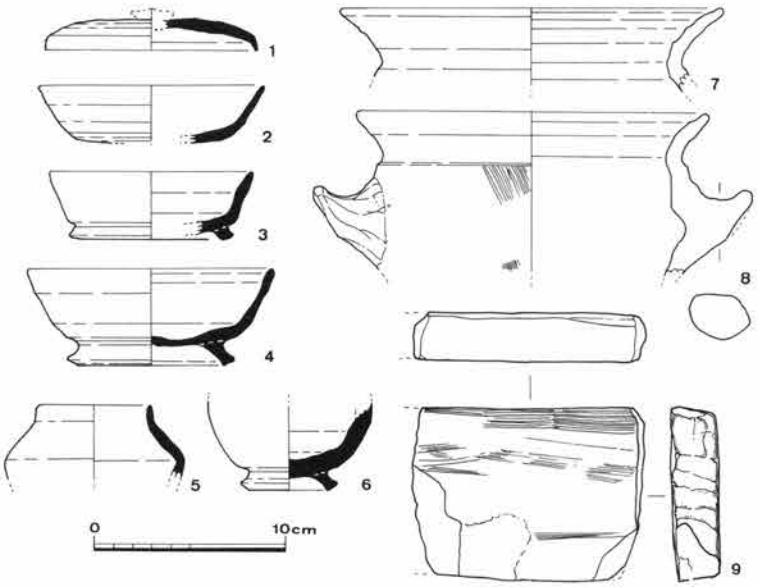
柱穴(P-20)内の遺物(第28図１)　上層遺構の柱穴は多いが、中からの出土遺物はきわめて少なく、しかも時期のわかる遺物が出土したものとなると柱穴(P-20)のみである。中から底部糸切りの土師器杯の底部断片、須恵器杯Ａ、そしてこの黒色土器の椀が出土した。黒色土器の口縁端部の内側には、ごく浅い沈線がめぐる。底部を欠損しているが、高台付のものとみられる。内外面とも黒色に炭素凝着されている。時期は特定しがたいが、10世紀後半～11世紀前半のものである。

Ⅳ層の遺物(第28図２～22、第29図１)　数量は非常に多く、整理箱約25箱分である。土師器の割合が圧倒的である。２は糸切り底をもつ須恵器杯である。10世紀後半のものである。３～６は須恵器蓋である。７世紀後半から８世紀前半にかけてのものである。７～13は須恵器杯である。年代の幅は蓋と同様である。14は須恵器鉢の体部である。焼成があまいために風化がすすんでいる。15は厚い円板の底部をもつすり鉢である。底部外面にはヘラ状工具で突いた無数の穴がある。16～18は土師器杯である。17は内面に暗文をとどめる。18は一部の縁辺部に煤が付着している。また口縁近くに相対する４つの小孔がある。天秤のように吊り下げて用いられたものか、あるいは蓋かもしれない。20は手捏ねのミニチュア土器である。18は土師器の高杯である。21は土師器甕である。22は土師器甑であろう。第29図１は土師器鍋である。

Ⅳ下層の遺物(第28図23～31、第29図２)　数量は整理箱約15箱分である。やはり土師器がほとんどで、須恵器は少ない。23・24は須恵器蓋である。25～27は須恵器杯Ａである。28は須恵器壺の断片である。29は土師器甕である。30は丸底の土師器短頸壺である。体部径8.6cmと小型である。31は土師器高杯の断片である。第29図２は土師器鍋である。

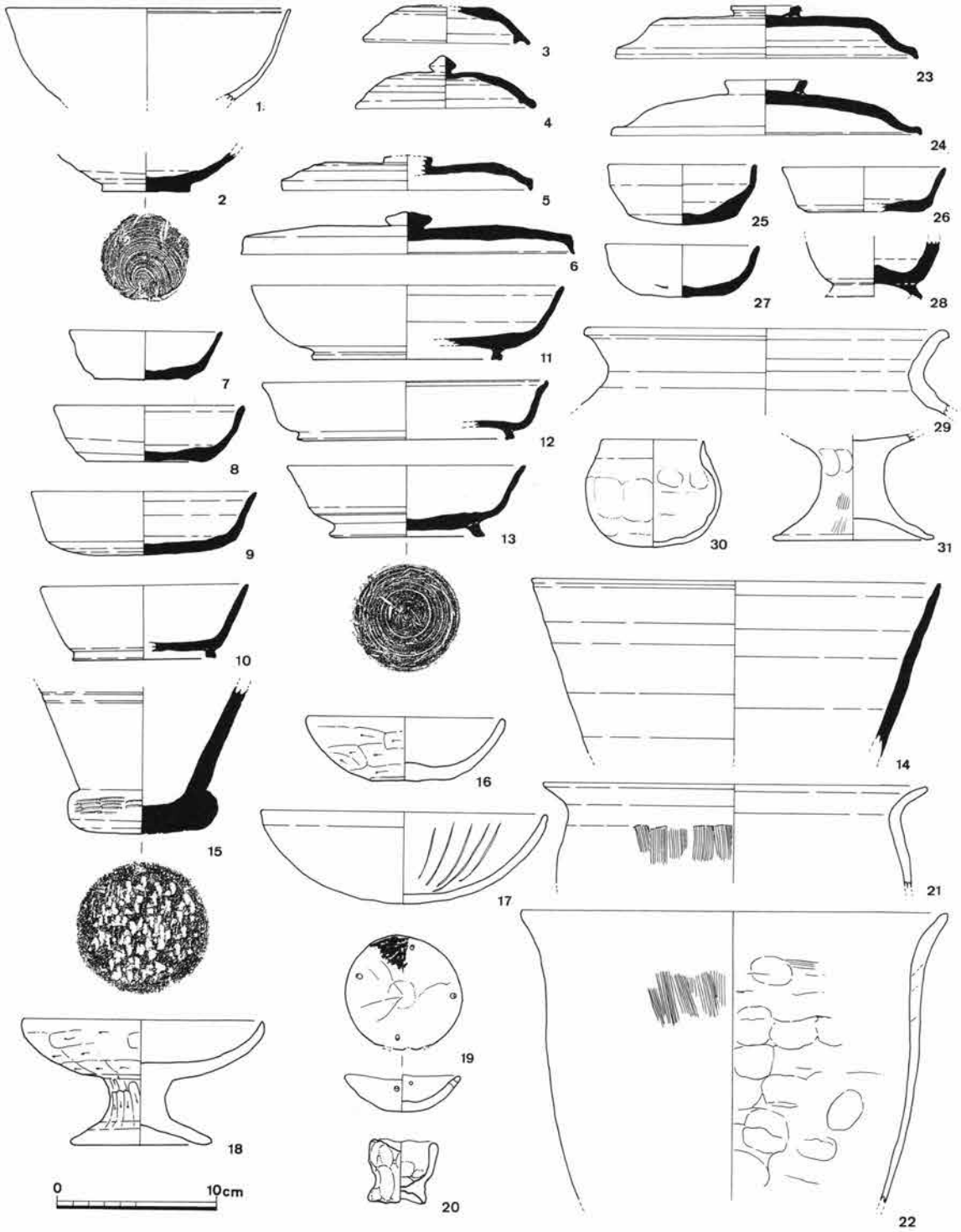
Ⅴ層の遺物(第29図３～６)

谷部最下層で、整理箱約３箱分ある。土師器が多く、須恵器は細片で図化し得ないものである。３は土師器鍋である。４・５は土師器杯、６は土師器高杯である。体部外面にケズリの単位が観察される。また、図示していないが緑釉陶器の口縁部細片(１cm大)と鉄滓が１点ずつある。以上、８世紀前半のものが中心と考える。



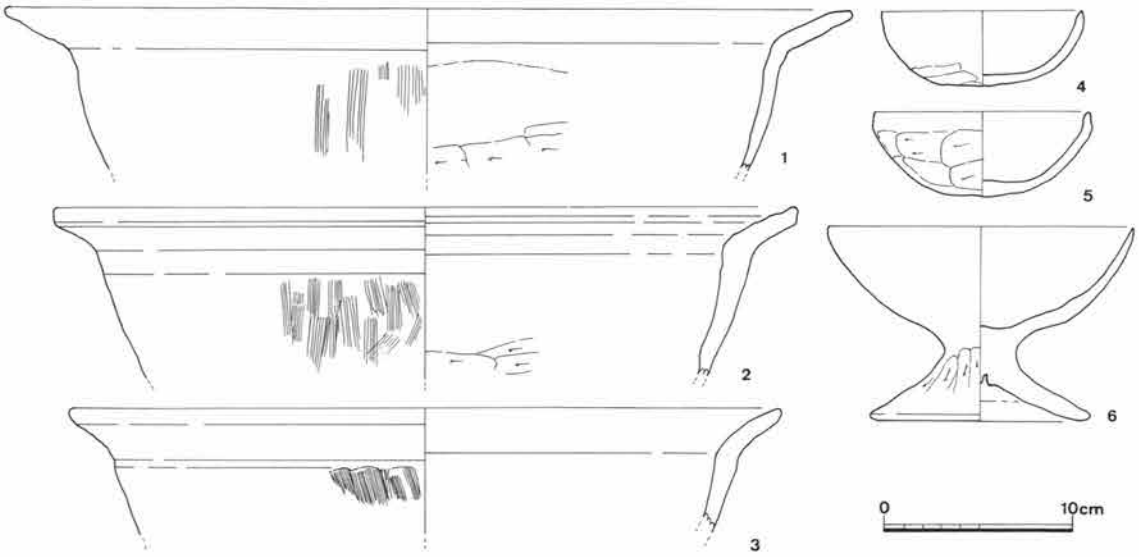
第27図　出土土器実測図(Ⅲ層)

土製品(第30図)　特徴的な遺物であるためここに集めた。１

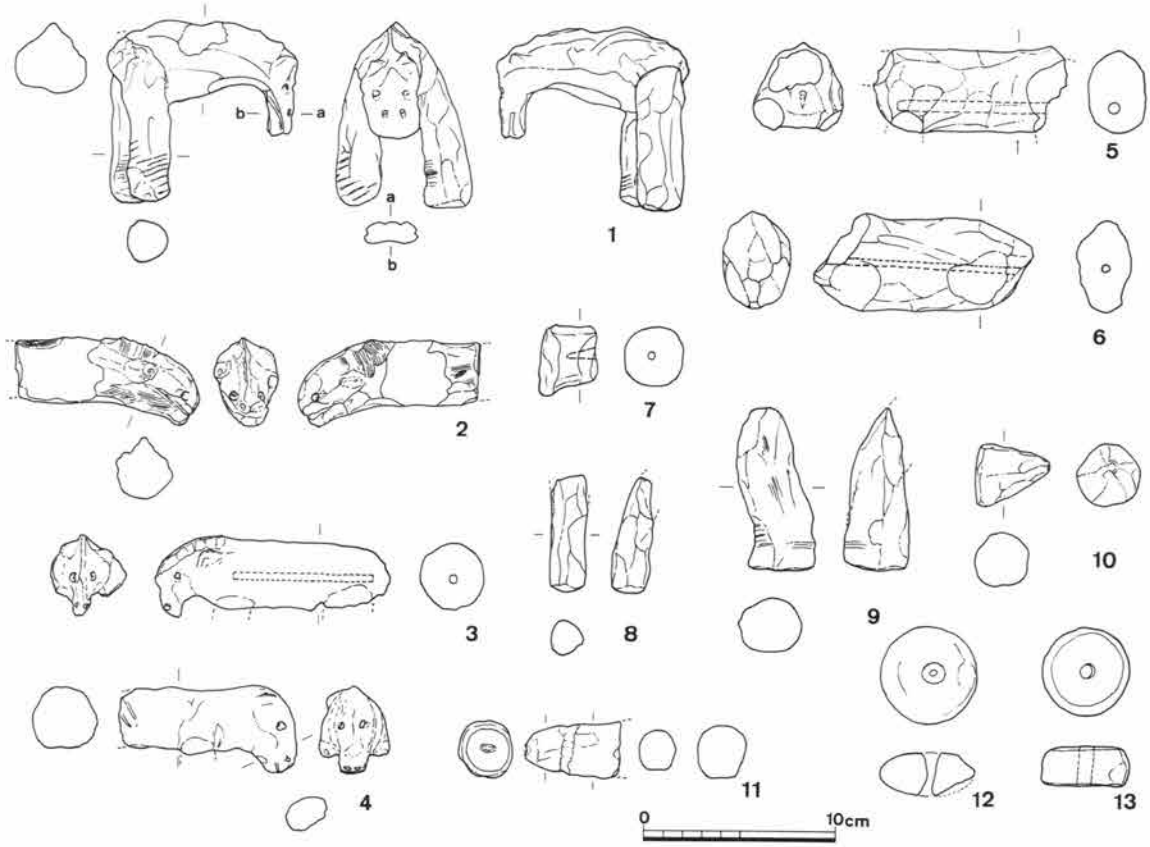


第28図　出土土器実測図
柱穴(P-20)：1、Ⅳ層：2～22、Ⅳ下層：23～31

～9は土馬の断片である。いずれも裸馬で、馬具の明確な表現はない。また3・5～7には体部に細い穴が貫通している。土馬は、当時の疫病をもたらす疫神を排除する道具と考えられている。本遺跡における土坑の周辺でも何らかの祭祀が行われた可能性がある。こうした竈形土製品と土馬が一緒に出土している例は、周辺では綾部市新庄町の長遺跡(奈良時代)で知られている。[注4] 10は円錐形の不明土製品。11はH地区出土の陽物形土製品である。12・13は紡錘車である。



第29図　出土土器実測図（Ⅳ層：１、Ⅳ下層：２、Ⅴ層：３～６）



第30図　土製品実測図

丘陵上：１　ＳＸ01：２･10　Ⅳ層：６･８･９･12･13　Ⅳ下層：７ Ⅴ層：３･４　竪穴式住居跡１：５　Ｈ区：11

３．ま と め

調査の結果、南稲葉遺跡は飛鳥時代から平安時代にかけての集落遺跡であることが明確になった。検出遺構は、竪穴式住居跡３基、多数の柱穴と土坑などである。飛鳥時代から平安時代にかけて丘陵上の平坦地ばかりでなく、谷部のゆるやかな斜面部にも竪穴式住居や掘立柱建物を建て

て生活していた。出土遺物はほとんどが土師器と須恵器で、とくに土師器の割合は圧倒的である。この土師器と須恵器の出土割合に関して、綾部市西坂町の高倉遺跡は時代も奈良時代で南稲葉遺跡と同じであるが、そこでは須恵器の割合が土師器に比べて高く、全体の94％を占める。(注5) 高倉遺跡ではまた墨書土器も出土している。墨書土器の出土はなく、炊飯具や貯蔵具が圧倒的に多く出土する南稲葉遺跡とは対照的である。高倉遺跡が一般庶民の生活臭の少ない特殊な性格を帯びた集落とすると、この南稲葉遺跡は日々の炊事や、行事や季節ごとに行う祭祀も含め、ごく日常的な生活が営まれた普通の集落といえる。

（黒坪一樹）

注1　『綾部市遺跡地図』　綾部市教育委員会　1998

注2　調査参加者は、以下の通りである（順不同・敬称略）。

作業員　田中健之助・原田二郎・原田俊之・上原克己・森本一男・井上致夫・高田朋子・柏原幸雄・今井弘司・吉崎次雄・沢井史朗・藤田利枝・塩尻　悦・鈴木信太郎・杉井　豊・石角　修・大槻米治・白波瀬明・能勢芳夫・大槻壽治・福田明秩

調査補助員　工藤　信・伊藤裕康

整理員　川端文子・川端裕子・田中美恵子・村井裕香・森　京子・山田美和子・渡辺あやみ・渡辺文子・渡辺洋子・渡辺法子・山本弥生・及川あや子

注3　中村孝之「安国寺平山古墳発掘調査概報」（『綾部市文化財調査報告』第14集　綾部市教育委員会）1987

注4　井口一三「長遺跡発掘調査報告」（『綾部市文化財調査報告』第21集　綾部市教育委員会）　1995

注5　近澤豊明・井口一三・森　正「高倉遺跡発掘調査概報」（『綾部市文化財調査報告』第20集　綾部市教育委員会）　1994

なお、京都府埋蔵文化財情報第77号の略報（22頁）では全体図の座標値を誤って表示した。今回は航空測量図をもとに全面的に作成し直した。

3．善願寺遺跡第２次発掘調査概要

1．はじめに

今回の調査は京都縦貫道木崎高架工事に先立ち、橋脚建設工事により遺跡の損壊する部分を対象として、日本道路公団関西支社の依頼を受けて実施した。善願寺遺跡は昭和51年に京都縦貫道建設工事に先立って発掘調査がなされ、古墳時代後期の横穴式石室墳２基の他、平安時代後期から中世にかけての遺物散布地であることが確認された[注1]。また、中世寺院である善願寺の所在地である可能性が指摘されている。

現地調査は、当調査研究センター調査第２課課長補佐兼調査第１係長水谷壽克、同調査員石崎善久が担当した。現地調査に際しては、作業員・補助員として現地の方々、学生に従事していただいた[注2]。また、関係諸機関からご教示を得ることもできた。本概要報告の執筆は、位置と環境の項目を村上計太(京都教育大学生)が執筆し、その他を石崎が執筆・編集した。現地写真は石崎がその都度行った。なお、本概要報告で用いた方位は座標北・標高はＴ．Ｐ．である。調査に係る経費は全額日本道路公団関西支社が負担した。

調査は平成12年５月８日より着手し、６月21日にはラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。６月29日には関係者説明会を行い、同日全ての機材を撤収し現地作業を終了した。

調査の方法は盛土層および旧耕作土層・耕作土床土を重機により除去した後、順次、人力による掘削を行うこととした。また、重機による表土・盛土層を除去する過程で遺構面まで２ｍ以上を測ることが明らかとなったため、調査範囲は狭くなるものの作業上の安全を考慮して複数のステップをつけて掘削する方法を採ることとした。調査対象地の南半部分については町道付け替えに先行して隣接部分の試掘調査を実施し、その結果、遺構・遺物とも確認することができなかったため遺跡の範囲外と判断し、土層断面図を作成するにとどめ、面的な調査は実施しなかった。

北側部分ではＰ13・17トレンチを除き遺構・遺物を検出することができた。時期は弥生時代中期から中世に至る各時期のものが認められたが、既設の橋脚により調査トレンチの西側部分が大きく削平・攪乱を受け、調査範囲が狭小なため全容を知りうることのできた遺構は少なかった。

なお、本稿では遺構番号についてトレンチ番号を冒頭に付す形で呼称することとした(例えば溝ＳＤ1401)。現地では各トレンチごとに遺構に通し番号をつけて遺物を取り上げた。そのため、遺物にはトレンチ・遺構番号のみを記している。

2．位置と環境

善願寺遺跡は、京都府船井郡園部町字木崎に位置する。園部町は桂川上流域の大堰川水系の最北端に位置し、丹波高原を源流とする園部川・半田川などの小河川により形成された小盆地、通

称園部盆地をその町域とする。善願寺遺跡は園部川の一支流である陣田川東岸に展開する丘陵裾部分に立地しており、現状での遺跡周辺部分は標高約131mを測る。

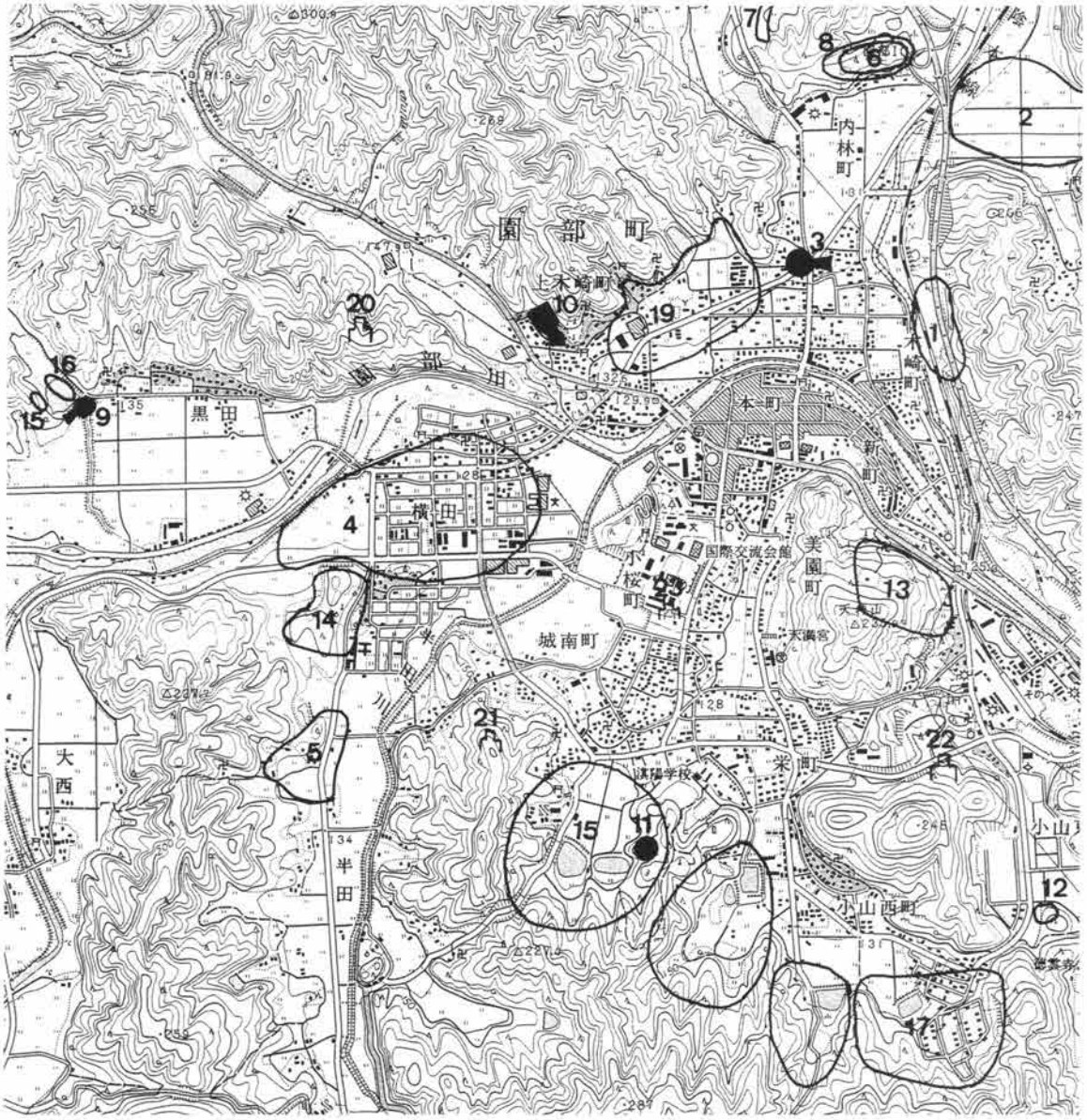
現在、遺跡内には京都縦貫道木崎高架橋が建設され、大部分が縦貫道盛土によって覆われている。遺跡の東側には北から南へ流れる陣田川が存在し、この川に沿う形でＪＲ嵯峨野線が敷設されている。現在の陣田川は河川改修工事のため川幅10m前後の河川となっているが、改修以前は川幅１m程度の小河川であったと地元の方からうかがった。以上のような点から、遺跡は本来、陣田川東岸に展開する丘陵裾部の微高地を利用して土地利用がなされていたものと推定する。

園部盆地で確認されているもっとも古い考古資料は縄文時代にまで遡る。曽我谷遺跡(注3)では尖頭器などの石器が出土している。また、園部垣内古墳(注4)の墳丘盛土内から縄文土器片・石鏃が出土しているが、いずれも遺構に伴うものではない。

弥生時代には集落遺跡や墳墓遺跡が確認される。中期の遺跡として詳細は不明ながらも横田遺跡(注5)(中期後半)をあげることができる。また、善願寺遺跡も今回の調査で弥生時代中期の集落遺跡であることが明らかとなった。後期に属する集落遺跡として、半田遺跡(注6)・今林遺跡(注7)・曽我谷遺跡をあげることができる。なかでも今林遺跡は丘陵斜面部分を利用した高地性集落であり、竪穴式住居跡・溝・ピット群などが検出されている。住居の平面プランは円形・方形のものの他、多角形住居が存在する点が注目される。曽我谷遺跡では流路内から多数の土器が出土しており、庄内併行期の集落と見られる。また、遺物の散布範囲から見て、当該期の大形集落と推定される。また、後期を中心に墳墓資料も蓄積されつつある。狭間墳墓群(注8)(旧称瓜生野古墳群)では13基の方形台状墓が調査されている。いずれも一辺10m前後を測り、盛土で構築されている。埋葬施設は木棺直葬が主体である。副葬品には鉇の他、ガラス小玉などが出土している。同一丘陵上にある今林８号墓(注9)は庄内併行期に造墓された方形台状墓である。箱形木棺を納めた第１主体部からは銅鏡１面・玉類・タビなどが出土し庄内併行期の豊富な副葬品をもつ墳丘墓の調査事例として注目される。今林１号墳(注10)も後期の台状墓であり、土器棺が検出されている。

園部黒田古墳(注11)は全長52mを測る前方後円形の墳丘をもつ墳丘墓である。墳丘はバチ形に開く前方部と長楕円形を呈する後円部に特徴を見いだすことができる。埋葬施設は後円部で２基が確認され中心埋葬施設は大形の二段墓壙を呈し、墓壙底に構築された礫床状の施設の上に舟形木棺が安置されたものと見られる。副葬品には破砕された位至三公鏡１面・玉類・鉄鏃などが検出された。定型化する以前の前方後円形墳丘墓の例として注目される。

古墳時代前期の遺跡として、著名なものに中畷古墳(注12)・園部垣内古墳がある。中畷古墳は全長64mを測る前方後方墳であり、筒形銅器が出土したと伝えられる。園部垣内古墳は全長82mを測る埴輪・葺石を完備した前方後円墳であり、埋葬施設として後円部中央に割竹形木棺を安置した粘土槨を構築している。出土遺物には多量のヤリ・剣・刀・鉄鏃などの武器類、方形板革綴短甲・靫といった武具類、農工具、車輪石・石釧・石製鏃・玉類・三角縁神獣鏡をはじめとする５面の銅鏡などがあり、南丹波を代表する前期古墳といえる。園部黒田古墳にはじまる前方後円墳や前方後方墳といった首長墓の系譜は同時期の南丹波をみても突出した内容をもち、その優位性が注



第31図　調査地周辺遺跡分布図(1/25,000)

1.善願寺遺跡	2.曽我谷遺跡	3.園部垣内古墳	4.横田遺跡	5.半田遺跡
6.今林古墳群	7.挾間墳墓群	8.今林遺跡	9.黒田古墳	10.中畷古墳
11.岸ヶ前２号墳	12.徳雲寺北古墳群	13.天神山古墳群	14.温井古墳群	15.町田東古墳群
16.黒田北古墳群	17.大向窯跡群	18.壺の谷窯跡群	19.宮ノ口遺跡	20.黒田城跡
21.大村城跡	22.小山(五合山)城跡	23.園部城跡		

目される。そのひとつの背景として、古山陰道が盆地南端を通過することから交通の要衝をおさえたものとみる見解がある。

古墳時代中期には大形前方後円墳は築造されず、直径もしくは一辺20～30mクラスの円・方墳が築造される。代表的なものとして今林６号墳(JE13)・岸ヶ前２号墳(JE14)などを例示することができる。今林６号墳は20mクラスの埴輪をともなう中規模方墳であり短甲・鉄剣・鉄刀・鉄鏃・農工具類・玉類・鏡とひとそろいの副葬品をもっており、典型的な中期古墳の内容を示している。岸ケ前２

号墳もほぼ同様の内容をもつが、鏡が欠落する。また、こうした短甲をはじめとする武具類を副葬する古墳の他に、徳雲寺北古墳群(注15)のように、埴輪を採用する小古墳が見られる。また同古墳群内には棺内礫床を採用する埋葬施設が認められることもひとつの特徴といえよう。中期後半の事例として今林２号墳(注16)を例示する。同古墳は直径20mの円墳であり、埋葬施設は木棺直葬を採用していた。武器類の他、馬具を副葬している。

古墳時代後期、横穴式石室の導入に伴い群集墳が形成されるようになる。代表的なものとして天神山古墳群をあげることができる。天神山古墳群(注17)は古式の横穴式石室をもつ円墳により構成される群集墳であり、総数21基を数える。同時期の横穴式石室は亀岡盆地を中心にみられ、短い羨道部に正方形に近いプランを呈する玄室をもつ。これらの石室墳は６世紀中葉を前後して築造され、南丹波における導入期横穴式石室を検討する上で重要な存在である。

一方、温井古墳群(注18)・町田東古墳群・黒田北古墳群(注19)のように木棺直葬墳から構成される後期群集墳も確認されている。須恵器転用枕を採用するものや小口に粘土と礫を用いた裏込め構造を示すものがあり、北丹波地方や丹後地方との類似性が指摘される。

園部町で注目される古墳時代の遺跡として須恵器窯址群をあげておきたい。大向窯跡群(注20)ではＴＫ47型式併行期と考えられる段階から須恵器生産を行っており、地方窯の出現を見る上で貴重な存在である。先の導入期横穴式石室の受容とともに、古墳時代後期にこの地域が重視されたことを示すものと考えたい。

その一方で、古墳時代の集落遺跡の動態については不明瞭な部分が多い。布留式併行期の集落の実体は全くと言っていいほど不明であり、曽我谷遺跡で小形丸底壺が採集されているにすぎない。古墳時代中期の例としては、今林２号墳の南側斜面で５世紀後半とされる「青野型住居」が１棟のみ検出されているが、大規模な集落を構成していたとは言い難い。平成12年に調査された今林遺跡は古墳時代後期末葉を中心とする集落であるが、立地の特異性から、この地域の拠点集落と考えるにはやや難がある。今後、低湿地部分を含めた集落遺跡の調査が課題と考える。

飛鳥時代以降の遺跡としては、先述の窯址群のうち、壺ノ谷窯址群(注21)は平安時代まで継続して操業される。中でも壺ノ内７号窯は瓦と須恵器の兼業窯であり、その供給先を検討する必要性がある。奈良・平安時代の遺跡としては、宮ノ口遺跡(注22)が知られるが、集落構造などの実体は不明である。また、盆地の西端を通過すると考えられる古代山陰道に付随して、埴生の地に「野口駅」の存在が比定されているものの、遺跡としての実体は不明である。

中世を代表する遺跡としては、当善願寺遺跡の他に多数の山城が知られている。現在のところ20余の山城が確認されている。代表的なものとして、黒田城、大村城、小山城などがある。黒田城は平安時代末期に築城された片山氏の居城である。大村城・小山城は室町時代に築城され、それぞれ田中氏・荘林氏の居城である。

近世になると園部城が築かれる。小出氏の居城である。この園部城が築城される以前、同地に荒木氏の薗部城があったとされる説がある。この薗部城は天正６(1578)年に織田軍により攻め落とされた。

江戸時代の園部は、園部藩２万９千石の治下のもと園部城の城下町として発展を遂げ現在に至ることとなる。

３．各トレンチの設定

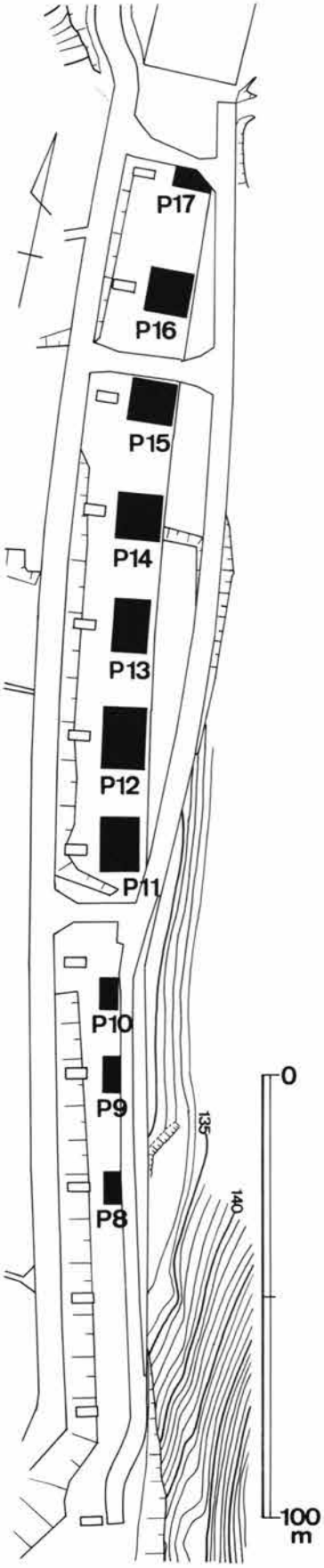
今回の調査では橋脚建造に伴い、遺跡の損壊する地点を限定的に調査することとなった。そのため、各々のトレンチは約10mごとの間隔をおくように設置することとなった。各トレンチの名称は建設される橋脚の番号を頭に付し、Ｐ８～17トレンチの計10か所について調査を実施した。これは、善願寺遺跡として周知される遺跡の範囲をほぼ南北に縦断するものであり、Ｐ８～17トレンチまでの距離は約230mを測る。

また、第１次調査との位置関係を把握することにも努めたが、報告されている文章と図が整合せず、また、縦貫道建設により旧地形がかなり改変され、当時の基準となるポイントを見いだすことができなかった。そのため、図示しえたのは概略図であり、厳密な１次調査との整合性を示すものではないが、おおむね旧地形に合致させるならばＰ14～17トレンチは遺跡北側に展開する微高地上に、Ｐ13トレンチは小谷地形に、Ｐ９～12トレンチは若干の起伏はあるものの、おおむね南から北へ傾斜する丘陵裾部分に相当するものと思われる。

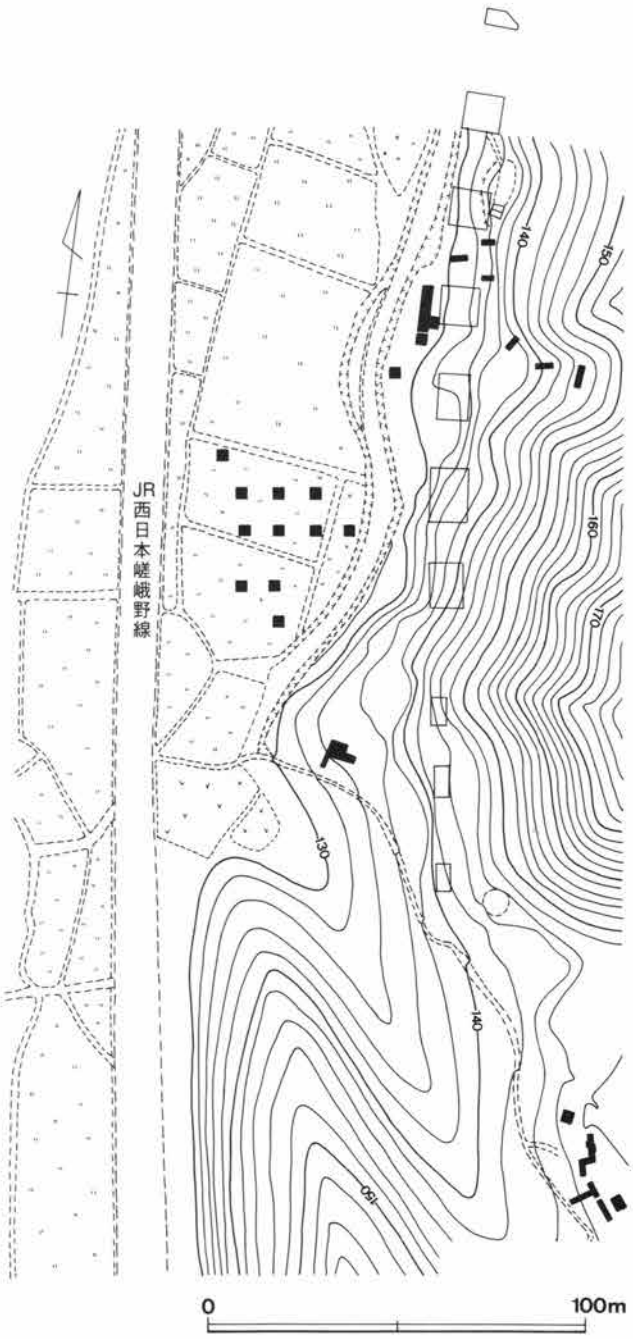
４．基本層序

基本的な層序は第34図に図示するとおり、上層から、現地表面→橋脚盛土層→旧路面（アスファルト・バラス）→旧盛土層→旧耕作土層→耕作土床土→黒灰色粘質土層（遺物包含層）→黄灰色粘質土層（遺構ベース土）→黒灰色シルト→黄褐色粘質土の順である。

また、削平や地形上の制約からか遺物包含層の形成されていないトレンチもあり、南側のＰ８～10トレンチでは、丘陵の斜面部分に相当する場所に位置したためもあり遺構・遺物包含層などは確認されなかった。また、最下層の安定地盤となる黄褐色粘質土層のレベルから見て、Ｐ17トレンチを最高所に、Ｐ13トレンチの小谷地形を介して再びＰ12トレンチに舌状の微高地が存在し、Ｐ11トレンチに大きな谷状地形が形成されていると推測される。



第32図　善願寺遺跡トレンチ配置図（1/3,000）



第33図　善願寺遺跡第１次調査時地形測量図と第２次調査トレンチ配置略図(1/2,000)

5．各トレンチの概要

各トレンチの概略について北から順に説明を加える。

P17トレンチ　現盛土面から約2.5m掘削した段階で、基盤土壌と考えられる黄褐色粘質土を検出した。黄褐色粘質土上面には、旧路面養生のための盛土が存在しており、遺構・遺物包含層についてはすでに削平されてしまったものと判断された。

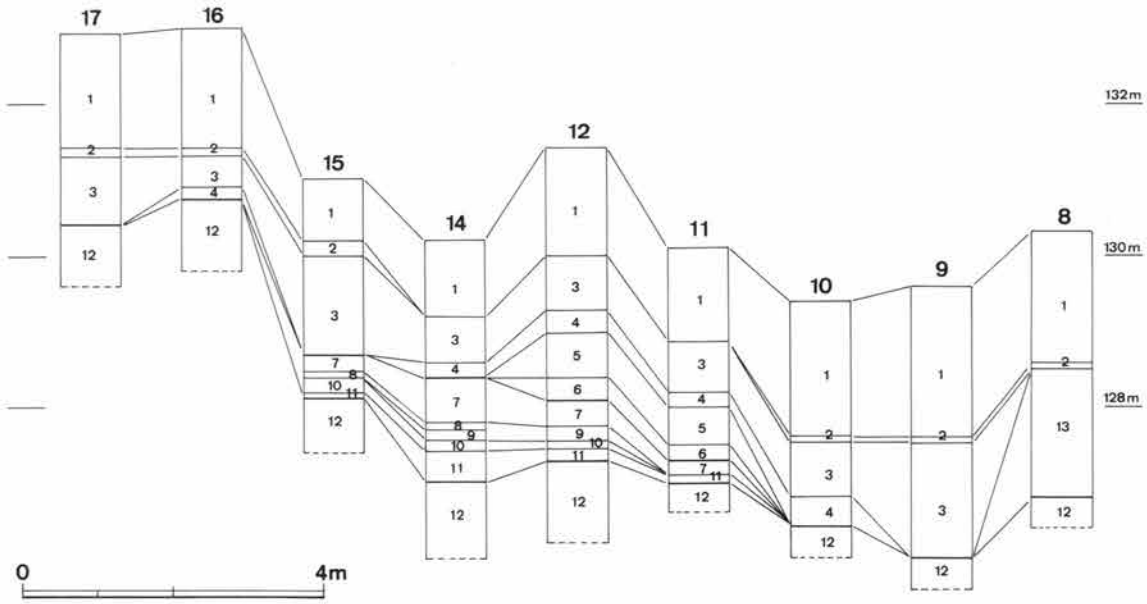
P16トレンチ　現盛土層から約2.1m掘削した段階で、旧耕作土と考えられる黒褐色土層を検出した。また、トレンチ西半部分は、既設の橋脚工事により大きく破壊を受けていた。遺構は旧表土を除去した黄褐色粘質土層上面で、溝・ピットなどを検出した。また、同一面上で近・現代のものと考えられる暗渠を検出した。

溝ＳＤ1601は幅0.2m・深さ0.1mを測る断面弧状を呈する溝である。埋土は暗灰褐色砂質土の単層であり、埋土中から瓦器片が出土している。

ピット群は建物としてのまとまりを見いだすことはできないが、埋土中から土師器片・瓦器片を出土したものもあり、おおむね溝ＳＤ1601と前後する時期のものと考える。

暗渠状遺構は、幅0.3m・深さ0.3mを測る断面逆台形状の溝を掘削し、溝底部に竹・棒を据え付けた後、角礫を用いて埋め戻し暗渠として機能させたものである。また、トレンチ北東隅部で直交しており、畑地の区画を示すものと考える。暗渠状遺構に伴う出土遺物はなかったが、土層の観察結果から、旧耕作土に伴う暗渠と判断した。

P15トレンチ　現地表下部は厚い盛土層に覆われており、盛土層を除去した段階で遺構面と考えられる黄灰色粘質土層に達した。遺構の遺存状況はきわめて悪く、ピット３基を確認したにすぎない。なお、遺構面直上で瓦器片１点を検出した。



第34図　善願寺遺跡土層柱状図

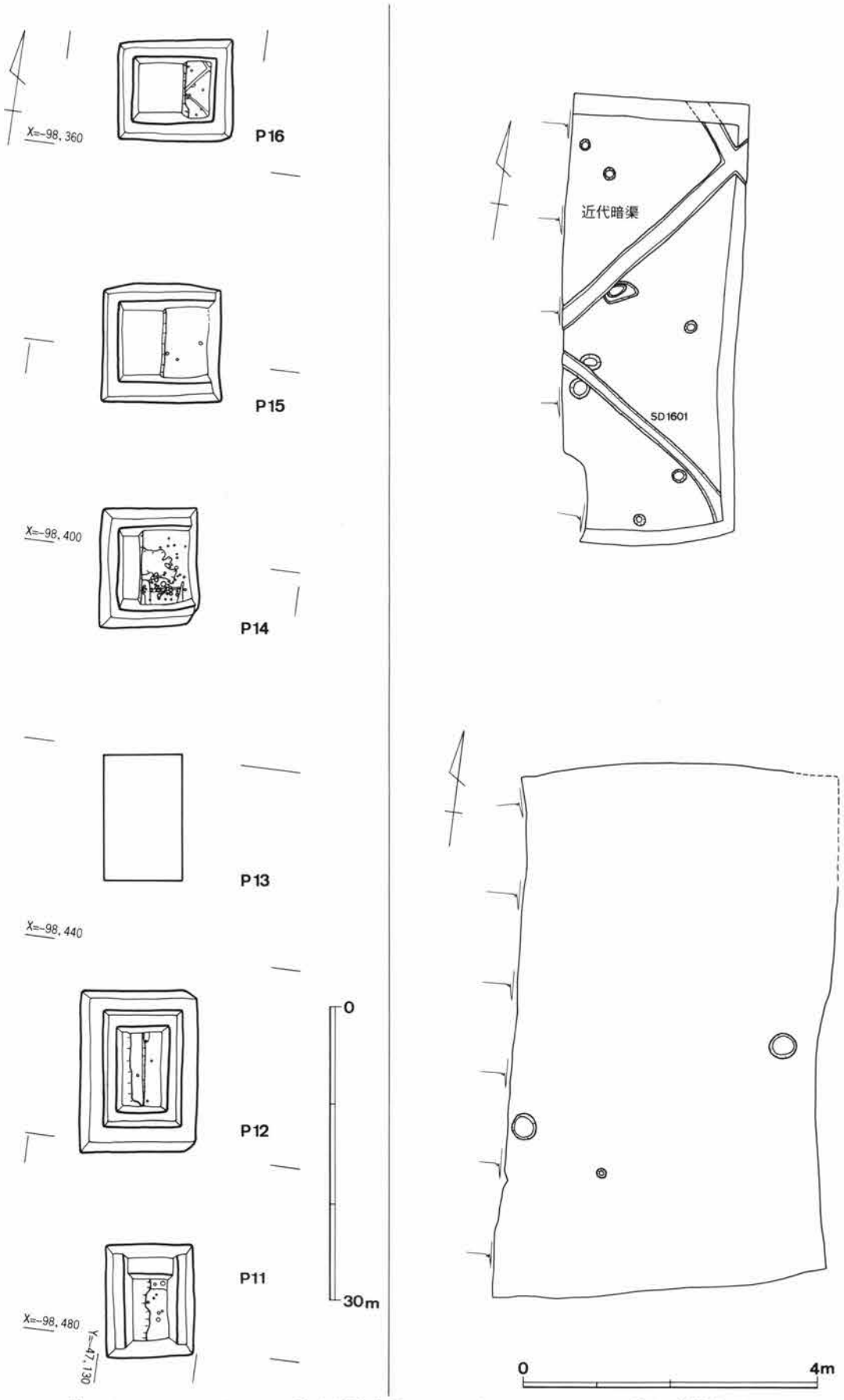
1.盛土　2.バラス・アスファルト　3.盛土　4.旧耕作土　5.耕作土床土
6.黒褐色粘質土(遺物包含層)　7.黄灰色粘質土(遺構ベース)　8.淡黄褐色粘質土　9.灰色粘質土
10.淡黄灰色粘質土　11.黒灰色粘質土　12.黄灰色粘質土　13.暗茶褐色粘質土

Ｐ14トレンチ　現盛土層から約1.8m掘削した段階で、旧耕作地に伴い敷設されたと思われる瓦・レンガ・礫敷きの旧農道と考えられる路面を検出した。ほぼ同一面で、遺構面と考えられる黄灰色粘質土層を確認したため精査を実施した結果、竪穴式住居跡１・溝・ピット群など多数の遺構を確認することができた。また、遺物包含層は旧地形の傾斜に沿った形で南側部分のみに薄く遺存していた。

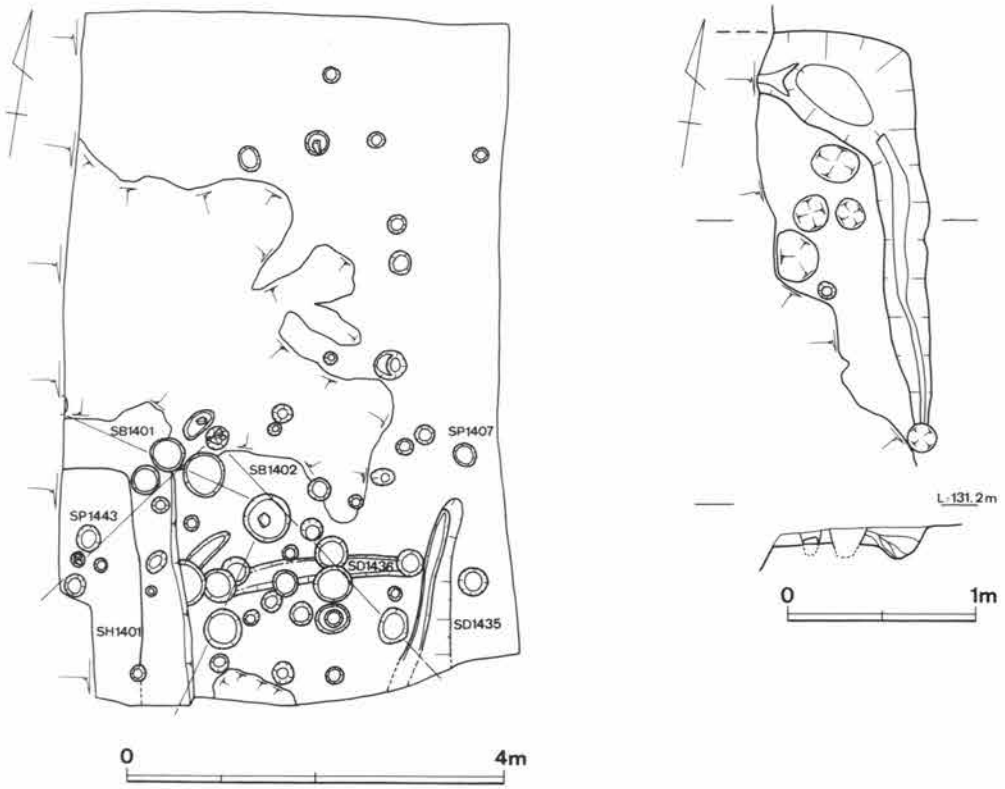
竪穴式住居跡ＳＨ1401はトレンチ南西部で確認した。西側は大きく橋脚設置時の攪乱により損壊しており、北東コーナー部分を確認したにすぎない。残存する部分から判断して掘形の平面プランは隅丸方形を呈していたものと推定する。残存部で南北2.1m・東西0.9m・深さ0.1mを測る。住居内の施設として周壁溝を確認した。周壁溝は残存部では完周しており、その規模は幅0.2m、床面からの深さ0.1mを測る。また、北東隅部分のみ深く掘削されている。主柱穴と思われる柱穴、炉などは検出することができなかった。遺物は埋土中から細片化した弥生土器(第38図１・２・４～８)が、周壁溝北東隅部分では高杯(第38図３)が出土した。出土遺物からみてこの竪穴式住居跡は弥生後期後半に機能していたものと判断する。また、住居埋土中からはサヌカイト剥片も出土しているが、これは包含層からの流入と考える。

溝ＳＤ1436は東西方向に掘削された幅0.3m・深さ0.1mを測る素掘り溝である。他のすべての遺構に切られることから、このトレンチ内ではもっとも古い遺構と見られる。わずかに弧を描いていることから竪穴式住居跡の周壁溝である可能性も考えることができるが詳細は不明。埋土中から突帯文をもつ壺細片(第38図９)が出土しているので弥生時代中期中葉の遺構と判断される。

溝ＳＤ1435は南北方向の素掘り溝であり、幅0.3m・深さ0.3mを測る。埋土中からは瓦器片が



第35図　P11～15トレンチ検出遺構全体図およびP15・16トレンチ検出遺構実測図



第36図　Ｐ14トレンチ検出遺構実測図およびＳＨ1401実測図

出土している。

ピット群は多数を検出した。調査範囲が狭小なため確実に建物として復原するのは困難であるが、第36図のように２棟の掘立柱建物跡があるものと想定した。ＳＢ1401はＳＤ1435に、ＳＢ1402はＳＤ1601に、それぞれ主軸方向をそろえるものと考える。

Ｐ13トレンチ　現盛土層から約4.5mまで掘削したが、調査域全体が橋脚の既掘坑により破壊されていた。基本層序の項で述べたように、この部分には小谷地形が形成されているものと判断され、橋脚工事も安定した地盤を得るため、予想以上に大きな埋設坑を掘削する必要があったものと考えられる。このトレンチについては崩落の危険性が高かったため、写真撮影の後埋め戻しを行った。

Ｐ12トレンチ　現盛土層から約2.5m掘削した段階で安定した遺構面を確認した。遺構面の上には包含層が形成されており、同層中からは瓦器・土師器・須恵器・弥生土器などが出土した。いずれも出土レベルに一定性がなくローリングを受けていることから二次的な堆積に伴うものと考える。

また、調査区西側1/3は完全に削平され遺構面自体が失われ、中央1/3は遺構面である黄灰色粘質土層が掘削されその下層の黒色粘質土が露出した状態であった。

遺構はトレンチ北側で土坑１基の他、ピット３基を確認した。土坑ＳＫ1201は西側部分を削平され、東側部分のみ遺存する。残存部分で長軸1.2m・短軸0.4m・深さ0.15mを測る。残存する平面形態は楕円形を呈し、断面形は浅い擂り鉢状を呈している。埋土中からは炭の小片に混じっ

て土師質の甕と思われる体部片が出土したが詳細な時期を知りうる資料ではない。ピット内からは瓦器片が出土した。

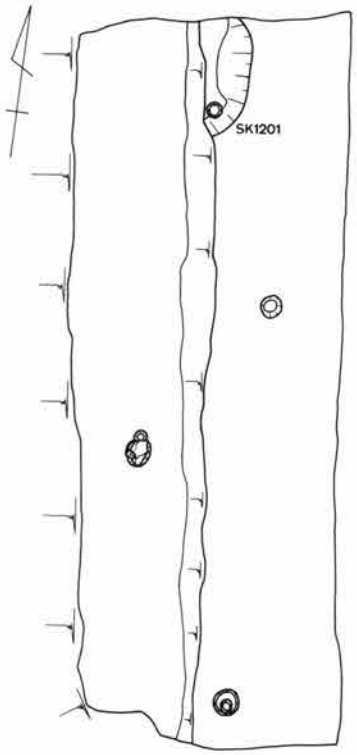
P11トレンチ　表土から2.8m掘削した段階で安定した黄灰色土層を検出した。この面でピット群等を検出した。遺構面上にはわずかに遺物包含層が形成され、瓦器・土師器の小片が出土した。

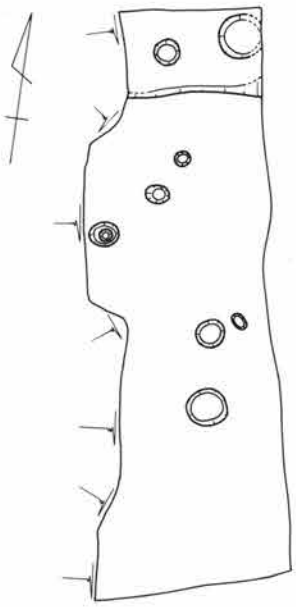
ピットは総数8基を検出したが、建物としてのまとまりを見いだすことはできない。また、トレンチ北側で直線的な落ち込みを検出した。深さ約15cmを測る。この落込みの性格については埋土中の出土遺物がなく、また調査範囲が狭小なため明らかにすることができなかった。落込み内の埋土を除去した段階で2基のピットを検出した。

P10トレンチ　表土から2.5m掘削した段階で旧耕作土を確認した。この耕作土直下が黄灰色土層となっている。しかしながらこのトレンチでは遺構・遺物とも確認することができなかった。近世の耕作による削平の可能性がある。

P9トレンチ　表土から3.5m掘削した段階で黄灰色土層を確認した。この黄灰色土層直上まで縦貫道建設時の盛土が存在し、遺構・遺物の存在を確認することはできなかった。

P8トレンチ　表土から1.8m掘削した段階で暗茶褐色粘質土を検出した。この土層は均質で安定した土層であったが遺物はなく、また下層の黄灰色土層上でも遺構・遺物を確認することはできなかった。地形的に見てこの暗茶褐色粘質土は丘陵側からの流入土であると考えられ、この地点は旧地形の丘陵斜面に相当するものと判断した。





第37図　P11・12トレンチ検出遺構実測図

6．出　土　遺　物

今回の調査で出土した遺物の総量はコンテナ2箱分に満たない。また、大部分が小片であり、完形個体として認識しうる個体がない。その中で図示し得たのは第38・39図の23点である。

出土遺物には、弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・石器がある。

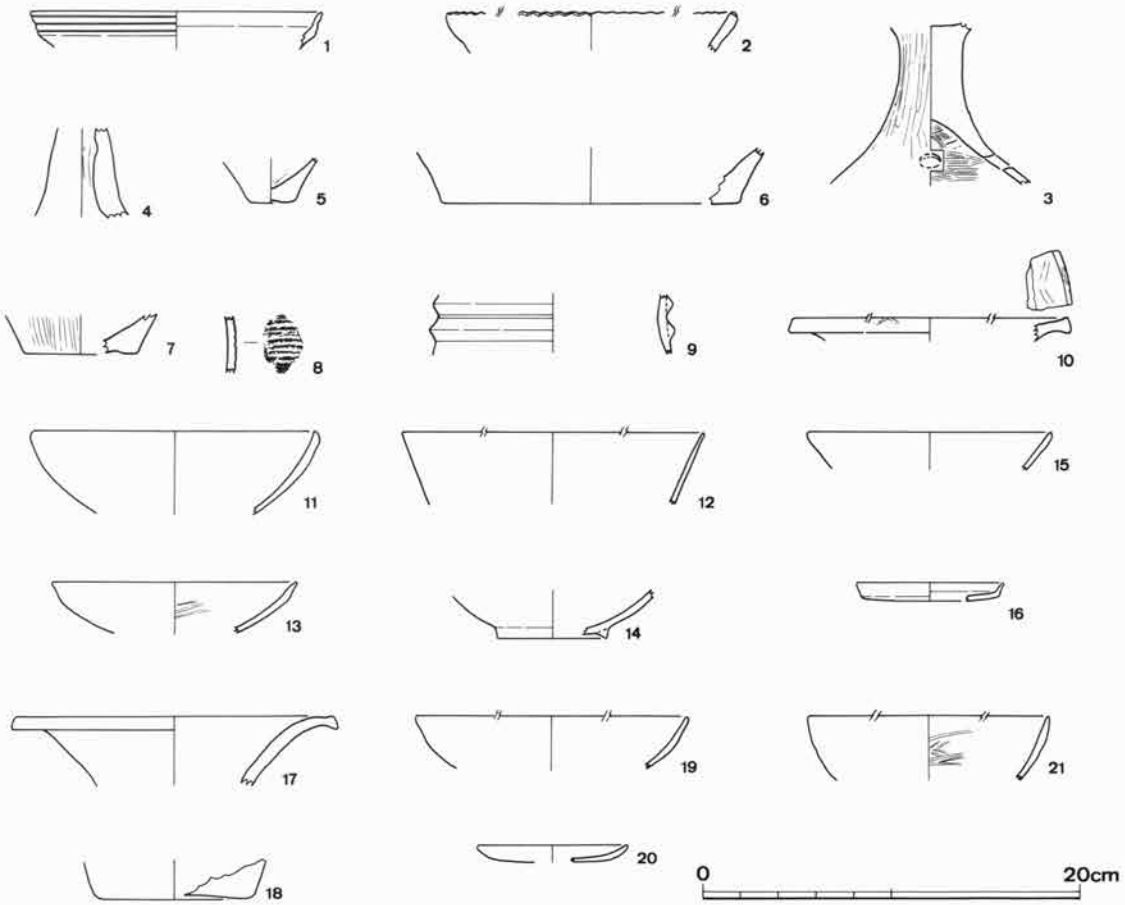
1～8・22は竪穴式住居跡SH1401から出土した。このうち、3は周壁溝北東隅床面上から出土しており、この住居で

使用されたと考えられる個体である。その他のものは住居跡の埋土中から出土しており、使用状況を特定できるものではない。１は甕の口縁部である。複合口縁の形状を示し、口縁外面には３条の擬凹線を施す。２はやや内湾気味に立ち上がる甕の口縁である。口縁端面にはヘラ状工具による刻目を施す。３は高杯脚部である。中実の脚柱部に大きく広がる脚部をもつ。スカシは４方向に施される。調整は外面が縦方向のヘラミガキ、脚部内面は横方向のハケにより行われる。４は高杯脚柱部である。３とは異なり短く中空の形態を呈する。５は甕底部である。狭小な平底をもつ。内面にはハケ工具の圧痕と思われる工具痕が遺存する。外面の調整については磨滅のため不明である。６は大形の甕底部と思われる。復原底径16cmを測る大形品である。７は外面にハケ調整を施す甕の底部である。８は甕体部の小片である。外面にタタキ目が顕著に認められる。22は磨製石器の破片である。残存長5.2cm・幅2.7cm・厚さ0.5cmを測る。表裏面とも平坦に磨かれ、両側辺に向かい傾斜する。周縁部には研磨痕以前の剥離調整痕が認められる。材質は粘板岩であり、その形状から磨製石鏃の可能性が高い。

９は溝ＳＤ1436から出土した。細片の上、磨耗が著しいが、突帯を付す壺の頸部と思われる。

10はピットＳＰ1407から出土した壺の口縁部である。口縁外側面および内面に波状文と思われる文様がわずかに認められる。

11・12はピットＳＰ1443から出土した。11は深手の土師器杯である。12は小片であるが、非常



第38図　善願寺遺跡出土土器実測図

に薄手の作りであり、直線的に立ち上がる。広口壺の口縁部の可能性がある。

13～16・23はＰ14トレンチ包含層から出土した。13・14は瓦器である。13は口縁端部にやや強い横方向のナデを施す椀である。磨滅が著しいが内面にヘラミガキが認められる。14は椀の底部である。断面三角形を呈する高台を付す。調整については磨滅のため不明。15・16は土師器である。15は直線的に立ち上がる杯である。16は口縁外側面に強いナデを施す皿である。23はサヌカイト製の削器である。裏面に明瞭な打痕を残す大形の剥片を用い、一方に単純な刃部を設けることにより削器として仕上げている。

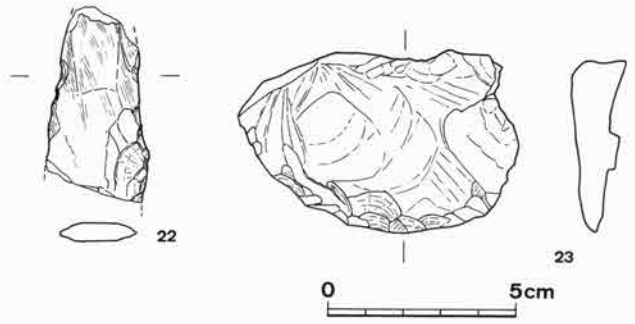
17～21はＰ12トレンチ包含層から出土した。17・18は弥生土器である。17は口縁端部に面をもつ広口壺である。磨耗が著しく調整や施文については不明。18は復原底径４cmを測る甕の底部である。両者とも中期中葉と思われる。19・20は土師器である。19は内湾する体部をもち、口縁下端部をやや強くなでることにより整形している。20は復原口径3.8cmを測る皿である。21は瓦器椀である。磨滅が著しいが内面にヘラミガキが認められる。

６．ま　と　め

今回の調査により、善願寺遺跡の実体の断片を知りうる資料を得ることができた。調査範囲が狭小でしかも大部分が縦貫道建設に伴い破壊されていた点は非常に残念ではあるが、以下、いくつか明らかとなった点を記しまとめとしたい。

大きな成果のひとつとして、弥生時代の遺構・遺物を確認し得た点を挙げることができる。Ｐ14トレンチで検出した溝ＳＤ1501は中期中葉の竪穴式住居跡の残欠である可能性がある。この溝ＳＤ1501の南側包含層中から多数のサヌカイト剥片が出土した点はこれを裏付けるものといえよう。これまで、当地域では中期中葉に該当する遺跡は確認されておらず、確実な居住域と見なすことのできる初例となった。中期中葉に属する遺物が確認されたのはＰ14・12トレンチの２か所のみであるが、この部分を中心として、さらに周辺部に遺構が広がることは明確である。

後期の住居址として竪穴式住居跡ＳＨ1501を検出できた点も重要である。出土遺物が細片のため、詳細な時期決定を行う根拠には乏しいものの、敢えて同時期の遺構を見出すならば、擬凹線をもつ複合口縁の甕と中実の高杯脚柱部、短い中空の脚柱部をもつものとして、今林遺跡竪穴式住居跡ＳＨ11を例示することができる。今林遺跡の土器は弥生時代後期後半代に位置づけられており、ほぼ同時期に丘陵上に展開する集落（今林遺跡）と、低地に立地する集落（善願寺遺跡）が存在していることとなり、後続する曽我谷遺跡への展開を考える上で注目すべきである。



第39図　善願寺遺跡出土石器実測図

中世の遺構・遺物では、Ｐ16トレンチからＰ11トレンチまでの広がりを確認することができた。瓦器はいずれも外面に

ミガキの痕跡が認められ、断面三角形の高台をもつ点から13世紀前半代に位置づけられるものである。また、Ｐ15トレンチでは複数の掘立柱建物跡が重複して検出された点から見て、継続的に営まれた集落遺跡として見ることができる。伝承にある中世寺院善願寺についてはその所在あるいは関連遺構を確認することはできなかったが、調査期間中に地元の古老から、いまは散逸してしまったものの、近年まで、善願寺を記した江戸時代の絵図が残っていたというお話を伺うことができた。善願寺については「親元日記」寛政６(1794)年５月４日条に高山寺別当を兼ねる善願寺中坊重海が、この時、桐野河内村内の高山寺田を巡って高屋の蟠根寺と相論した。という記事がある[注23]。こうした、文献資料から15世紀後半に善願寺が存在したと仮定した場合、実際に出土した考古資料は13世紀後半代のものが中心となるため、この資料にみられる年代に比定される資料はない。口碑によると七堂伽藍を構え、明智光秀の丹波攻略の際消失したとされているため、その寺域は広範にわたるものと推測される。第１次調査ではＣ地区の第１地点ＣＧ14(報告文のまま、図に注記等がないので位置を確定できず)から焼土層が確認されている。このことは前述の消失伝承を考える上で示唆的であり、あるいは戦国期の善願寺に関連した焼土層であったのかもしれない。この寺院の建立が中世段階まで遡るかどうかの確証は今回の調査成果から窺うことはできないが、少なくとも掘立柱建物跡等の存在から中世集落が形成されていたのは間違いない。

中世集落として見た場合、遺構・遺物はＰ16トレンチからＰ11トレンチまで、直線距離にして約110ｍの範囲で確認することができた。とくにＰ16トレンチで検出した溝ＳＤ1601やＰ14トレンチで検出したピット群から一定の方向性をもつ建物群が存在する可能性が高い。今回の調査では集落の様相をうかがい知ることができるだけの成果をあげることはできなかったものの、大形の集落遺跡になる可能性も秘めており、今後、周辺部の開発に当たっては十分な注意が必要と判断される。

(石崎善久)

注１　安藤信策ほか「７　国道９号バイパス関係遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財調査概報』1977　京都府教育委員会)　1977

注２　調査参加者は以下のとおり(順不同・敬称略)。

調査補助員　村上計太

作業員　前田富士子・矢野ふさゑ・佐々谷きみ子・吉田修一・野口和子

注３　平良泰久ほか「曽我谷遺跡発掘調査概報」(『園部町文化財調査報告』第２集　園部町教育委員会)　1977

注４　森浩一編『園部垣内古墳』(同志社大学考古学研究室)　1990

注５　同志社大学考古学実習室園部町遺跡分布調査研究会編『園部盆地における考古学的調査－分布調査の成果Ⅲ－』(同志社大学考古学実習室園部町遺跡分布調査研究会)　1981

注６　前掲注(5)

注７　野々口陽子「１.今林２号墳・今林遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第68冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1996

注８　『狭間墳墓群・平山古墳・カチ山北古墳』(現地説明会資料)　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　2000

注９　福島孝行「今林古墳群の発掘調査」（『京都府埋蔵文化財情報』第78号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2000

注10　柴　暁彦「(1)今林古墳群」（『京都府遺跡調査概報』第62冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1995

注11　森下　衛・高野陽子ほか「船阪・黒田工業団地予定地内遺跡発掘調査概報」（『園部町発掘調査調査報告書』第８集　園部町教育委員会）　1991

注12　前掲注(4)

注13　前掲注(9)

注14　門田誠一『佛教大学園部校地の遺跡－考古学調査のあらまし－』（佛教大学）　1999

注15　辻健二郎「園部町小山東町土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書(徳雲寺谷遺跡群)」（『園部町文化財調査報告書』第13集　園部町教育委員会）　1997

注16　前掲注(7)

注17　辻健二郎「園部天神山古墳群発掘調査報告書」（『園部町文化財調査報告書』第10集　園部町教育委員会）　1995

注18　安藤信策・山口　博ほか「温井13号墳発掘調査概報」（『園部町埋蔵文化財調査報告』第３集　園部町教育委員会）　1981

注19　前掲注(11)

注20　丸川義広「口丹波における須恵器生産の開始」（『盾列』創刊号　奈良大学考古学研究会）　1975

注21　二ノ宮早緒里・浜中有紀ほか『壺ノ内窯址群・桑ノ内遺跡発掘調査報告書』（佛教大学校地調査委員会）　2000

注22　辻健二郎「園部町内遺跡発掘調査概報　平成７年度(宮ノ口遺跡)」（『園部町文化財調査報告書』第11集　園部町教育委員会）　1996

辻健二郎「園部町内遺跡発掘調査概報　平成８年度(宮ノ口遺跡)」（『園部町文化財調査報告書』第12集　園部町教育委員会）　1997

注23　『京都府の地名』　平凡社　1995

4．池上遺跡第７次発掘調査概要

1．はじめに

この調査は、平成12年度主要地方道亀岡園部線関係遺跡埋蔵文化財発掘調査として、京都府土木建築部の依頼を受けて当調査研究センターが実施した。池上遺跡は、平成９年の八木町教育委員会による試掘調査で確認され、過去６度にわたる発掘調査が実施された(第１表)。これまでの発掘調査によって、弥生時代の集落跡・墓地や古墳時代の建物跡、またそれ以降の中世の遺構などが確認されている。今回の調査地は、平成10年度に当調査研究センターが調査した第５次調査地の北延長部に相当する野条地区手前までの道路建設予定地において約2,000㎡の発掘調査を実施した。過去の調査地に隣接しているため、第３～５次調査で検出されたものと同時期の遺構・遺物の検出や遺跡北側の遺構の広がりが確認できると予測された。また、池上遺跡の遺跡範囲の北限を確認できる可能性が期待された。

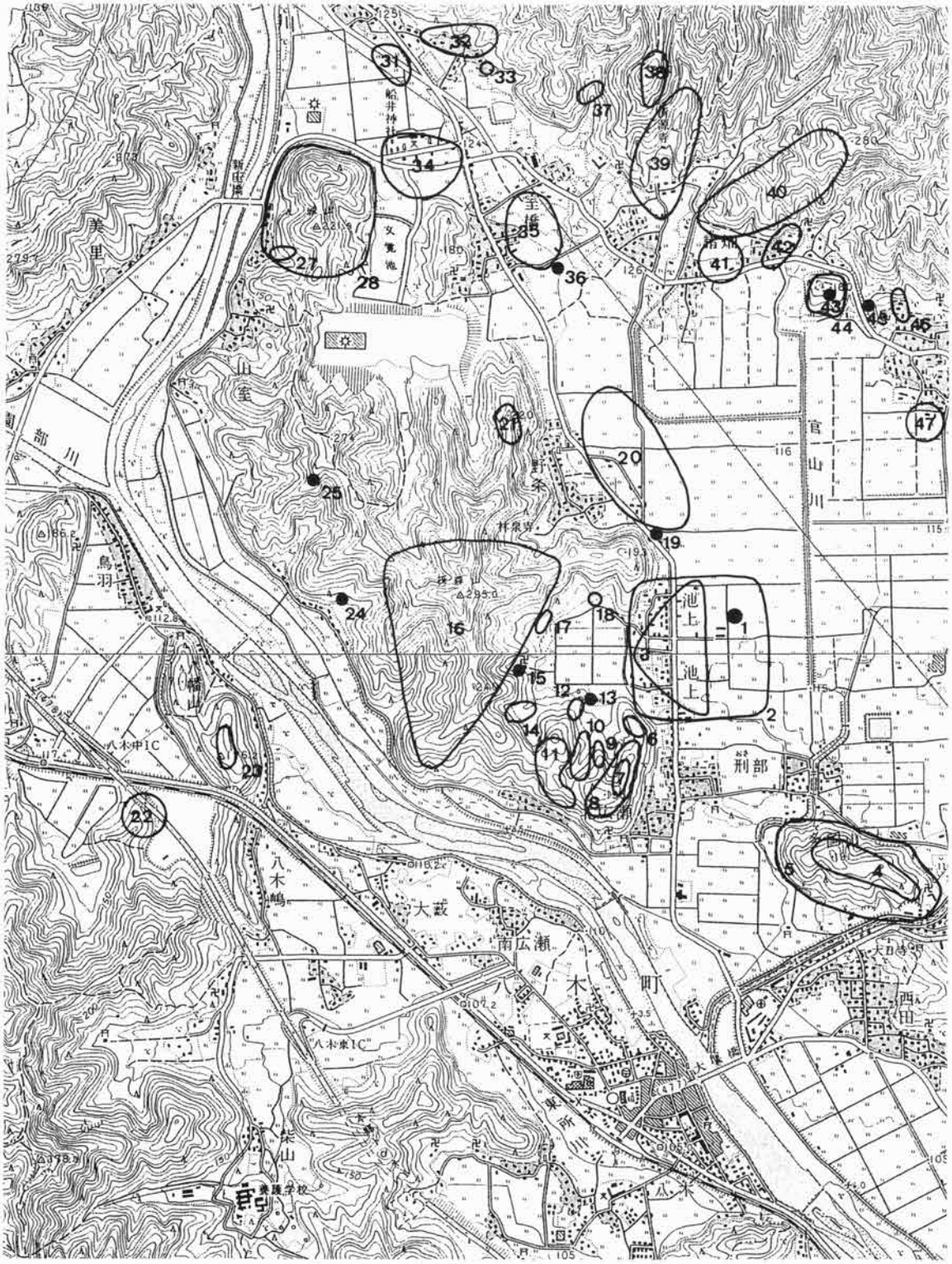
発掘調査は、当調査研究センター調査２課課長補佐兼調査第１係長水谷壽克と同調査員村田和弘が担当し、現地調査および本概要報告の執筆は村田が担当した。調査期間は、平成12年６月21日から同年11月８日である。調査面積は、面的な調査と遺構の有無の確認を目的とする試掘調査を合わせ、約2,000㎡である。平成12年11月７日には、遺跡の説明会を行い(写真４)、およそ40名の参加を得た。調査に当たっては、作業員・整理員(注1)として八木町住民の方々、園部土木事務所および京都府教育委員会・八木町教育委員会はもとより、諸機関のご協力をいただいた。記して御礼を申し述べたい。

2．位置と環境

八木町は、京都府のほぼ中央部にあたり、亀岡盆地の北端に位置している。東は北桑田郡京北

表１　池上遺跡調査経過一覧表

次数	調査原因	調査期間	調査面積	調査機関
1	遺跡分布調査と試掘調査	平成７年２月27日 ～平成７年３月９日	約24㎡	八木町教育委員会
2	ほ場整備事業に伴う 範囲確認試掘調査	平成９年11月27日 ～平成10年１月27日	約200㎡	八木町教育委員会
3	八木工場団地 開発事業に伴う試掘調査	平成10年１月19日 ～平成10年３月18日	約720㎡	八木町教育委員会
4	八木工場団地 開発事業に伴う本調査	平成10年５月７日 ～平成11年２月６日	約4,600㎡	八木町教育委員会
5	主要地方道亀岡園部線に 伴う本調査	平成10年10月22日 ～平成11年３月５日	約2,000㎡	当調査研究センター
6	ほ場整備事業に伴う試掘 調査	平成11年10月20日 ～平成11年12月３日	約400㎡	京都府教育委員会



第40図　調査地位置図（S＝1/25,000）

1．調査地　2．池上遺跡　3．狐塚古墳群　4．多国山古墳群　5．刑部城跡
6．寺内東古墳群　7．北広瀬城古墳群　8．北広瀬城跡　9．南尾東古墳群　10．南尾古墳群
11．南尾西古墳群　12．寺内古墳群　13．寺内経塚　14．寺内西古墳群　15．池上院裏古墳
16．筏森山古墳群　17．池上院北古墳　18．八幡宮古墳　19．三万崎古墳　20．野条遺跡
21．野条砦跡　22．沢ノ谷遺跡　23．八幡山古墳群　24．新田古墳　25．草福古墳
26．石谷古墳　27．山室古墳群　28．新庄城跡　29．佐切城跡　30．杓ケ谷古墳
31．船技遺跡　32．清谷古墳群　33．船枝館跡　34．新庄遺跡　35．室橋遺跡
36．天王古墳　37．美津谷古墳群　38．畑中城跡　39．大谷口古墳群　40．松本古墳群
41．諸畑遺跡　42．福本古墳群　43．鎧塚古墳　44．八木田遺跡　45．西山古墳
46．西上里古墳群　47．日置遺跡

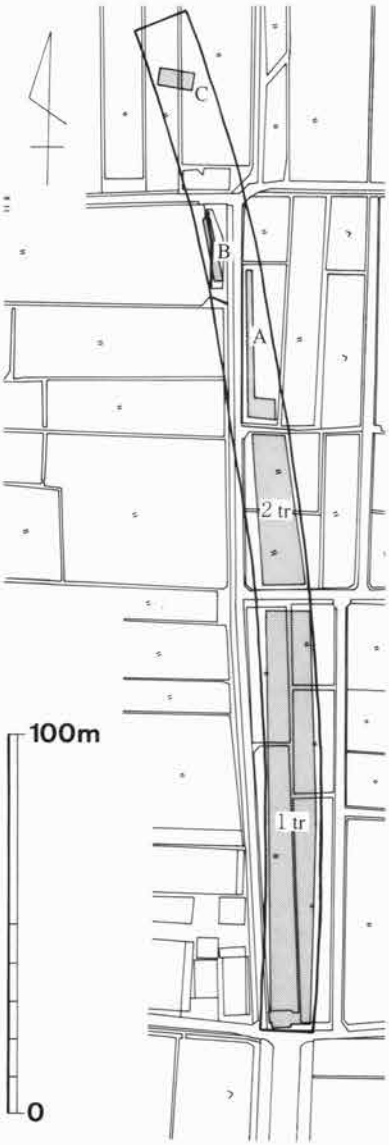
町、南は亀岡市、西は船井郡園部町、北は船井郡日吉町に接する。

池上遺跡は、亀岡盆地の北端に位置し、北側の盆地狭隘部が平坦な地形に変化する場所にあたる(第40図)。遺跡の西側には筏森山(標高295m)があり、亀岡盆地の北側の入り口をふさぐように存在している。亀岡盆地を流れる桂川(大堰川)は、筏森山の西側を流れている。遺跡の東側には、官山川という天井川が流れている。

遺跡が立地するところは、筏森山から東の沖積地に向かって延びる微高地上にある池上地区の集落の東側に所在する。池上遺跡の現状は、水田地として利用されている(第41図)。

池上遺跡の北側には、野条遺跡が隣接して所在している。野条遺跡は数度にわたって試掘調査が行われ、ピットなどの遺構が散在していることが確認されている。

池上遺跡の推定範囲内には、狐塚古墳群が確認されている。この古墳群は筏森山の東側微高地に立地していが、水田造成時に削平され、６基の古墳はすべてが破壊されている。その存在の裏付けとして、周辺の聞き込み調査による出土遺物の確認がなされた。遺物は須恵器杯身・杯蓋・壺などであった。また、第１次調査において、古墳推定地付近で器台を含めた古墳時代後期の須恵器片が多量に出土している。

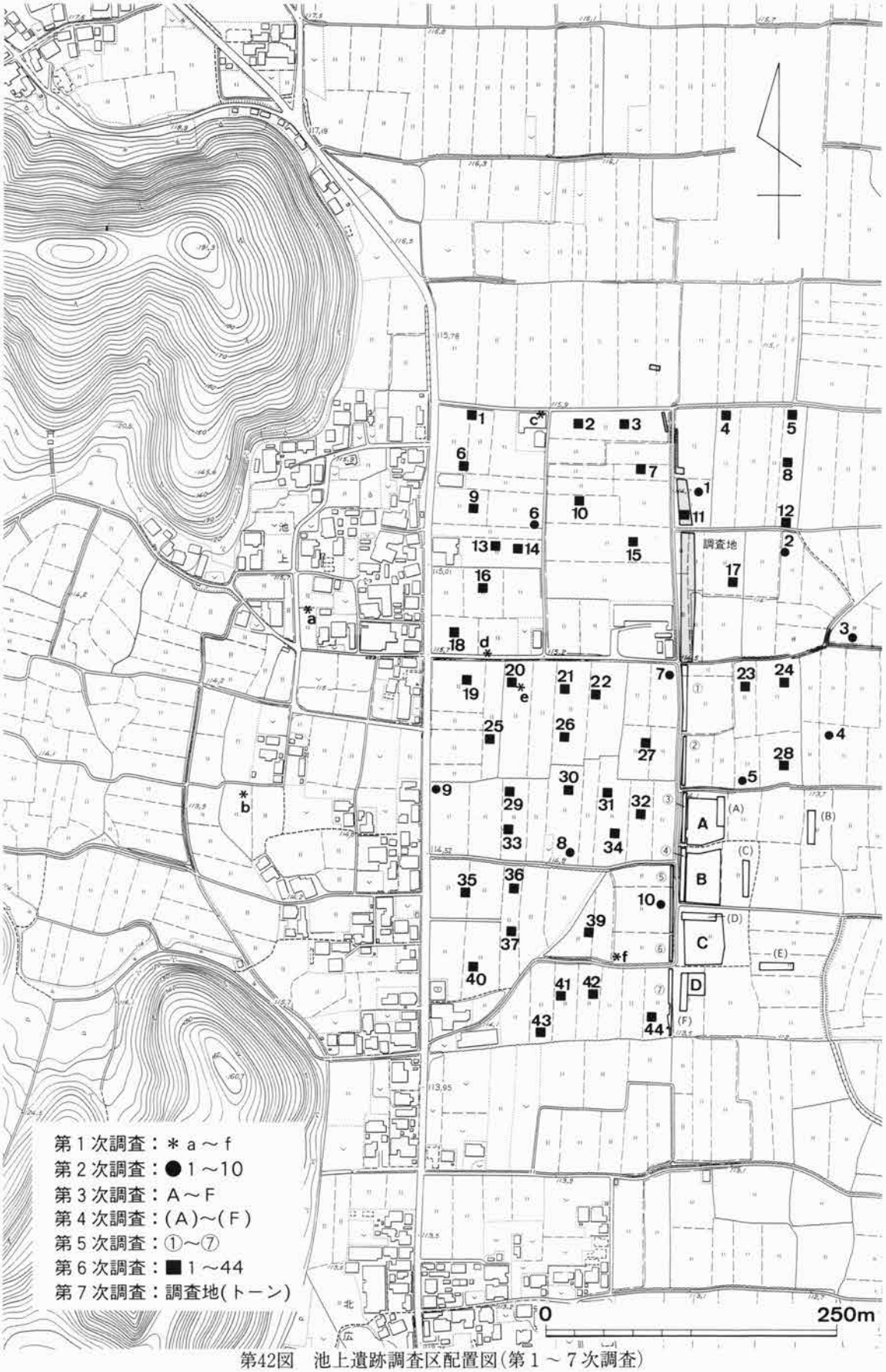


第41図　第７次調査トレンチ配置図

池上地区の集落を取り巻く周辺丘陵や筏森山山麓および稜線上において、多数の古墳群が確認されている。池上院北古墳群・八幡宮古墳・池上院裏古墳・寺内古墳群・寺内東古墳群・寺内西古墳群・南尾古墳群・南尾東古墳群・南尾西古墳群・北広瀬城古墳群・筏森山古墳群などの数多くの古墳群が分布する。

西側の筏森山の東麓には、かつて池上院(ちじょういん)という天台宗の寺院が所在する。この池上院は、天台密教の法流谷流の祖皇慶(977～1089年)が住した池上房に始まり、現在も、延暦寺の末寺(池上寺)としてその法灯を伝えている。伝承では、池上院(池上寺)は大規模な伽藍を備え、六院を有していたといわれ、現在の地名にも、塔の本や観音谷などの施設の名を残すところがある。

池上院には平安時代初期の千住観音像が安置されており、寺歴の古さを示すものと考えられる。また、承安４(1174)年に模写された『丹波国吉富荘絵図』にも様子が描かれている。この絵図には「国八庁」と記されたひときわ目立つ建造物があり、これが国庁とも考える説もあり、その場所は屋賀あるいは池尻に比定できる[注2]。また、そのなかに池上在家として数軒の屋敷が描かれている。この数軒の屋敷が発掘調査で検出された中世の建物跡に関連するのか興味深い。

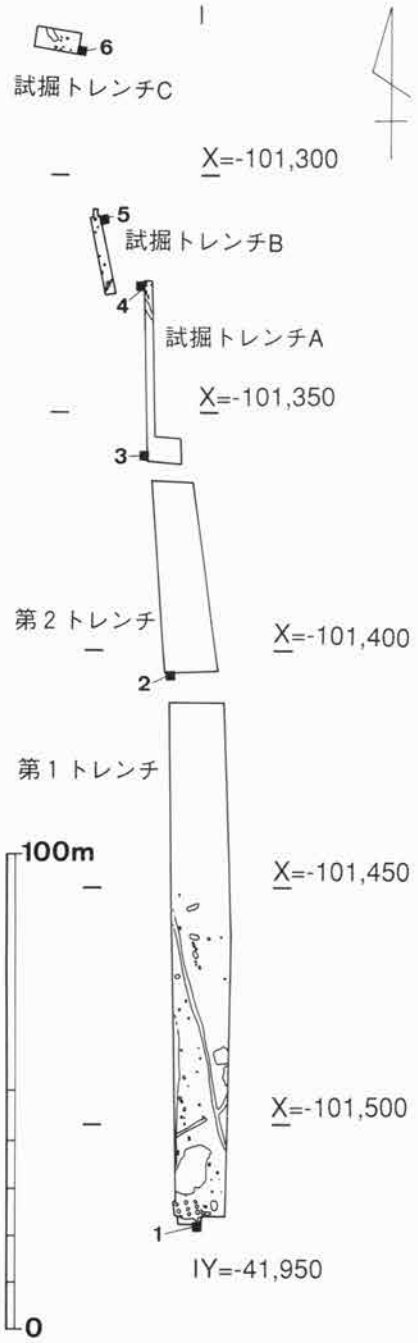


第42図　池上遺跡調査区配置図(第１～７次調査)

桂川の右岸には八木嶋遺跡[注3]がある。この遺跡は古墳時代から鎌倉時代におよぶ集落跡である。そのなかでも古墳時代の掘立柱建物跡群は、その規模・配置から「豪族居館」である可能性が指摘されている。また、平安時代の掘立柱建物跡群もまとまって検出され、風字硯・円面硯・墨書土器などが出土したこととあわせて考えると、官衙的な施設の存在も想定できる。

その他にも中世を代表する遺跡として、八木城跡・新庄城跡・刑部城跡・西田城跡・神吉城跡などの山城がある。特に八木城跡[注4]は国内有数の規模を誇る山城跡で、その北東側の発掘調査によって城を取り囲む山裾の曲輪跡や石垣で囲まれた屋敷跡が確認された。また、出土遺物として土師皿や丹波・瀬戸の陶器、中国製の陶磁器などさまざまなものが多量に出土し、城下の形状を知るうえで貴重な成果が得られている。

このように八木町内の丘陵上や平地には、多くの遺跡が所在し、発掘調査によって八木町の歴史を知るうえで重要な資料が得られている。



第43図　調査トレンチと模式柱状図
作成ポイント(1/1,600)

３．過　去　の　調　査

これまでの調査によって、池上遺跡は、南北約600m・東西約550mの範囲が指定され、弥生時代から中世におよぶ複合遺跡であることが明らかになっている。

まず、池上遺跡のこれまでの６度にわたる調査について整理しておく(第１表・第42図)。

池上遺跡は、平成６～８年度に八木町教育委員会が実施した町内遺跡詳細分布調査によって新たに確認された。この時に６か所のグリッド設定による試掘調査が行われ、弥生時代中期の溝を検出するなど弥生時代から中世におよぶ遺構・遺物の検出が確認されている。この試掘調査を第１次調査として、池上遺跡の調査が開始された[注5]。

第２次調査[注6]は、八木町教育委員会がほ場整備に先立つ範囲確認を目的とした試掘調査として、広範囲に10か所のトレンチを設定して調査を実施した。その結果、水田下に埋没した低台地上に展開する弥生時代から中世にわたる集落の一端が確認されている。

第３次調査[注7]は、遺跡範囲内に八木町が企業誘致事業の計画を進めるに先立って実施された試掘

調査である。試掘調査は八木町教育委員会が実施した。第２次調査の成果も踏まえて、計画の遺跡範囲内に６か所のトレンチを設定した。その結果、高密度の遺構の分布が確認されたため、第４次の面的な調査となった。

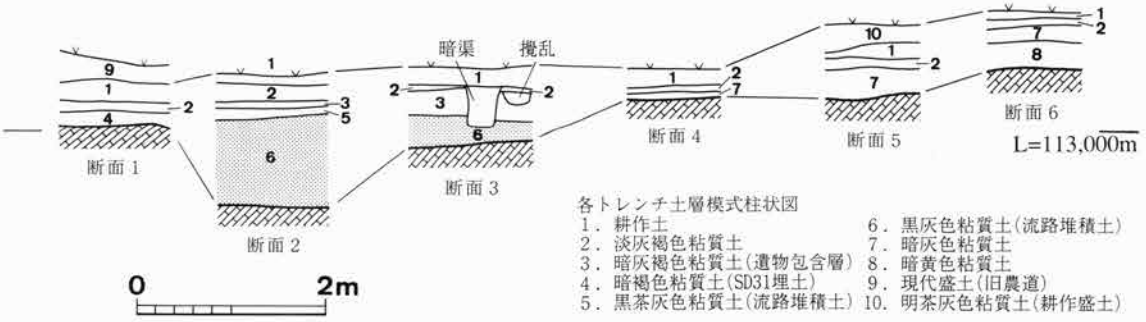
第４次調査は、八木町教育委員会が第３次の試掘調査の成果をもとに行った面的調査である。調査地は広範囲の面積を調査し、まとまった遺構と遺物が検出された。調査の結果、遺跡の性格を知る上で良い資料が得られた。弥生時代については、中期の住居跡と墓域が検出された。古墳時代では、中期から後期の住居跡が検出された。調査によって集落と墓域の変遷を追うことができる。また、玉作り工房跡が検出され、集落内で管玉生産が行われていたことがわかった。遺物からは製作工程が復原でき、南丹地域では余部遺跡(注8)(亀岡市)に次ぐ例として、貴重な資料が得られた。

第５次調査(注9)は、平成10年度に当調査研究センターが発掘調査を担当した。調査地は第４次調査地の西側の亀岡園部線の道路整備部分にあたり、第４次調査区に隣接して調査した。検出した遺構は、弥生時代の溝や竪穴式住居跡・周溝墓、古墳時代の掘立柱建物跡や竪穴式住居跡などである。その他に平安時代(10世紀末)の遺構・遺物や中・近世の遺構・遺物もが検出された。

第６次調査(注10)は、京都府農林水産部耕地課が進める担い手育成型府営ほ場整備事業「川東地区」の事業に先立って実施された試掘調査である。発掘調査は京都府教育委員会が行い、遺跡内部における遺跡の密度と現地表からの遺構の深さを把握することを目的として、調査地全域に44か所の試掘グリッド・トレンチを設定して調査した。その結果、弥生時代から中世にかけての遺構が表土直下で検出される傾向が全域でみられることが確認された。また、狐塚古墳群付近で行われた調査では古墳の周濠と思われる溝が確認された。このことは、今は削平されてしまい当時の姿はとどめていない狐塚古墳群の分布が広がる可能性を示唆するもので、貴重な成果が得られた。

４．旧地形と基本層序

調査地の周辺の地形を観察すると、地形は西の筏森山から東に向かって水田や耕作地が傾斜している。水田は西から東に徐々に官山川に向かって傾斜している。この地に水田が造成される際に、削平・盛土が行われたと推測する。その根拠として、調査地の西側に隣接して狐塚古墳群が分布しているが、墳丘は削平され埋没していることが試掘調査などによって確認されていることが挙げられる。



第44図　土層模式柱状図(1/80)

今回の調査で検出した遺跡のほとんどは、黄褐色粘質土層の上面で検出した。基本的に遺構検出面は、水田の床土（２層）の直下で検出される。

土層模式柱状図（第44図）で示すとおり、基本的には黄褐色粘質土層（遺構検出面）は南から北へ徐々に高くなっているが、第２トレンチあたりで深くなっている。

調査地の南側の断面１は、第５次調査区に隣接していることから、おおむね同じ層が堆積している。遺構は水田の床土直下で検出した。検出した柱穴などの遺構の深さからみて、多少の削平を受けていると思われる。断面２では黄褐色粘質土層を他の断面に比べて深い地点で検出した。この断面の観察から、６層は黒灰色粘質土（黒ボク）層で流路の堆積と考えられる。断面３では６層の堆積が浅くなり、試掘トレンチＡの北側である断面４の南側で立ち上がる。また、第１トレンチの座標Ｘ=-101,450あたりでも、南側の立ち上がりを確認した。このことから、６層が堆積している地点には自然流路が存在することが確認できた。断面４と断面５は基本的な層序であるが、断面５の耕作土（１層）上層には二次的な耕作土が盛られている。断面６も同様であるが、遺構検出面と７層の間に遺構面（黄褐色粘質土層）に似た８層が堆積していた。しかし、８層の上面では遺構は検出されなかった。

遺物包含層には時期幅が広い遺物が含まれ、どのトレンチで検出した遺構も比較的浅かった。また、第１トレンチでは礫層も広く検出したことからも、現在の水田面を造成するにあたり大きく地表面が削平され、また低い地盤には盛土を行い整地されたと思われる。

５．調　査　概　要

調査対象地は、南北方向に長い主要地方道亀岡園部線の道路部分（約260ｍ）である（第41図）。調査面積は、試掘調査が約400㎡、本調査が約1,600㎡で合計約2,000㎡を測る。

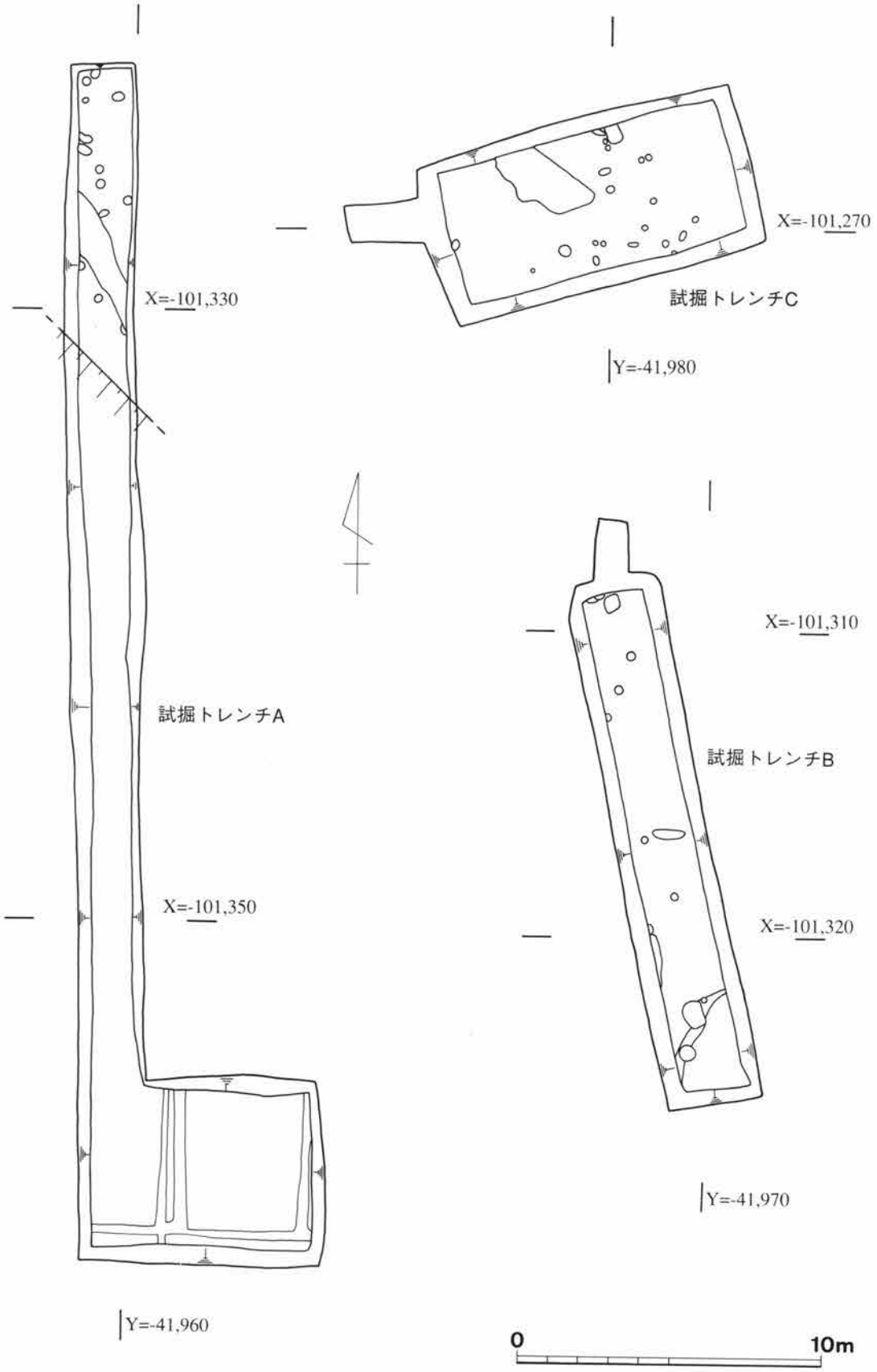
面的調査のトレンチは、現在の農道や農業用水路が調査時も使用されていたため、２つに分割し設定した。設定したトレンチは、掘削作業開始順に南からトレンチ番号を設定した。また、調査対象地の北半分は京都府教育委員会による周辺部の試掘調査によって遺構が希薄であることが確認されている。このことから、調査対象内に現地表面の高さに段差があるところに３か所の試掘トレンチ（Ａ～Ｃ）を設定し調査した（第45図）。

水田の耕作土と床土は、重機で掘削し搬出した。その後、遺構面直上まで再び重機による掘削を行い、そののち人力による掘削作業を実施した。すべてのトレンチの重機掘削作業後、試掘トレンチ３か所を先行して調査した。

(1)試掘トレンチＡ～Ｃ

①試掘トレンチＡ

この地点では、調査できる範囲の関係から、南北約３ｍ・東西約２ｍの長方形のトレンチと、南側の南北約６ｍ・東西約８ｍの方形のトレンチを「Ｌ」形に配置した（第45図）。トレンチの南側では数条の近代の暗渠が設けられていた。この暗渠は聞き取りによって、戦後すぐに作ったものであることが判明した。暗渠の埋土からは、当時の茶碗の破片などのほかに古代末から中世に



第45図　試掘トレンチA～C平面図(1/200)

かけての遺物も出土している。

黄褐色粘質土の遺構検出面は、標高約113.4mを測る。ただし、黄褐色粘質土は、北端部でのみに認められた。検出した遺構は、北端部の斜行する溝と数基の直径約10cmほどのピットであった。斜行する溝は、幅約１m・深さ約0.2mで逆台形の底部をもつ。埋土からは、土師器の小片が出土したが、時期を示すような遺物は出土しなかった。

遺構検出面の黄褐色粘質土層は、斜行溝の南肩から南へ傾斜して下がる。また、南側肩部から南端部まで黒灰色粘質土(黒ボク)が堆積している状況が確認できた。この黒灰色粘質土(黒ボク)の堆積は、斜行溝の南側に深い溝が存在していることを示唆している。そのほかに、黒灰色粘質土の上面には東西方向と南北方向の暗渠を検出した。遺構からは時期を示すような遺物は出土しなかったが、上層の遺物包含層からは、少量であるが土師器の皿や須恵器杯の破片など10世紀後半の遺物が出土した。

②試掘トレンチB

調査地点は試掘トレンチAと農道を挟んだ西側の水田に設定した。トレンチは南北約17m・東西約３mの長方形に設定した(第45図)。現地表は試掘トレンチAに比べると標高は高いが、模式柱状図(第44図の断面５)で示したとおり、二次的な耕作土の盛土がみられる。遺構検出面は標高約113.3mであった。

検出した遺構は、直径10cmほどのピットや溝などである。それぞれの遺構の深さは10cm程度と浅かった。検出した遺構の埋土からは遺物は出土しなかった。トレンチの北側にピットが３基等間隔に並んでいるが、トレンチの幅が狭いため、建物跡になるか柵になるかは現段階では不明である。

③試掘トレンチC

調査地点は調査範囲の北端に、南北約11m・東西約5.5mの長方形のトレンチを設定した(第45図)。遺構面は現地表面から約0.6m掘り下げた、標高約113.5mで検出した。

検出した遺構は、十数基の小規模なピットや不定形の土坑であった。ピットはまばらに散っており、建物跡などの遺構としてなり得ないものであった。トレンチの北端で検出した不定型な土坑は、深さ約0.8mを測る。しかし、これらの遺構の埋土からは、遺物は出土しなかった。

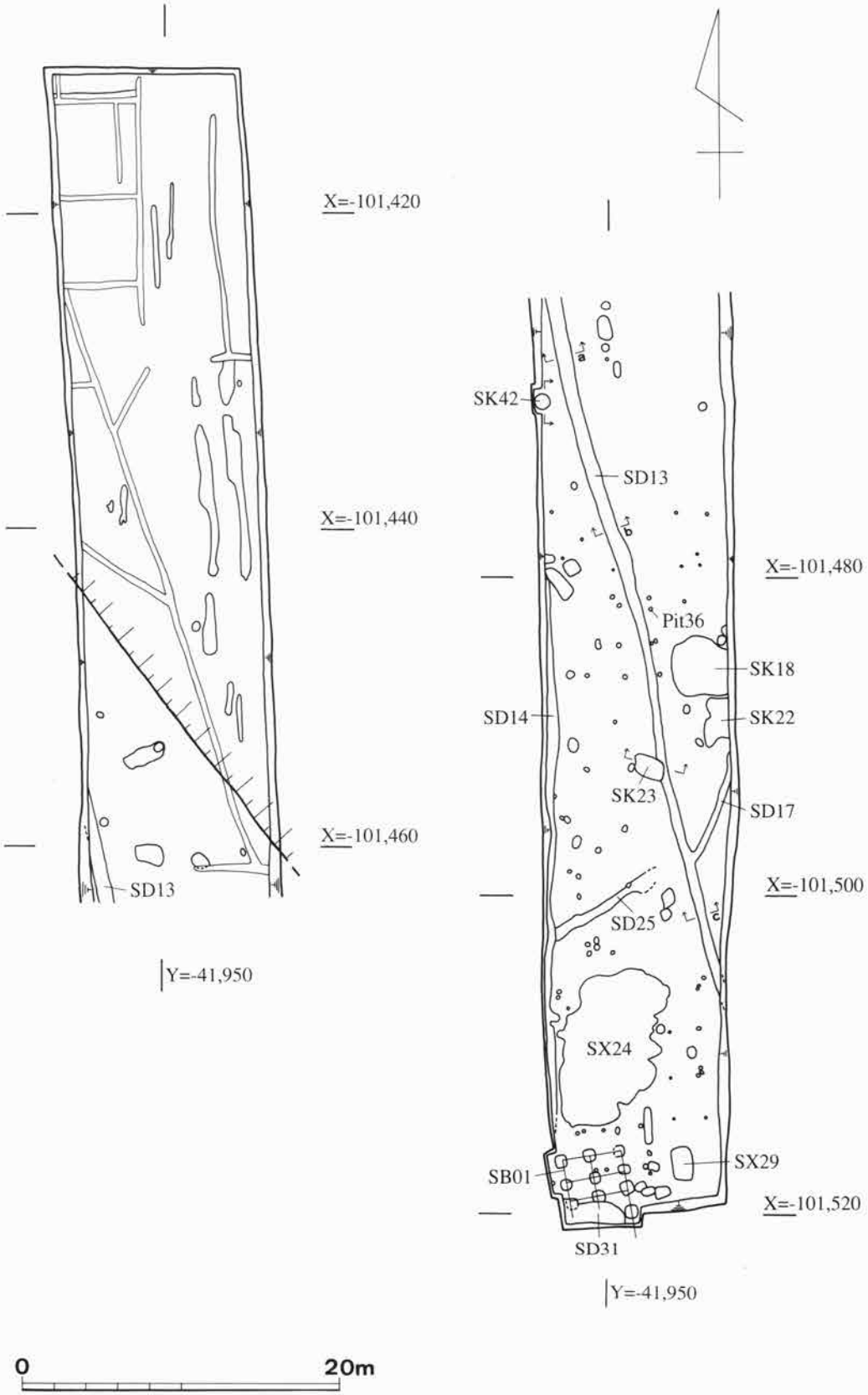
④試掘調査の結果

調査範囲内の北半分で、３か所の試掘トレンチを設定し調査した結果、土坑やピット・溝などの遺構を検出した。しかし、検出した遺構の密度は希薄で、時期を特定する遺物も出土しなかった。ただ、上層の遺物包含層からは、９～11世紀頃の遺物が少量出土していることや、試掘調査によって散漫ではあるが遺構は分布していることが確認でき、周辺に遺構・遺物が広がっている可能性を示唆する成果を得ることはできるものと判断している。

(2)本調査トレンチ

①第１トレンチ

面的な調査は、農道や用水路の関係から２か所に分けてトレンチを設定した(第46図)。人力に



第46図　第１トレンチ平面図(1/400)

よる調査を開始した順からトレンチに番号を付けた。南側長いトレンチを第１トレンチ、北側を第２トレンチとした。

第１トレンチは、第５次調査の第１トレンチに隣接する。第５次調査の第１トレンチとの間隔は、東西方向の農道部分の幅約５ｍあり、この農道部分は未調査部分である。

第１トレンチは、南北の長さが約110m、東西の幅が約12mを測る南北に長い長方形のトレンチである(第46図)。

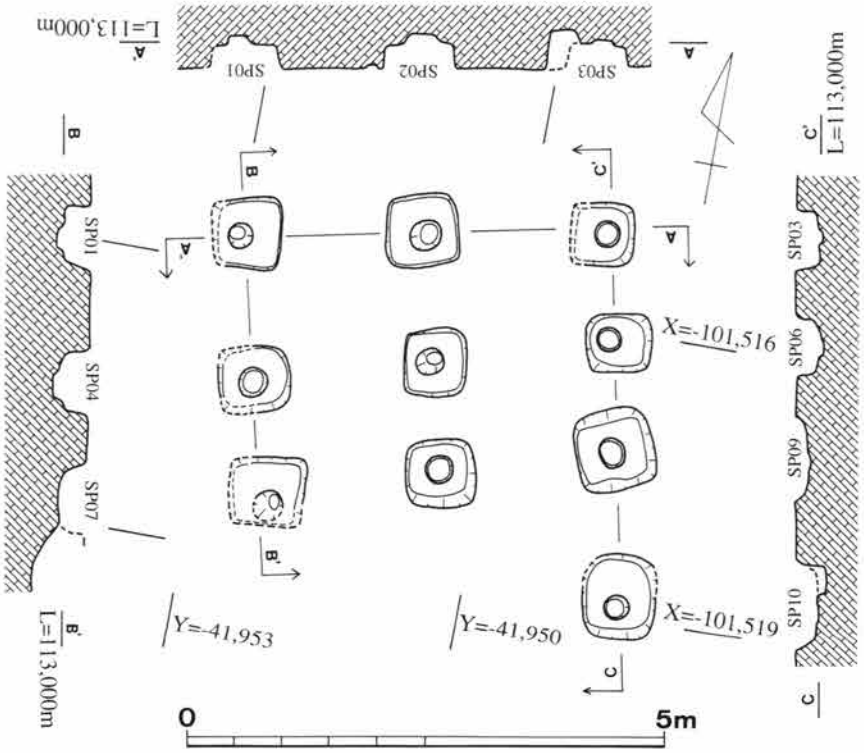
現地表から黄褐色粘質土層の遺構検出面までは浅く、耕作土と床土を除去すると精査前でも遺構を確認することができた。遺構面となる黄褐色粘質土層は、トレンチの南半部では標高約113.2mで検出したが、北半部では黒灰色粘質土(黒ボク)が堆積していた。この層は、南から北に向かって堆積が厚くなり深くなっていることを確認した。

北半部で検出した黒灰色粘質土(黒ボク)層内には遺物は含まれていなかったが、その上層に遺物包含層があり、平安時代から中世にかけての遺物が出土している。また、黒灰色粘質土(黒ボク)層の上面では戦後に掘られた暗渠や中世以降に掘削された南北方向の耕作溝を検出した。耕作溝の埋土からは、須恵器・土師器をはじめ、瓦器・黒色土器・陶磁器の破片が出土した。

第１トレンチで検出した遺構の小規模な土坑やピットなどは南半部に点在するが、建物跡や大型の土坑などの主要遺構はトレンチの南端部に集中している。

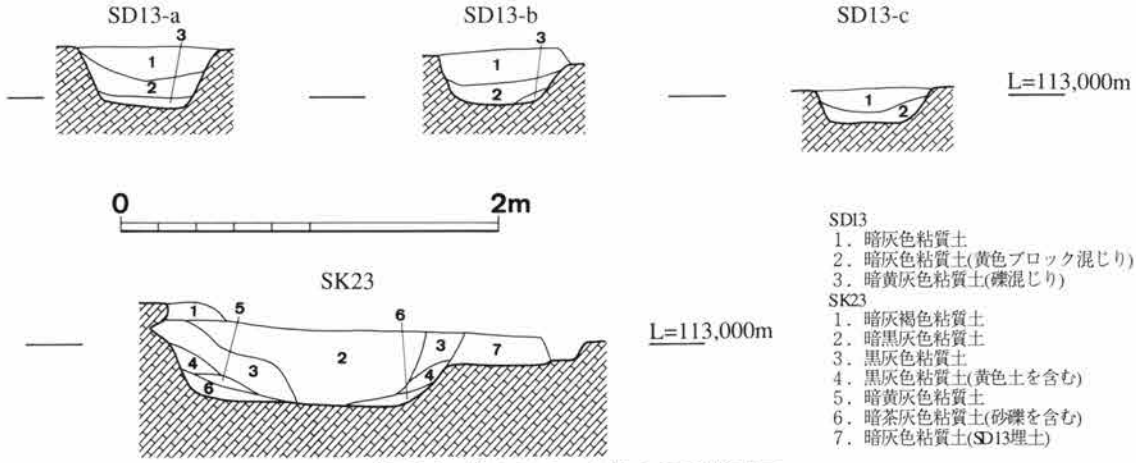
この第１トレンチは、第５次調査の北側に隣接することから遺構が密集していることも考えられたが、遺構の密度は低かった。

総柱建物跡ＳＢ01　トレンチの南端部で、隅丸方形の柱穴掘形をもつ総柱建物跡を１棟検出した(第47図)。この総柱建物跡ＳＢ01の規模は、東西２間で柱間は西から約２ｍ・約1.9m(約12.83尺)、南北に３間以上で柱間は北から約1.2m・約1.2m・約1.6m(約13.2尺)を測る。建物跡の方位は、真北ではなくやや北西方向(N11°W)に傾いている。



第47図　総柱建物跡ＳＢ01平・断面図

柱穴はトレンチ内で10基検出したが、後世の溝である溝Ｓ



第48図　溝ＳＤ13・土坑ＳＫ23断面図

Ｄ31によって南側の２基の柱穴が破壊され消滅していると思われる。検出した10基の柱穴は、平均すると一辺が約0.8mの隅丸方形を呈しているが、若干の形状の違いや方向のズレが認められる。また、柱穴掘形の底には、柱の沈んだ痕跡が確認できる。柱穴の埋土からは、奈良時代前期（８世紀前半）に属する遺物が数点出土している。

溝ＳＤ13　この溝はトレンチの南半部を北西から南東方向に斜行する。トレンチ内で検出した溝の長さは約52mと長く、幅約0.8m・深さ約0.2mを測る。溝の底部は平坦で、断面形は逆台形を呈している（第48図）。溝の方位は、総柱建物跡ＳＢ01とほぼ同一の方向（N13°W）を向いている。また、溝の埋土からは、８世紀前半～10世紀末に属する遺物が出土している。このことから、溝ＳＤ13は総柱建物跡１とほぼ同時期に掘られ、それ以降も機能していたと考えられる。

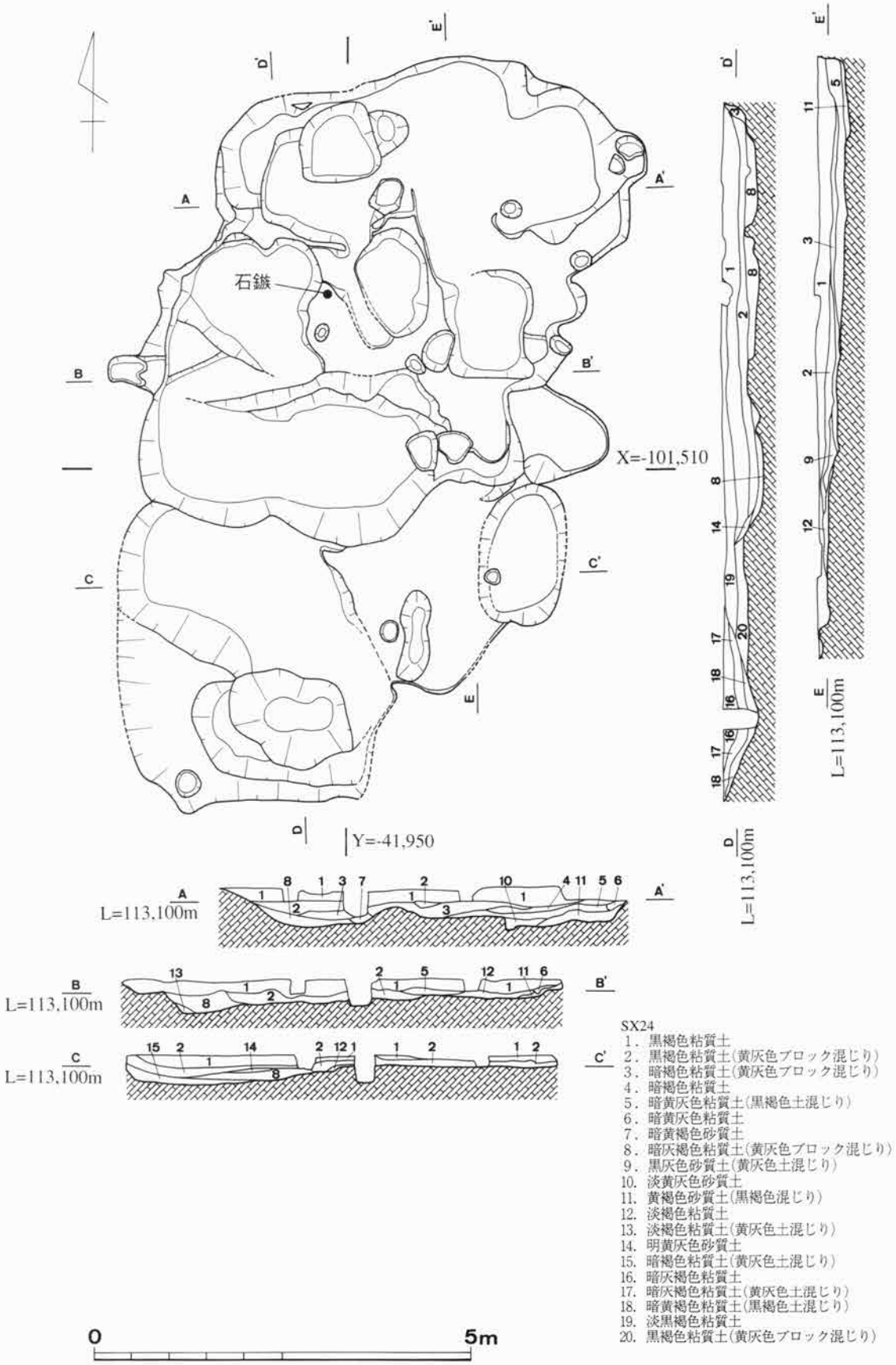
溝ＳＤ14　トレンチの西端に沿って検出した南北方向の溝である。検出した溝の長さは約35mを測る。溝の幅は溝自体がトレンチの西端にあることから、溝の西側の肩を確認することはできなかった。溝の埋土からは、10世紀代の土師皿や瓦器椀などが出土した。

溝ＳＤ17　溝ＳＤ13の南側で検出した溝である。この溝は溝ＳＤ13から、北東方向に分かれる溝である。溝の時期は、溝ＳＤ13との溝の切り合い関係では、埋土が同質のもので新旧の判断は困難であった。しかし、埋土から出土した遺物から判断すると、溝ＳＤ13とほぼ同時期の遺構であると思われる。

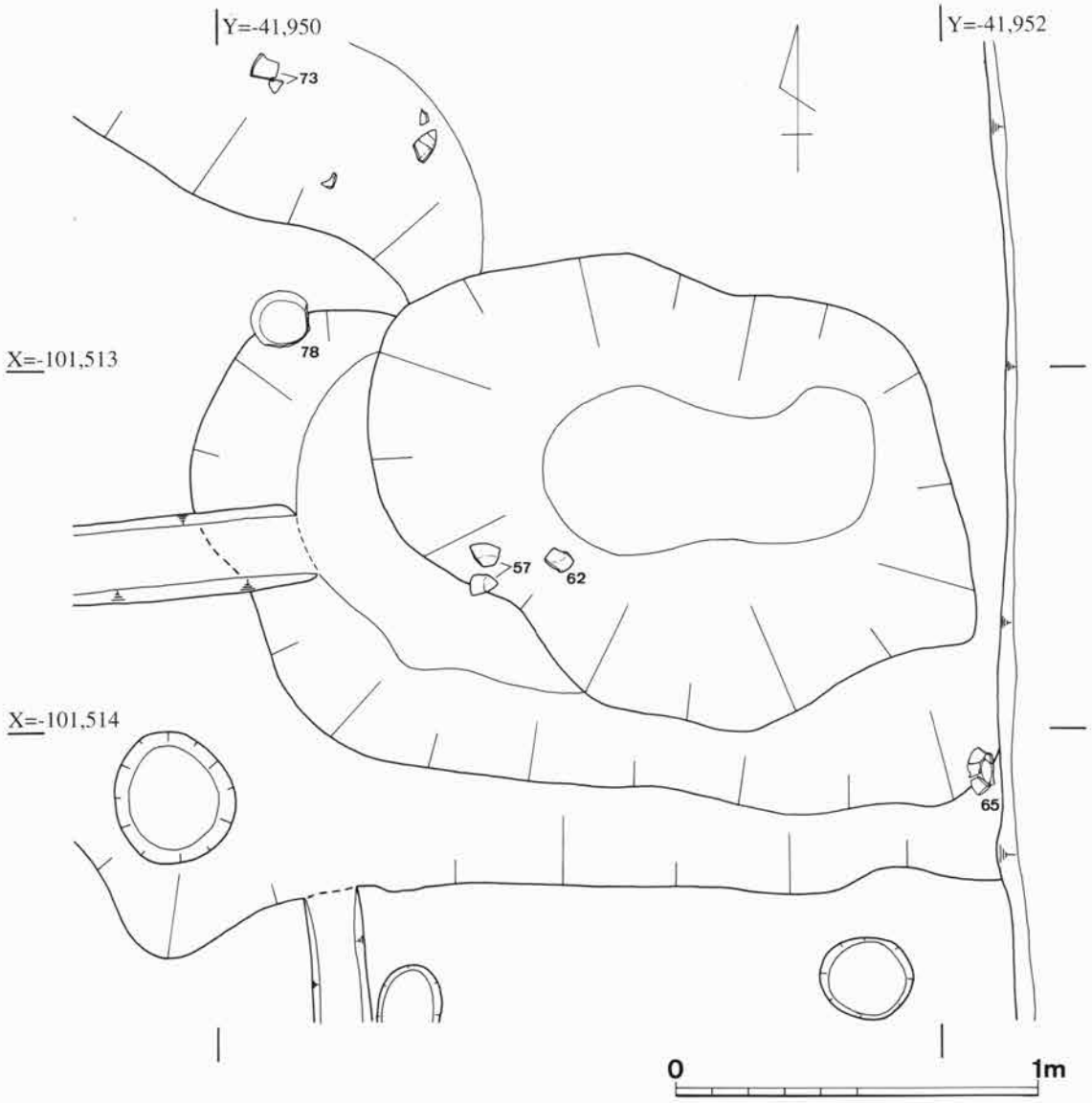
土坑ＳＫ18　トレンチの東端で検出した。検出した当時は、竪穴式住居跡の可能性が考えられた。しかし、土坑内を掘り下げた結果、遺構の底には凹凸があり一定ではなく、床面として整地された層も確認できなかったため、竪穴式住居跡でないことが判明した。この土坑の規模は、南北長約3.5m・深さ約10cmを測り、東西幅はトレンチ外へおよんでおり不明である。土坑の埋土からは須恵器・土師器の破片が出土したが、小片のため時期は特定できなかった。

土坑ＳＫ22　土坑ＳＫ18の南側に隣接して検出した土坑である。南北の長さは約2.5m、深さは約10cmを測る。土坑の埋土からは、土師器片が少量出土した。

土坑ＳＫ23　土坑ＳＫ18と土坑ＳＫ22の南西にあり、溝ＳＤ13を切り込んだ状態で検出した。この土坑は東西に長い方形の土坑である（第48図）。東西の長さが約1.6m、南北の長さが約1.5m



第49図　土坑ＳＸ24平・断面図(1/80)



第50図　土坑ＳＸ24内遺物出土状況図

で、深さは約0.4mを測る。しかし、土坑内からは遺物は出土しなかった。

土坑ＳＸ24　総柱建物跡ＳＢ01の北側で検出した、南北の最大長が約10m、東西の最大長が約６mを測る不定型な大型土坑である(第49図)。土坑の深さは、もっとも深いところで約0.5mを測る。この大型の土坑は、数回の土坑が重なって形成されているようである。

しかし、この大型の土坑が何のために掘られたのか、遺構の性格については現状では判断できない。ゴミ捨て場としての土坑にしては、規模の割には出土遺物が少ない。また、粘土取り土坑にしては周辺に良質の粘土層が見当たらない。今後この周辺に同様の遺構が検出され、何らかの遺構と関連していれば解明されるであろう。

遺物としては、大型土坑の埋土からは８世紀前半～９世紀初めに属する須恵器・土師器が出土した(第50図)。この土坑から出土した土器片は、他の遺構から出土した土器片に比べると比較的大きな破片で、破片ごとに接合し完形に近いものに復原できるものが多い。また、この土坑からは、縄文時代に属する石鏃や弥生土器の破片、７世紀末の須恵器など、混入したと思われる遺物

も出土している。

溝ＳＤ25　土坑ＳＸ24の北側で検出した東西方向の溝である。溝の幅は約0.5mで深さは約10cmと浅く、遺物は出土しなかった。また、溝は東側で浅くなり消滅するが、おそらくは溝ＳＤ17とつながっていたと考えられる。遺構面が削平されたため、溝の浅い部分がなくなったと推測する。

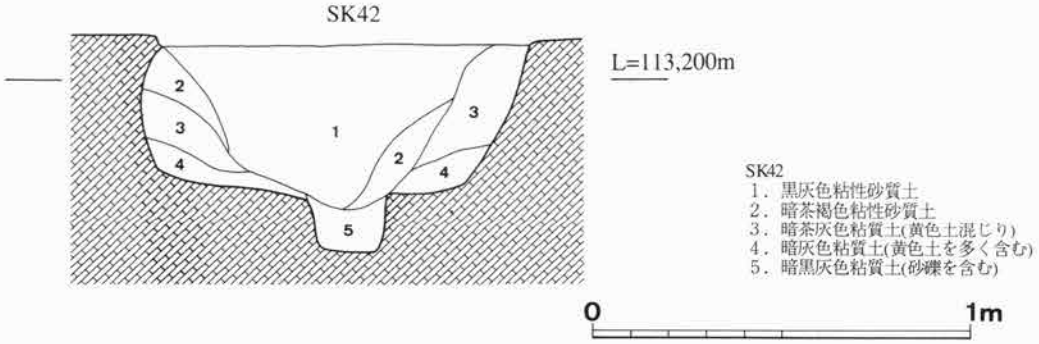
土坑ＳＸ29　この土坑は総柱建物跡ＳＢ01の東側で検出した土坑である。南北の長さが約２m、東西の長さが約1.5mを測る長方形の土坑である。検出した当時は、土壙墓の可能性があるかと考え調査を行った。しかし、この土坑の埋土は他の遺構の埋土とは明らかに異なり、淡灰褐色粘質土の単一層が堆積しているのみであった。埋土からは須恵器片が少量出土したが、時期の特定はできなかった。また、第５次調査の第１トレンチの北側でも、長方形の土坑が検出されており、同一のものである可能性がある。

溝ＳＤ31　この溝はトレンチの南端部を拡張して調査した際に検出した。当初、総柱建物跡ＳＢ01の建物規模の確認のために南側を約1.5m拡張したが、柱穴は柱穴10を検出したのみで、溝ＳＤ31を新たに検出した。おそらく、この溝ＳＤ31によって、柱穴07と柱穴08の南側にあったと思われる柱穴は破壊されたものと考えられる。溝は柱穴07の南西隅を破壊し、柱穴10の西手前で南へ向かう。溝の幅は、南肩がトレンチ外に広がることから確認できなかったが、深さは遺構検出面から約0.5mを測る。埋土からは中世以降の土師器や陶磁器が少量出土している。

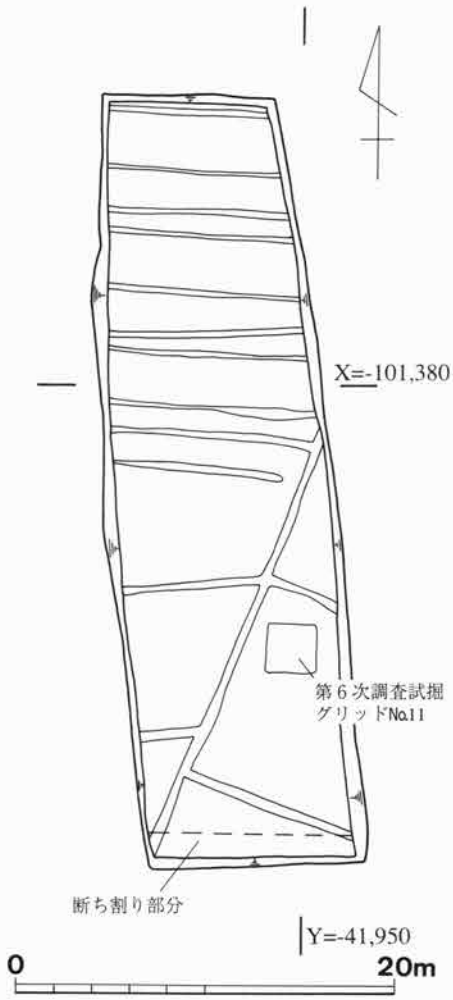
ピット36　このピットは土坑ＳＫ18の北西で検出した、直径10cm程度の小さな穴である。このピットの深さは約12cmで、埋土からは土師皿が１個体分出土した。

土坑ＳＫ42　溝ＳＤ13の北端のやや南側で検出した、円形の土坑である（第51図）。検出時にはトレンチの西端に相当したため、半円部分を検出したに過ぎなかった。その後、遺構の規模・形態を確認するため、西に約0.5m拡張し、円形の土坑であることを確認した。土坑の規模は、直径が約１m・深さは約0.4mであった。土坑を底部まで掘り進めると、ほぼ中央に直径約0.2m・深さ約0.13mの小穴があった。小穴の中には３cm大の礫が入っていた。この土坑がどのように使用されていたのかは不明であり、時期を特定する遺物も出土していない。周辺にも同様の遺構はなく、遺構の性格については周辺での調査を待つしかない。

第１トレンチで検出した遺構には、８世紀前半～10世紀末の時期に属する遺構と中世以降に属



第51図　土坑ＳＫ42断面図（1/20）



第52図　第２トレンチ平面図(1/400)

する遺構がある。８世紀前半～10世紀末の時期に属する遺構は、おおむねトレンチの南側に集中して検出された。中世以降の遺構はほぼトレンチ全域で検出したが、全域に散在している状況であり、遺構の密度は低かった。

第１トレンチで出土した遺物には、須恵器・土師器・緑釉陶器・瓦器がある。また、ピット36からは黒色土器の皿などが出土している。

②第２トレンチ

このトレンチは、調査対象地のほぼ中央にあり、第１トレンチの北側に設定し調査した(第52図)。トレンチの南北の長さは約41m、東西の長さは約12mを測る。

調査は、重機で表土を掘削したのち、人力による水田床土直下の平安時代～中世にかけての遺物が含まれる包含層を除去した。そのあと、遺構検出のための精査作業を行ったが、東西方向と南北方向の暗渠の溝が検出されるのみで、遺構検出面となる黄褐色粘質土は確認できなかった。また、第６次調査の試掘グリッド(No.11)を確認した。

そのため、トレンチの南端で断ち割りを行った結果、黒灰色粘質土(黒ボク)が1.4m程堆積していることを確認した。そして、その直下から暗黄褐色粘質土層を確認した。土層断面の観察の結果、この暗黄褐色粘質土層は、その他のトレンチで検出した遺構面(黄褐色粘質土)と同一層であることが確認できた。また、この暗黄褐色粘質土面は西に向かって傾斜していることも判明した。黒灰色粘質土(黒ボク)堆積層には、遺物は含まれていなかった。この堆積層はさらに北側に広がり、試掘トレンチＡの北端部までおよんでいる。試掘調査や断ち割りの成果を総合すると、おそらくこの黒灰色粘質土(黒ボク)堆積層は、自然流路の堆積層であると考えられる。

黒灰色粘質土(黒ボク)層の上層である遺物包含層からは、古代末から中世にかけての須恵器・土師器・瓦器・陶磁器などの土器のほかに、銭貨(寛永通寶)や土器の破片に穴をあけた土錘らしきものが出土している。また、黒灰色粘質土上面で検出した暗渠からも少量の土器片や暗渠の掘削当時のものと思われる陶器や煙管の先などが出土した。

６．出　土　遺　物

今回の調査で出土した遺物は、遺跡の北端部であるためか遺物量は決して多くはない。しかし、遺構の時期変遷や遺構の広がりなどを捉える上で検討資料となるものと考える(第53・54図)。

出土遺物は、各トレンチの包含層から出土した遺物と第１トレンチの遺構から出土した遺物の中から主だったものを選別して報告する。

１～43は試掘トレンチＡ・第１トレンチ・第２トレンチの包含層から出土した遺物である（第53図）。44～84は第１トレンチで検出した遺構から出土した遺物である（第54図）。

(1)試掘トレンチＡ

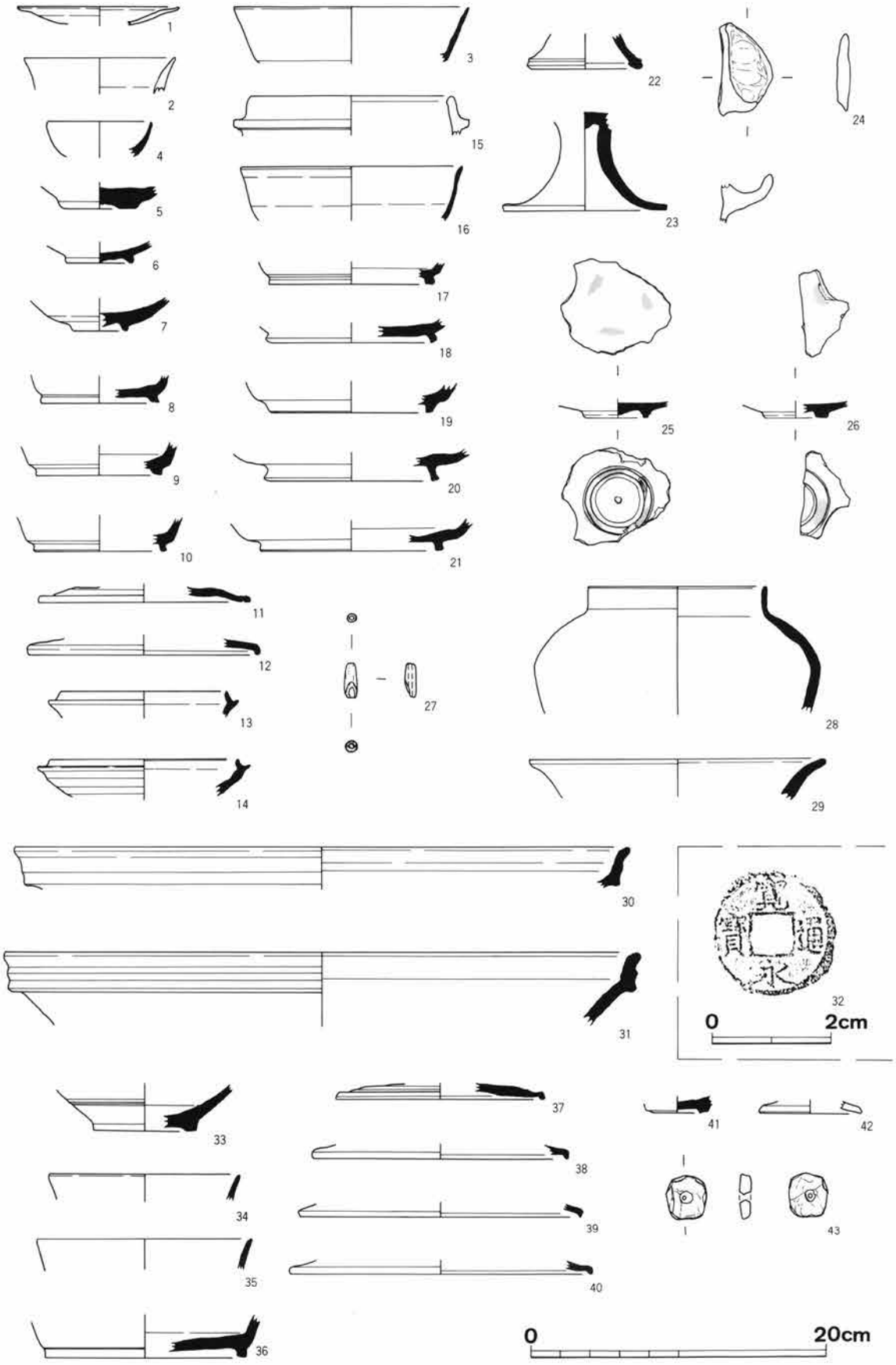
１～３は試掘トレンチＡの遺構精査時に出土した遺物である。

１はトレンチ北端部で検出した遺構面の精査時に出土した土師皿である。調整は内外面にナデを施し、底部外面には指押さえの痕跡がみられる。色調は内外面とも暗茶灰色である。器形からみて土器の時期は、10世紀後半に属する土器であろう。２は北端部の遺構面の上層にある包含層から出土した土師器の甕の口縁部である。調整は内外面とも磨滅が著しく不明である。色調は内外面とも淡灰色である。３はトレンチの南側遺物包含層から出土した須恵器の杯である。暗褐色粘質土層（黒ボク）の上層から出土した。調整は内外面ともに回転ナデで、色調は内外面とも淡青灰色である。

(2)第１トレンチ包含層

４～32はトレンチの北側での人力掘削作業中や耕作溝検出作業中、遺物包含層から出土した遺物である。

４は包含層から出土した陶器の小型の杯であり、口径が７cmと小さい。色調は灰褐色で、内面に自然釉がかかっている。調整は内外面とも回転ナデ、底部にヘラケズリが施されている。小型だがていねいに作られている。５は包含層から出土した陶器の椀の高台部分である。調整は内外面に回転ナデが施され、底部は削り出し高台である。色調は内外面とも明褐色である。６は包含層から出土した陶器の椀の高台部である。調整は内外面には回転ナデと施釉がみられる。高台部分は削り出しである。色調は内面は暗茶褐色、外面は淡茶褐色である。７は包含層から出土した陶器の椀の高台部分で、調整は内外面に回転ナデが施され、内外面の一部分に白色の釉薬がかけられている。外面の色調は淡黄褐色である。８はトレンチ北側での遺物包含層掘削中に出土した須恵器の杯Ｂである。調整は内外面ともにナデで、底部は張り付け高台である。色調は淡灰色である。９はトレンチ北側での遺物包含層掘削中に出土した須恵器の杯Ｂである。底部は貼り付け高台である。調整は内外面ともナデで、色調は淡灰色である。10はトレンチ北側での遺物包含層掘削中に出土した須恵器の杯Ｂである。底部は貼り付け高台で、調整は内外面ともナデで、色調は淡灰色である。11はトレンチ北側での遺物包含層掘削中に出土した須恵器の蓋である。調整は回転ナデで、外面の口縁部付近には、重ね焼きの痕跡がみられる。色調は淡灰色である。12はトレンチ北側での遺物包含層掘削中に出土した須恵器の蓋である。調整は回転ナデで、色調は淡灰色である。11･12の２点とも頂部に摘みが付くタイプであるが欠損している。また、11と12では口縁部先端の形状が異なっている。13はトレンチ北側での遺物包含層掘削中に出土した蓋杯の杯身である。調整はナデで、色調は淡青灰色である。14は遺構精査時に出土した蓋杯の杯身である。調整は外面底部にヘラケズリが施され、口縁部外面から内面底部までがナデである。色調は淡灰



第53図　出土遺物実測図(1)

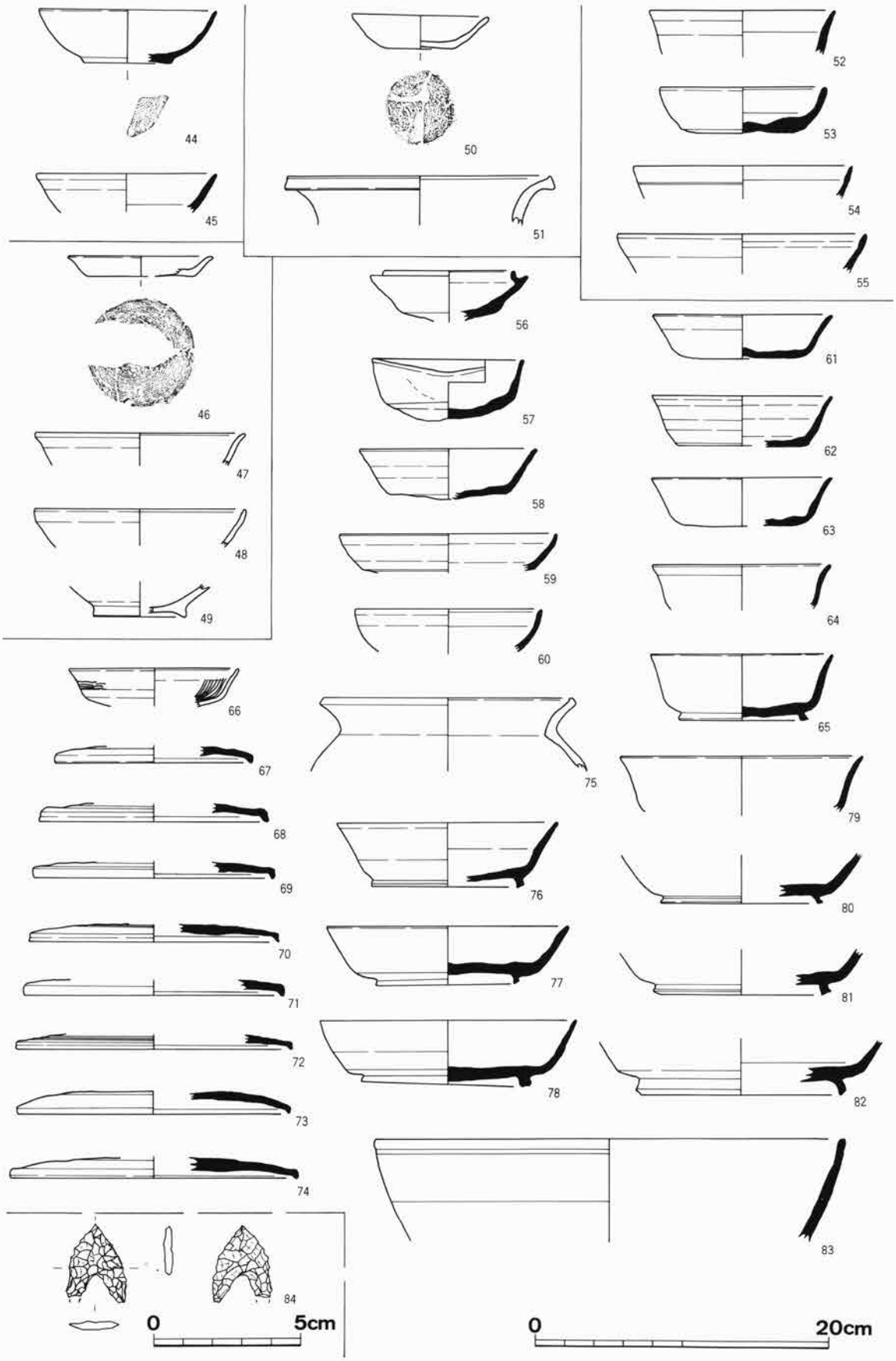
色である。15はトレンチ北側の遺物包含層掘削中に出土した土師器の羽釜の口縁部分の破片である。つばの部分は貼り付けである。色調は黒灰色である。16は北側の包含層から出土した緑釉陶器の椀の口縁部片である。調整は内外面ともナデが施され、内外面に淡緑灰色の釉がかかっている。17は遺物包含層から出土した須恵器の杯Ｂの高台部分である。高台は貼り付け高台である。調整は内外面ともナデで、色調は淡灰色である。18は遺物包含層から出土した須恵器の杯Ｂである。高台は貼り付け高台である。調整は内外面ともナデで、色調は淡灰色である。19は遺物包含層から出土した須恵器の杯Ｂで、高台は貼り付け高台である。調整は内外面とも回転ナデで、色調は淡灰褐色である。20は遺物包含層から出土した須恵器の杯Ｂの高台部分で、高台は張り付けである。調整は内外面ともに回転ナデで、色調は淡灰色である。21は遺物包含層から出土した須恵器の杯Ｂと思われる。高台は張り付けである。調整は内外面ともに回転ナデで、色調は淡灰色である。22は北側の遺物包含層の掘削中に出土した脚部の破片である。おそらく須恵器の高杯の脚部と思われる。調整は内外面ともに回転ナデで、色調は淡青灰色である。23はトレンチの南側の排水溝掘削時に出土した須恵器の高杯の脚部と思われる。杯部には皿状の杯が付くものと思われる。調整は脚部に回転ナデがみられる。色調は淡灰色である。24はトレンチ北側の暗渠埋土から出土した土師器の甑の把手部分である。把手の先端は上向きに折り曲げられている。把手部分の調整は指による成形痕が残るのみで、色調は淡黄褐色である。25はトレンチ北側の遺物包含層から出土した緑釉陶器の皿の高台部分である。内面と高台部分には、重ね焼きの痕跡(アミ部分)が３か所ずつみられる。緑色釉は内面と高台部の一部に施されている。調整は回転ナデが施され、底部は削り出し高台である。26はトレンチ北側の遺物包含層から出土した緑釉陶器の皿の高台部分である。26と同様に内面と高台部分に、重ね焼きの痕跡(アミ部分)がみられる。しかし、２点は高台の形状も異なっている。27はトレンチ北側の包含層から出土した土錘である。長さは2.3cm、径は最大で0.8cmを測るが、一部欠損している。28はトレンチの中央の暗渠の埋土から出土した須恵器の短頸壺の口縁部から頸部にかけての破片である。調整は全体に回転ナデが施されている。色調は淡灰色である。29はトレンチ北側の遺物包含層から出土した須恵器の壺の口縁部分である。口縁部から径を復原したところ、大きめの壺であろうか。調整は内外面ともナデで、色調は灰褐色である。

30はトレンチ北側の遺物包含層掘削中に出土した陶器のすり鉢の口縁部である。色調は茶褐色である。31はトレンチ西側の排水溝掘削中に出土した陶器のすり鉢の口縁部である。色調は淡茶褐色である。32はトレンチ北側の包含層から出土した寛永通寶(初鋳1636年)である。銭貨の外縁はもろくなって一部欠損しているが文字は判別できた。

(3)第２トレンチ包含層

33～43は第２トレンチの黒灰色粘質土層(黒ボク)の上層である遺物包含層から出土した遺物である。

33はトレンチ南側の遺物包含層で出土した陶器の椀の高台部分である。調整は内外面ともにナデが施され、高台は削り出しである。内外には白色の釉薬がみられる。34はトレンチ南側で出土



第54図　出土遺物実測図(2)　1/4

した須恵器の杯の口縁部分である。調整は内外面ともにナデで、色調は淡灰色である。35はトレンチ南側で出土した須恵器の杯の口縁部分である。調整は内外面ともにナデで、色調は淡灰色である。36はトレンチ中央の遺物包含層から出土した須恵器の杯Ｂで、底部の高台部分の破片である。底部の高台は貼り付け高台である。調整は内外面ともにナデが施され、色調は内面が青灰色で外面が灰褐色である。37はトレンチ中央から南側にかけての遺物包含層から出土した須恵器の蓋の口縁部分である。調整は外面頂部にヘラケズリ、口縁端部から内面全体はナデが施されている。色調は淡灰色である。38はトレンチ中央から南側にかけての遺物包含層から出土した須恵器の蓋の口縁端部である。調整はナデで、色調は淡灰色である。39はトレンチ中央から南側にかけての遺物包含層から出土した須恵器の蓋の口縁端部である。調整はナデで、色調は淡灰色である。40はトレンチ南側の遺物包含層から出土した須恵器の蓋の口縁端部である。調整はナデで、色調は淡灰色である。37～40のそれぞれの口縁の端部は、内面に膨らみをもつタイプである。

41はトレンチ中央での遺構精査中に出土した陶器の椀の高台部分である。高台は削り出しであるが、高台径が4.2cmと小さいことから小振りの椀であろう。色調は淡灰褐色である。42はトレンチ南側の遺物包含層から出土した土師質の高台部の破片である。端部はていねいにナデが施されている。43はトレンチ中央で遺構精査中に出土した土製品である。土師器の破片に孔をあけ、再利用した有孔円盤と思われる。形は円形と言うよりは隅丸方形に近い形をしている。大きさは約３cmほどである。中心にある孔は、工具によって両面から穿たれているようである。色調は淡灰褐色である。

(4)第１トレンチ溝：ＳＤ13

44・45はトレンチの南半分を斜行する溝ＳＤ13から出土した遺物である。これらは溝の北側の埋土から出土した。

44は須恵器の椀である。内外面にはていねいな回転ナデが施され、底部には糸切りによる切り離し痕跡が残る。焼成も良好で、色調は青灰色である。45も須恵器の椀と思われるが、口縁部の破片である。調整は内外面ともに回転ナデで、色調は淡灰色であった。44の土器からみて時期は10世紀後半に属すると考える。

(5)第１トレンチ：溝ＳＤ14

46～49は溝ＳＤ14の南側（ＳＸ24の西側）の埋土から出土した遺物である。

46は土師器の小皿で、おそらくロクロ回転による土器である。内外面の調整は回転ナデが施され、底部は糸切りによる切り離しである。色調は淡茶褐色である。47～49は瓦器の椀である。47は瓦器椀の口縁部分の破片であるが、調整は内外面とも磨滅が著しく、ミガキ・暗文などは判別できない。48も同様に瓦器椀の口縁部分の破片であるが、調整は内外面とも磨滅が著しくミガキ・暗文などは判別できない。49は瓦器椀の高台部分の破片である。この土器も磨滅が著しく調整は不明である。また、底部は貼り付け高台である。

(6)第１トレンチ溝：ＳＤ25・ピット36

50はトレンチの中央付近で検出した直径約10cmのピット36中より出土した黒色土器Ａ類の皿で

ある。土器は十数個の破片として出土したが、ほぼ完形品に復原できた。内外面の調整は回転ナデで、内面底部に単一方向のナデがみられる、外面底部は糸切りによる切り離しである。内外面とも磨滅し、色調は薄くなっているが、内面が淡灰褐色、外面が暗灰褐色である。51は溝ＳＤ25の埋土から出土した土師器の壺の口縁部である。調整は内外面ともにナデが施されている。色調は淡茶灰色である。

(7)第１トレンチ：総柱建物跡ＳＢ01

52～55はトレンチ南端部で検出した総柱建物跡ＳＢ01を構成する柱穴から出土した。

52は柱穴ＳＰ01の埋土から出土した須恵器の杯の口縁部分の破片である。内外面の調整は、回転ナデで、色調は灰褐色である。53は柱穴ＳＰ02の埋土から出土した須恵器の杯の口縁部分の破片である。調整は内外面の口縁端部には回転ナデ、底部内面は単一方向のナデが施されている。底部外面は切り離しの後、未調整である。色調は内面が青灰色、外面が暗灰色である。また、口縁端部は丸味をもっている。54は柱穴ＳＰ05の埋土から出土した須恵器の杯の口縁部分の破片である。口縁端部の調整は回転ナデで、端部内面に膨らみをもつものである。色調は淡灰色である。55は柱穴ＳＰ10の埋土から出土した須恵器の杯の口縁部分である。口縁端部の調整は回転ナデで、色調は淡灰色である。口縁部の端部内面に膨らみをもつ。

(8)第１トレンチ：土坑ＳＸ24

56～84は不定形をした大型の土坑ＳＸ24の埋土から出土した遺物である。

56は須恵器の蓋杯の杯身の破片である。内外面には緑色変化した自然釉がみられる。底部外面は回転ヘラケズリと回転ナデの調整が施されている。自然釉がかかっていないところの色調は、暗青灰色である。土器の時期としては、７世紀末に属する土器であると考える。57は須恵器の杯身であるが、器形の歪みが著しい。口径が小さいところで10.6cm、最大では11.7cmを測り、器高は3.9cmを測る。内外面の調整は回転ナデで、底部外面は未調整である。この土器は破片が接合し完形となった。58は須恵器の杯である。口縁部が広く外反するものである。調整は内外面とも回転ナデで、底部外面はヘラ切り後は未調整である。色調は焼成が不十分のためか、内外面とも淡赤灰色である。59は須恵器の皿と思われる。器高が低く、底部にヘラケズリがみられる。色調は淡灰色である。60は須恵器の椀と思われ、器形は丸味をもつ。調整は内外面ともにナデで、色調は淡灰褐色である。61は須恵器の杯である。調整は内外面とも回転ナデが施されている。色調は淡青灰色である。62は須恵器の杯の破片である。調整は内外面ともにていねいな回転ナデが施され、外面底部に強いナデがみられる。色調は暗灰色である。63は須恵器の杯である。調整は内外面ともに回転ナデで、色調は暗灰色である。64は須恵器の杯である。調整は内外面ともに回転ナデが施され、色調は淡灰色である。65は須恵器の杯Ｂで、底部に貼り付け高台をもつ。この土器は、数点の破片から接合し完形に復原できたものである。口縁部の直径は12.5cmで高台径は8.9cm、器高は4.5cmを測る。調整は内外面とも回転ナデが施されている。66は土師器の皿である。内面にはナデのあとに放射状の暗文、外面にはナデの後に横方向のミガキが一部に確認できる。色調は赤灰褐色である。67は須恵器の蓋の口縁部分の破片である。調整は回転ナデで、色調は淡

灰褐色である。68は須恵器の蓋の口縁部である、調整は内外面ともに回転ナデで、色調は淡灰褐色である。69須恵器の蓋の口縁部である。調整は回転ナデで、色調は青灰色である。70は須恵器の蓋である。外面頂部には回転ヘラケズリが施されている。また、口縁端部と内面にはナデが施されている。色調は暗灰色である。71は須恵器の蓋の口縁部である。調整は回転ナデで、色調は暗青灰色である。72は須恵器の蓋である。調整は内外面ともに回転ナデが施され、色調は暗灰色である。72は須恵器の蓋である。外面頂部に回転ヘラケズリが施されている。外面の口縁部から内面にかけては回転ナデが施されている。色調は暗青灰色である。73は須恵器の蓋である。内外面ともに回転ナデの調整がみられる。74は須恵器の蓋である。調整は頂部外面はヘラケズリ、口縁端部から内面は回転ナデが施されている。67～74の須恵器の蓋のそれぞれの口縁端部は、若干形状が異なっている。75は土師器の甕の口縁部分の破片である。調整は内外面とも磨滅が著しいため不明である。色調は淡茶灰色である。76は須恵器の杯Ｂの口縁部から底部高台にかけての破片で、底部に貼り付け高台をもつ。調整は内外面とも回転ナデが施されている。色調は暗灰色である。77も同じく須恵器の杯Ｂであるが、76に比べると杯部が浅いためプロポーションが異なる。調整は内外面とも回転ナデが施され、底部は貼り付け高台である。色調は内面が淡灰色、外面は暗灰色である。78も77と同様な杯Ｂであるが、口縁部分に歪みがみられる。調整は内外面とも回転ナデが施され、底部は貼り付け高台である。色調は内面が青灰色で、外面が暗灰色である。79は須恵器の杯である。大きめの杯で外面には淡緑灰色の自然釉がみられる。調整は内外面とも回転ナデが施されている。内面の色調は暗灰色である。80は須恵器の杯Ｂの高台部分で、調整は内外面とも回転ナデが施され、底部に貼り付け高台をもつ。色調は暗灰色である。81も須恵器の杯Ｂの高台部分で、調整は内外面とも回転ナデが施され、底部に貼り付け高台をもつ。色調は暗灰色である。82も同様に須恵器の杯Ｂの高台部分である。調整は内外面とも回転ナデが施され、底部に貼り付け高台をもつ。色調は内面が淡灰色、外面が淡灰褐色である。83は須恵器の大型の深鉢の口縁部から体部にかけての破片である。調整は外面の口縁端部に膨らみをもち、一条の沈線がある。調整は内外面ともにナデが施され、色調は暗灰色である。84はチャート製の石鏃である。石鏃の一部分が欠損している。石鏃の形状からみて、おそらく縄文時代に属する遺物であろう。

土坑ＳＸ24から出土した遺物は７世紀後半～10世紀末と時期幅がある。しかし、一部を除いてほとんどの遺物は８世紀前半に属するものである。このことから、遺構の時期は、８世紀前半のものと想定することができよう。

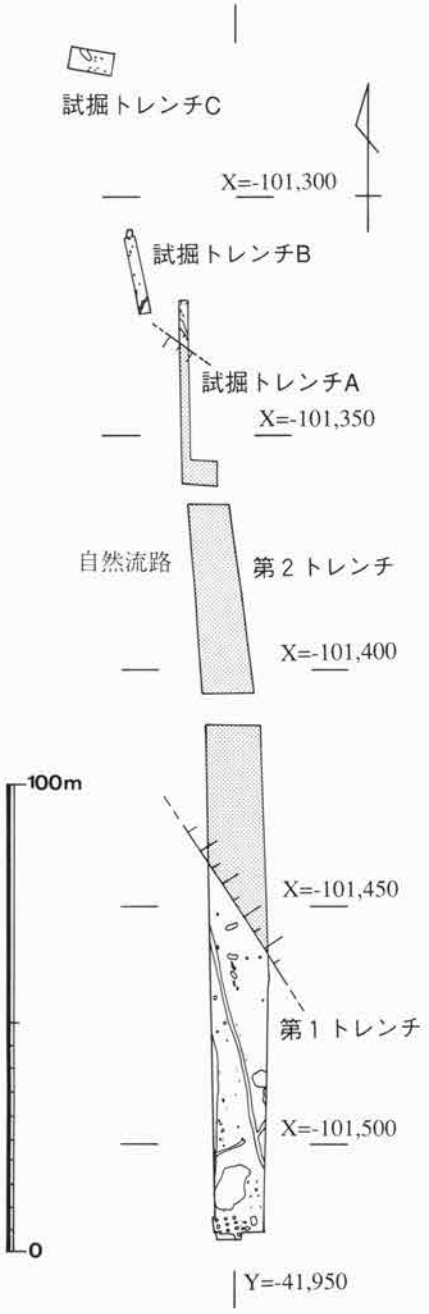
７．ま と め

今回の発掘調査によって、得られた成果についてまとめる。

調査地の北側でトレンチＡ～Ｃの３か所の試掘調査を実施した。その結果、希薄であるが、遺構を検出し、この地点にも遺構が分布することが確認できた。また、調査地の中央(120ｍ間)では、断ち割り調査と試掘トレンチＡと第１トレンチの北側で確認した黒灰色粘質土(黒ボク)の堆積状況から、この間に自然流路が存在することが判明した。しかし、時期を示す遺物の出土はな

く堆積層も厚いため、今回の調査においては、この自然流路の全面的な解明には至っていない。

調査対象地の南側での面的な調査では、今回の調査の第１トレンチが第５次調査区の北側にあたることから、弥生・古墳～平安時代の遺構の北への広がりが予想されたが、弥生時代や古墳時代の遺構はなく、奈良時代末～平安時代前期の遺構や中世の遺構を検出した。奈良時代末～平安時代の遺構は、第１トレンチの南半部で集中して検出した。総柱建物跡ＳＢ01は、２間×３間以上の建物で、第５次調査で検出された建物跡とほぼ同じ方位を持つことから、この一帯には数棟の倉庫が建てられていた可能性も指摘できる。また、溝ＳＤ13については、総柱建物跡ＳＢ01とほぼ同一の方向を向いているので、何らかの区画溝である可能性も考えられる。



第55図　自然流路検出位置図

土坑24についても、遺構の性格は不明であるが、出土遺物から総柱建物跡ＳＢ01や溝ＳＤ13とほぼ同時期の遺構であると思われる。出土遺物では、８世紀前半の須恵器・土師器のほかに、縄文時代の石鏃が出土していることから、周辺にこれまで確認されていない縄文時代の遺跡が存在する可能性が指摘できる。

第２トレンチにおいては、遺構の検出はできなかったが、自然流路の存在を確認することができた(第55図)。この溝は、試掘トレンチＡとの成果と照合すると、北西方向から南東方向に流れ、調査地内を斜行する流路であることが確認できた。このことは、池上遺跡の範囲や立地などの古環境を考える上で、今後の研究の資料となるであろう。

また、中世以降の遺構も密度は希薄であるが、広範囲にわたって存在することも確認できた。

池上遺跡の第７次となる今回の調査地では、弥生～古墳時代の遺構はなく、奈良時代末以降の遺構を検出した。検出遺構は、第１トレンチの南側で集中し、中央部で確認した自然流路の南側で遺構は途切れる。過去の調査から遺構の変遷を整理すると、池上遺跡では時期が新しくなるにつれ、北へ移動していったと考えられる。今回検出した奈良時代末～平安時代前期に属する総柱建物跡ＳＢ01は、トレンチの南端で検出したが、それより北側では検出できなかった。そして、第１トレンチ南端部にしか同時期の遺構が存在しないことからも遺跡の変遷が追えるのではないだろうか。

また、今回確認した遺跡範囲内を斜行する自然流路(約120m間)によって、池上遺跡の遺構の北限が確認できたと考える。もし、北限ではなかったとしても、この地点で弥生時代～中世におよぶ集落の遺構が途切れることは事実である。また、自然流路より北側では、希薄ながら遺構が存在することも確認できた。この遺構が池上遺跡に属するものか別の遺跡かは、今後の周辺の遺跡調査の成果が待たれる。今回の調査によって得られた成果が、遺跡の範囲や遺構の変遷などの今後の遺跡の調査・研究の検討資料となり、弥生時代から中世にまでおよぶ複合遺跡である池上遺跡の実態を解明する手がかりとなることを期待したい。

(村田和弘)

注１　第７次調査に参加していただいた作業員・補助員・整理員の方々(順不同・敬称略)
松本　勝・山下秋雄・國府尚美・石橋愛子・麻田早苗・塚脇　徹・後藤敏雄・谷田ふさ子・大内清美・関岡いずみ・八木実登志・谷澤　亨・麻田洋子・西河和美・仲川宏子・秋田　清・松本孝子・平井もと子・後藤恵美子・吉村美穂・藤木旬子・東古昌樹・天池佐栄子・宅間のり子・村上計太・今西　光・中川香世子・小寺明美

注２　上島　亨「池上院と神護寺・丹波国府－新史料の紹介と皇慶の活動をめぐって－」(『郷土誌八木』第10号　八木史談会)　2000

注３　鵜島三壽「国道９号バイパス関係遺跡(1)　八木嶋遺跡第２次」(『京都府遺跡調査概報』第46冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1991
柴　暁彦、原田三壽「国道478号バイパス関係遺跡　八木嶋遺跡第２次」(『京都府遺跡調査概報』第56冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1994

注４　柴　暁彦「国道９号バイパス関係遺跡(3)　八木城跡・堂山窯跡」(『京都府遺跡調査概報』第51冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1992
引原茂治「国道478号バイパス関係遺跡(2)　八木城跡第２次」(『京都府遺跡調査概報』第56冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1994
引原茂治「国道478号バイパス関係遺跡(2)　八木城跡第２・３次」(『京都府遺跡調査概報』第62冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1995

注５　谷口　悌『八木町遺跡地図－町内遺跡詳細分布調査報告書－』　八木町教育委員会　1997

注６　谷口　悌『池上遺跡発掘調査－第２次調査－』　八木町教育委員会　1998

注７　谷口　悌『池上遺跡発掘調査－第３・４次調査－』　八木町教育委員会　2000

注８　野々口陽子「余部遺跡第２次」(『京都府遺跡調査概報』第81冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1998
野々口陽子「余部遺跡第５次」(『京都府遺跡調査概報』第88冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1999

注９　中川和哉・野々口陽子・筒井崇史「１．池上遺跡第５次」(『京都府遺跡調査概報』第91冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　2000

注10　奈良康正「２　府営農業基盤整備事業関係遺跡平成11年度調査概要［1］池上遺跡」(『埋蔵文化財発掘調査概報』2000　京都府教育委員会)　2000

参考文献

京都府教育委員会『京都府遺跡地図』第３分冊［第２版］　1986

中川和哉「丹波地域の遺構検出面と黒ボク層」（『京都府埋蔵文化財情報』第75号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2000

中世土器研究会『概説　中世の土器・陶磁器』　真陽社　1995

兵庫埋蔵銭調査会「５．寛永通寶の基本分類と近世の銭貨」『日本出土銭総覧』　1996

写真４　池上遺跡説明会風景(東から)

5．半木町遺跡発掘調査概要

1．はじめに

平成11年度、京都府立大学構内で京都府立大学１号館改築工事が計画されたことに伴い、京都府立大学文学部史学科日本歴史学講座が中心となって建設予定地内で試掘調査を実施した。その結果、平安時代前期と鎌倉時代を中心とする遺物を包含する土層が検出され、この場所が古代に形成された集落遺跡の一画に位置することが明らかとなり、新たな遺跡として周知された[注1]。今年度、この成果を受けて、１号館建設予定地を対象として面的な発掘調査を実施した。本文はその概要である。

今回の調査は、工事地区内の遺構・遺物の広がりとその性格を確認するとともに記録を作成し、特に重要な遺構・遺物が確認された場合には、その保存のための資料を合わせて作成することを目的として実施した。調査は１号館改築工事対象地である約500㎡を対称とした。調査担当者は、当調査研究センター調査第２課主幹調査第２係長事務取扱久保哲正と同主任調査員田代　弘である。調査は、平成12年７月18日に着手し、９月28日までに現地での作業を終了した。10月３日に、発掘調査成果についての説明会を実施し、全ての作業を終了した。なお、調査経費は京都府が全額負担した。

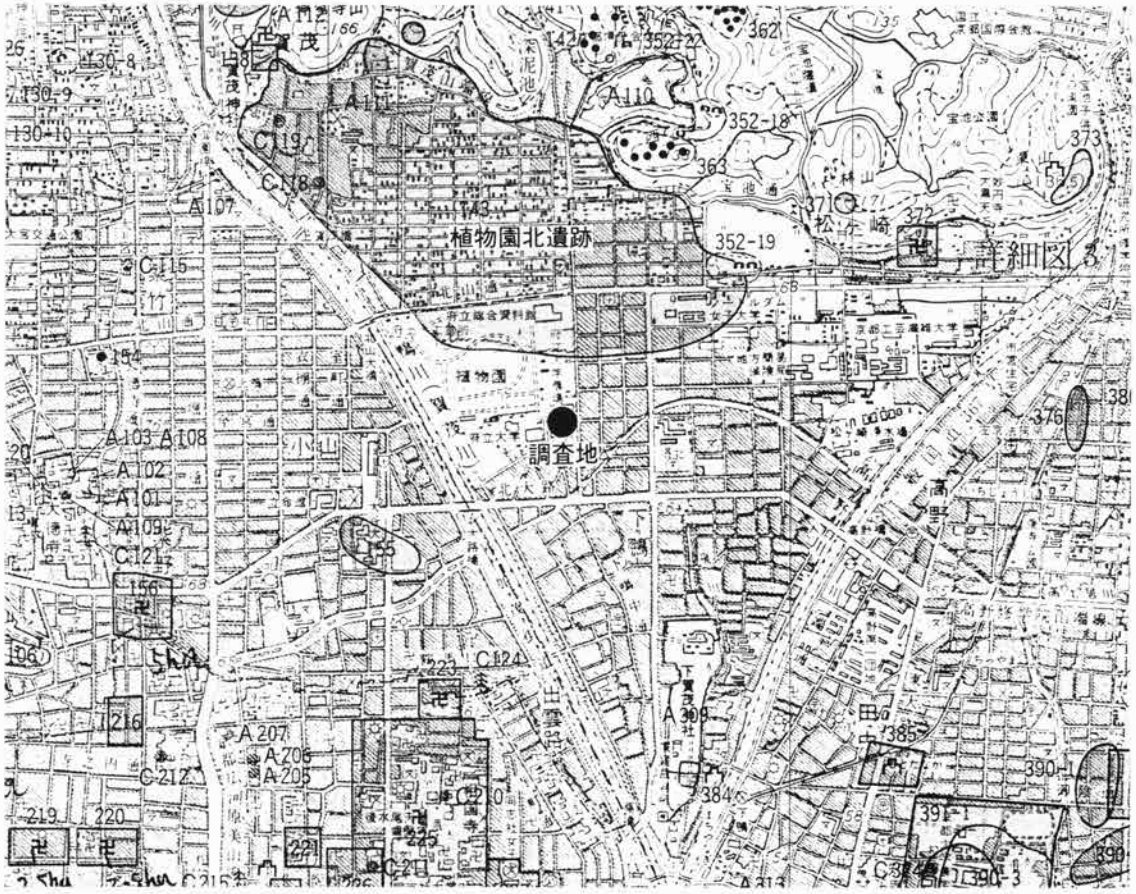
2．遺跡の位置と環境

京都府立大学構内は、京都市左京区下鴨半木に所在する。山城盆地の北郊、鴨川と高野川の合流する洛北の景勝地に位置し、両河川により形成された自然堤防上に立地している。府立大学周辺では、古代の人々の生活跡が広い範囲で発見されている。北西に位置する京都府立植物園周辺では、縄文時代から中世にかけての長い間、集落が営まれていたことが明らかにされた(植物園北遺跡)。洛北地域では拠点的な役割をもった複合集落遺跡と推定されている。府立大学の農場の北側に隣接するコンサートホールの敷地内では平安時代を中心とする建物跡が多数発見された[注2]。昨年度の試掘調査で府立大学構内にも平安時代から中世にかけての集落遺跡が存在する可能性が指摘され、遺物散布地も広い範囲で確認された。このように、府立大学とその周辺には数多くの集落遺跡が長期間にわたって形成されたことが明らかにされつつある。

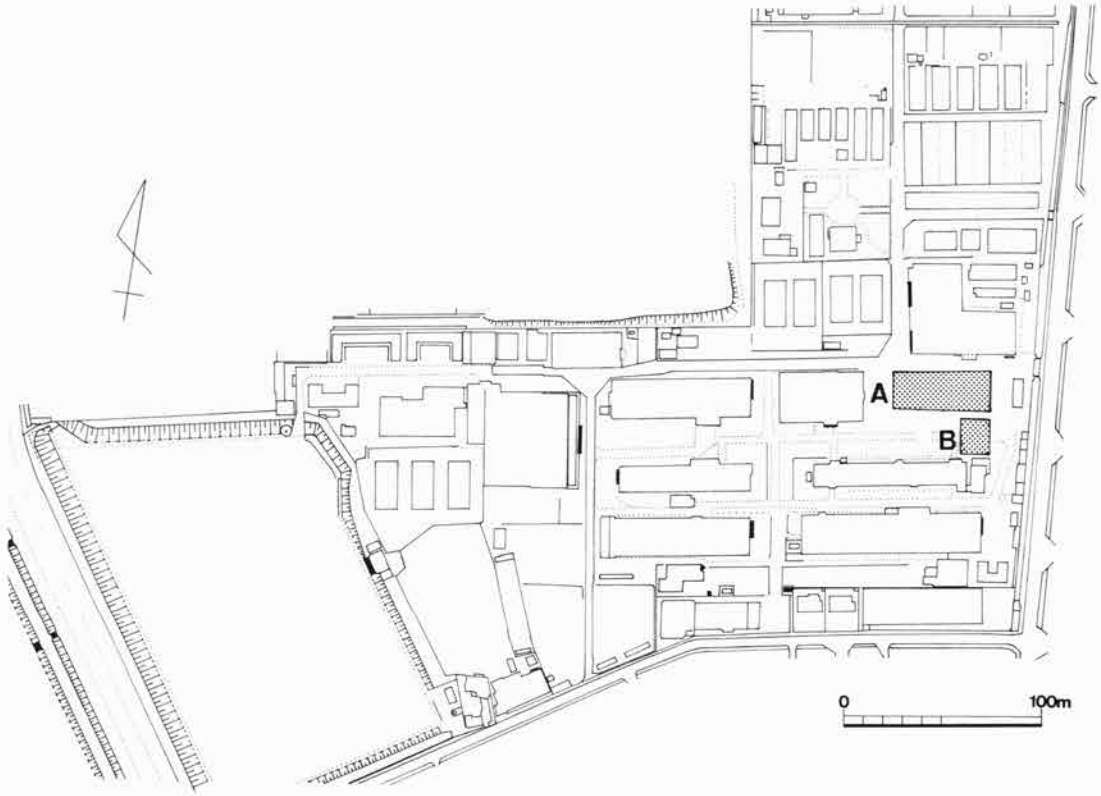
3．調査の経過と概要

(1)調査の経過

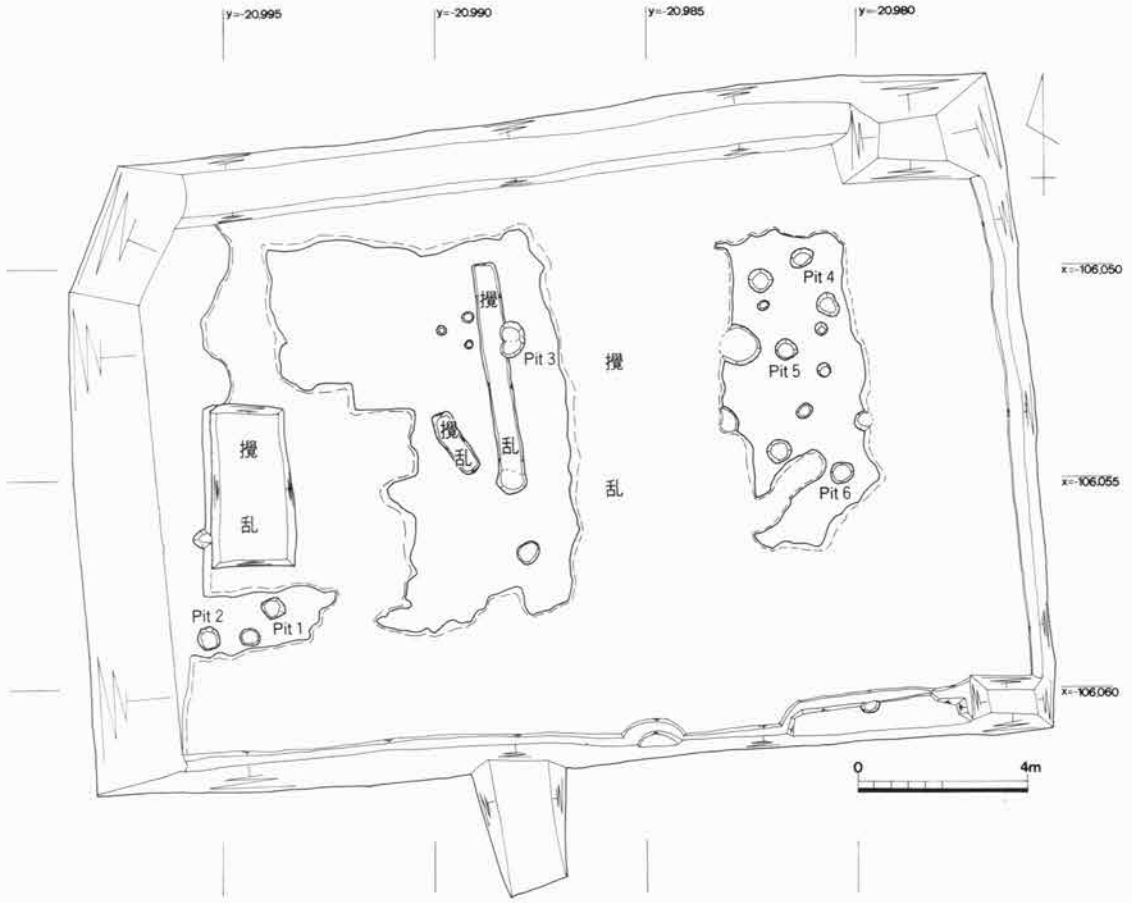
平成11年度の試掘調査では、旧校舎建造に伴うとみられる地山の攪乱が著しいものの、10cm前後の包含層が部分的に遺存することが確かめられた。したがって、今回の調査は未攪乱の包含層



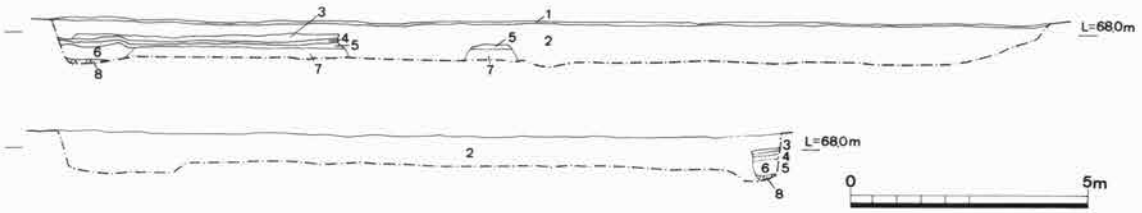
第56図　調査地位置図(1/250,000)
『京都市遺跡地図』　京都市文化市民局　1996を一部改変



第57図　調査トレンチ配置図(アルファベットがトレンチ名称)



第58図　A地区検出遺構平面図

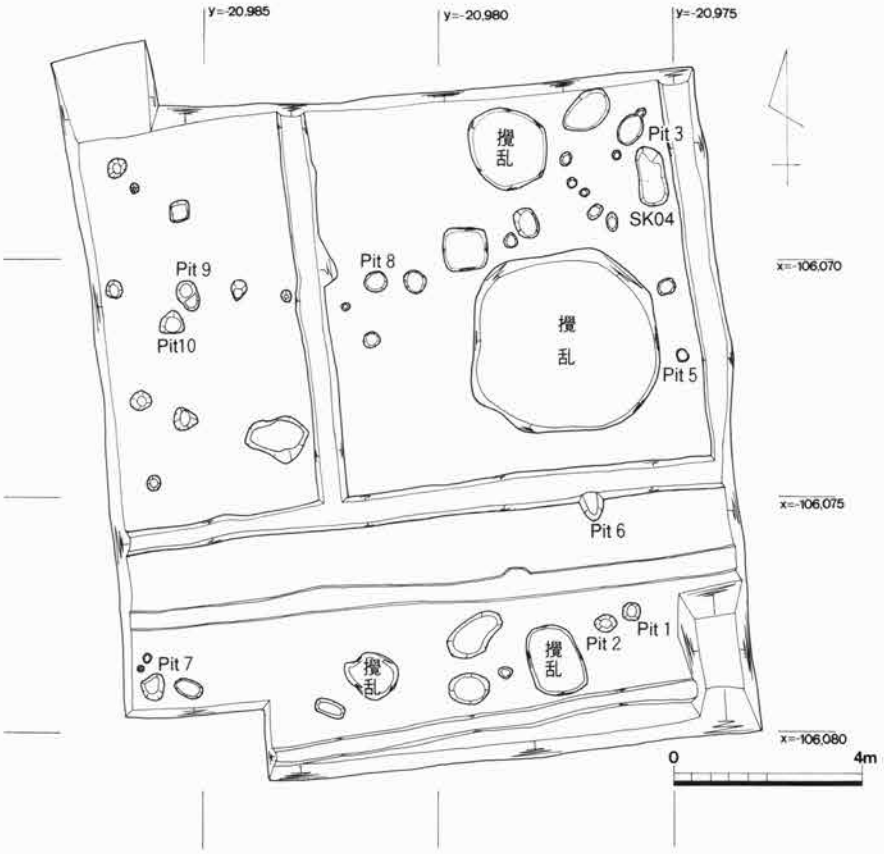


第59図　A地区土層断面図

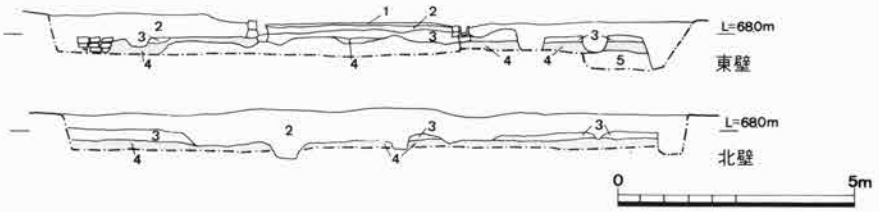
1.アスファルト　2.攪乱土層　3.暗青灰色粘土　4.暗青灰色土　5.暗灰色土　6.砂礫層
7.暗茶褐色土　8.黄色土(地山)

の広がりを確認することと、その部分に遺存する遺構を検出することを目的として実施した。

調査対象地区は、2か所の工事予定地区である。北側の地区をA地区、南側の地区をB地区として調査に着手した。調査に先立って、まず、両地区の表土を重機を用いて除去した。包含層上面まで重機掘削をし、その後に人力で掘削を進め、遺構・遺物を精査した。遺構を平面的に検出した段階で平板による遺構の平面的分布図を作成し、検出遺構番号を付した。遺構を掘削し、遺構平面形が確定した段階で、1/20の実測図・断面図を作成した。作業の進捗に応じて、随時、写真撮影などの記録作業を行った。



第60図　B地区検出遺構平面図



第61図　B地区土層断面図

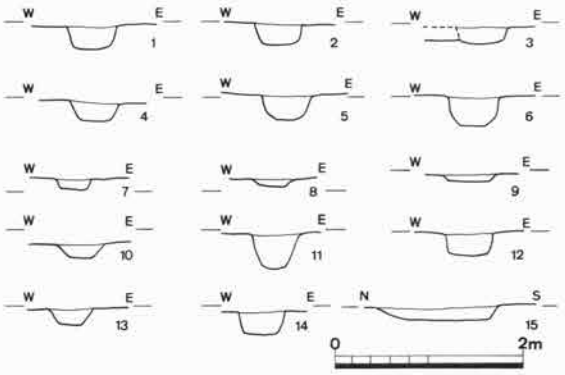
1.アスファルト　2.攪乱土層　3.暗青灰色土　4.暗茶褐色土(包含層)　5.黄色土(地山)

(2)調査概要

①A地区(第58図)　平成11年度に試掘調査をした地区である。この地区に遺物包含層・遺構が分布することが予想されたが、表土掘削の結果、調査地区内は旧校舎の基礎工事等によって大きく攪乱されていることがわかった。包含層と遺構面が遺存する場所はごくわずかで、島状にかろうじて検出しえた状況であった。遺存していた遺構面を精査して遺構を検出することを試みた結果、22個のピットを検出することができた(第60図)。ピットは円形のもの、隅丸方形のものがあり、しっかりと掘られていた。これらのピットは、掘立柱建物跡の柱穴と推定される。しかし、狭い範囲で散発的に確認したのみであり、建物跡の形状や規模は明らかでない。遺構の形成年代については、Pit4から出土した須恵器椀(第63図5)の年代が9世紀代に属するのものであること、鎌倉時代時代以前に形成されたと推定される包含層(暗茶褐色土層)を埋土としていることなどか

ら、平安時代から鎌倉時代に形成された遺構とみることができる。この地区の包含層は10cm以上の厚みを有しており、攪乱がなければ、ピット群を一定の広がりをなして検出し得た可能性がある。

②B地区　B地区では、A地区で検出された包含層が南側へどのように広がるのかを確かめた。掘削の結果、A地区同様、遺構面の多くは大学関連施設の基礎工事が行われた際に大きく削平され、攪乱をうけていることがわかった(第61図)。A地区で検出した包含層の一部とピット、土坑などの遺構などを検出することができたが、建物跡などの遺構を面的に検出することはできなかった。遺物包含層である暗茶褐色土層は、土層断面の観察から、調査地の東・南・西の方向へとさらに広がることを確認した。

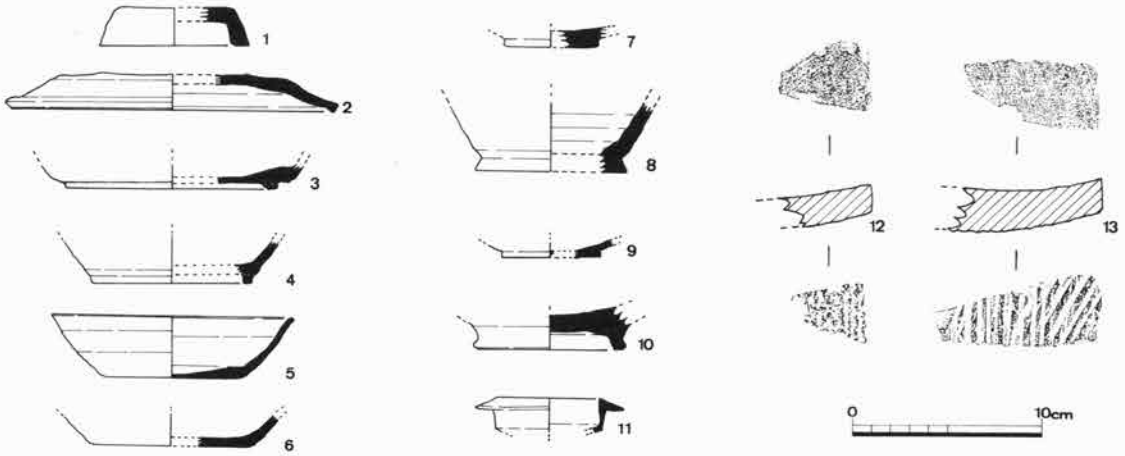


第62図　各トレンチ検出ピット断面図
A地区：1～6（1:Pit1, 2:Pit2, 3:Pit3, 4:Pit4, 5:Pit5　6:Pit6）
B地区：7～15（7:Pit 1, 8:Pit2, 9:Pit3, 10:Pit4, 11:Pit 7, 12:Pit8, 13:Pit9, 14:Pit10, 15:SK04）

ピットは、掘立柱建物跡の柱穴とみられるものであるが、概して浅く、不明瞭なものが多い。ピット・土坑は暗茶褐色土層を埋土とするものが多い。

(3)出土遺物

遺物は、ピットから少量を検出したほか、大半は包含層・攪乱土層で検出したものである。平安時代以降の遺物が中心であるが、縄文時代晩期に遡る可能性のある暗茶褐色の胎土を有する土器破片、奈良時代に遡る可能性のある須恵器杯や布目瓦破片など、平安時代以前の土器類も認められる。平安時代の遺物としては、杯身・杯蓋・甕・壺などの須恵器類、緑釉陶器皿、土師器類などがある。包含層からは須恵器や土師器・瓦などの破片が出土した。平安時代を中心とし、近世におよぶ。出土遺物中、主なものを第63図に示した。



第63図　A・B地区出土遺物実測図
Aトレンチ　Pit4:5　Aトレンチ暗茶褐色土:3　Aトレンチ攪乱土層:6
Bトレンチ　暗茶褐色土:1・2・4・7・8・9・10・12・13　Bトレンチ攪乱土層:11

1は須恵器壺の蓋である。上面に淡緑色の自然釉が認められる。2は須恵器の杯蓋である。口径18cmを測る。8世紀後半から9世紀前半に属するものであろう。3・4は高台を有する杯身、5・6は高台をもたない須恵器杯身である。7は糸切り痕を有する椀の底部である。9は器体内外面に緑釉を施す椀の底部破片である。8は須恵器壺の底部である。10は灰釉を施す椀の底部である。11は灯明皿である。近世の施釉陶器である。12・13は平瓦破片である。12は平行タタキが施された布目瓦で、厚さが2cmほどで精良な粘土を用いて作られている。奈良時代以前に属するものであろう。13は縄タタキが施された布目瓦である。平安時代後期に属するものであろう。

3．ま と め

今回の調査地区内は、以前に建てられた校舎基礎工事に伴う攪乱により、遺構検出面が広い範囲で攪乱されていた。遺構の遺存状態は良くなかったが、調査によって以下の諸点を明らかにすることができた。

今回の調査地点は、出土した遺物からみて、縄文時代晩期には人々の生活が始まり、奈良時代以降に宅地として利用されたと考えられる。

A・B両調査地区で検出したピットの中には、掘立柱柱穴と推定されるものがある。A地区では9世紀代の遺物を伴うものがあり、平安時代の掘立柱建物跡が存在したことは疑いない。調査対象地では、攪乱が著しいために全体像を明らかにすることはできなかったが、攪乱がおよんでいない地点では遺構が良好な状態で遺存している可能性がある。

遺跡の広がりを示す包含層は、今回の調査地で、さらに東と南方向へ広がっていることが明らかとなった。西側と北側については攪乱が著しいので明らかではないが、テニス場付近で遺物が採取されていることなどから考えると、この方面にも包含層が広がり、遺構が遺存していると考えられる。なお、京都市・京都府との協議の上、今回の調査地点を含む府立大学構内の遺跡の広がりを「半木町（はんぎちょう）遺跡」として範囲の指定を行い、周知の遺跡として認定することとなった。

（田代　弘）

注1　菱田哲郎・熊崎　司「京都府立大学構内遺跡の試掘調査」（『洛北史学』第2号　京都府立大学）2000

注2　『京都市遺跡地図』　京都市文化市民局　1996

竹原一彦「植物園北遺跡第11次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第54冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1993

岸岡貴英「植物園北遺跡第13次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第58冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1994

峰　巍「植物園北遺跡の調査」（『第49回京都市考古資料館文化財講座資料』　京都市考古資料館）1991

久世康弘「植物園北遺跡（第9次）」（『平成3年度京都市埋蔵文化財調査概要』　（財）京都市埋蔵文化財研究所）　1995

6．三山木遺跡第３次発掘調査概要

1．はじめに

この調査は、綴喜都市計画事業三山木地区区画整理事業に伴い、京田辺市の依頼を受けて実施した。平成９年度には、京田辺市教育委員会が事業施行範囲である31.2haを対象に試掘調査を実施し、遺跡の範囲ならびに概要確認を行っている[注1]。その結果、三山木山崎から東方に延びる低丘陵先端の微高地部を「三山木遺跡」とし、弥生時代から鎌倉時代にかけての集落遺跡が存在するとした。また、府道生駒・井手線北側で府道八幡・木津線から近畿日本鉄道京都線にかけてを「二又遺跡」とし、奈良時代から鎌倉時代にかけての遺構が遺存すると考えられた。その後、第２表のとおり発掘調査が実施され、各遺跡の詳細が部分的であるが徐々に判明しつつある。今回の調査は、三山木遺跡では３回目の調査となる。

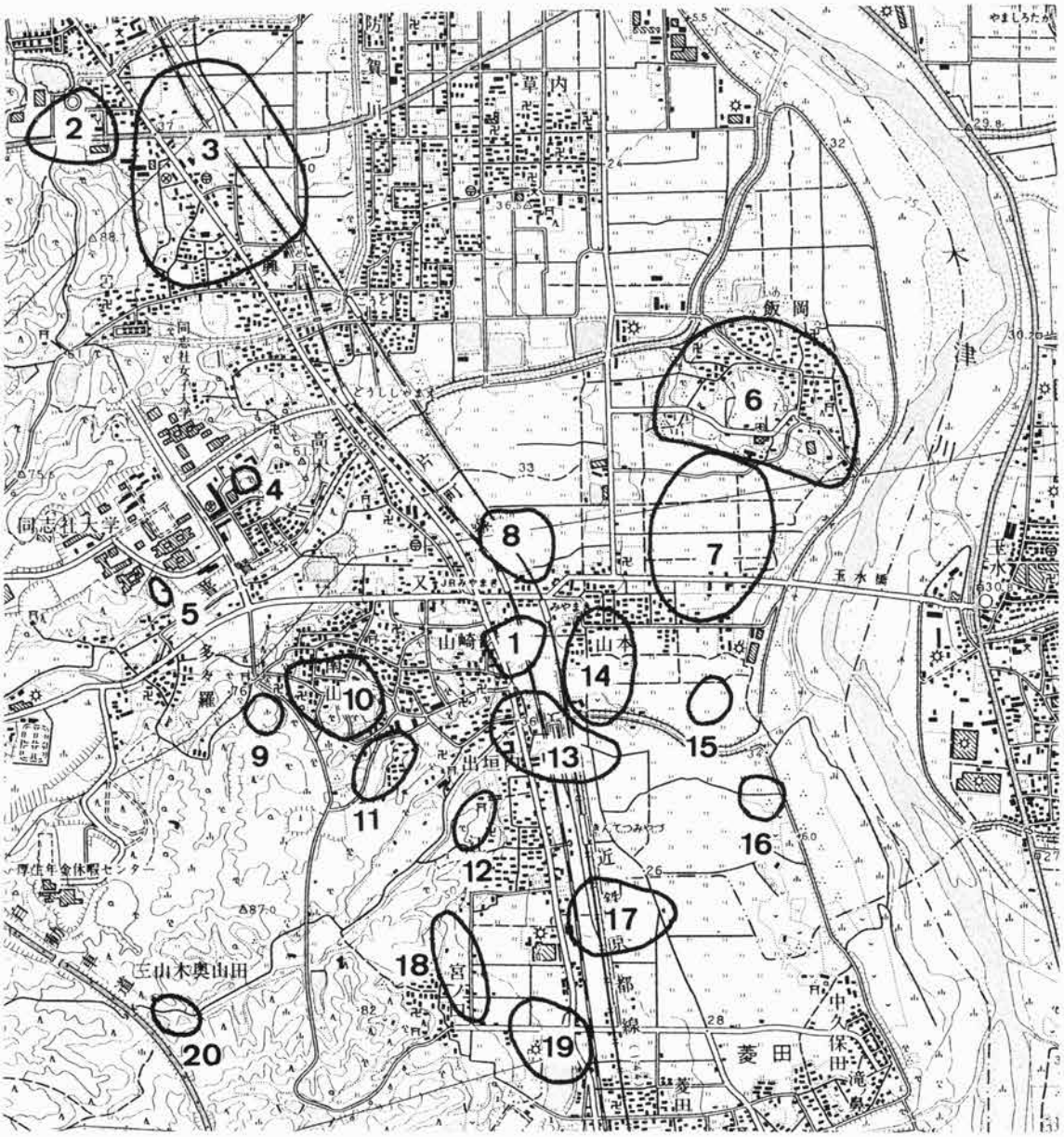
現地調査は、当調査研究センター調査第２課主幹調査第２係長事務取扱久保哲正・同主査調査員岡崎研一が担当した。現地調査は平成12年５月15日から同年９月28日まで行い、調査総面積は1,400㎡である。９月21日には約70名の見学者の中、現地説明会を開催した。調査時の空中写真は(株)かんこうに委託した。これら調査にかかる経費は、全額京田辺市が負担した。本概報作成にあたっては主に岡崎が担当し、遺構図の作成・遺物整理などの作業は調査参加者がそれぞれ分業した。遺物写真については、調査第１課資料係主任調査員田中　彰が撮影した。なお、執筆は、岡崎・松田早映子が、遺構図等のトレースは川端美恵が行い、文責については文末に記した。調査期間中は、京田辺市教育委員会・京都府立山城郷土資料館・地元各自治会など、各関係諸機関の協力をいただいた。また、地元の方々をはじめ学生諸氏には調査補助員・整理員として従事していただいた[注2]。記して感謝の意を表したい。

第２表　三山木遺跡・二又遺跡調査一覧表

遺跡名	次数	調査期間	調査面積	調査主体	調査担当	時代	検出遺構
二又遺跡		平成10年11月９日 ～ 平成11年２月５日	約1,500㎡	京田辺市 教育委員会	鷹野一太郎 五百磐顕一	飛鳥時代 ～ 鎌倉時代	掘立柱建物 井戸・溝・ 土墨状遺構
三山木遺跡	第１次	平成10年11月９日 ～ 平成11年２月５日	約300㎡	京田辺市 教育委員会	鷹野一太郎 五百磐顕一	縄文晩期 ～ 鎌倉時代	溝・柱穴
三山木遺跡	第２次	平成11年５月17日 ～ 平成11年10月28日	約1,800㎡	(財)京都府埋蔵 文化財調査研究 センター	岡崎研一 田代　弘	弥生前期 ～ 鎌倉時代	土坑・溝・ 掘立柱建物 ・井戸

2．位 置 と 環 境(第64図)

京田辺市は、京都府南部にあたる南山城地域のほぼ中央に位置する。木津川は、当地域中央を北流する。同市はその左岸に所在し、西は大阪府枚方市、西南は奈良県生駒市、南は相楽郡精華町、東から東北には木津川を隔てて綴喜郡井手町と城陽市、北は八幡市と隣接している。現在でも大阪府・京都市・奈良市・滋賀県方面への分岐地点とされ、交通の要衝にあたる。枚方市との境には、生駒山系から派生する低丘陵が北方に延びており、低位地帯は木津川によって形成された沖積地からなる。現在沖積地は、市街地・水田・畑地として利用されている。三山木遺跡は、京田辺市三山木山崎・高飛にかけて所在し、同市の南部に当たる。近畿日本鉄道京都線三山木駅



第64図　調査地および周辺遺跡分布図（1/25,000）

1．三山木遺跡(調査地)　2．田辺遺跡　3．興戸遺跡　4．天神山遺跡　5．新宗谷遺跡　6．飯岡遺跡
7．古屋敷遺跡　8．田中(二又)遺跡　9．口駒ヶ谷遺跡　10．南山遺跡　11．西羅遺跡　12．三山木廃寺
13．宮ノ下遺跡　14．直田遺跡　15．遠藤遺跡　16．下川原遺跡　17．桑町遺跡　18．屋敷田遺跡
19．宮ノ口遺跡　20．奥山田池遺跡

第65図　区画整理区域内の遺跡分布図（破線は区画整理範囲）

西側に広がる。遺跡は、東西200m・南北200mを測る。山崎の丘陵尾根筋が東方向に舌状に張り出しており、その北側には普賢寺川が、南側には遠藤川が蛇行して東流する。

弥生時代前期から中期にかけては、この尾根筋上に住居跡などの遺構があったとみられ、尾根筋中央のわずかな谷地形から当時の土器片・石器片などが多量に出土している[注3]。また、遠藤川南側にも弥生時代前期の宮ノ下遺跡が広がる。現在、近畿日本鉄道の操車場と大きく様変わりしているが、この地も宮津から北東方向に延びる丘陵先端部にあたり、三山木遺跡近辺の地形と類似する。古墳時代の遺跡は、飯岡付近に飯岡古墳群と近鉄興戸駅西方の丘陵部に興戸古墳群がある[注4]。後期には、飯岡横穴が築かれる。しかし、古墳時代の集落遺跡については不明である。奈良・平安時代には、山崎から延びる尾根筋先端の、普賢寺川近くの微高地上に二又遺跡が広がる。当遺跡は、東西300m・南北100mを測り、奈良から平安時代にかけての掘立柱建物跡・柵列・土塁状

遺構・溝・井戸などが検出されている。墨書土器の出土などは注目される。[注5] また、『続日本紀』和銅4(711)年の条文に山本駅設置の記載があり、現在の府道木津八幡線付近を古山陽道が通じていたとする説が、歴史地理学からの説であり有力視されている。三山木遺跡東側を山本と言い、山本駅の比定地である。[注6] 寿宝寺東側に「山本駅旧跡」と記された石塔が存在する。

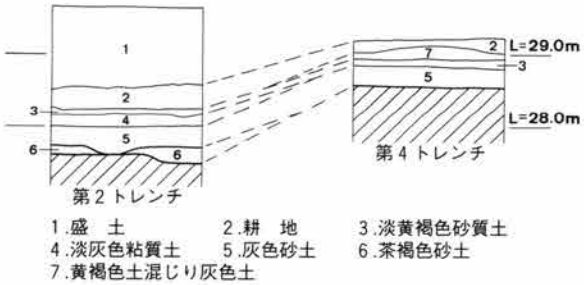
三山木遺跡から西方約2kmには、天平16(744)年に安置されたとする国宝十一面観世音菩薩を本尊とする観音寺がある。境内には、式内社地祇神社も存在する。周辺には、下大門・上大門などの寺院関係地名と普賢寺領の荘官が住んでいたとされる下司など荘園関連地名などが集中する。観音寺本堂裏手の丘陵部には礎石が現在も遺存し、塔が存在したと考えられている。ここから三山木一帯を一望することができる。塔跡周辺には奈良時代前期から平安時代にかけての瓦片が多量に散布する。観音寺からさらに南西約3kmにも式内社朱智神社があり、古くより三山木から大阪枚方方面へ抜ける街道が存在したと想像できる。朱智神社の南方約2kmには笠上神社があり、ここから南山城を一望できる。

また、調査地南方約500mの丘陵裾部(宮津)には、573年に創建されたとされる式内社佐牙乃神社がある。もともと三山木字山本にあったものを1429～41年に移したとされ、10月になると神輿の渡御が、宮津を起点として山本まで往復される。

3．調　査　概　要

(1)基本層位

今回の調査地は、主に三山木遺跡東端部、現在の近畿日本鉄道京都線三山木駅付近に集中することから、当地での基本層位の概略を説明する。第66図に示すように、第4トレンチにおける遺構面の標高は第2トレンチよりも約1m高い。これは、西方の山崎に広がる低丘陵の裾部に広がる微高地が第4トレンチの方向に延びていたことを示す。第4トレンチでは、耕土層下に薄く堆積する遺物包含層(灰色砂土)の下が遺構面(黄白色砂土)となり、この面から平安時代以降の柱穴や溝などを検出した。遺構の残りを見ると後世にかなり削平を受けており、遺構面としてはこの1面であった。第2トレンチでは、最近に近畿日本鉄道が約1mの盛土を行っており、もともとの地形はかなり低かった。耕土層下は、砂土ならびに砂質土が交互に堆積しており、薄く堆積する遺物包含層(灰色砂土)の下が遺構面となる。遺構面は2面確認し、上層・下層遺構とした。第66図に示した茶褐色砂土の上面と下面が遺構面である。灰色砂土・茶褐色砂土には、弥生時代から鎌倉時代にかけての土器片が混入していた。このことから両土層とも、鎌倉時代に堆積したものと考えられる。



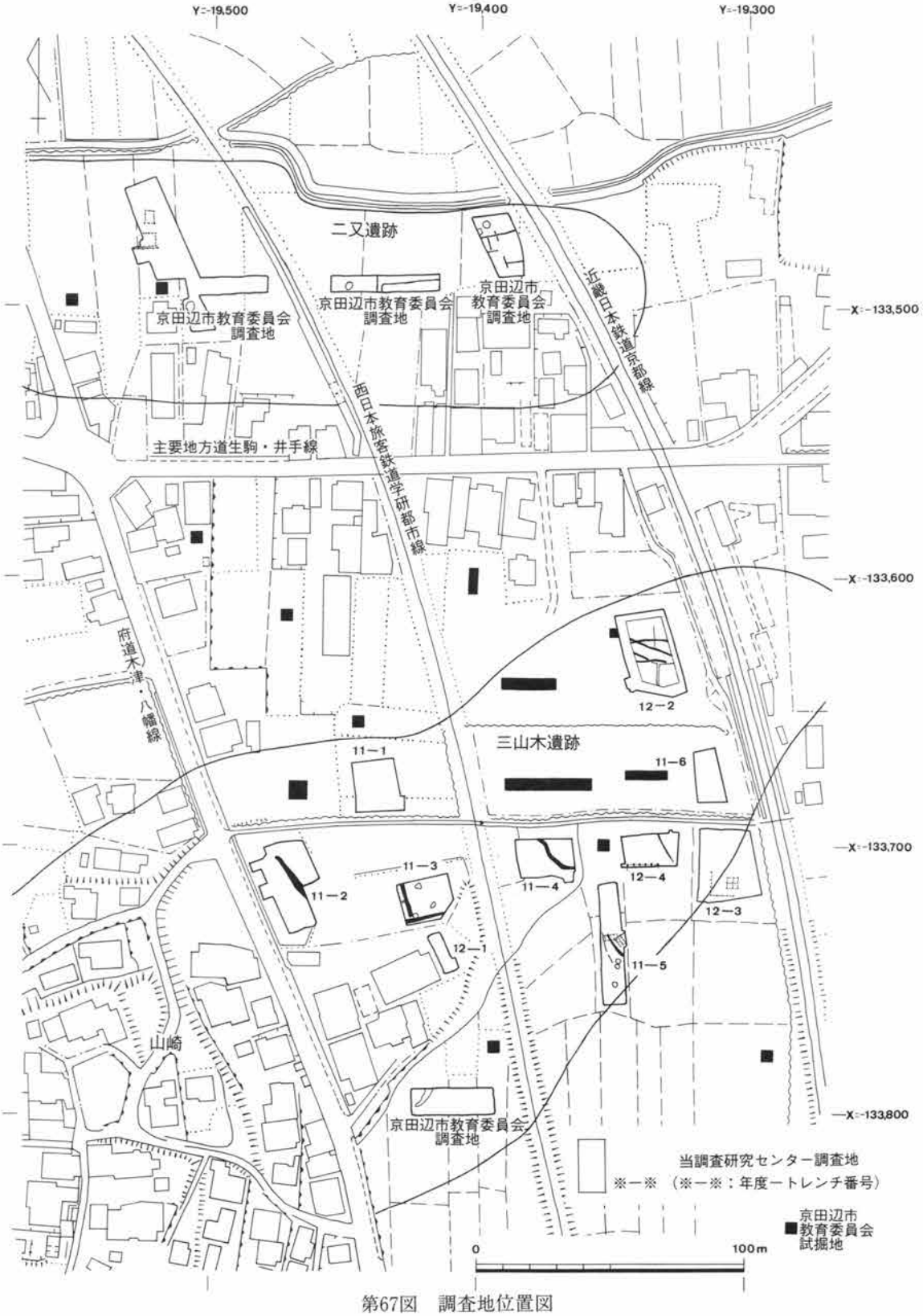
第66図　基本層位略図

(2)検出遺構

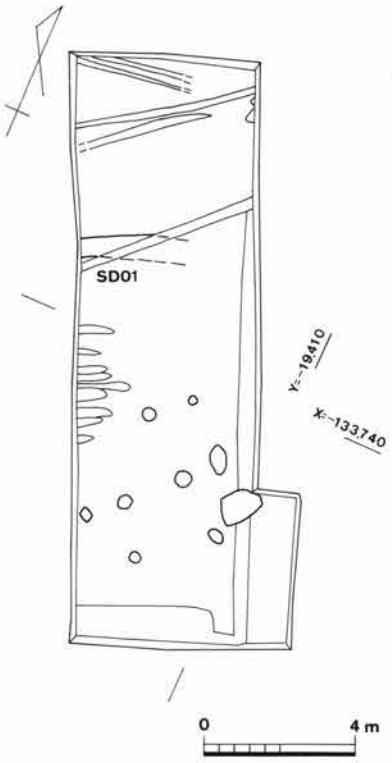
各トレンチ毎に概要説明をし、主な遺構についての詳細を記す(第67図)。

Ａ．第１トレンチ（第68図、図版第52）

昨年度に当調査研究センターが調査を行った第３トレンチ南側の隣接地に、約90㎡の調査地を設定した。当地は、山崎から延びる丘陵尾根筋上に当たり、北側と南側の低地部を調査した際に



第67図　調査地位置図



第68図　第１トレンチ平面図

弥生土器が多量に出土していることから、当時の住居跡などが存在すると想定された。掘削した結果、現在の地形は後世に大きく削平した後に、盛土されていることが判明した。検出した遺構は、溝１条（ＳＤ01）と柱穴と耕作溝である。削平を受けており残りは非常に悪い。ＳＤ01は耕作溝の埋土と異なり、柱穴と同色の暗茶褐色土であった。ＳＤ01は、東西溝（主軸はＮ66°Ｅ）で、幅0.7m・深さ0.1m・検出長２ｍを測る。昨年度調査の第３トレンチで検出したＳＤ03と平行する形であったかもしれない。遺存状況が悪く、出土遺物もないことからその関係については不明である。柱穴は、径0.2～0.3m・深さ0.2mを測る。柱穴が一列に並ぶと思われた箇所があり、一部拡張を行ったがその続きは見つからず、掘立柱建物跡や柵列などにはならなかった。

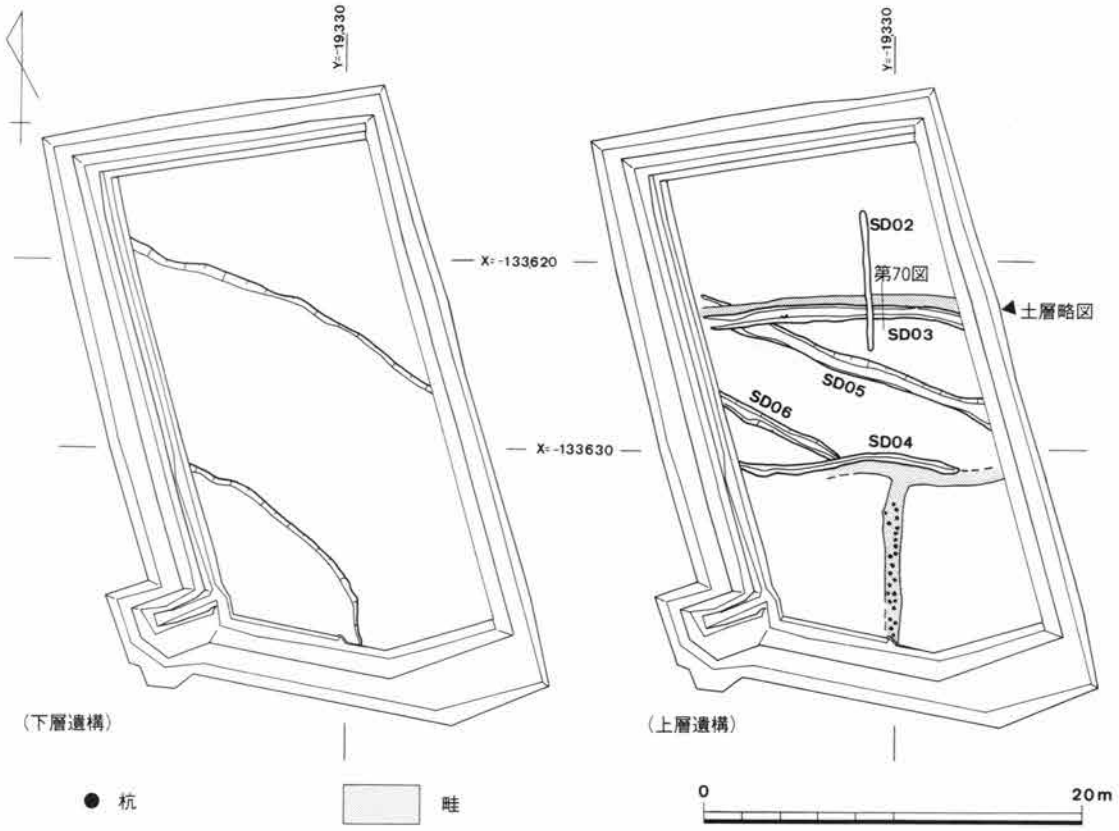
Ｂ．第２トレンチ（第69図、図版第52～56）

近畿日本鉄道京都線三山木駅西側に設定した調査地である。面積は、約600㎡である。最近１～1.5mの盛土がなされたようで、元々の地形は調査前のそれとは大きく異なる。断面・土質から、もとは水田であったことがうかがえ、耕土層下約0.8mで遺構面となる。遺構としては４条の溝と中世の水田面を確認した。

①上層遺構（第69図、図版第53）

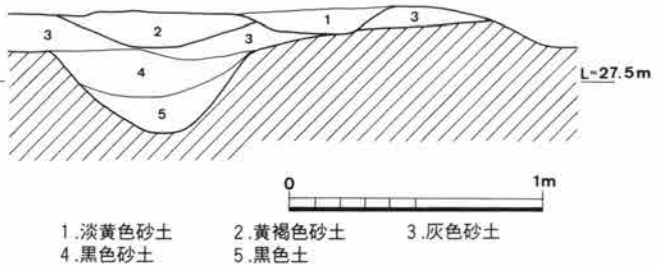
ＳＤ02　トレンチ北側で検出した南北方向の溝である。幅約0.3m・深さ約0.1m・検出長約７m、主軸はＮ５°Ｅを測る。切り合い関係では最も新しい溝であることが確認でき、溝内から土師器皿片１点（47）が出土した。

ＳＤ03・04　トレンチ中央で検出した東西方向の溝である。ＳＤ03は北側の溝で、ＳＤ04は南側の溝である。両溝は、東側でわずかに南へ湾曲するが、ほぼ平行する形で確認したことから、同時期の遺構の可能性が高い。両溝間の距離は、約7.5mを測る。ＳＤ03の規模は、幅約1m・深さ約0.2m・検出長約14m、主軸はN88°Ｅで、ＳＤ04は、幅約0.5m・深さ約0.2m・検出長約12m、主軸はN89°Ｅを測る。ＳＤ03北側は、溝に沿って幅約0.6m・高さ約0.1mの畦が認められ、それより以北は灰色粘土が広がり、水田面であったと思われる。ただし、稲株などの痕跡の検出には至らなかった。水田面と畦との標高差は、約0.2mを測る。ＳＤ03から土師器甕片が出土し、水田面埋土中からは土師器片・須恵器片に混じって瓦器椀や土師皿の破片（40～46）も出土することから、鎌倉時代頃に機能したものと考えられる。ＳＤ03とＳＤ04の間は暗茶褐色土が堆積しており、水田部の埋土とは異なった。両溝は、ほぼ東西方向を向くことから、付近一帯に広がる条里地割を踏襲する方格地割りに伴う遺構と考える。ＳＤ03の東側のみ溝の修築が認められた（第70図）。その回数は３回で、もともと幅0.8m・深さ0.3mを測る溝が埋まった後（第70図４・５の土層）、灰色砂土が薄く堆積し、そこに幅0.8m・深さ0.15mを測る溝が設けられた（第70図２の



第69図　第２トレンチ平面図

土層)。その後一部重複する形で、幅0.6m・深さ0.1mを測る溝が設けられていた(第70図１の土層)。また、ＳＤ04南側にも畦状のわずかな高まりを確認した。この畦状の高まりに直交する形で杭列を伴う畦畔１条も確認している。杭列(畦畔)は、トレンチ南半部に続く状況を確認した。杭は自然木を一部加工して畦畔の両側に２列に打ち込まれていた。一部畦を安定させるためか、切り株を埋め込んでいた。杭列(畦畔)の両側は、灰色粘土が広がり、水田であったと思われる。この水田面から土師器片・須恵器片に混じって瓦器椀や土師器皿の破片も出土することから、鎌倉時代の遺構と考える。

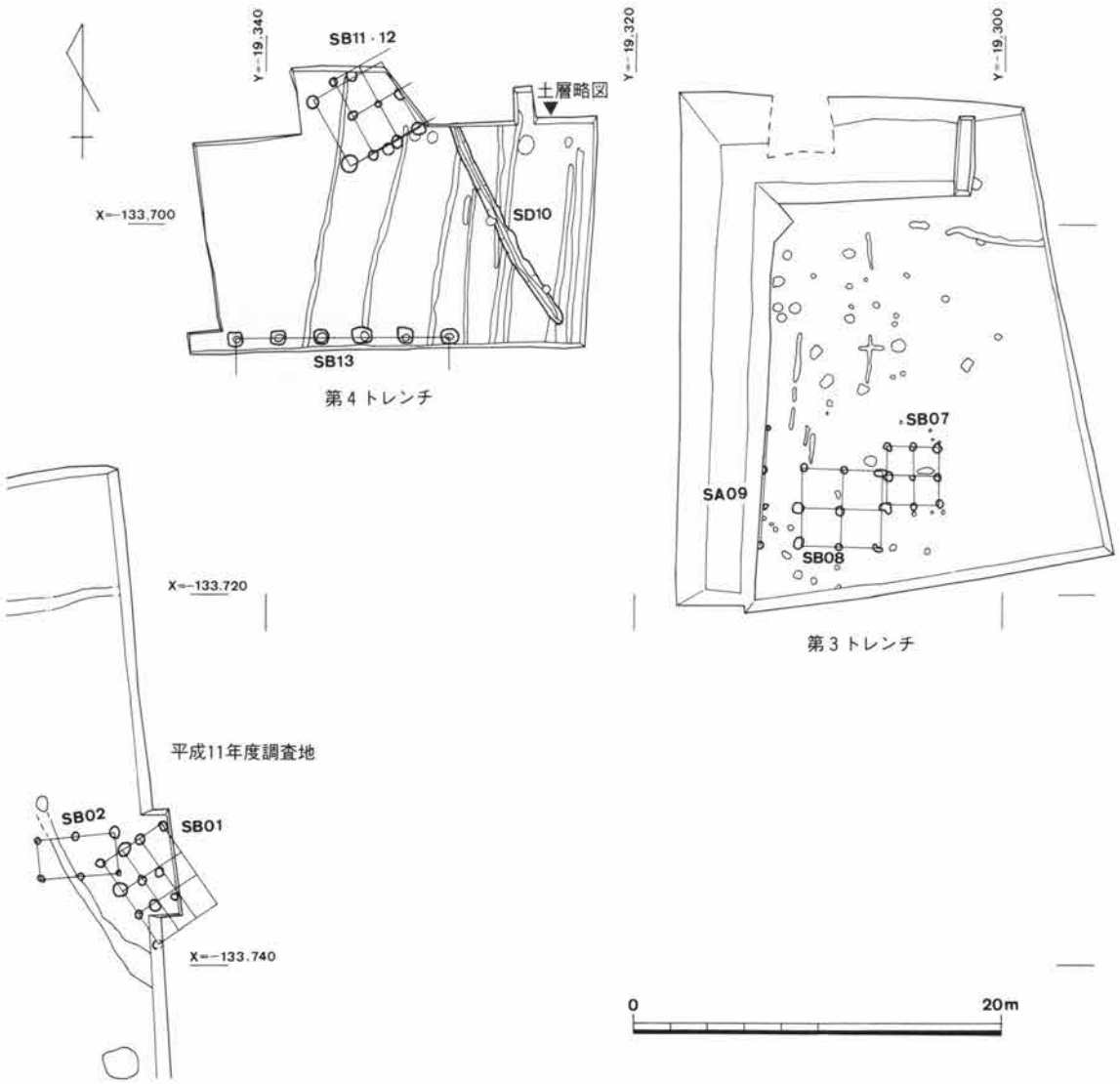


第70図　流路修築状況図

ＳＤ05・06　ＳＤ03・04と大きく方向の異なる溝である。両溝は4.5mの間隔で平行していた。ＳＤ05の規模は、幅約１m・深さ約0.15m・検出長約16m、主軸はN69°Ｅを測る。溝内からの出土遺物は無いが、切り合い関係からＳＤ03以前であることが認められた。ＳＤ06の規模は、幅約0.6m・深さ約0.15m・検出長約７m、主軸はN64°Ｅを測る。

②下層遺構(第69図、図版第54)

顕著な遺構は、検出していない。トレンチ北東部から南西方向に、0.2～0.3mの段差で階段状に低くなる。これは、調査前に山崎の方から東にかけて旧地形は下がるという予想に反して、山



第71図　第3・4トレンチ平面図

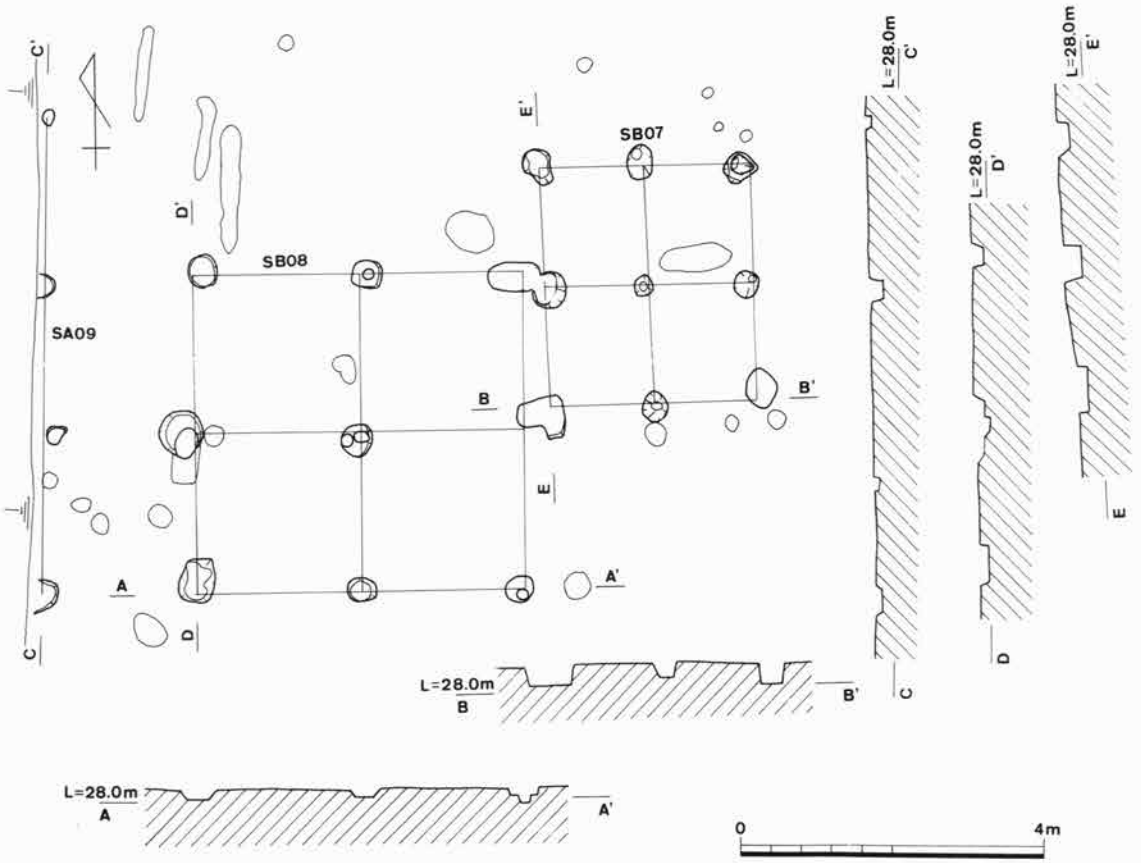
本の集落近辺がわずかに高台であったことを示すものと考える。トレンチ南西部は最も低く、その堆積状況を観察すると黒色砂土と灰色砂土の互層で、木の葉などが層状に堆積していたことから、湿地帯であったと思われる。

C．第3トレンチ(第71図、図版第57・58)

近畿日本鉄道京都線三山木駅南方約100mに設定したトレンチである。面積は、約580㎡である。トレンチ南半部で、2間×2間の掘立柱建物跡2棟(SB07・08)と柵列(SA09)を確認した。いずれも同方向を向くが、きわめて近接して設けられており、同一時期のものとは考えがたい。一部、柱穴が重複していたが、土色の違いなどから前後関係は確認できなかった。

SB07(第72図)　調査地南端で検出した2間×2間の総柱建物跡である。東西2.7m・南北3.1mを測る。柱穴は全て径40cm程を測り、深さは30cm前後であった。主軸方位は真北を向き、SB08とほぼ平行する。南東隅の柱穴から土師器片(37)が出土している。

SB08(第72図)　SB07の西側に隣接した2間×2間の総柱建物跡である。東西4.3m・南北4.2mを測る。柱穴は全て径40～60cmを測り、深さは20cm前後である。主軸方位は真北を向く。

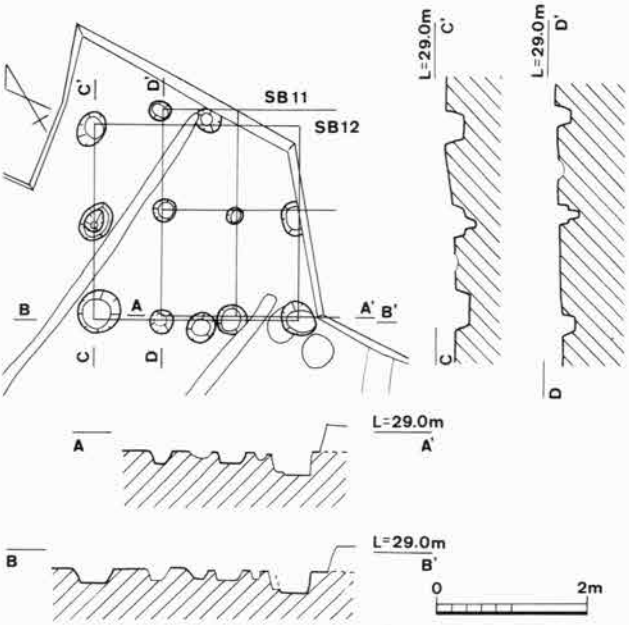


第72図　ＳＢ07・08、ＳＡ09実測図

ＳＡ09(第72図)　ＳＢ08西側で検出し、柱穴４か所からなる。非常に残りが悪く、径20～40cm・深さ10～20cmで、主軸方位はＮ３°Ｅを測る。ＳＢ07・08と後述するＳＢ13を画するものであったと考える。

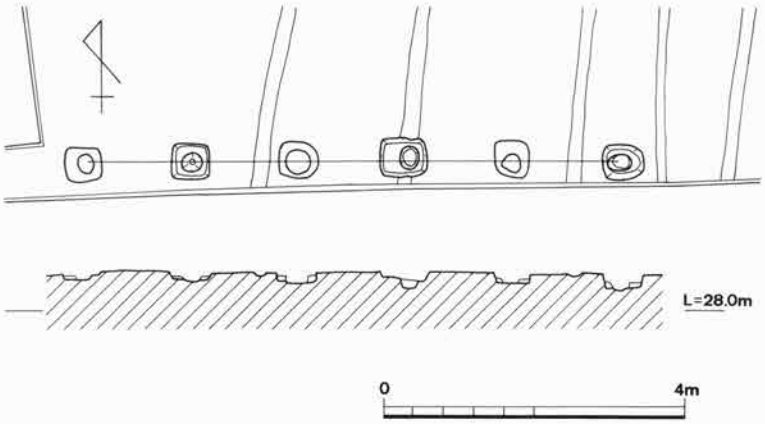
Ｄ．第４トレンチ(第71図、図版第59)

第３トレンチ西側に設定した調査地である。面積は、約250㎡である。農道を挟んだ北側では京田辺市教育委員会が試掘調査を行っており、柱穴や溝などを確認していることから、当調査地においても同様の遺構が検出されるものと考えられた。調査の結果、掘立柱建物跡３棟(ＳＢ11～13)と溝跡(ＳＤ10)を検出した。



第73図　ＳＢ11・12実測図

ＳＢ11(第73図)　調査地中央北端で検出した。掘立柱建物跡の南辺部分のみ検出し、北側に広がることが確認できたことから、一部拡張を行った。その結果、東西１間(1.0m)以上×南北２間(2.7m)からなる総柱建物跡であることが判明した。柱穴は、径約30～40cmを測り、深さは20



第74図　ＳＢ13実測図

～30cmである。主軸方位はＮ30°Ｗを測り、ＳＤ10と平行する。時期については柱穴内出土遺物がなく不明である。

ＳＢ12(第73図)　調査地中央北端で、ＳＢ11と重複する形で検出した。掘立柱建物跡の南辺部分のみ検出し、北側に広がることが確認できた。拡張の結果、東西２間(2.7m)×南北２間(2.6m)からなる建物跡と判明した。柱穴は、径約40～50cmを測り、深さは約30cmである。主軸方位はＮ30°Ｗを測り、ＳＤ10と平行する。時期については、柱穴内出土遺物がなく不明である。

ＳＢ13(第74図)　調査地南東隅で検出した柱穴列である。柱穴が展開する南側が調査地外となるため、掘立柱建物跡になるかどうかは不明である。しかし、第３トレンチで検出したＳＢ07・08や、昨年度調査を行った際に検出したＳＢ02と平行し、これらの建物跡に囲まれる形で柱穴列を確認したこととなり、その中心的な建物であった可能性が高い。５間からなる柱穴列の掘方は一辺50～60cm・深さ20～30cmを測り、柱痕の径は20～30cmを測る。真東西方向を向き、柱間は約1.4mである。柱穴内から、須恵器蓋(48・49)、土師器杯(52)が出土し、10世紀後半の建物と考える。

ＳＤ10(第71図)　ＳＢ12・13の南東で検出した溝で、両建物跡と平行する形で検出した。溝の主軸方向は、Ｎ30°Ｗを測る。規模は、幅約0.6m・深さ約0.3m・検出長約12.5mである。このような検出状況から、ＳＢ12・13と同時期と考えられる。

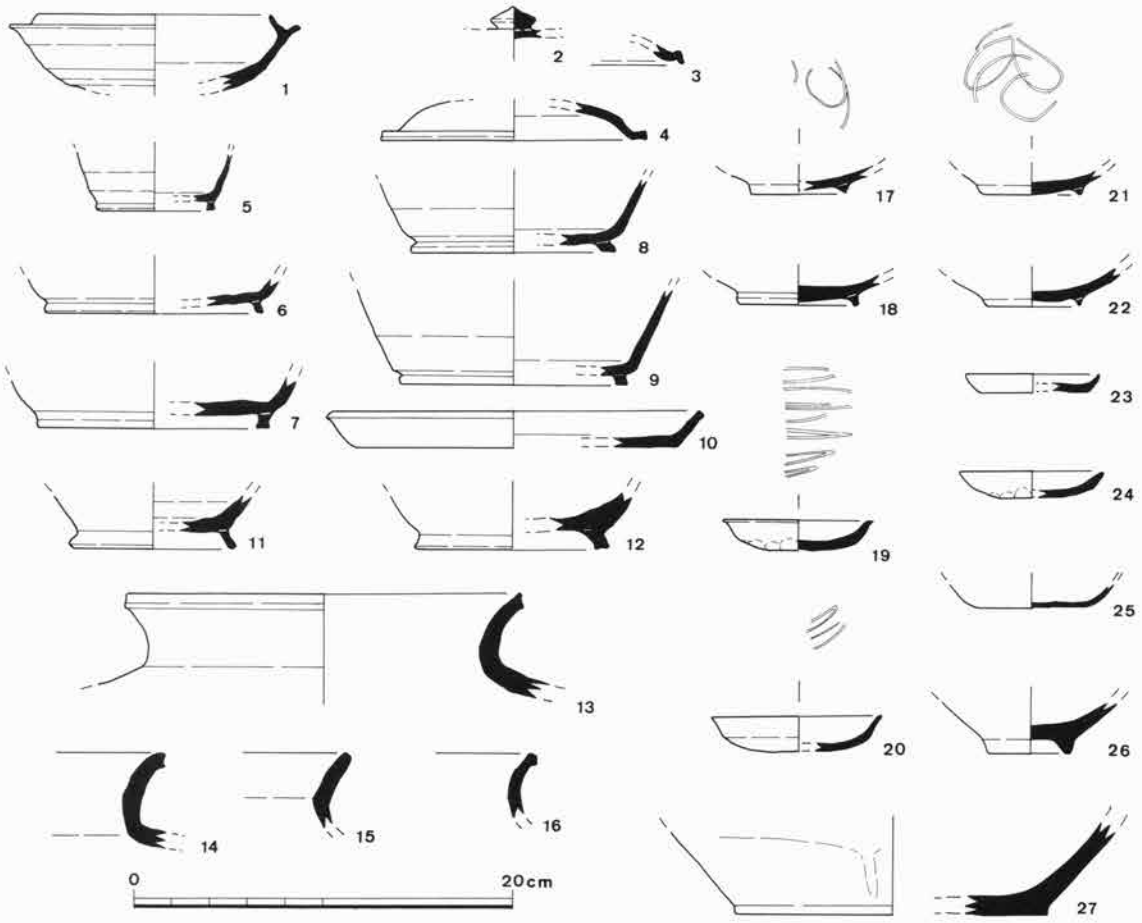
(岡崎研一)

４．出　土　遺　物(図版第60)

(1)包含層出土遺物(第75図)

１～14・16は須恵器、17～22・25は瓦器、15・23・24は土師器、26・27は陶磁器である。主に第３トレンチから出土した。

杯身(１)は、口縁端部内上方に短く立ち上がる。底部外面にヘラ削りを施す。形態からＴＫ209併行期のものである。蓋(２～４)は、口縁部がＳ字状に屈曲し、天井部中央に擬宝珠つまみを有する。杯(５～９)は、輪状の高台を貼り付ける。５は底径６cmと小型品である。８世紀後半から９世紀前半頃のものと思われる。皿(10)は、平坦な底部と外上方に短く立ち上がる口縁部からなる。端部は上外方に面をなす。壺(11・12)は、外下方を向く高台を貼り付ける。甕(13～16)の内、(15)のみ土師器で、「く」の字状に屈曲する口縁部である。その他は大きく外反する口縁部で、端部は外方に面をなすもの(13・14)と玉縁状のもの(16)とがある。瓦器椀(17・18・21・



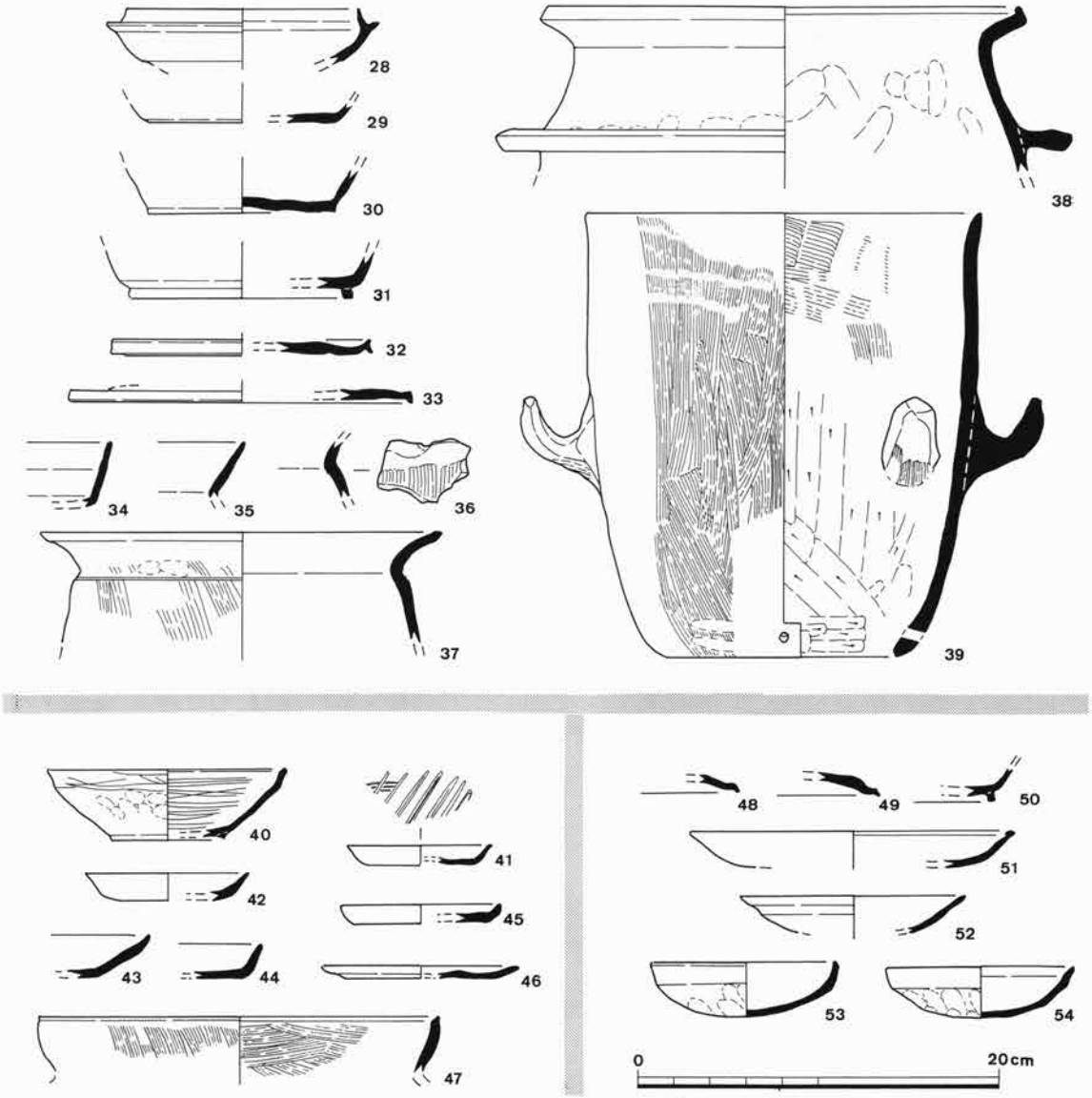
第75図　出土遺物実測図(1)

22)は、断面三角形の高台を貼り付ける。(17・21)の見込みには、螺旋状の暗文が施される。高台の形態や暗文などから13世紀前半と思われる。皿(19・20・23～25)には、瓦器(19・20・25)と土師器(23・24)がある。(19・20)の内面には暗文が施されている。口縁部はわずかに外反する。底部外面に指押さえが認められる。形態から13世紀前半と思われる。土師皿(24)は丸みを帯びた底部と口縁部からなる。(25)は器高のある土師皿である。陶磁器(26)は青磁である。(27)は鉢である。

(2)遺構出土遺物(第76図)

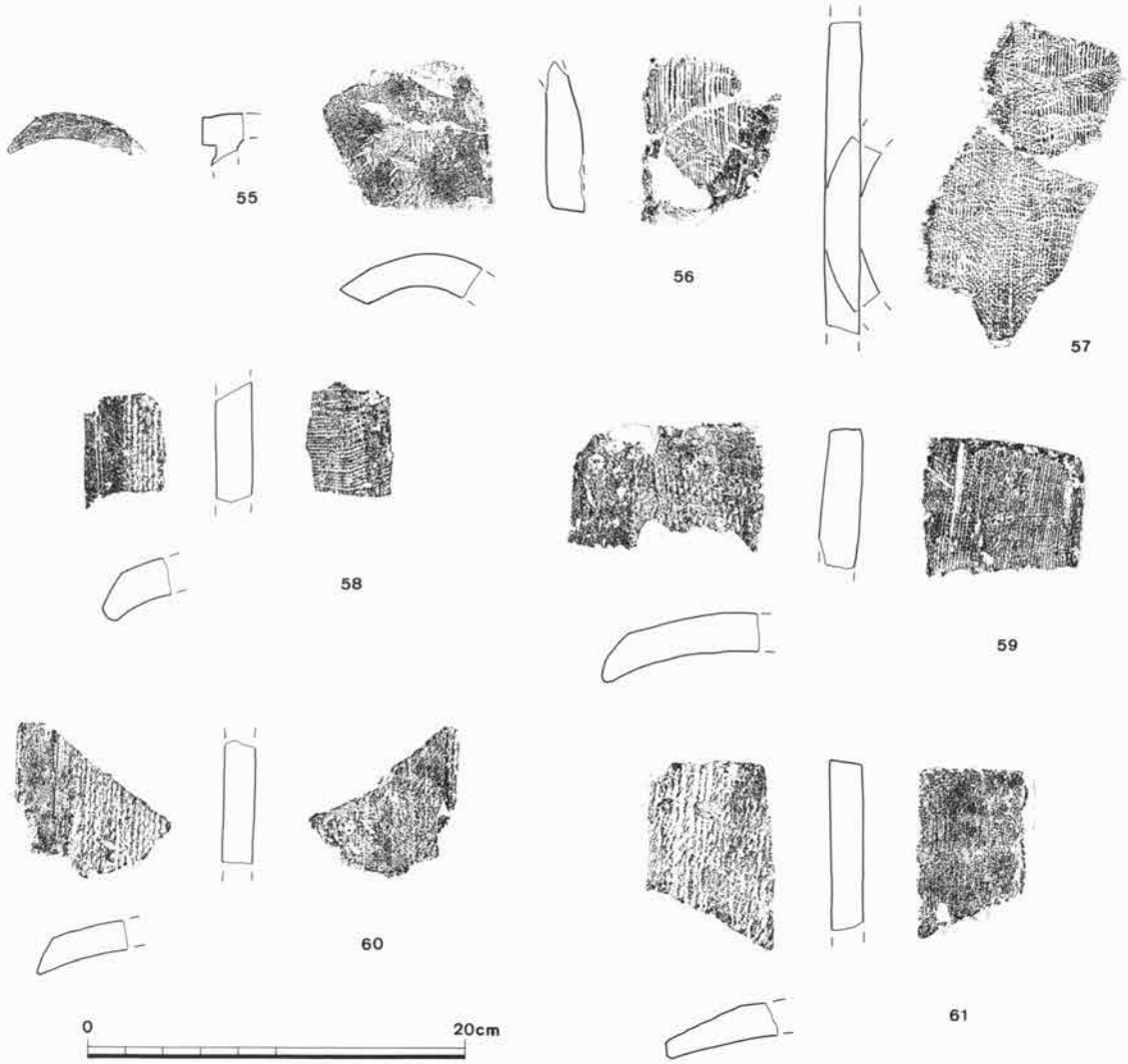
第13図上段の28～39は第３トレンチの柱穴出土、左下段の40～47は第２トレンチの溝・水田面出土、右下段の48～54は第４トレンチ柱穴・溝から出土したものである。28～34・48～50は須恵器、35～39・42～47・51～54は土師器、40・41は瓦器である。

杯身(28)は、口縁端部が短く内上方に立ち上がる。器高も低く、形態からＴＫ209併行期のものと思われる。杯(29～31・34・50)は平底あるいは輪状高台を貼り付ける。高台を有する杯は、底部外縁をめぐることから、８世紀後半から９世紀前半頃のものと思われる。蓋(32・33・48・49)は、器高が低く、口縁部がＳ字状に屈曲する。(32)には重ね焼き痕があり、これによる歪みが認められた。甕(35～37・47)は、破片であるため全容は不明である。(36・37)の体部外面にはハケメが施され、「く」の字状に大きく屈曲する。(47)の口縁部内外面にはハケメが施されてい



第76図　出土遺物実測図(2)

る。口縁端部は外上方に尖る。羽釜(38)は、内傾する体部上半と大きく外反する口縁部からなる。口縁端部は内上方につまみ上げる。体部上部に真横を向く鍔が貼り付けられている。形態から大和型で12～13世紀にかけてのものと思われる。甑(39)は、第3トレンチ北東隅の柱穴から出土した。円筒形の形態を有し、体部中位に一対の把手が貼り付けられる。体部外面ならびに内面の上半部はハケメが、下半部はヘラ削りが施される。体部最下位に径5㎜の穿孔が認められた。瓦器椀(40)は口縁部でわずかに屈曲し端部に凹線がめぐる大和型である。内面には暗文が密に施され、外面上部にも認められる。断面三角形の高台が貼り付く。皿(41・42・44～46)の内、(41)は瓦器でその他は土師器である。(41)の底部内面には暗文が認められる。杯(51～54)は土師器である。平坦な底部と外上方に立ち上がる口縁部からなる。端部が内に肥厚するもの(51)と口縁部外面にわずかな段をめぐらすもの(52)がある。(52)は、形態から10世紀後半と思われる。(53・54)は丸みを帯びた底部と上方に立ち上がる口縁部からなる。口縁部付近でわずかに屈曲する。体部外面に指押さえの痕跡が二段認められる。



第77図　出土遺物実測図(3)

(3) その他の遺物(第77･78図)

瓦は、全て第３・４トレンチ包含層から出土した。遺構に伴うものは無く、大半が平瓦である。軒丸瓦の出土量は少なく(55)、破片であるため詳細については不明である。平瓦は、一枚作りのものが大半で、凸面には縄タタキを施す。銭貨は全て宋銭である。第２トレンチの淡茶褐色粘質土から３枚、第３トレンチの淡茶褐色砂土から３枚が出土した。初鋳年は、第15図の銭名の後ろに記入した。祥符通寶は、他のものと比べて若干小ぶりである。

第78図　銭貨拓影(原寸大：()内は初鋳年)
1．祥符通寶(1009)　2．嘉祐通寶(1056)　3．熙寧元寶(1068)
4．熙寧元寶(1068)　5．元豊通寶(1078)　6．紹聖元寶(1094)

(松田早映子)

5．ま と め

今回の調査ならびに昨年度の調査結果から、第４トレンチ南側付近に南北方向の掘立柱建物跡が集中する可能性が高いことが判明した。これら建物群は、主屋・倉・付属棟から成ると思われるが、主屋に相当すると思われたＳＢ13については、残念ながらその全容については明らかにできなかった。このように平安時代に、範囲を限って真北を向く建物群を整然と配列していた様子は、限られた土地を目的に応じて、効率よく区画使用していたことを示していると思われる。

一方、現在の近畿日本鉄道三山木駅近辺から鎌倉時代の水田畦畔を確認したことは、弥生～鎌倉時代の集落遺跡としての三山木遺跡の東端が、三山木駅の西側までであることを明らかにした。

今回検出した建物跡などは、詳細については不明な点が多い中世荘園である山本荘が立荘するにあたっての基盤となった集落跡と考えられる[注7]。第４トレンチ北側からの方向の異なる建物の検出は、その北側に関連施設が広がっていると思われ、今後の調査に期待される。

（岡崎研一）

注１　京田辺市教育委員会「三山木地区特定土地区画整理事業地内試掘調査概報」（『京田辺市埋蔵文化財調査報告書』第26集）　1998

注２　一森雄次・奥　浩和・川端美恵・黄瀬桂子・小西麻佐子・白川久美子・田中美恵子・楢本順子・松田早映子・溝口聖子・山岡匠平

注３　岡崎研一・田代　弘「三山木遺跡第２次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第92冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2000

注４　田辺町教育委員会「古屋敷遺跡・飯岡横穴発掘調査報告書」（『田辺町埋蔵文化財調査報告書』第１集）　1981

田辺町教育委員会「飯岡遺跡第５次発掘調査概報」（『田辺町埋蔵文化財調査報告書』第17集）　1994

森　浩一編「田辺天神山弥生遺跡」（『同志社大学文学部考古学調査記録』第５号　同志社大学文学部考古学研究室）　1976

注５　京田辺市教育委員会「二又遺跡・三山木遺跡発掘調査概報」（『京田辺市埋蔵文化財調査報告書』第28冊）　1999

注６　伊野近富「興戸遺跡第11次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第47冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1992

足利健亮『日本古代地理研究』大明堂　1985

注７　岡崎研一「山城国綴喜郡山本荘について」（『京都府埋蔵文化財論集』第４集　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2001

7．木津川河床遺跡第12次発掘調査概要

1．はじめに

木津川河床遺跡は、京都府八幡市八幡に所在する弥生時代後期末から中世にかけての集落遺跡である。今回の調査は京都府土木建築部の依頼を受け、京都府洛南浄化センター内における卵形消化タンク槽の増設にともなって実施した。洛南浄化センター内の北西部は、従来、遺構密度の低い地点という認識であったが、平成10年度の調査で、古墳時代前期の竪穴式住居跡をはじめとする良好な遺構・遺物が検出され(注1)、北西地域の重要性が認識された。今回の調査地は、平成10年度調査地の南西側約70mであり、関連遺構の広がりが予想された。遺構・遺物の有無を確認するため、調査対象地内(3,000m²)のうち、約300m²を試掘した結果、中世の溝や、古墳時代の土坑状遺構とみられる遺構が検出された。この結果を受けて、遺構の残りが良好な範囲を約200m²拡張して本格的な発掘調査を実施した。

現地調査は、当調査研究センター調査第２課課長補佐兼調査第１係長水谷壽克、同主査調査員黒坪一樹が担当し、平成12年９月７日～平成13年１月12日まで実施した。調査期間中は、京都府教育庁指導部文化財保護課・京都府土木建築部・八幡市教育委員会からご協力いただき、調査補助員・整理員各氏の熱心な調査参加により無事調査を終了することができた(注2)。感謝の意を表したい。また、経済産業省地質調査所地域地質研究官の寒川　旭氏には、液状化現象の観察・記録ならびに、原稿の執筆までお願いした。重ねて御礼申し上げたい。

なお、発掘調査にかかる費用は、すべて京都府土木建築部が負担された。

2．位置と環境

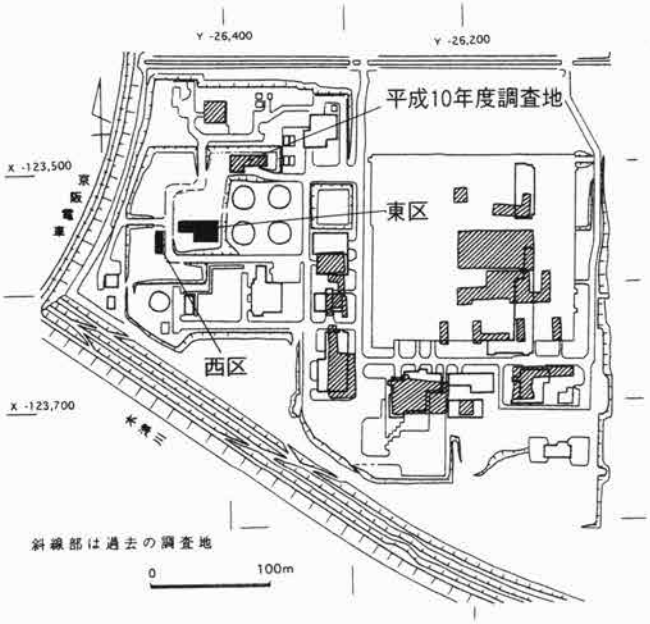
木津川河床遺跡の西端で桂川・宇治川・木津川は合流し、淀川となる。この３河川の中世における流れは現在と大きく異なる。その流れの歴史は、沖積世になって形成され、昭和16年まで存在していた巨大な遊水池である巨椋池と密接にかかわ

第79図　調査地位置図(1/50,000)

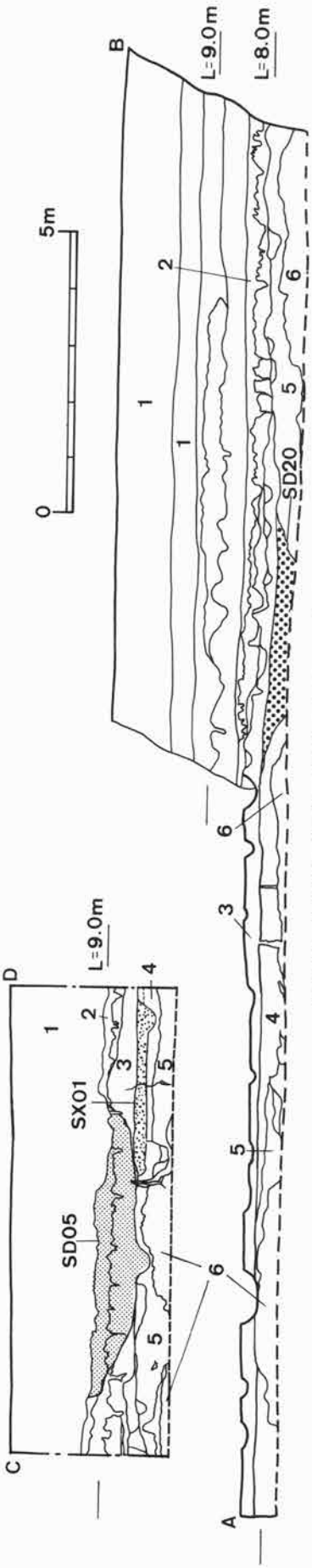
っている。中世初頭～16世紀末頃までは約800haの広がりをもっていた巨椋池の、南東峡谷部に宇治川は流れ込み、桂川と木津川はそれぞれ現在の淀・橋本あたりの巨椋池出口付近にその流れを見せていた。(注3) 木津川は蛇行が激しく、洪水などによる土砂の搬出が3河川中で最も多い。そのため自然堤防がよく発達し、「島畑景観の卓越する砂質平野」(注4)を形成してきた。特に、古代・中世期における遺跡が深く埋没している所以である。豊臣秀吉による大規模な堤の造営で、巨椋池は分断され、近世以降も漁業のさらなる発達に加え、広く水田・畑地利用がなされたが、その後も慶応4(1868)年の生津(なまづ)切れをはじめ、洪水には悩まされ続けた。さらに、昭和30年代になって住宅地開発がすすめられ、今日に至っている。木津川河床遺跡は一面において、治水の歴史が刻まれた遺跡であるといえる。

3．調　査　成　果

調査は、東区(425m²)と西区(75m²)に分けて実施した。重機により、表土および近現代の水田・畑地耕作土さらに近世包含層の一部を掘削した。それ以下はすべて人力で掘り進めた。地表下約1.6mで中世の溝状遺構や柱穴を確認した。さらに30cmほど掘り進み、試掘の際には古墳時代前期の遺構・



第80図　調査区位置図



第81図　土層断面実測図(番号は本文の層番号)

遺物を検出していた面を精査した。土坑が検出され、中から高杯や管玉などの遺物が出土した。この土坑の掘り込まれた遺構面は、西側の工事用道路をはさんだ西区までは続かず、西に向かっては、大きな流路(ＳＤ20)により存在していないことを確認した。遺構面は調査地の南北に広がっているようである。

(1)層位

調査区における土層は、東区の南壁中間部と北側東西断面、西区の西壁断面を例に説明していきたい。第81図と第85図の層番号は統一してあり、同じ番号は同じ層と認識した。第１層は現代の盛土である。第２層は橙褐色粘質土で、酸化した植物遺存体の斑粒を多量に含んでいる。第３層は、暗青灰褐色粘質土で、鎌倉時代(13世紀末～14世紀初頭)の溝々の遺構面を形成している層である。第４層は、暗青灰色極細砂である。古墳時代前期の土坑は本層に掘り込まれている。この第４層は、西区では明瞭な存在状況を確認できなかった。第５層は青灰色細砂である。遺物や炭化物は観察されない。次の第６層は淡橙褐色砂粒で、木津川の古い氾濫原の上面を形成するものである。この層は、噴砂の供給源で、盛り上がりがうねりのように観察される。なお第２層より上に、島畑状の起伏が多く見られた。

(2)検出遺構

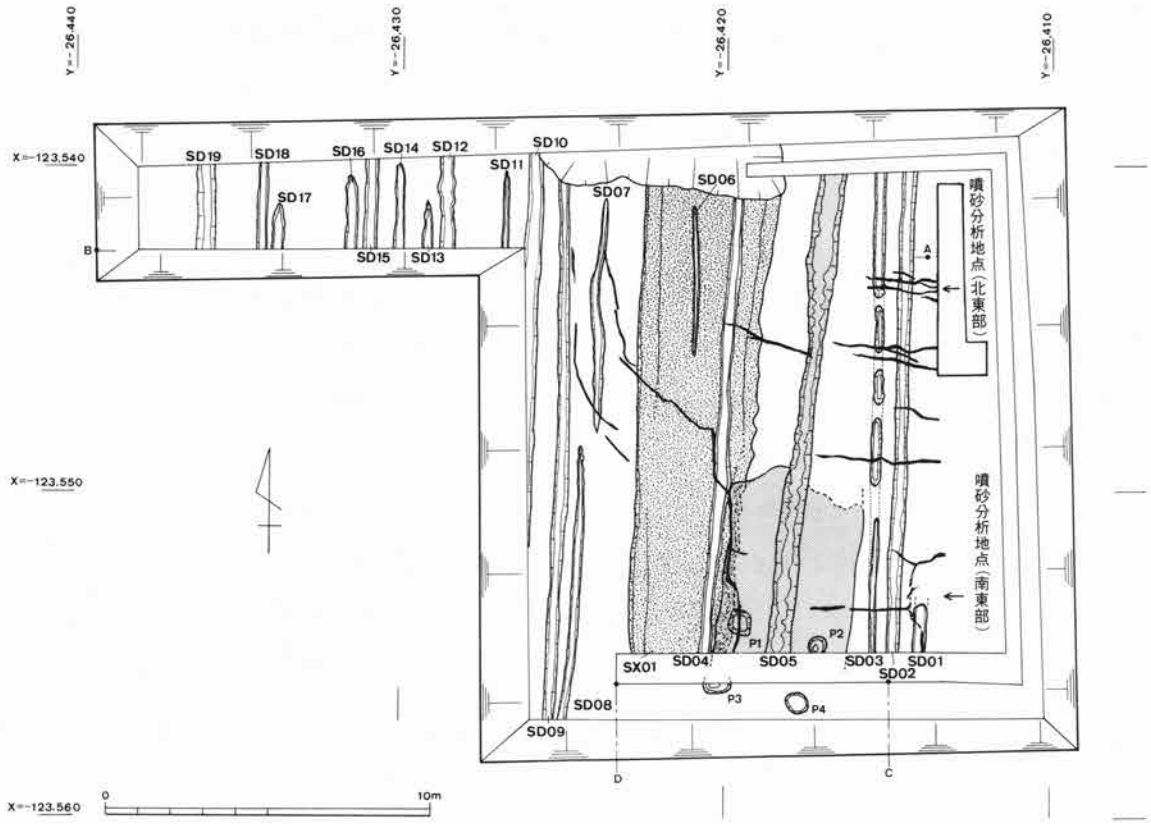
①東区検出遺構

ａ)鎌倉時代～安土桃山時代(13世紀末～16世紀末)の遺構

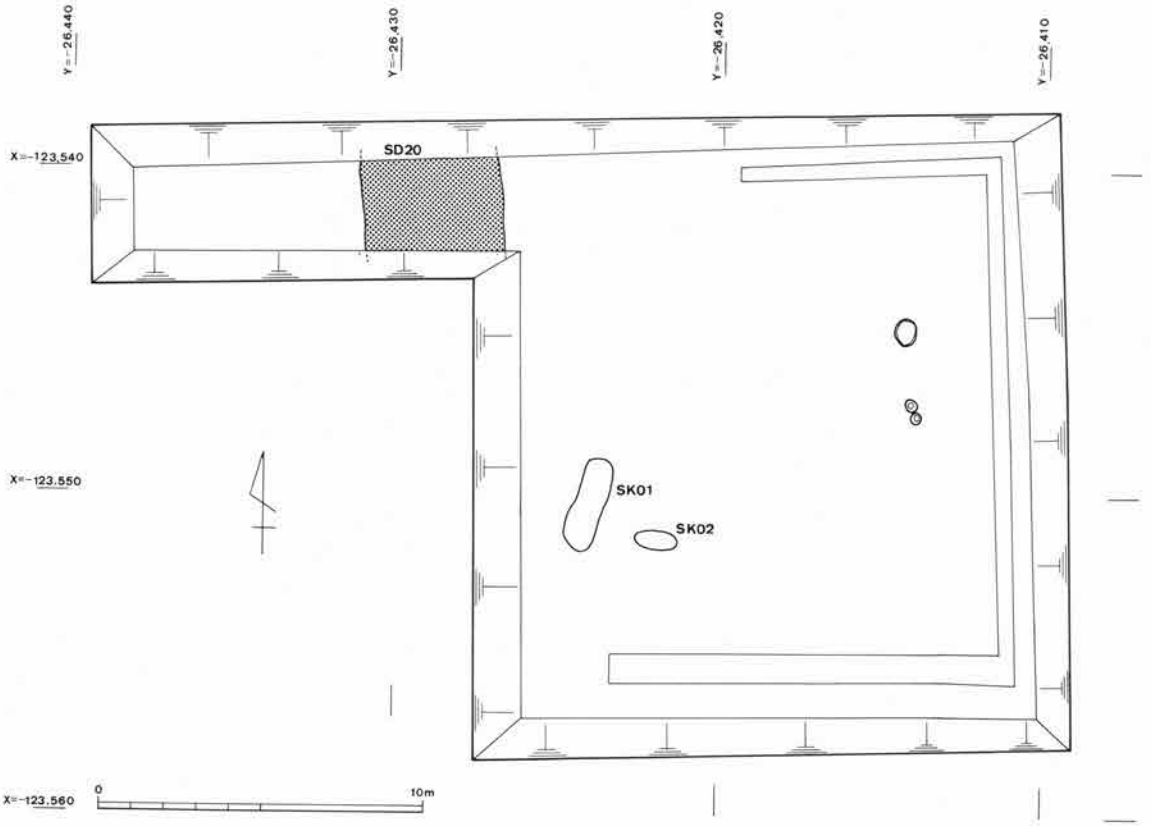
まず、南北方向に走る合計19本の溝および溝状遺構がある。溝はＳＤとし、東側から順にＳＤ01～19で表示した。溝の長さはほとんどのものが調査区いっぱいに検出されている。ＳＤ05を除き、残存する幅は約20cm前後で、深さは約５～10cmである。底面におけるレベル差はほとんどない。溝の中から13世紀後半～14世紀初頭の瓦器椀や、古墳～平安時代の土師器が出土した。埋土は暗青褐色粘質土で、これはベース面とほとんど同色・同質で、乾燥の度合や太陽光線の当り加減でわずかに違いが認識できる程度である。これらは、畑地耕作を示す溝(畝)と考える。

ＳＤ05は、他の溝と比べて方向をやや北東に振り、検出の幅は約50cm・深さ約20cmで規模も大きい。埋め土は暗灰褐色粘質土である。中からは16世紀末の陶器椀や平安時代の土師器や瓦の断片などが出土した。このＳＤ05は、調査区南壁断面では鎌倉時代の溝の遺構面より上位で確認しており、そこから復原すると幅約3.5m以上・深さ約80cmを測る。溝の底が幅約40cm・深さ20cmでさらに深くなっている。調査区内の北半分は、この部分のみが下層の溝と同一面で残る結果となった。この規模からして単なる畑地畝間の溝ではなく、畑地・水田耕作の区画溝あるいは通路の排水溝であろう。この溝は噴砂で切られており、この点については後述したい。

溝状遺構(ＳＸ01)は幅約２～３ｍ・深さ約25cmを測る。両肩の掘形は内側にややオーバーハングし、直に近い立ち上がりを示す。底面は凸凹がなく平坦である。他の溝とは異なり、畑地間の通路のようなものと考えられる。さらにＳＤ01から東側は溝状遺構がなく、噴砂の部分を除けば、



第82図　東区検出遺構配置図（鎌倉～安土桃山時代、トーンはＳＤ05・ＳＸ01の範囲、Ａ～Ｄは土層部位）



第83図　東区検出遺構配置図（古墳時代前期、トーンは流路ＳＤ20）

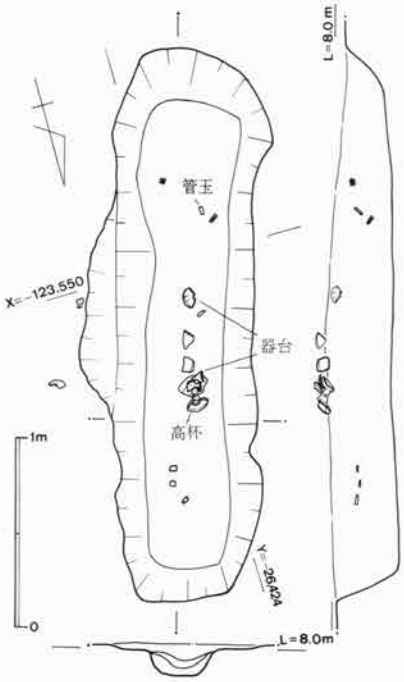
暗青褐色のシルトが厚く堆積している。水田利用された地点に当っているのかもしれない。

何らかの建物を構成する大型の柱穴(Ｐ１～４)が検出された。４基ともほぼ隅丸方形で、一辺約40～50cmを測る。柱材が粘土に置き換わった痕跡はＰ１とＰ２で確認し、それによると柱材の推定径は約20cmである。南西側にいかなる展開を見せるのか不明であるが、倉庫・住居のほか、櫓のような構築物の存在も考慮したい。時期は14世紀から16世紀末である。

b)古墳時代前期の遺構

２基の土坑(ＳＫ)がある。ＳＫ01は長軸2.8m・短軸0.8m・深さ0.4mを測る(第84図)。検出面での形状は不定形な楕円形であるが、下端は隅丸方形に近く、底面は比較的平坦になっている。埋土は、基本的に暗褐色粘質土でベース面(暗青褐色極細砂)との違いは明瞭であった。上層部に高杯・器台などの土師器が、中層部に管玉が１点出土した。土坑の形状・出土遺物から墓壙と見られるが、棺の痕跡は見られなかった。

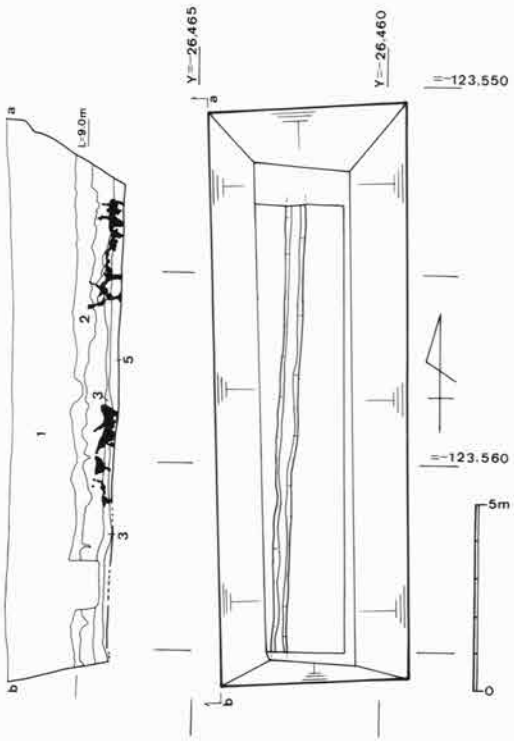
ＳＫ02は、細長い卵形である。長軸1.8m・短軸１m・深さ10～15cmを測る(第83図)。出土遺物はないが、ＳＫ01と同一面から掘り込まれており、古墳時代前期のものである可能性が高い。



第84図　ＳＫ01平・断面図

②西区の検出遺構

東区と同一の遺構面が続いている。暗青褐色粘質土の埋め土をもつ南北方向の溝が１本検出された。方向・規模から畑地の畝溝であろう。この面から下層は青灰色細砂層や、暗橙褐色細砂の盛り上がり(噴砂)などが観察されたが、古墳時代前期の遺構面である暗青灰色砂質土層はなく、下層の遺構・遺物は検出されなかった。



第85図　西区溝検出状況(層の黒部分は噴砂)

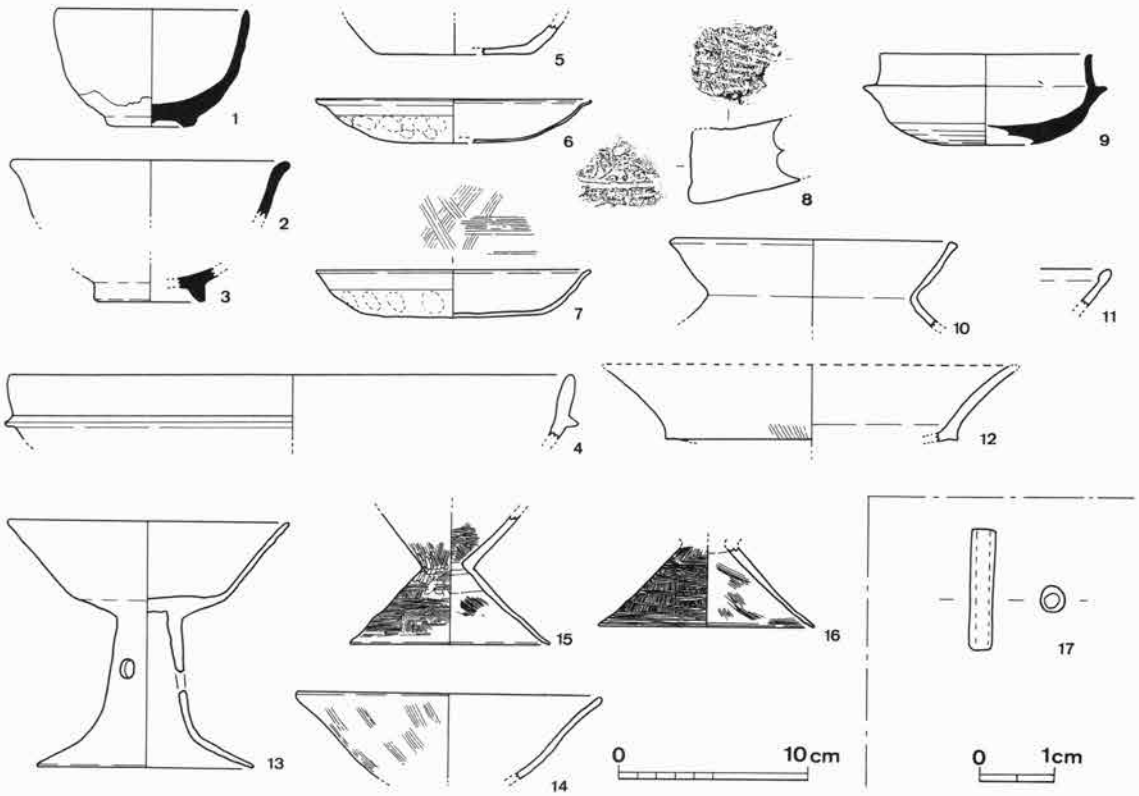
(3)出土遺物

出土遺物は全体に少なく、コンテナ整理箱３箱である。数点の瓦片をのぞき、ほとんどが土器(土師器・須恵器・瓦器)である。砕片が多く、図化できるものは非常に限られており、遺構に伴うものとなると、第86図に示したものがほとんどすべてと言える。

1・8は溝(ＳＤ05)から出土した。1は唐津焼の椀である。体部全体に暗緑褐色の釉薬がかかっている。近世初頭のものである。口径10cm・底径4.5cm・器高6.2cm。8は軒平瓦の断片である。破損が激しく、瓦当部にわずかに唐草文がみられる。平安時代の瓦であろうが、正確な形式や時期は不明である。2～5・7は遺構内ではなく、中・近世の包含層から出土したものである。2は中国製青磁(龍泉窯系)椀の口縁部断片である。14世紀前後のものである。3は中国製の白磁椀の底部断片である。4は大和型炮烙の口縁部断片である。表裏面とも黒褐色である。やや外反する傾きから、比較的浅い体部形となる。5は底部ヘラ切りの土師器杯である。9世紀初頭のものであろう。7は土師器皿である。薄い器壁とやや外反する口縁端部を持つ。11世紀前半のものである。6と12は畑地内の溝(畝)状遺構から出土した。6はＳＤ02、12はＳＤ07から出土。6は土師器皿である。器壁が2㎜程度ときわめて薄く、「て」の字状口縁の形態をもつ。10世紀のものである。12は二重口縁壺の口縁部である。古墳時代前期の布留式のものである。

9～11は中世の遺構面より下位の地層から出土した古墳時代の須恵器と土師器である。遺構に伴わない。9は須恵器杯身の断片で、古墳時代の須恵器はこれ1点のみである。断面は暗赤褐色で、暗青褐色の堅緻な仕上がりである。復原口径および器高は、11.1cm・4.9cmを測る。法量・形態から陶邑編年のＭＴ15型式であろう。10・11は布留式期の土師器甕の口縁部および口縁端部の断片である。ともに薄い器壁で、10は端部がやや肥厚し、11は明瞭な折り返しが認められる。

13～17はＳＫ01から出土した一括資料である。13は土師器高杯である。屈曲して直線的に大きく開く杯部と筒形の脚柱部をもつ。表面の調整は磨耗のため不明である。14も同様の形態をもつ



第86図　出土遺物実測図

高杯の杯部破片である。外面にわずかにハケ目の痕跡が残る。15と16は、上下とも「ハ」の字形に開く土師器器台の断片である。非常に薄い器壁が特徴的である。口縁部外面は細かなハケ目調整の後、精緻なヘラ磨き調整が施されている。これらの器台は布留式期(4世紀中葉)のものと考えている。13・14の高杯もその時期に呼応するものと言える。17は石製管玉である。凝灰岩製とみられ、灰白色である。小形ながら、両面からの穿孔で、ていねいに仕上げられている。長さ約1.6cm・厚み(径)約3mm・重さ0.4g。

(黒坪一樹)

(4)液状化現象の痕跡

木津川河床遺跡における平成12年度の発掘調査で、激しい地震動に伴う液状化現象の痕跡が検出された。液状化した地層から上昇した噴砂の通り道である「砂脈」が、数多く検出されているが、第87・88図には、代表例として発掘区の南東隅と北東隅に発達する砂脈の平面形を示した。

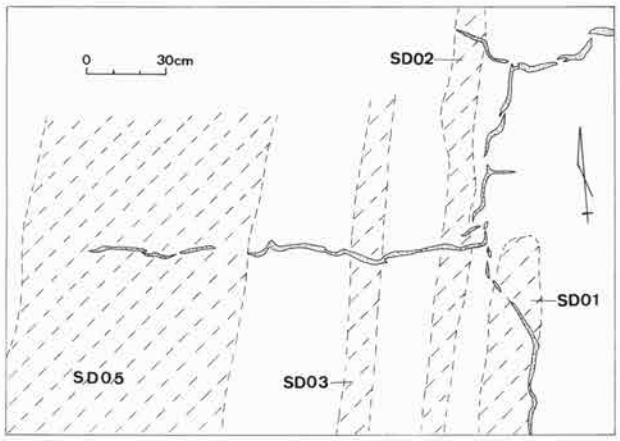
第87図(南東隅)では、最大幅2cmの砂脈が東西および南北方向にのびており、内部は極細粒砂で満たされていた。砂脈は南北方向にのびる溝を埋土も含めて引き裂いていたが、一部(図の右側)は溝に沿って分布していた。溝に沿う砂脈は、溝跡を地質的な弱線として利用したものと思える。

第88図1(北東隅)では、複雑に枝分かれした砂脈群が、おおむね東西方向に発達しており、最大幅4cmの砂脈内部は極細粒砂で満たされていた。砂脈は、南北方向にのびる複数の溝と埋土を引き裂いており、溝が埋積された後に生じた地震の産物と分かる。

第88図1の砂脈に直交するトレンチを掘削して地層を観察した(第88図2)が、説明の便宜上、地層をⅠ～Ⅷ層に区分した。これによると、Ⅰ層の上部は褐色のシルトで下部は褐色～灰色のシルト～極細粒砂、Ⅱ層は灰色の極細粒砂を含むシルト、Ⅲ層は褐色～灰色の極細粒砂～シルト、Ⅳ層は褐色の極細粒砂、Ⅴ層は灰色のシルト～極細粒砂、Ⅵ層は赤褐色の極細粒砂、Ⅶ層は灰色のシルト、Ⅷ層は極細粒砂～細粒砂である。Ⅳ・Ⅵ・Ⅷの各層で液状化が生じている。第88図1に示した砂脈に噴砂を供給したのは主に、Ⅳ層で、第88図2でも砂脈の下端が、Ⅳ層まで達したものが多い。ただし、図の右端ではⅥ層から生じた砂脈群が斜め方向に走り、Ⅰ層の途中まで上昇している。Ⅷ層から上昇した砂脈は認められないが、Ⅷ層の最上部では、Ⅶ層中に突き上げるような構造(柱状構造など)が顕著に認められ、Ⅷ層でも液状化が生じたことがわかる。

第88図4は液状化した砂層の粒度組成を示したものである。Ⅳ層中の①が、Ⅷ層中の②より、細かい粒子が多くなっている。図にAとして図示したのは、日本港湾協会の基準(注5)で“特に液状化の可能性あり”とされている範囲である。このことから、①・②とも最も液状化しやすい粒度組成を示しているが、Aゾーンの中心に近い②の方が、①よりさらに液状化しやすい組成である。

第88図3の左端は、第88図2の左端から南および東に、それぞれ約1.5m隔たった位置にある。ここでは、当発掘区で最も幅広い砂脈(最大幅11cm)が発達している。第88図3で示した地層は、第88図2よりはるかに単純になり、上部が極細粒砂を含むシルト(第88図2のⅦ層より上位の地



第87図　砂脈の平面図(東区南東隅)

層に対応)、中～下部が極細粒砂で下方に細粒砂が含まれている(第88図２のⅦ層に対応)。ここでも、説明の便宜上、上部の地層をⅦ'層、中～下部の全体をⅧ層とし、Ⅷ１層(厚さ約10cm)とⅧ２層(厚さ約７cm)を区別して図示した。

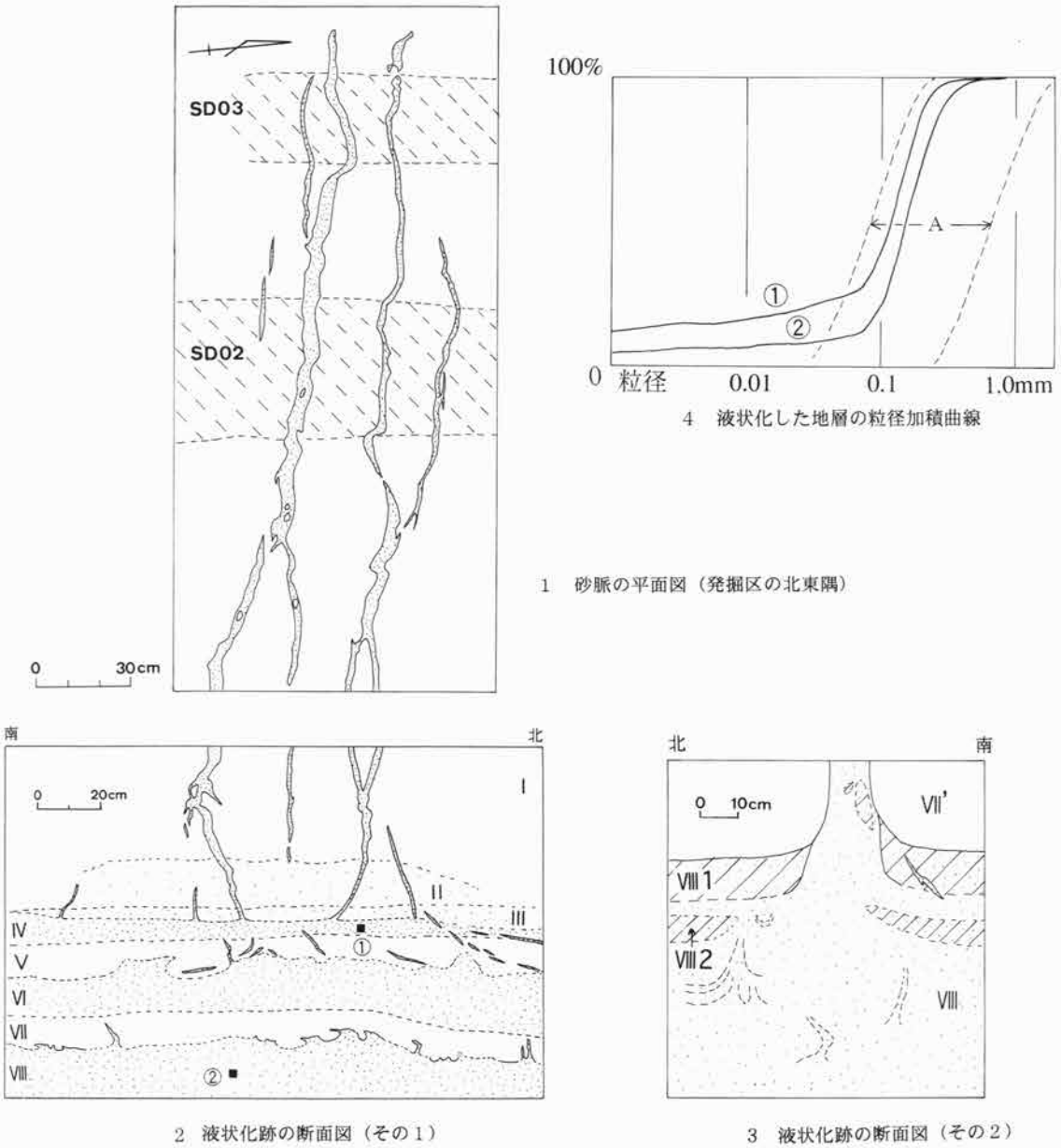
第88図３のⅧ層で液状化が生じているが、最上部のⅧ１層には液状化が生じておらず、砂脈はⅦ'層とⅧ１層とを引き裂いて上昇している。また、Ⅷ２層も流動した形跡が認められず、当初はⅧ１層と一体だったものが、上下に分断された可能性がある。それ以外のⅧ層は激しく液状化し、柱状構造・皿状構造など液状化した地層に特有な構造(模様)が残っている。

これまでに各地で観察された事例から、液状化し易い粒度組成の砂層を地下水が満たし、数10cmから１mの厚さの、水を通しにくい地層(シルト～粘土層)が覆っている場合に、最も液状化が生じやすいことがわかっており、今回の発掘区もこの条件を満たしている。第88図２の例では、液状化した砂層が３層に分断されているため、各それぞれの地層での液状化はさほど激しくなく、細い砂脈が複雑に絡み合った繊細な分布形態を示している。第88図３になると地質の状態が単純で、激しく液状化した砂層から幅広い一本の砂脈が真上に上昇している。第88図３ではⅦ'層とⅧ層の境界より下から砂脈が発達しているが、当時の地下水位・震動などの条件から、境界より少し下で、最も強い液状化が生じたものと考える。いずれにしろ、近接した位置でも地層の堆積状態によって液状化にともなう地変の形態が微妙に異なることがわかる。

今回検出された砂脈は、おおむね南北方向に平行する溝跡および埋土を引き裂いている。また、溝の埋土からは中世の遺物が検出されており、一部は安土桃山時代の唐津焼の椀(第86図１)を含んでいる(注6)。このことから、液状化の原因となった大地震は、安土桃山時代を含めてそれ以降に限定される。

このような年代で、当遺跡地域に最も激しい地震動をもたらしたのは、文禄５・慶長元(1596)年９月５日に生じた「伏見地震」である。『言経卿記』には「山崎、事外相損、家悉崩了、死人不知数了。八幡在所、是又家悉崩了」と書かれ、当遺跡周辺で家が悉く崩れるほどの被害が生じている(注7)。また、この地震は有馬―高槻構造線活断層系をはじめ京都から淡路島にいたる多くの活断層が活動して引き起こしたM(マグニチュード)８近い大地震(注8)で、京阪神から淡路島にかけての多くの遺跡で顕著な地震の痕跡が検出されている(注9)。この中でも、木津川河床遺跡における最近十数年間の調査で特に明瞭な液状化跡が発見されており(注10)、今回検出された痕跡も伏見地震によって生じた可能性が高い。

(寒川　旭)



1 砂脈の平面図（発掘区の北東隅）

4 液状化した地層の粒径加積曲線

2 液状化跡の断面図（その1）

3 液状化跡の断面図（その2）

第88図 液状化跡(東区北東隅)の分析

(5)まとめ

今回の調査では、大きく3つの成果が上がった。第1は、地震による液状化による噴砂が、16世紀末頃の唐津焼の椀を出土した溝(SD05)の肩部を裂き、埋土内にも達していたことで、この溝が伏見地震直前に埋まったものである可能性が生じたことである。また、噴砂の発生しやすい地盤(土質・堆積状況など)が追認された。液状化した地層から噴出した砂脈の詳細な観察・記録による貴重な成果である。

第2は、鎌倉時代(13世紀末～14世紀初頭)の畑地耕作に伴う南北方向の溝(畝)状遺構や、通路状遺構(SX01)などが検出され、柱穴も検出された。当時の土地利用としては、畑地および水田利用が主たるものであることがわかったことである。

第3は、古墳時代前期の土坑が検出され、平面および底面の形状や規模、さらに出土遺物の内

容などから埋葬遺構である可能性が指摘される点である。土師器の高杯・器台および管玉は墓壙が完全に埋められた後に供えられたものと考える。木津川河床遺跡では古墳時代前期の墓域はもとより、墓壙と見られる遺構もこれまで確認されていない。調査地の南側に墓域の広がりも予想され、将来の調査においては注意が必要であろう。

（黒坪一樹）

注１　森下　衛・上田真一郎・陣内高志「木津川河床遺跡平成10年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第88冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1999

注２　**調査補助員**　上田真一郎・高橋あかね　**整理員**　松下道子・及川あや子・西脇夏海

注３　日下雅義・青木哲哉「中世の淀川流域復原」（『週刊朝日百科日本の歴史20中世Ⅱ　琵琶湖と淀の水系』）　1986、ｐ５～276

注４　植村善博「変わりゆく景観⑪山崎地狭部の地形と土地利用」（『地理』第29巻第７号）　1984

注５　日本港湾協会『港湾施設の技術上の基準・同解説』　1979

注６　中世の出土遺物については、当調査研究センターの伊野近富から教示を得た。

注７　文部省震災予防評議会編『増訂大日本地震史料』第１巻　鳴鳳社　1941

注８　宇佐美龍夫『新編日本被害地震総』増補改訂版　東大出版会　1996

注９　地質工業技術院地質調査所が実施した活断層のトレンチ調査による。

注10　寒川　旭・岩松　保・黒坪一樹「京都府木津川河床遺跡において認められた地震跡」（『地震』40）1987、ｐ575～583

岩松　保・寒川　旭「八幡市木津川河床遺跡検出の大地震に伴う噴砂について」（『京都府埋蔵文化財情報』第26号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1987、ｐ９～17

寒川　旭・大草重康・岩松　保「木津川河床遺跡の発掘調査(1988年度)において検出された地震の液状化跡」（『考古学と自然科学』22）　1990、ｐ103～111

竹井治雄「木津川河床遺跡平成元年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第38冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1990

小池　寛「木津川河床遺跡平成３年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第49冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1992

赤松一秀「木津川河床遺跡試掘調査概要」（『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』17　八幡市教育委員会）　1995

森下　衛・上田真一郎「木津川河床遺跡の地震痕跡」（『京都府埋蔵文化財情報』第72号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1999、ｐ１～８など

図　　版

図版第１　シリガイ古墳群

(1)シリガイ１号墳試掘トレンチ
（北北東から）

(2)シリガイ２号墳試掘トレンチ
（北から）

(3)シリガイ２・３号墳試掘
トレンチ（北北東から）

図版第２　シリガイ古墳群

(1)シリガイ４号墳試掘トレンチ
（東南から）

(2)シリガイ５号墳試掘トレンチ
（南西から）

(3)シリガイ６号墳試掘トレンチ
（北東から）

図版第３　シリガイ古墳群

(1)シリガイ７号墳試掘トレンチ
（南東から）

(2)シリガイ７号墳試掘トレンチ
（北東から）

(3)シリガイ８号墳試掘トレンチ
（北東から）

図版第４　東禅寺古墳群

(1)東禅寺１号墳主体部検出状況
（北西から）

(2)東禅寺３号墳主体部検出状況
（南東から）

(3)東禅寺１号墳土師器高杯出土
状況（西から）

図版第５　エノク経塚群

(1)エノク経塚群塚ＳＸ01検出状況
（北北東から）

(2)エノク経塚群塚ＳＸ01検出状況
（北東から）

(3)エノク経塚群塚ＳＸ01検出状況
（北東から）

図版第６　エノク経塚群

(1)エノク経塚群塚ＳＸ01遺物出土状況（北東から）

(2)エノク経塚群塚ＳＸ01東西土層図（北北東から）

(3)エノク経塚群経塚検出状況（南から）

図版第７　エノク経塚群

(1)エノク経塚群経塚ＳＸ02閉塞
石組検出状況（南から）

(2)エノク経塚群経塚ＳＸ02
外容器検出状況（南から）

(3)エノク経塚群経塚ＳＸ02平石
検出状況（南から）

図版第８　エノク経塚群

(1)エノク経塚群経塚ＳＸ03閉塞
石組検出状況（南西から）

(2)エノク経塚群経塚ＳＸ03閉塞
検出状況（南西から）

(3)エノク経塚群経塚ＳＸ03外容器
検出状況（南西から）

図版第９　エノク経塚群

(1)エノク経塚群経塚ＳＸ04閉塞
石組検出状況（北東から）

(2)エノク経塚群経塚ＳＸ04閉塞
石検出状況（北東から）

(3)エノク経塚群経塚ＳＸ04外容器
検出状況（北東から）

図版第10　エノク経塚群

(1)エノク経塚群経塚ＳＸ05閉塞
石組検出状況（西南西から）

(2)エノク経塚群経塚ＳＸ05外容器
検出状況（南西から）

(3)エノク経塚群経塚ＳＸ05外容器
裏込石状況（南西から）

図版第11　エノク経塚群

7

6

10

9

8

11

エノク経塚群出土遺物(1)　第17図の番号に一致

4

4・5

5

13　14

12

エノク経塚群出土遺物(2)　第17・18図の番号に一致

図版第13　南稲葉遺跡第２次

(1)南稲葉遺跡全景（南から：北東は安国寺町集落）

(2)南稲葉遺跡調査区全景（南西から）

図版第14　南稲葉遺跡第２次

(1)南稲葉遺跡調査区谷部全景
（東から）

(2)南稲葉遺跡調査区縁辺部
（東から）

(3)南稲葉遺跡谷部柱穴群
（南から）

図版第15　南稲葉遺跡第２次

(1)南稲葉遺跡竪穴式住居跡１・２
（東から）

(2)南稲葉遺跡竪穴式住居跡３
（北西から）

(3)南稲葉遺跡竪穴式住居跡３
竈部（北西から）

図版第16　南稲葉遺跡第２次

(1)南稲葉遺跡土坑１全景
（南東から）

(2)南稲葉遺跡土坑１土器出土状況
（西から）

(3)南稲葉遺跡土坑１竈形土器
出土状況（北東から）

図版第17　南稲葉遺跡第２次

(1)南稲葉遺跡土坑１土器出土状況
（東から）

(2)南稲葉遺跡土坑１竈形土器
底部（南から）

(3)南稲葉遺跡土坑１須恵器壺
（南東から）

図版第18　南稲葉遺跡第２次

(1)南稲葉遺跡土坑１土器出土状況
（南から）

(2)南稲葉遺跡土坑１底部竈形土器
（南から）

(3)南稲葉遺跡土坑１土器除去状況
（南から）

図版第19　南稲葉遺跡第２次

(1)南稲葉遺跡土坑１西側テラス部
完掘状況（東から）

(2)南稲葉遺跡土坑１完掘状況
（西から）

(3)南稲葉遺跡土坑１小土坑内
須恵器出土状況（南東から）

図版第20　南稲葉遺跡第２次

(1)南稲葉遺跡谷部土層断面
（南から）

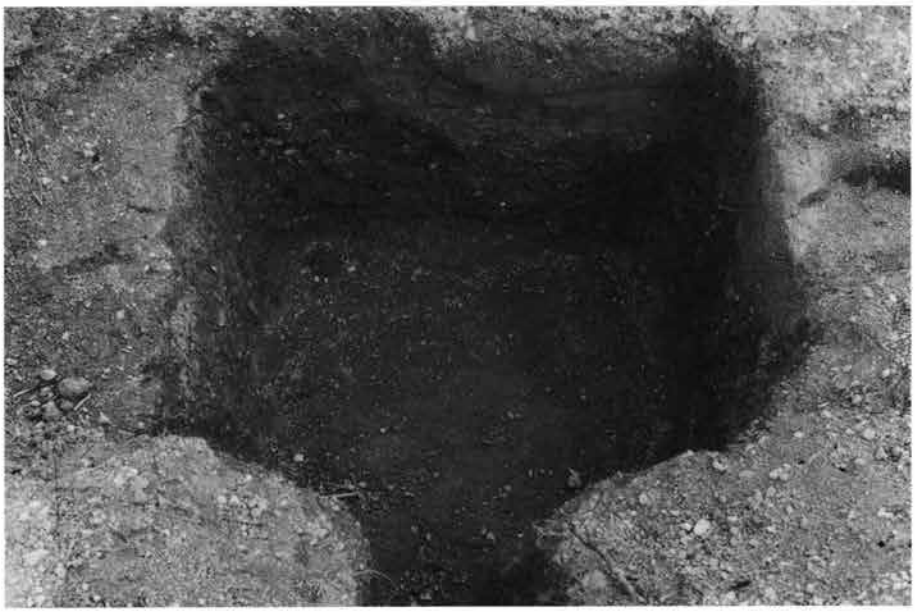
(2)南稲葉遺跡谷部土層断面アップ
（西から）

(3)南稲葉遺跡谷部土馬出土状況
（南から）

図版第21　南稲葉遺跡第２次

(1)南稲葉遺跡調査区完掘状況
（南西から）

(2)南稲葉遺跡北西丘陵部掘削状況
（南から）



(3)南稲葉遺跡北西丘陵部近世土坑
（南から）

図版第22　南稲葉遺跡第２次

(1)南稲葉遺跡掘削風景（東から）

(2)南稲葉遺跡北側丘陵部掘削状況（西から）

(3)南稲葉遺跡北西側丘陵部掘削状況（北から）

図版第23　南稲葉遺跡第２次

26－9

27－5

26－22

28－2

26－13

28－16

26－4

28－19

28－8

28－20

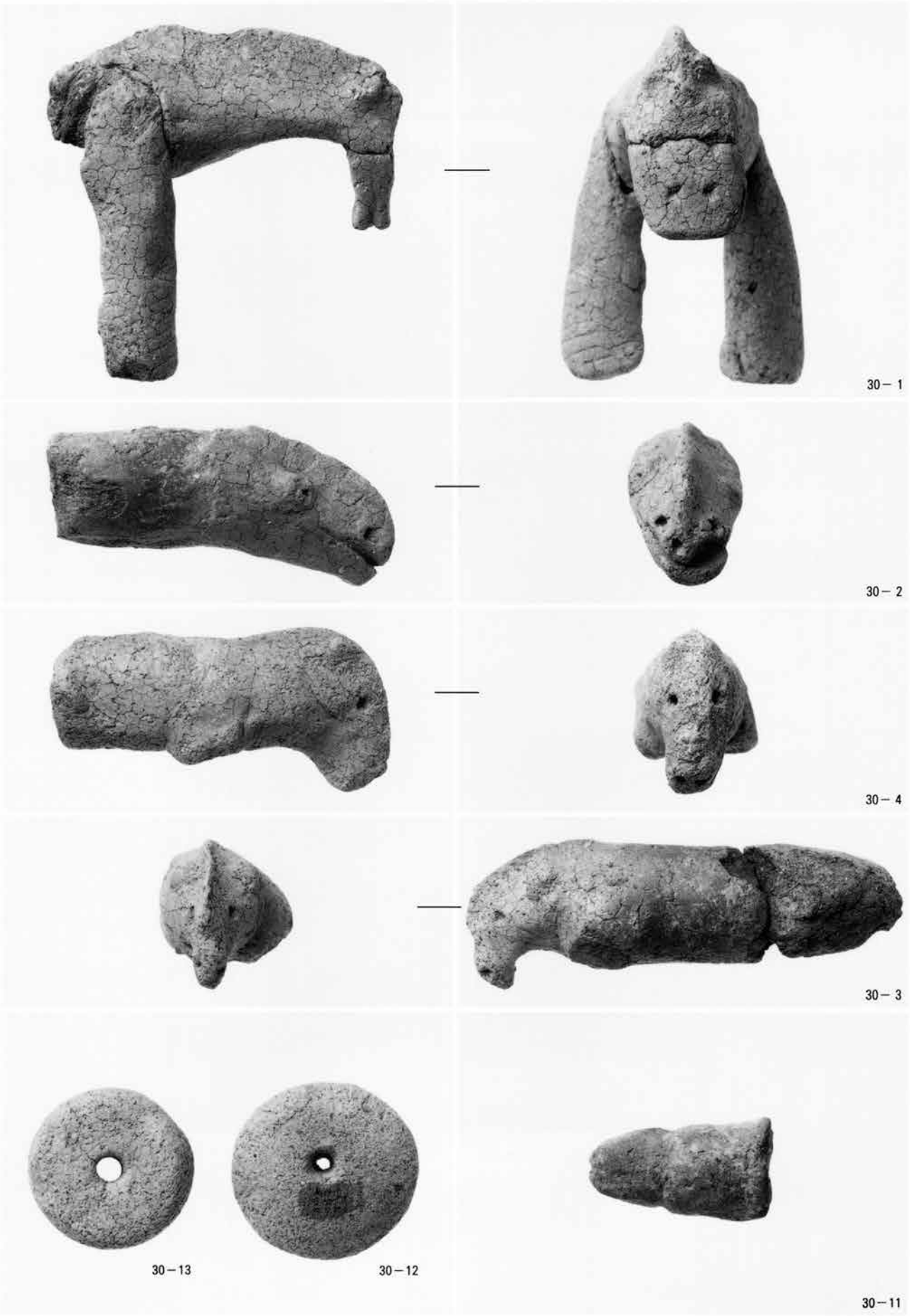
26－5

27－8

26－19

南稲葉遺跡出土土器（番号は図に対応）

図版第24　南稲葉遺跡第２次



南稲葉遺跡出土土製品（番号は図に対応）

図版第25　善願寺遺跡第２次

(1)善願寺遺跡全景（北東上空から園部盆地を望む）

(2)善願寺遺跡全景（北上空から）

図版第26　善願寺遺跡第２次

(1)善願寺遺跡全景
（上空から、上が西）

(2)Ｐ14～16トレンチ全景
（上空から、上が西）

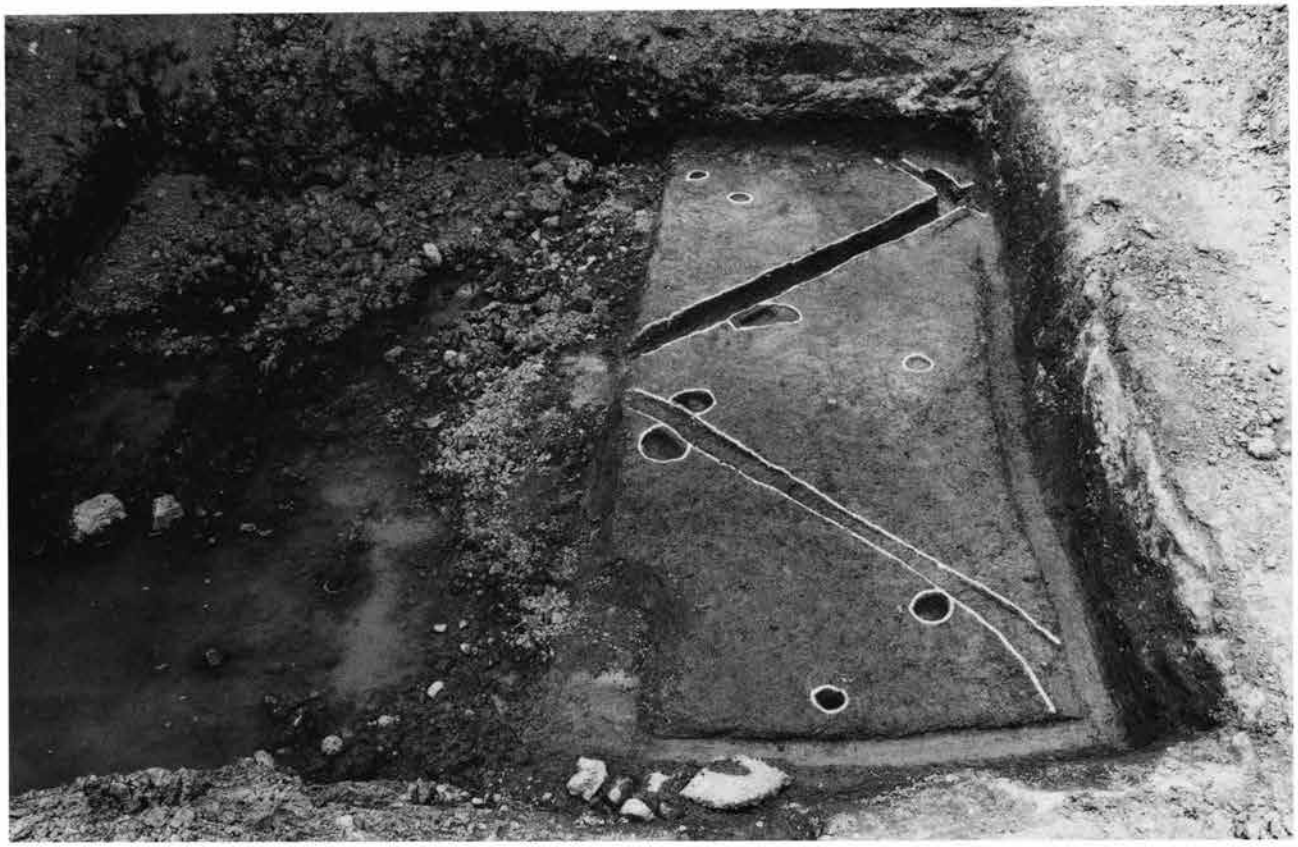
(3)Ｐ11・12トレンチ全景
（上空から、上が西）

図版第27　善願寺遺跡第２次

(1)調査前全景（北から）

(2)調査前全景（南から）

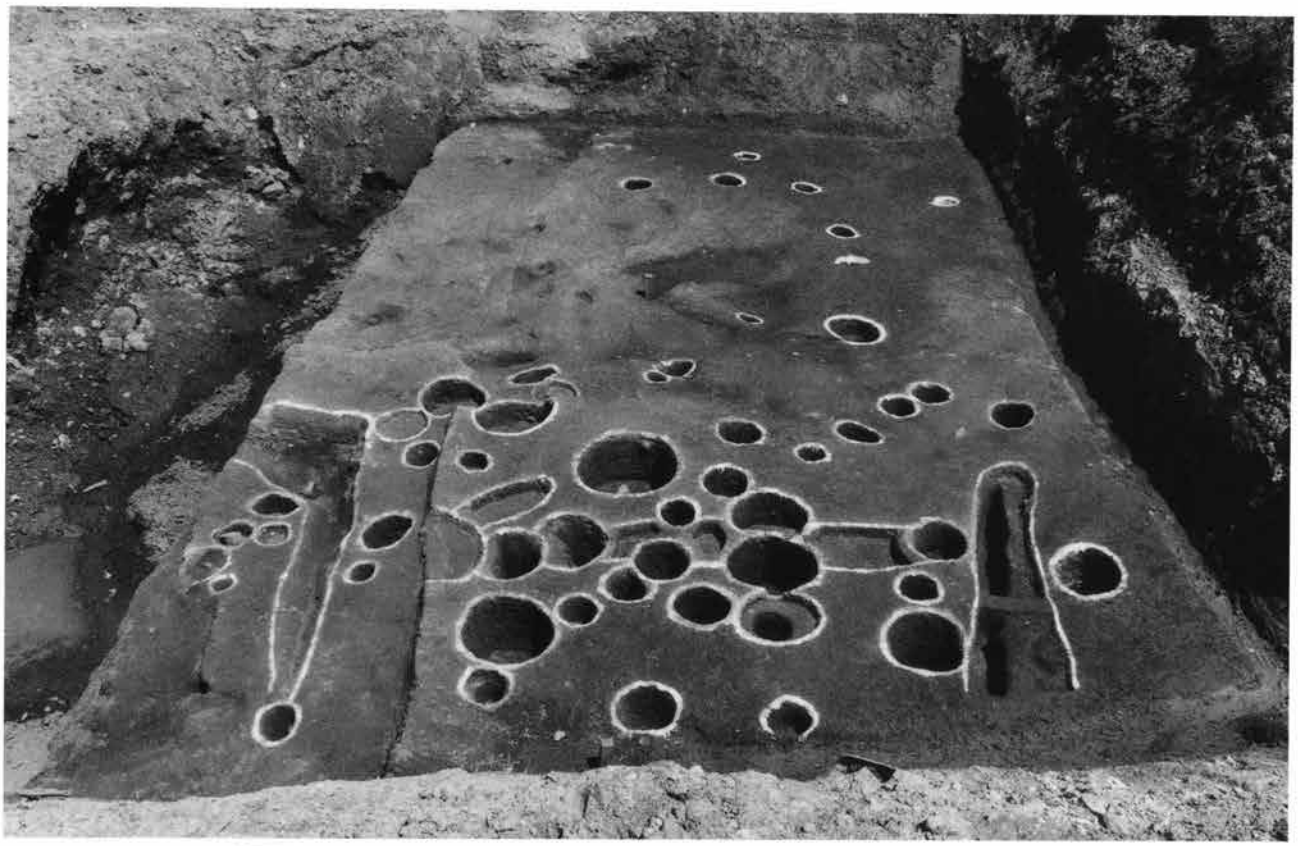
図版第28　善願寺遺跡第２次



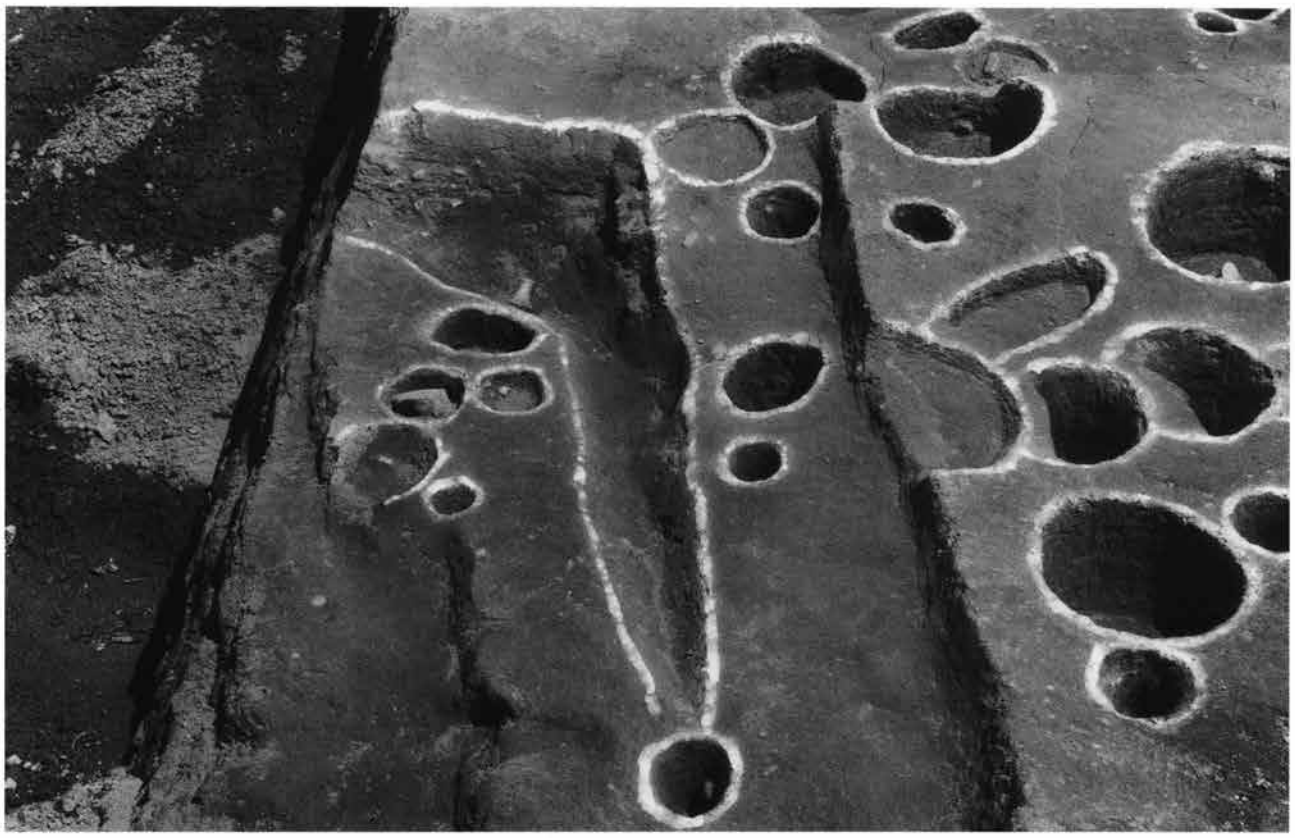
(1)Ｐ16トレンチ遺構検出状況（南から）

(2)Ｐ15トレンチ遺構検出状況（南から）

図版第29　善願寺遺跡第２次



(1)Ｐ14トレンチ遺構検出状況（南から）



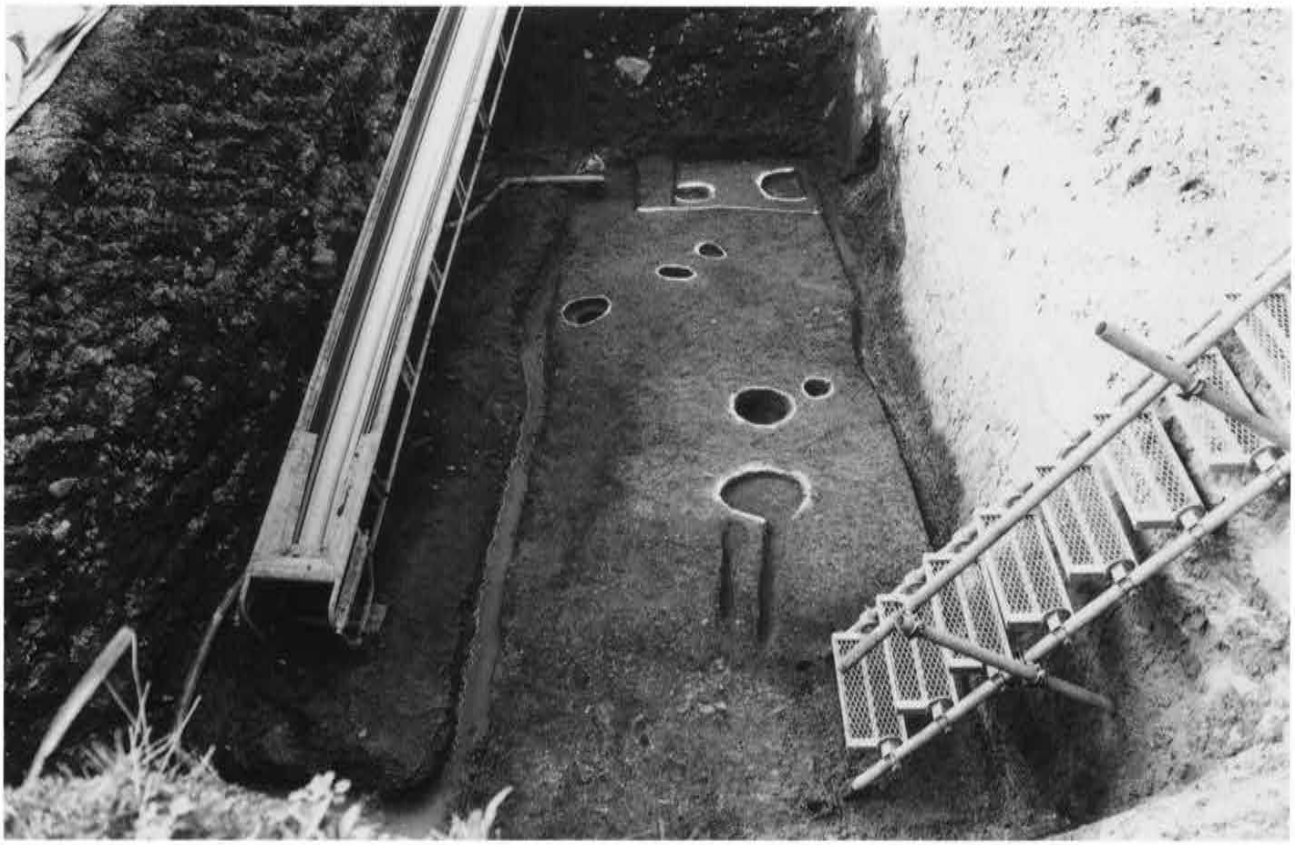
(2)竪穴式住居跡ＳＨ1401検出状況（南から）

図版第30　善願寺遺跡第２次

(1)Ｐ12トレンチ遺構検出状況（南から）

(2)Ｐ12トレンチ断ち割り状況（北から）

図版第31　善願寺遺跡第２次



(1)Ｐ11トレンチ遺構検出状況（南から）

(2)Ｐ17トレンチ掘削状況（西から）

図版第32　善願寺遺跡第２次

(1)Ｐ10トレンチ掘削状況（北から）

(2)作業風景（南から）

図版第33　池上遺跡第７次

(1)調査地遠景（南上空から）

(2)調査地遠景（北上空から）

図版第34　池上遺跡第７次

(1)第１・２トレンチ全景（上が北）

(2)第１トレンチ南側（上が北）

図版第35　池上遺跡第７次

(1)調査前風景（北西から）

(2)重機掘削作業風景（北から）

(3)第１トレンチ重機掘削後精査前風景（北から）

図版第36　池上遺跡第７次

(1)試掘トレンチＡ遺構検出状況
（南から）

(2)試掘トレンチＢ遺構検出状況
（北から）

(3)試掘トレンチＣ遺構検出状況
（西から）

図版第37　池上遺跡第７次

(1)試掘トレンチＡ遺構掘削作業
（南から）

(2)第２トレンチ遺構精査作業
（南から）

(3)第２トレンチ全景（北から）

図版第38　池上遺跡第７次

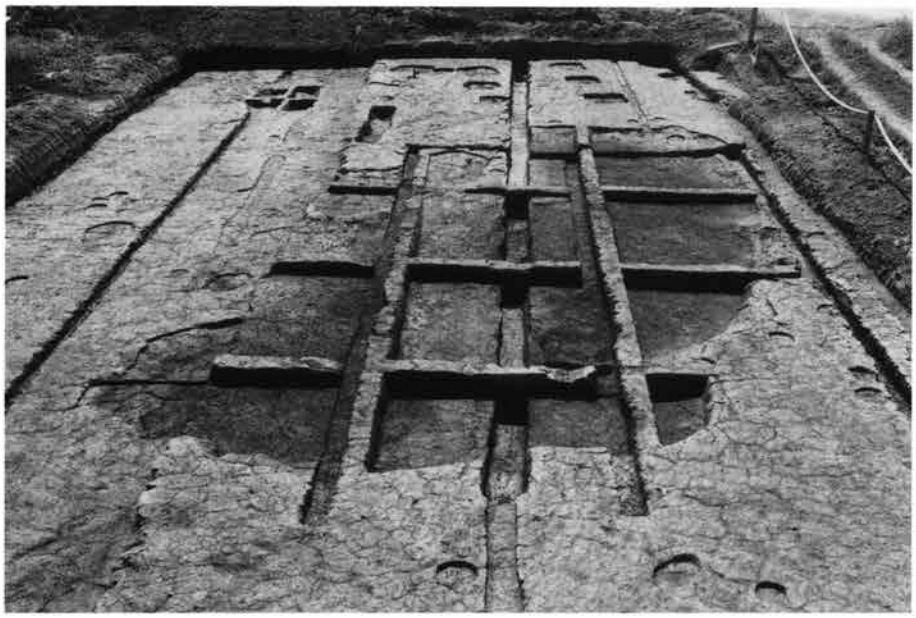
(1)試掘トレンチＡ検出遺構
（南東から）

(2)第１トレンチ溝ＳＤ13検出状況
（南から）

(3)第１トレンチ南端部遺構掘削
風景（南東から）

図版第39　池上遺跡第７次

(1)第１トレンチ南側遺構検出状況
（北から）



(2)大型土坑ＳＸ24検出時全景
（北から）

(3)大型土坑ＳＸ24作業風景
（北西から）

(1)土器（No.97）出土状況
（南から）

(2)土器（No.87）出土状況
（東から）

(3)土器（No.57・62）出土状況
（北から）

図版第41　池上遺跡第７次

(1)大型土坑ＳＸ24全景（北から）

(2)大型土坑ＳＸ24断面（東から）

(3)溝ＳＤ31断面（東から）

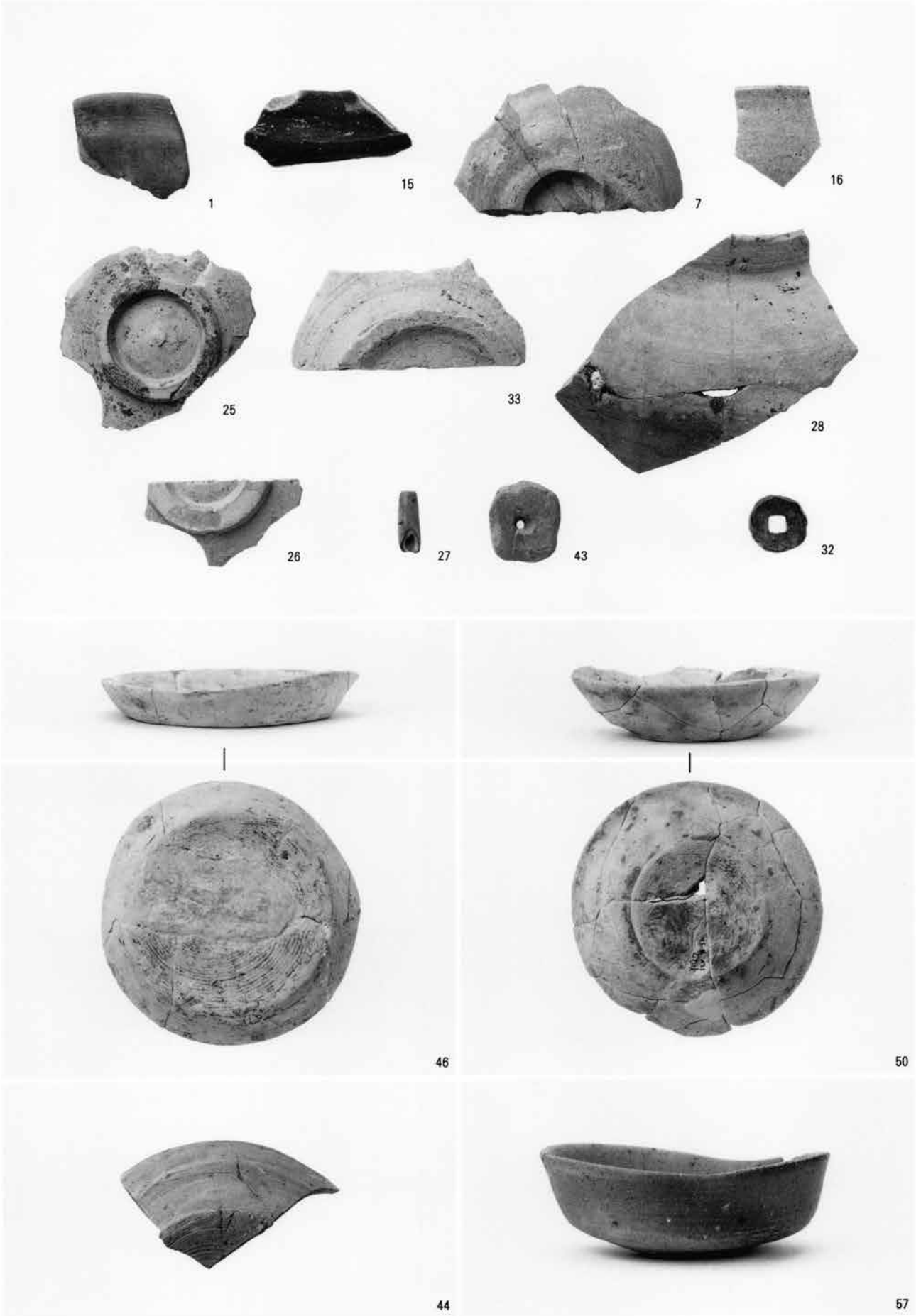
図版第42　池上遺跡第７次

(1)掘立柱建物跡ＳＢ01検出状況（南から）

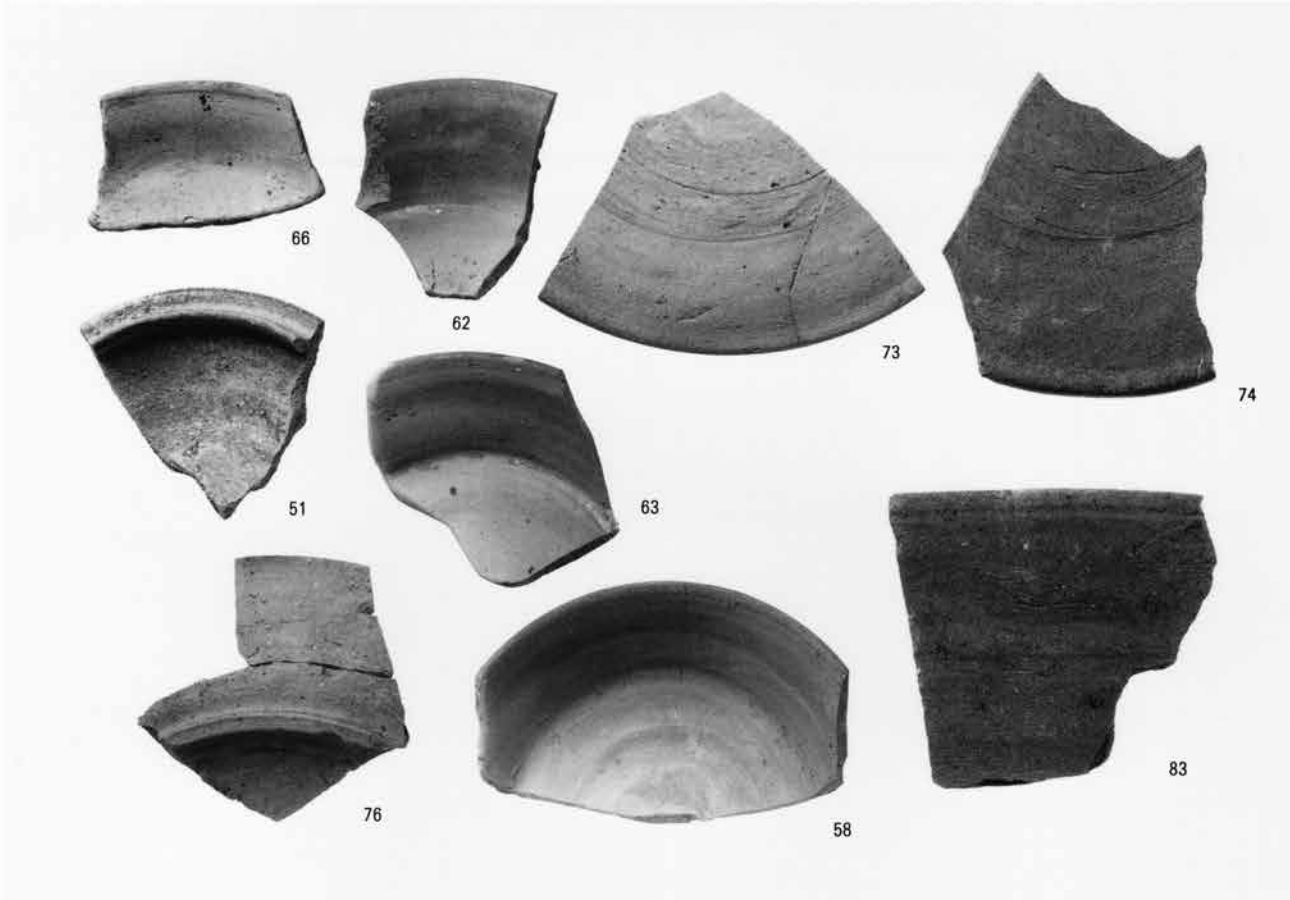
(2)掘立柱建物跡ＳＢ01掘削作業風景（南西から）

(3)柱穴10断面（北から）

図版第43　池上遺跡第７次



出土遺物(1)



出土遺物(2)

図版第45　半木町遺跡

(1)調査地全景（南から）

(2)A地区調査風景（南から）

(3)B地区調査風景（北から）

図版第46　半木町遺跡

(1)A地区全景（南から）

(2)A地区調査後の全景（西から）

(3)A地区調査後の風景（北西から）

図版第47　半木町遺跡

(1)A地区遺構検出状況（西から）

(2)A地区検出遺構（西から）

(3)A地区検出遺構（北東から）

(1)Ｂ地区作業風景（東から）

(2)ＧＰＳによる基準点測量
（Ａ地区、北東から）

(3)土層断面図作成のための基準点
設置風景（Ｂ地区、南から）

図版第49　半木町遺跡

(1)B地区全景（南から）

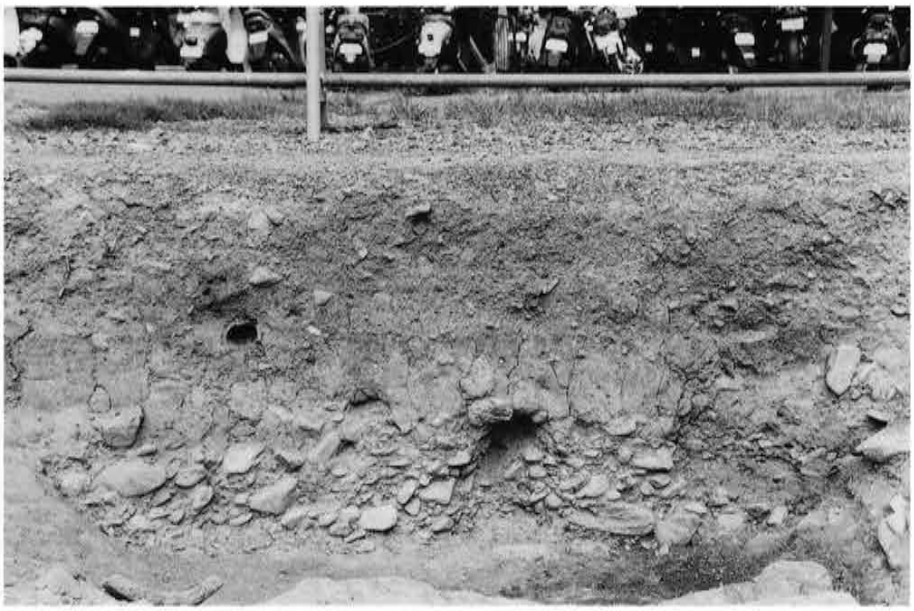
(2)B地区調査後全景（南西から）

(3)B地区調査後全景（南東から）

図版第50　半木町遺跡

(1)Ｂ地区ＳＫ04検出状況（東から）

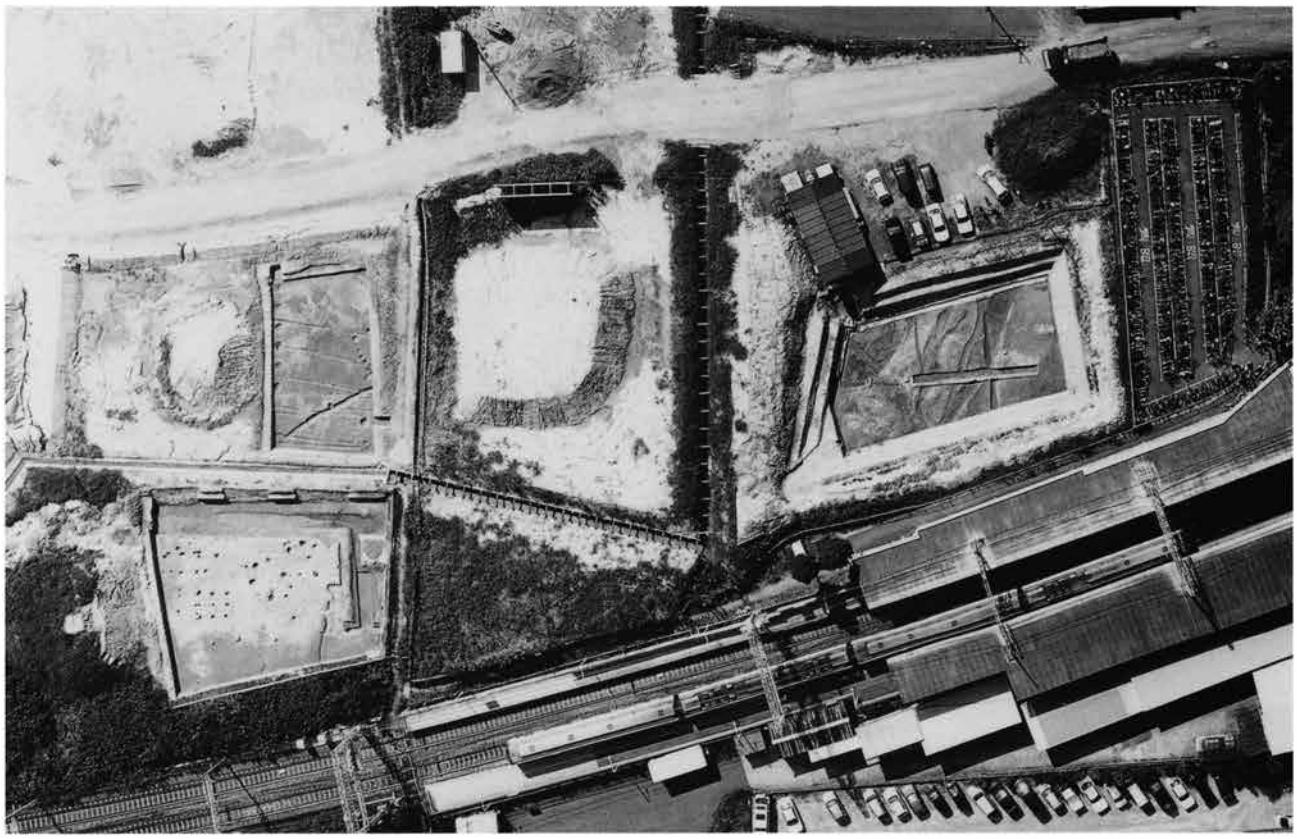
(2)Ａ地区土層の堆積状況（西から）



(3)Ｂ地区土層の堆積状況（西から）

図版第51　三山木遺跡第３次

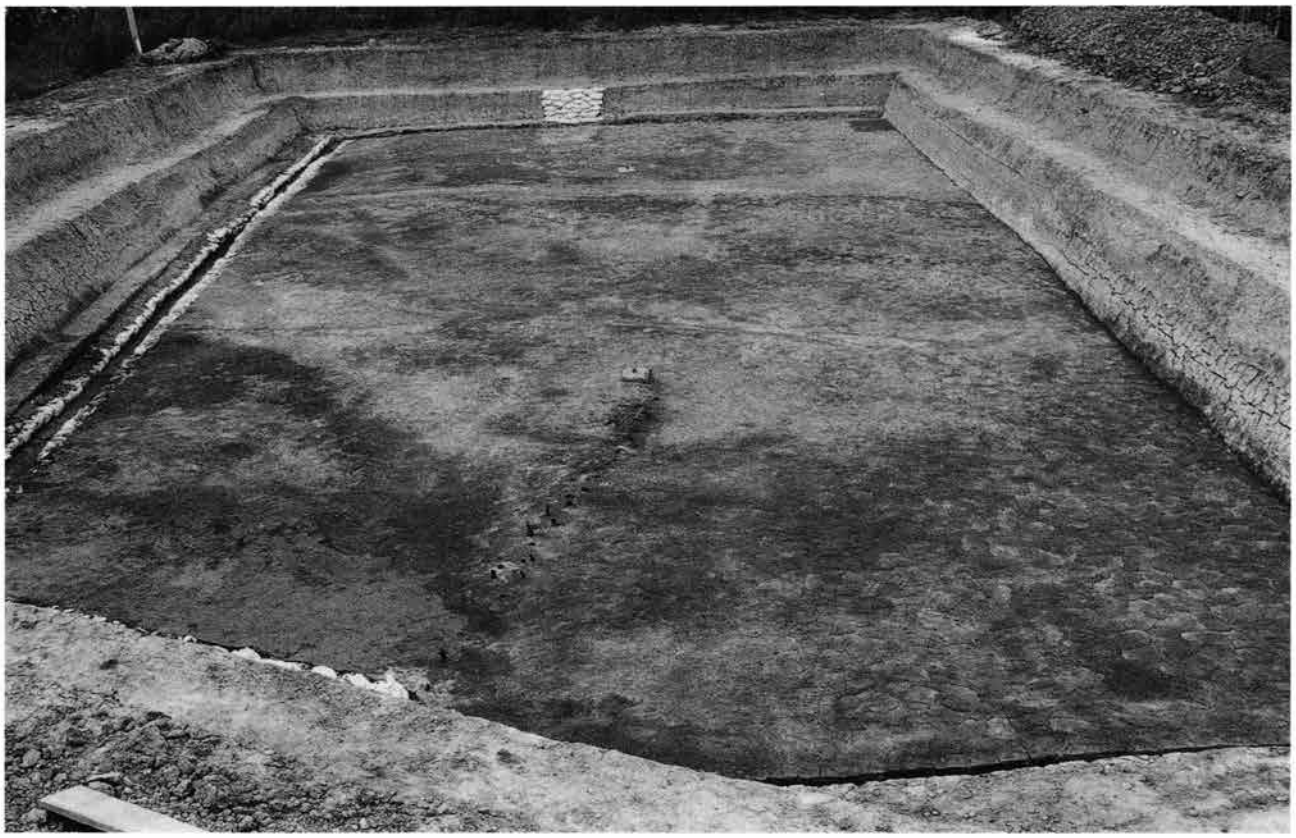
(1)三山木遺跡全景（北上空から）



(2)調査地全景（上空から）

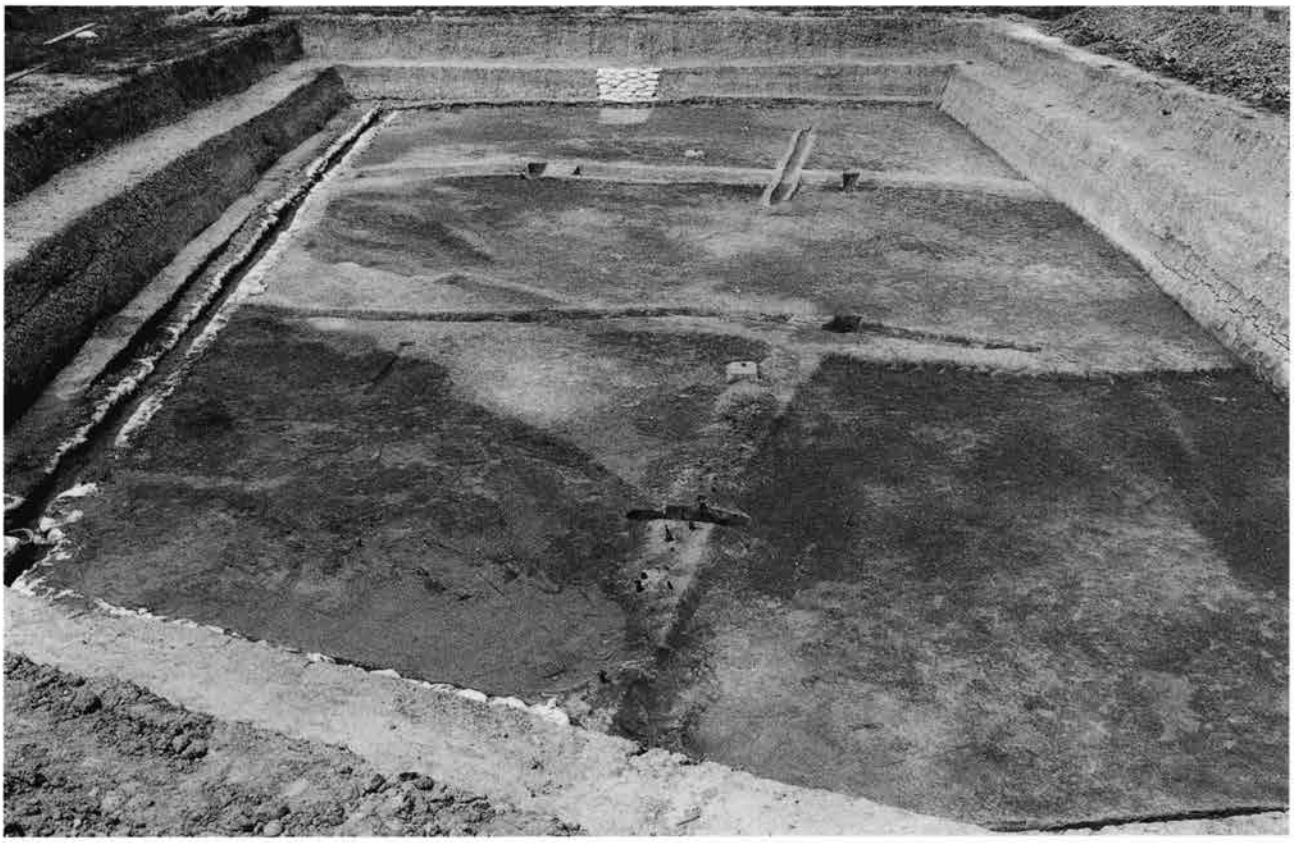
図版第52　三山木遺跡第３次

(1)第１トレンチ完掘状況（南東から）

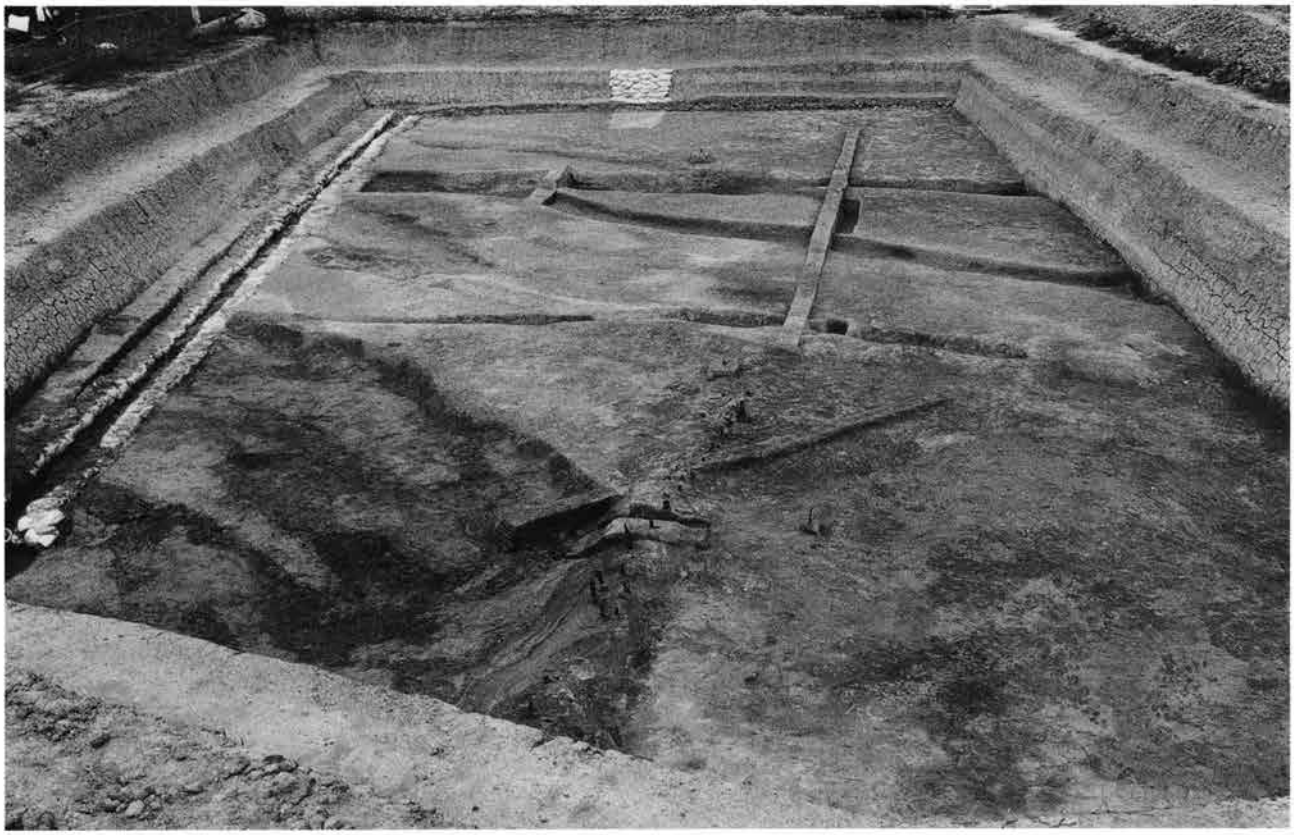


(2)第２トレンチ遺構検出状況（南から）

図版第53　三山木遺跡第３次



(1)第２トレンチ上層遺構（南から）



(2)第２トレンチ上層遺構（南から）

図版第54　三山木遺跡第３次

(1)第２トレンチ下層遺構（北西から）

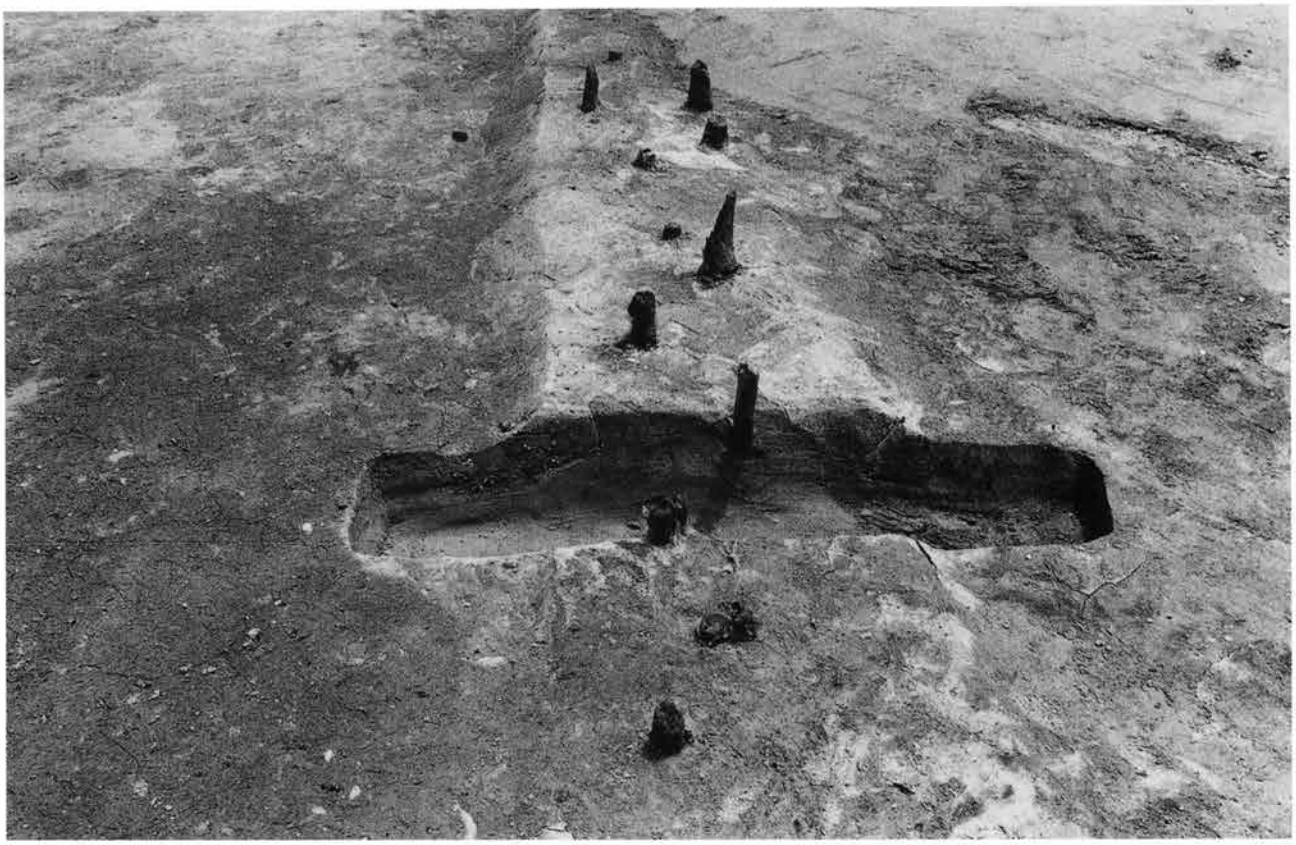
(2)第２トレンチＳＤ03～06近景（東から）

図版第55　三山木遺跡第３次

(1)第２トレンチＳＤ03と畦断ち割り状況（東から）

(2)第２トレンチ南西隅断ち割り状況（北から）

図版第56　三山木遺跡第３次

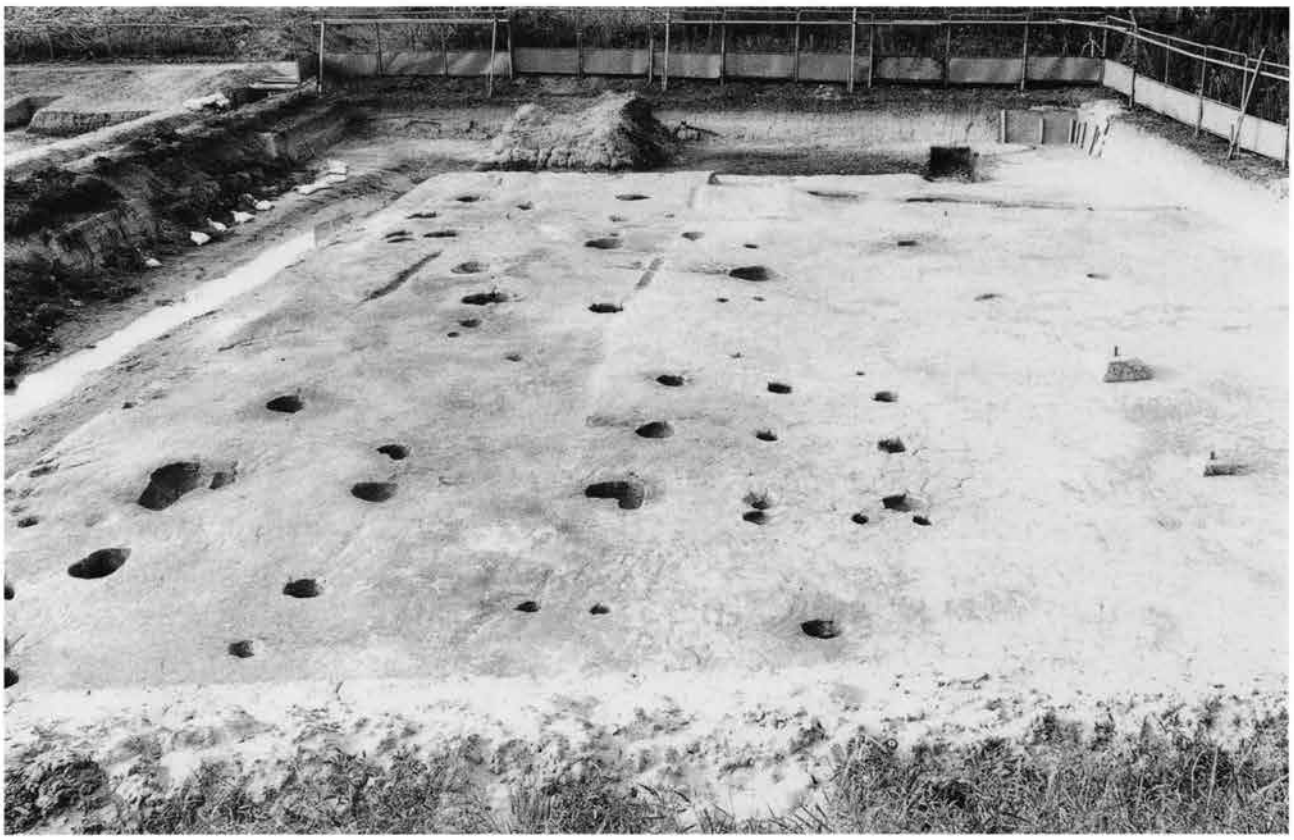


(1)第２トレンチ畦断ち割り状況（北から）

(2)第２トレンチ断ち割り状況（北西から）

図版第57　三山木遺跡第３次

(1)第３トレンチ遺構検出状況（南から）



(2)第３トレンチ完掘状況（南から）

図版第58　三山木遺跡第３次

(1)第３トレンチＳＢ07近景
（南から）

(2)第３トレンチ柱穴内遺物出土
状況（西から）

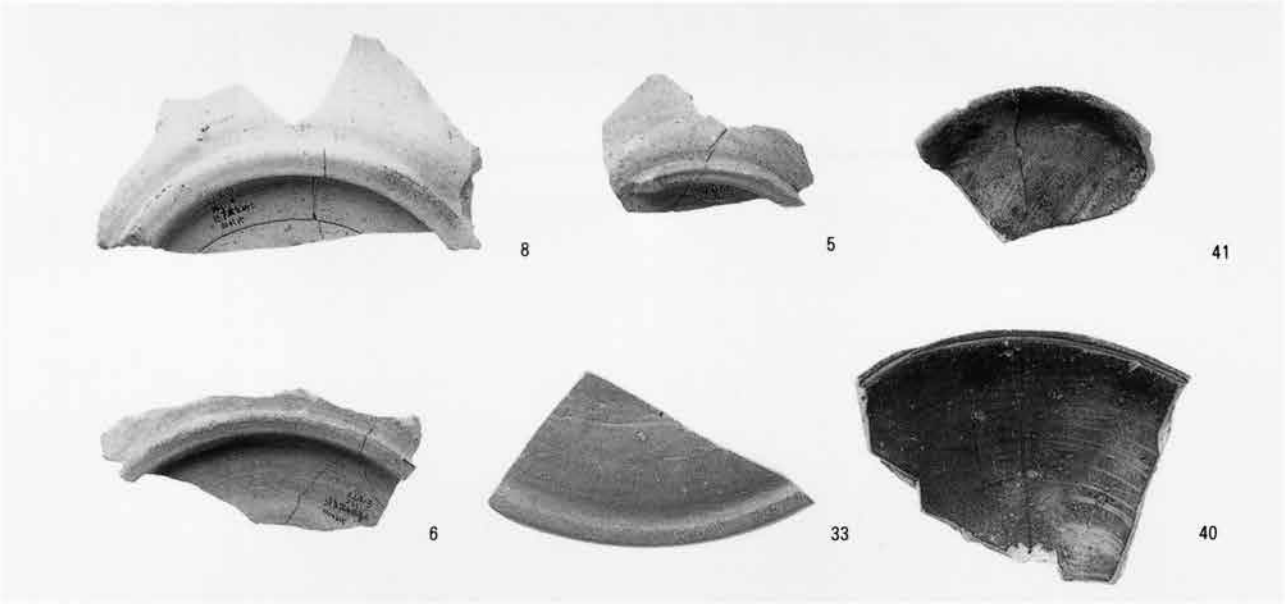
(3)第４トレンチ柱穴内遺物出土
状況（東から）

図版第59　三山木遺跡第３次

(1)第４トレンチＳＢ13近景（北から）

(2)第４トレンチＳＢ11・12近景（南から）

図版第60　三山木遺跡第３次



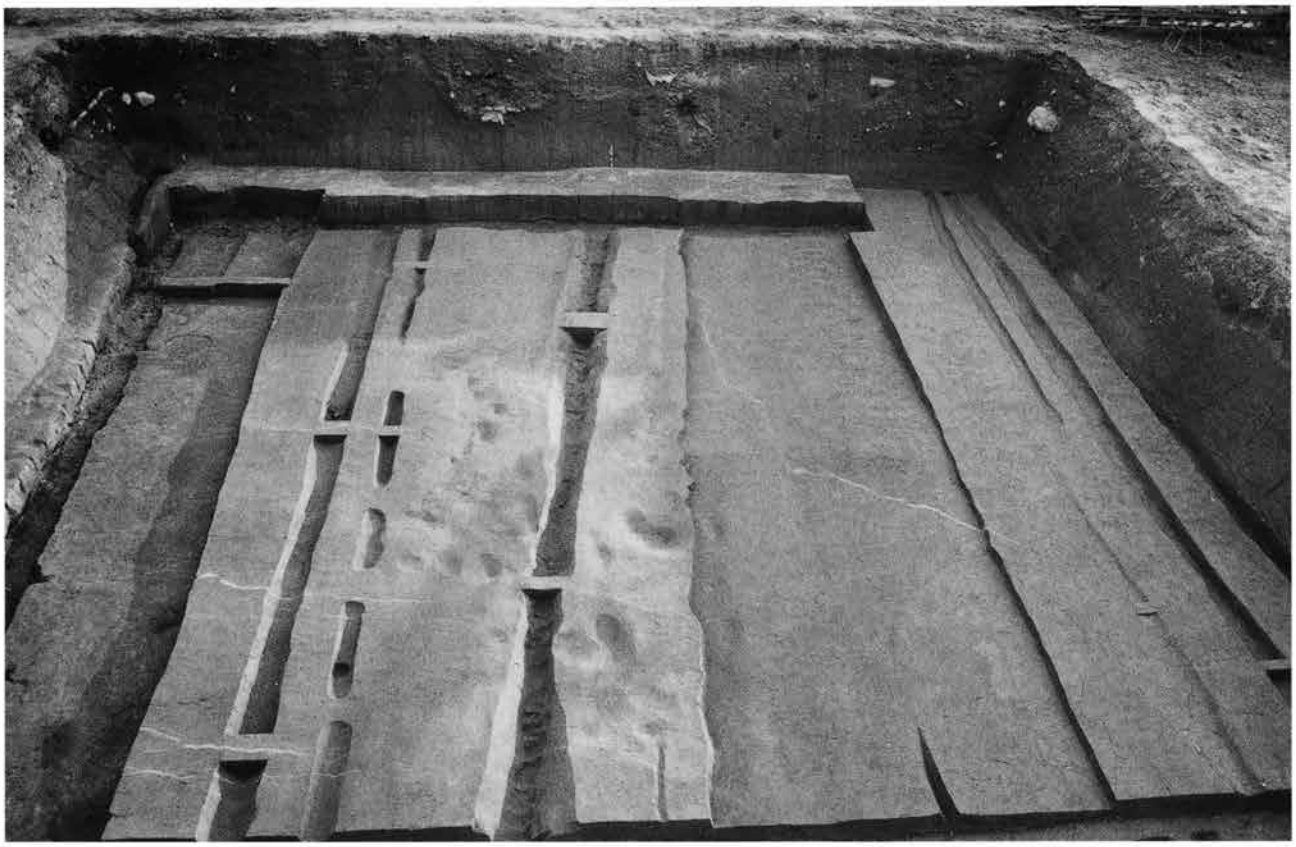
出土遺物

図版第61　木津川河床遺跡第12次

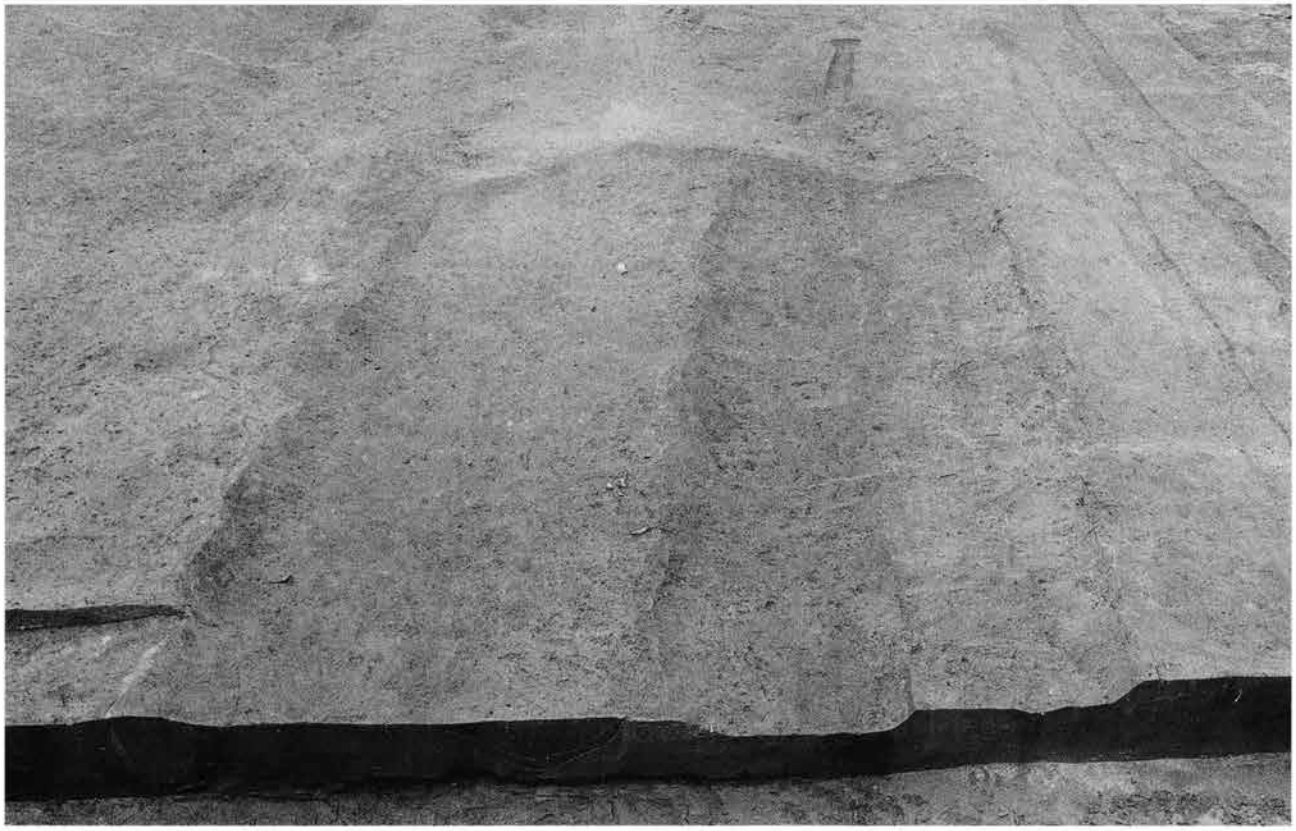
(1)調査地全景（東から）

(2)東区全景（東から）

図版第62　木津川河床遺跡第12次

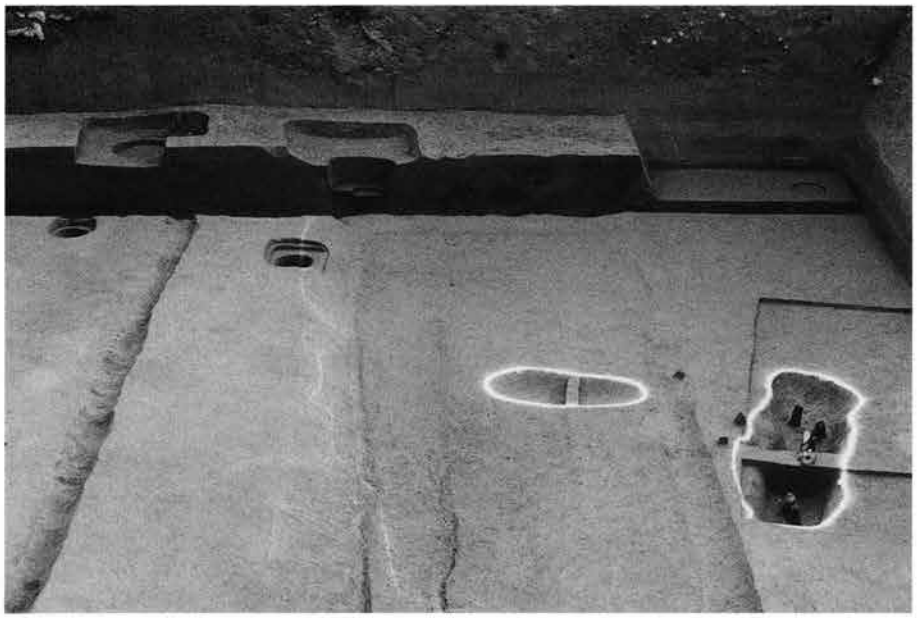


(1)東区遺構検出状況（鎌倉～安土桃山時代、北から）



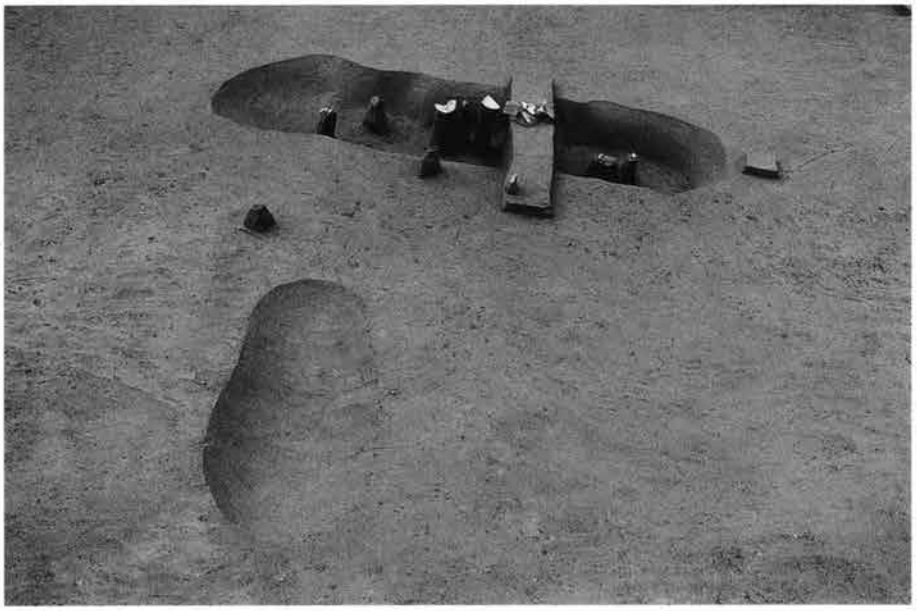
(2)溝（ＳＤ05）検出状況（南から）

図版第63　木津川河床遺跡第12次

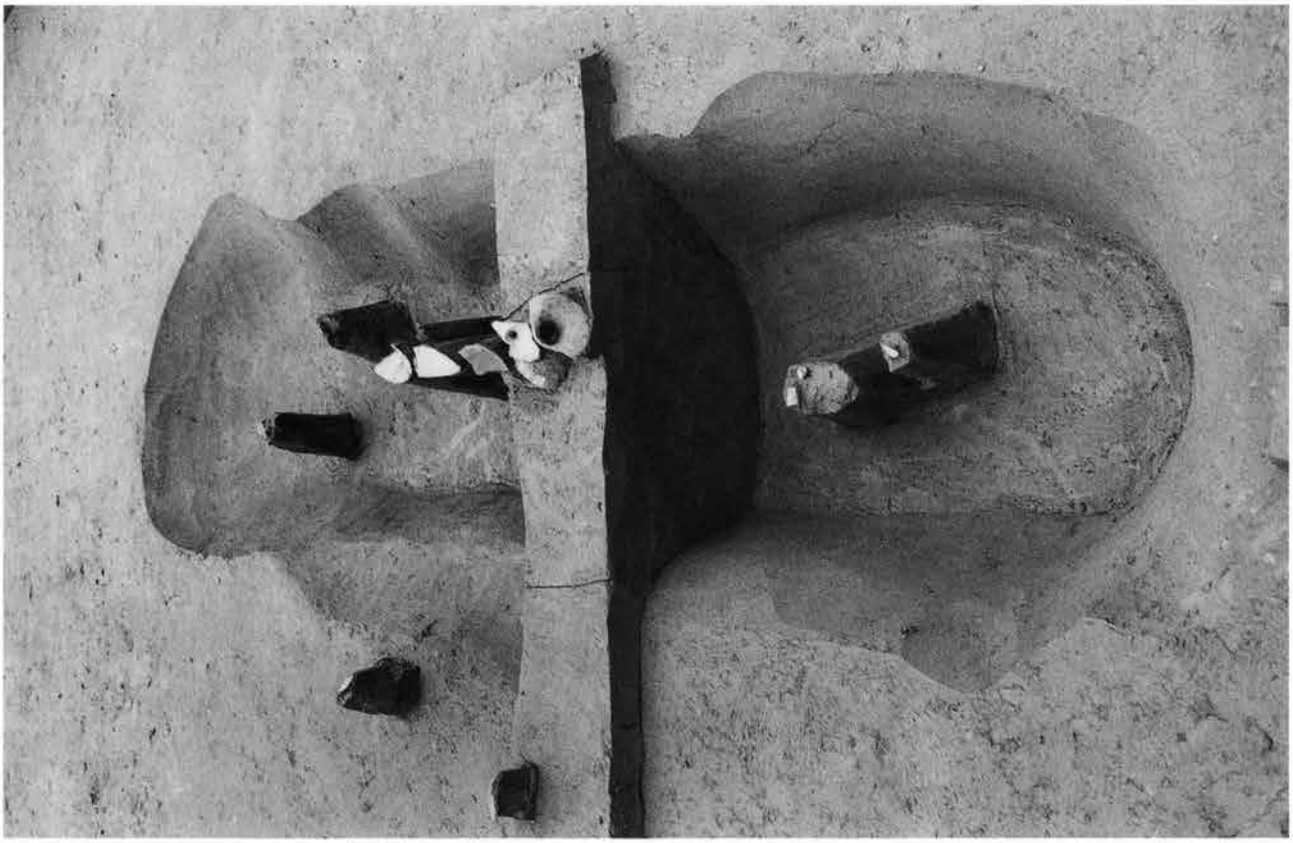


(1)東区柱穴・土坑検出状況
（北から）

(2)柱穴（Ｐ１）完掘状況
（西から）



(3)土坑（ＳＫ01・02）掘削状況
（東から）



(1)土坑（ＳＫ01）掘削状況（北から）

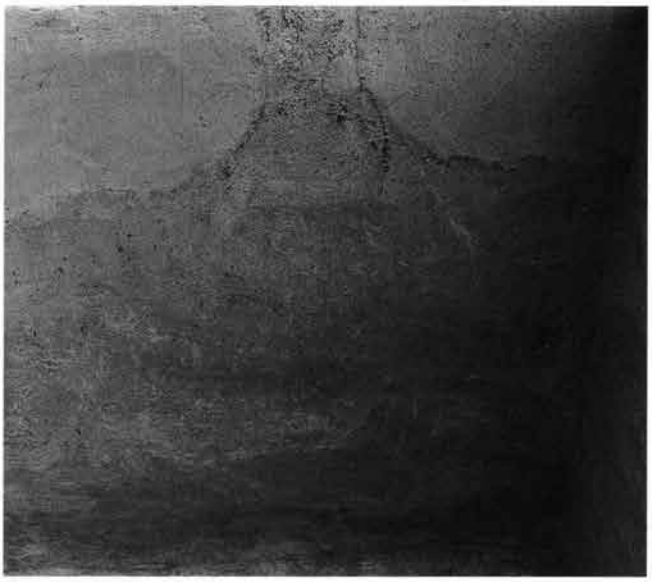
(2)土坑（ＳＫ01）完掘状況（北から）

図版第65　木津川河床遺跡第12次

(1)東区北側断面（第81図下に対応、北西から）

(4)液状化の断面形（第88図２に対応、東から）

(2)東区流路（ＳＤ20）断面検出状況（北東から）

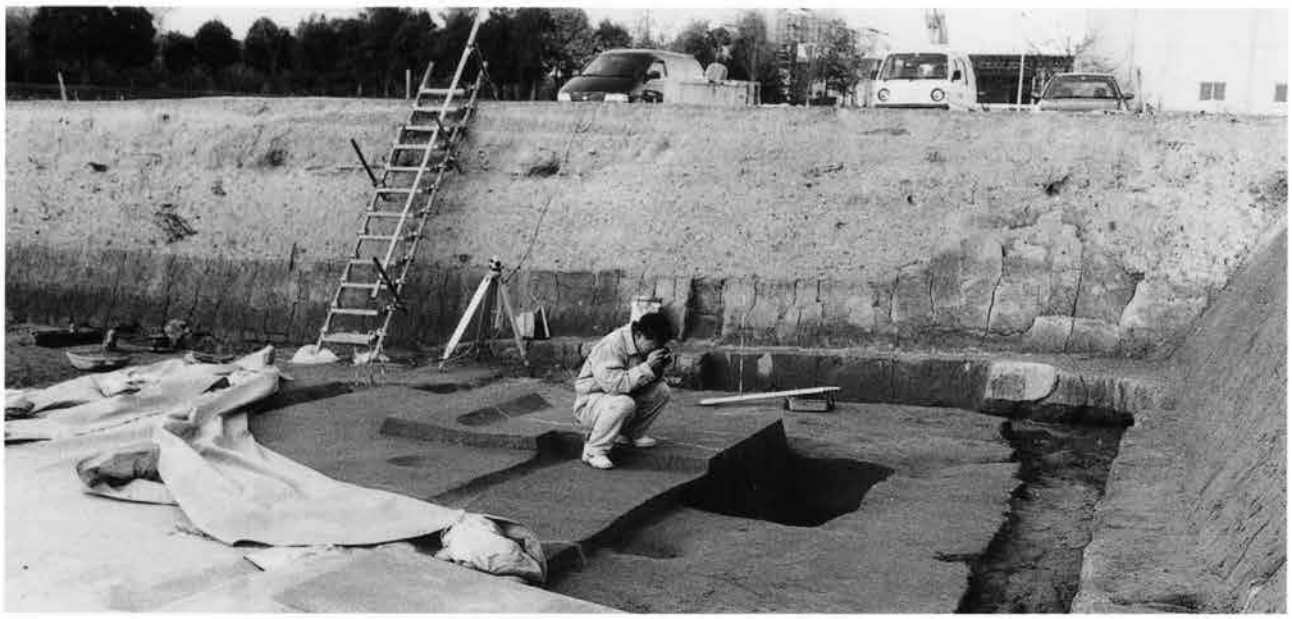


(5)液状化跡の断面形（第88図３に対応、西から）

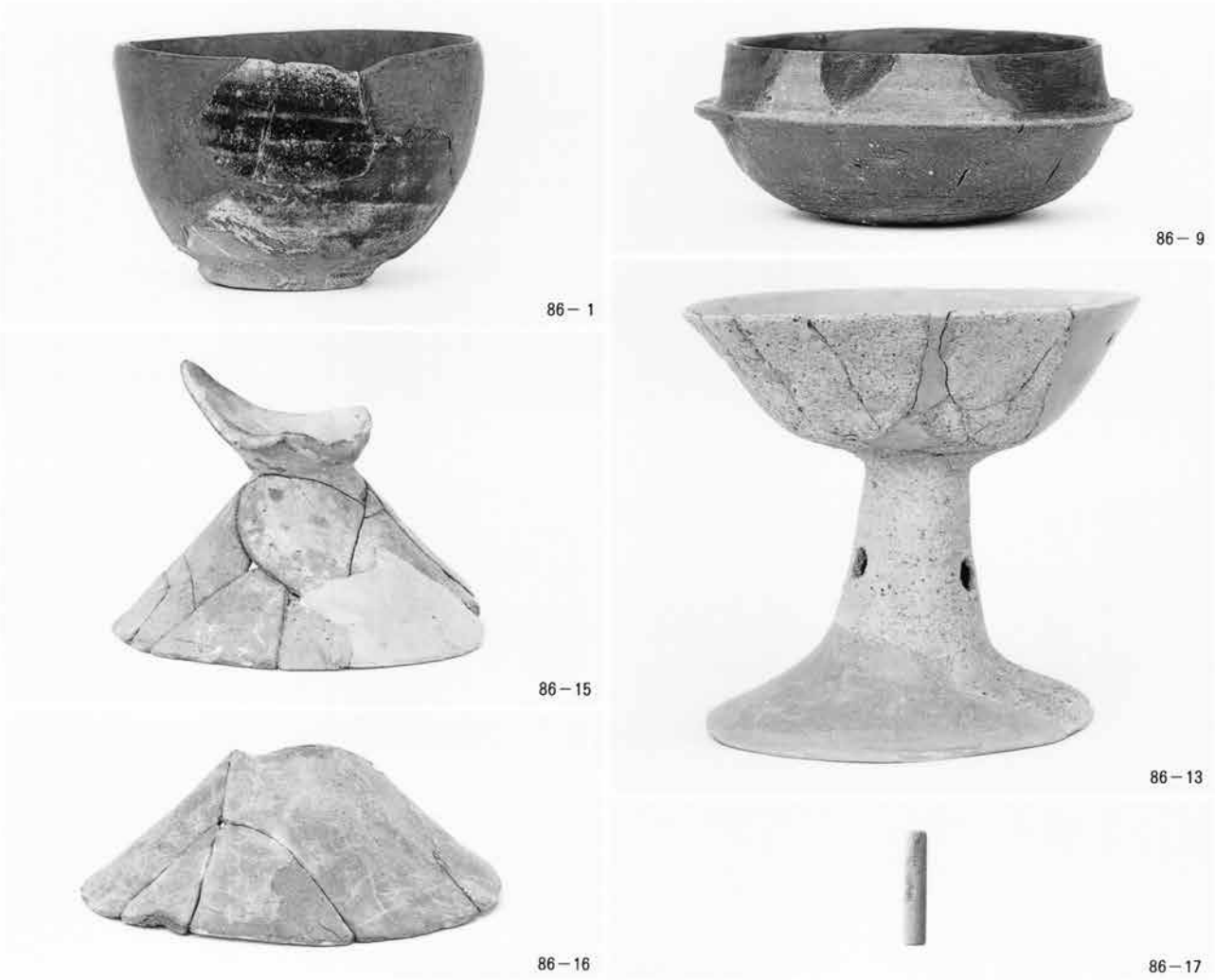
(3)東区流路（ＳＤ20）断面検出状況
（北壁中、南東から）

(6)東区液状化跡観察部分（北東から）

図版第66　木津川河床遺跡第12次



(1)液状化現象記録作業（東区北東隅、南から）



(2)出土遺物

報告書抄録

ふりがな	
書　　名	
副書名	
巻　　次	
シリーズ名	京都府遺跡調査概報
シリーズ番号	第98冊
編著者名	岩松　保・黒坪一樹・石崎善久・村田和弘・田代　弘・岡崎研一
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002　京都府向日市寺戸町南垣内40-3　　Phone　075(933)3877
発行年月日	西暦　2001　年　3　月　26　日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
しりがいこふんぐん・とうぜんじこふんぐん シリガイ古墳群・東禅寺古墳群	みやづしすず 宮津市須津	205		35° 32′ 43″	135° 8′ 54″	20000601 ～ 20000812	870	道路建設
えのくきょうづか エノク経塚	みやづしすず 宮津市須津	205		35° 32′ 41″	135° 9′ 4″	20000821 ～ 20000919	60	道路建設
みなみいなばいせきだいにじ 南稲葉遺跡第２次	あやべしあんこくじちょうみなみいなば 綾部市安国寺町南稲葉	203		35° 20′ 3″	135° 18′ 38″	20000508 ～ 20000811	1,000	道路建設
ぜんがんじいせきだいにじ 善願寺遺跡第２次	ふないぐんそのべちょうきざきまちぜんがんじだに 船井郡園部町木崎町善願寺谷	401	14	35° 6′ 43″	135° 28′ 58″	20000508 ～ 20000629	500	道路建設
いけがみいせきだいななじ 池上遺跡第７次	ふないぐんやぎちょういけがみ 船井郡八木町池上	402		35° 5′ 4″	135° 32′ 24″	20000621 ～ 20001108	2,000	道路建設
はんぎちょういせき 半木町遺跡	きょうとしさきょうくしもがもはんぎちょう 京都市左京区下鴨半木町	103		35° 2′ 37″	135° 46′ 12″	20000718 ～ 20000928	500	校舎改築
みやまぎいせきだいさんじ 三山木遺跡第３次	きょうたなべしみやまぎきざき 京田辺市三山木木崎	342		34° 47′ 43″	135° 47′ 19″	20000515 ～ 20000928	1,400	区画整理
きづがわかしょういせきだいじゅうにじ 木津川河床遺跡第12次	やわたしやわた 八幡市八幡	210	4	34° 53′ 9″	135° 42′ 39″	20000907 ～ 20010112	500	浄化センター施設増設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
シリガイ古墳群・東禅寺古墳群	古墳	古墳	土坑	須恵器杯・土師器高杯	試掘
エノク経塚	経塚	鎌倉	経塚	越前焼三耳壺・鏡・銭貨・土師皿・須恵器	
南稲葉遺跡第２次	集落	飛鳥/奈良 平安	竪穴式住居/土坑 掘立柱建物	須恵器/土師器/竈形土製品/土馬	
善願寺遺跡第２次	集落	弥生 中世	竪穴式住居 ピット	弥生土器/石器 瓦器	
池上遺跡第７次	集落	奈良/平安 中世	掘立柱建物/溝/土坑 溝	須恵器/土師器/陶器	
半木町遺跡	集落	奈良/平安	土坑/ピット	須恵器	
三山木遺跡第３次	集落	平安	掘立柱建物/溝/土坑	須恵器/土師器/瓦/銭貨	
木津川河床遺跡第12次	集落	古墳 鎌倉/室町/安土桃山	土坑/溝 土坑/溝	土師器 青磁・白磁	

京都府遺跡調査概報 第98冊

平成13年３月26日

発行　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の３
Phone (075)933-3877 (代)

印刷　三星商事印刷株式会社
〒604-0093　京都市中京区新町通竹屋町下ル
Phone (075)256-0961 (代)

『京都府遺跡調査概報』第98冊正誤表

頁	場所	誤	正
1．鳥取豊岡宮津自動車道			
p.4	地マージン	ノンブル抜け	－4－
p.9	6行目	西南部	東南部
p.12	4行目	熈寧元豊	熈寧元寶
p.12	4～5行目	元豊通寶	元豊通寶
p.18	21行目	熈寧元豊	熈寧元寶
p.18	21行目	元豊通寶	元豊通寶
p.19	9行目	熈寧元豊	熈寧元寶
p.19	9行目	元豊通寶	元豊通寶
図版第11	キャプション	第17図の番号に一致	第14図の番号に一致
図版第12	キャプション	第17・18図の番号に一致	第14・15図の番号に一致
2．南稲葉遺跡第2次			
p.32	下から4行目	文字欠け	Ⅲ層出土遺物
3．善願寺遺跡第2次			
p.48	下から16・17行目	SD1501	SD1436
4．池上遺跡第7次			
図版目次Ⅸ	図版第40	土器(No.97)出土状況	土器(No.79)出土状況
p.53	下から5行目	千住観音	千手観音
p.54	5	第4次調査：(A)～(F) 第5次調査：①～⑦	第4次調査：①～⑦ 第5次調査：(A)～(F)
図版第40	キャプション	土器(No.97)出土状況	土器(No.79)出土状況